

高木尚一 遺文・遺歌集

ひとすぢの信



筆 蹟

青砥兄より黒上五一郎先生の
お言葉に参られたことをまことに

師の若のみな声なつかし久しくはみみ
よますこと、誠に

あいまつることもなかり友らあまた
にまいるとまことぞかしこそ

出雲路は山なみ青く天の日の光し
夏の木立に

蟬の声しげき庭には鳥あまたむれて
君がみ家

目にみえぬいのちのつなかりうら
少かむけわしえこの世に

昭和五十年七月

こんや旅館にて
高木尚一

高木尚一さんが、昭和50年7月（64歳）、本会理事・青砥宏一氏経営の「こんや旅館」にて揮筆された色紙

刊行のことば

（旧）国民文化研究会・理事長
前・亜細亜大学教授
小田村寅二郎

この本の筆者であられる高木尚一たかぎしやういちさんは、私ども国民文化研究会の起点であつた一高昭信会に連らなる人々の中で、最年長の会員（具体的には「顧問」兼「会員」）であられ、かつ、亡き師・黒上正一郎先生の御指導をその御生前にいただいた、残り少ない現存者であられたが、昨、昭和五十八年十一月二十四日、数へ年七十二歳をもつて、足早やにこの世を去つて逝かれた。

その月のはじめ十一月四日の早朝、それまで何の異常もなくお元気に活躍を続けてをられた高木さんは、突然、御自宅で脳溢血で倒れられ、半身不随、言語障害に陥り、直ちに日産厚生会・玉川病院に入院の身となられた。道子夫人はじめ近親の方々の手厚い御看護の甲斐もなく、二十日ばかりを経て御逝去になつてしまはれた。突然の御訃報に接して驚天動地の私ども後輩ではあつたが、「もつともつと御指導いただきたかつたのに」と、相寄り相集ふごとに、悲しみが甦つてならなかつたのである。

亡くなられるに先立つこと三ヶ月、その年の八月、長崎県雲仙で開かれた「第二十八回合宿教室」の第三日目の夜、屋外での「慰霊祭」では、お元気なお声で「のりと」を奏上されたが、その荘重なお声は、参列者三百何十人もの人々の心に、沁み通るやうに印象づけられた。越えて一年、今年の夏八月に、熊本県阿蘇での「第二十九回合宿教室」での同じ「慰霊祭」の折、何人もの人々が、亡くなられた高木さんが、ここに来てをられるやうに思はれてならなかつた”と実感のこもつた所感を洩らされた。これは、高木さんの在りし日々の「和顔愛語の人」と評された誠実なお人柄が、ごく自然に思ひ出されてのゆゑではなかつたであらうか。

高木尚一さんは、明治四十五年のお生れで、その学歴は、現在の東京学芸大学・附属竹早小学校の前身校を卒業のあと、御父君（高木尚右・陸軍少将）の御赴任により、朝鮮の竜山中学に入学された。二年余の在学のあと、御父君の東京転任と共に、東京府立第四中学の三年に転入学、同校四年修了で旧制一高の文科に入学してをられるから、学業成績は抜群に優秀であられたに相違ない。後、東京帝大の法学部に進まれ、卒業後の就職は、現在の東京都立大学、当時の東京府立高校に専任講師としてであつた。それは、文部省所属の国民精神文化研究所・勅任官所員・井上孚麿、山本勝市両先生の御推薦によるものであつた、と聞いてゐる。

さて、高木さんが旧制一高に入学されたのは、昭和四年であり、数へ年で十八歳の時であつた。それから亡くなられるまでの五十四年間、高木さんは、一高生時代に心に宿された一つの道を、ただひたすらに直進して御生涯を終へられた方であつた。すなはち、一高入学直後、二歳年長で上級生であつた田所廣泰さん（その遺稿は、『愛国の光と影』と題して本会から既刊）のすすめで「一高昭信会」に入会され、田所先輩と共に、この会の発展運営に全力を傾注されたのである。

「一高昭信会」は、現在のわが「国民文化研究会」の道統の起点となつた文化団体であるが、黒上正一郎先生（高木尚一さんの一高入学一年半後の昭和五年九月に、三十一歳の若さで病没された篤学の士）が創立された会であり、かつ、創立後一年余にして、その黒上先生を喪つたグループでもあつた。しかも、黒上先生が亡くなられる一年半前に梅木紹男さん（昭和四年四月十三日没、東大在学中）を、黒上先生没後一年半後に新井兼吉さん（昭和七年一月十日没、東大在学中）を、その翌日に河野稔さん（一高在学中）の三人の尊い同志を相継いで病魔で喪つたこの「一高昭信会」は、田所廣泰さんを柱に、高木尚一さんほかの一高生によつて、悲痛な思ひの中にその相続が開始されたのである。

聖徳太子の日本文化創業の御精神を日夜讃仰し、明治天皇の御製を毎朝、校庭の一角で拝誦す

ることを怠らなかつた。「一高昭信会」は、やがて昭和十二年に、東京帝大の中に「東大精神科学研究会」を、昭和十五年には、全国の旧制大学・旧制高校・旧制高専校の学生を網羅して「日本学生協会」といふ全国的な学生同信団体を結成した。それらは、常に田所さん高木さんを中軸としての発展であつた。

この「日本学生協会」の結成を見た昭和十五年の夏には、遠く満州・台湾に学ぶ日本人学生を加へ、全国四百名の学生による九泊十日間の大合宿（聖徳太子が東洋文化を、明治天皇が西洋文化を見事に摂取せられた、その偉大な御精神を讀へ仰ぎつつ、営まれた思想研修の大合宿）が、信州菅平高原^{すがだいら}で開催された。高木さんも、その折の講師の一人であつたことはいふまでもなかつた。

その翌、昭和十六年二月に、田所廣泰先輩（当時、数へ年三十二歳）は、「一高昭信会」出身者（いづれも社会各層の優秀ポストに就職してゐた人々）に檄をとばし、自分たちで民間に「精神科学研究所」といふ拠点を作らうではないか、そこで真の学問を追求すると共に、わが日本の国の進路に誤りなからしめんために、果敢な思想是正運動を展開しようではないか、そのためには、同志諸君は現在のポストを辞し、この「研究所」に立てこもることにしてくれないか、財政の見通しは全く立つてはゐないが、皆で努力すれば、必ずやれると信ずるから、と一人一人を説いて廻り、

遂にその結成に立ち到つたのである。その折、田所さんの主唱された所は、――

① 支那事変勃発（昭和十二年七月七日）から、すでに三年有余を経過するのに、戦線は拡大するばかりで、一向に「事変解決」の曙光すら見えぬ。といふのは、戦争なるものは短期終結を目指すもの、といふ人類の鉄則に反するばかりか、国内では「百年戦争論」などが流布され、徒らに「長期戦化」を常識化させようとさへしてゐる。これらは、わが天皇さまの発せられた度々の「詔勅」に反することであり、大御心に添ひ奉る所以ではない。何としても、この誤つた進路にくさびを打ち込まねばならない。

② 一方政府筋の動向も、決して油断がならない。昨秋（昭和十五年十月）発足を見た「大政翼賛会」の趣旨などをよく読んでみると、わが『大日本帝国憲法』の真意が濛昧化もうまいされつつあり、社会主義国ばりの一國一党を指向し出したと見るほかはない。正にわが尊い国体を、戦時下を利用して革命へと移行させる含みさへうかがはれるではないか。一刻も早くこれが指摘に立ち上らなければ、「日本危し」である。（註、後に尾崎ソルゲ事件の発覚があり、近衛首相の側近が、これらスパイに翻弄されてゐたことが明らかとなつた。田所さんの指摘は、まさに的を射たものであつた、といふほかはない。）

③ 更にいま一つ。戦時下で三年余を経過した時点での日本であるから、軍需物資優先、民需

物資抑制の必要上、「統制経済」が施行されていくのは致し方のない所である。しかし政府筋（企画院、農林省その他）が推進しはじめてゐる方向は、「統制経済」に名を藉りて、次第に、社会主義の「計画経済」に移行させようとしてゐる気配、実に濃厚である。このままに推移させると、「戦時下でこそ社会主義革命は成就する」といふ、マルキシズムの定石に合致してしまひ、日本国に革命を到来させかねない危機となる。正に「日本危し」ではないか。——といふのが、田所さんが同志諸氏に訴へた所であつた。

同志一同は、これに呼応して次々に現職を辞して、田所さんの所に集つた。高木尚一さんは、栄ある旧制高校専任講師のポストを、惜げもなく辞されたし、加納祐五さんは第一銀行の行員を、桑原暁一さんは外務省専任嘱託を、その他の人たちも同様にして、十余名の結集が見られた。私もその驥尾きびに付した一人であつた。この「精神科学研究所」の一同は、同年輩の人々が次々に応召を受けて戦地に赴いてゐた時期であつたので、「何処で死ぬのも同じ」と、祖国に殉ずるの決意固く、毀誉褒貶きよほうへんも意に介さず、前進一路で果敢に活動した。各地で開く講演会、世界観大学講座、学生合宿をはじめ、いくつもの出版物を通じて、日本の危局を訴へつづけた。さうした折、高木さんは、主として関西地区を担当され、大阪常駐により、関西財界からの支援取付けにも、寧日

なき活躍を続けてくださったのである。

しかし残念なことには、この「精神科学研究所」は、丸二年間の活動を以て終止符を打つことになった。すなはち、昭和十八年二月、時の首相・東条英機の直接指揮下にあつた「東京憲兵隊」によつて、「反戦・反軍・反国家」の嫌疑により総検挙、百余日の留置取調べ、結果は不起訴には終つたが、われらの拠点たる研究所は、強制解散の憂き目に遭ふことになつたからである。われらは、もはやなすすべもなく、終戦に至る二ヶ年を過さざるを得なかつた。その間、高木さんは、さきに記した井上孚磨先生御夫妻の媒酌で、昭和十九年四月に、上村道子様と結婚され、爾来、生涯の伴侶を得られることになつたのである。

終戦直後、高木さんは新しい職場として、財団法人・労働科学研究所にはいられ、後、同研究所・維持会事務局長、晩年には、同研究所常務理事に推され、終始「労研」に尽された。その間、東京都地方労働委員会の公益委員に任ぜられ、のち、高崎経済大学教授、その定年後は、高千穂商科大学教授を勤められた。両大学においては、余人の及び得ない「同信相統」の精神によつて、その指導下の学生の教導に当られたのである。高崎経大を退職されて高千穂商大に移られたあと、私費によつて週一回高崎まで出向かれ、一泊までして以前の指導下学生に対し、「輪読」を指

導し続けてをられたごとき、全く頭の下がる御教導であつた、といふべきであらう。

私はこの「稿」の中で、さきに「高木さんは、一高生時代に心に宿された一つの道を、ただひたすらに直進して御生涯を終へられた方であつた」と記した。それは、「一高昭信会」で奇しくもめぐり合はれた黒上正一郎先生の志を、全身心で受け継いでゆかれたことを意味する。

それ故に、この「文集」の編集を担当された長内俊平・小柳陽太郎・青砥宏一の本会理事諸氏も、さうした高木さんの志を偲び上げながら、この編集に従事した、と述懐してをられるが、それはまさに、亡き高木尚一さんが、「祖国日本の悠久のいのち」に、わが身わが心を随順させて送られた御一生を偲べば、まことに適切な編集方針であつた、と思はれる。地下の高木さんも、あのニコニコしたお顔（本書巻頭のお写真に拝するやうな）で、「よく、まとめてくれたね」と、喜んでくださったのである。

そしてまた、この本の中に、黒上正一郎先生を偲んでの高木さんの文章が、沢山に見られること、並びに、高木さんが半世紀余にわたつて一貫して修業された「しきしまの道」の足跡が、沢山の詠草を通じてうかがはれることは、われわれ後輩にとつて、得難い「道しるべ」になつたこ

とを喜び合ひたいと思ふ。本書を題して、『ひとすぢの信―高木尚一 遺文・遺歌集―』と決められたことと合せ、前記編集三委員はじめ、協力された各位に、心からの謝意を表させていたきたい。また、校正に日夜・土日曜を分たず御協力くださった長内俊平・三浦貞蔵・磯貝保博・藤井貢の四氏にも深甚の謝意を表し、奥村印刷の担当者・山崎修一氏の御協力にも御礼を申し上げます。

以上、蕪辞ながら「刊行のことば」とさせていただきます、重ねて高木尚一さんの「しきしまの道」詠草の格調高き「しらべ」を、若き友らと共に、改めて学ばせていただくべく心したいと念じてをります。さいごに末筆ではありますが、

故高木尚一先輩の御冥福と、

御遺族御一同様の御平安を、

本書編集者をはじめ、国民文化研究会会員一同と共に祈り申し上げます。

昭和五十九年九月十日

凡 例

一、遺稿は、論考・和歌を問はずすべて年代順に編輯した。故人の精神生活の道程を忠実にうつし出したい念願と共に、読者に於てご自分の年齢と照し合せて読まれることを念頭においてのことである。

一、頁数の関係で採録すべきものを厳選せざるを得なかつたが、若い人達には是非読んでもらひたいものを中心に選択させて戴いた。それはまた故人の終世の念願であつたことも念頭においてのことである。

一、頁数の関係で止むを得ず割愛した論考のなかからは是非残して置きたいお言葉は「抄録」としてそれぞれの年代に採録した。

一、書名を「ひとすぢの信」とさせていただいたのは、故人の生涯が、祖国への信、師への信、友ら（先輩、後輩を含めて）への信ひとすぢにつらぬかれたことを顕彰すると共に、同信の道につらなる我ら一同の敬慕の思ひをこめてのことである。なほ「題字」は、若き頃一高昭信会に於て高木尚一先輩から親しく教導をうけられた加納祐五さん（元日特金属工業常務取締役・七十歳）に揮毫していただいた。

一、出典は、それぞれの論考・和歌の表題の下に表示した。同じものが複数の出版物に掲載されてゐる場合は、代表出典名をとつた。配列は原則として発刊年月順とし、作成年月日が明らかなものは本文に（）

を以つて表示した。なほ、巻・号数については特別意味あるものを除き割愛し何月号を以つて代表させた。

一、仮名遣ひについては、遺稿の大半が歴史的仮名遣ひによつてをられること並びに国語の正しい伝統の継承を念願して、特別の場合を除き歴史的仮名遣ひとした。

一、本書に採録したものは、本書末尾に記載した「略歴及び執筆目録」にその旨を表示する記号（※印）を付し、本書を繙く便とした。

一、執筆目録については、国民文化研究会とその昔の道統関係での出版物を中心に、高木さんが勤務された労働科学研究所・高崎経済大学・高千穂商科大学関係等集録に努めたが、なほ遺漏あるべきをおそれるものである。寛容を乞ひたい。

一、編者に於て知り得る事項について、適当に「編者註」を挿入し読者の便に備へた。

目次

刊行のことば

凡例

遺文・遺歌

昭和六年～十年（二十歳～二十四歳）

『稜威の男健』創刊に際して	1
和歌へ黒上先生をしのびまつりて▽他	3
新井兼吉・河野稔両先輩をしのびまつりて	5
和歌へ福島中学大節会（同信団体）諸兄を迎へて▽	12
和歌へ病床雑詠▽	14
詩へ欲び（病舎にて）▽	15
和歌へ旧作・黒上正一郎先生のみ霊に捧ぐ・病院より帰りて・夕▽	16
和歌へ友のふみ・建国祭・師の君のみ霊のみに・久々に一高へ・夕畑行▽	18

昭和十一年～二十年（二十五歳～三十四歳）

和歌△述懐・散歩・晩秋・夕・折にふれて▽	21
和歌△春近し・犬ならし・大豆の発芽力実験写真を見て▽	22
詩△安房神社▽	24
和歌△課外講義▽	25
詩△ニュース映画「ソヴェトの軍縮」を見つゝ▽	25
合宿雑記	27
抄録△「感想断片」から▽	31
和歌△新宿駅にて・戦死者の家・二重橋前・旅行に出発せむとして▽	32
和歌△親兵式拝観▽他	33
和歌△友のたより・実朝のうた・悲歎述懐・合宿を終へて・朝▽	35
東大法学部学生諸兄に呈す	39
抄録△「聖徳太子」から▽	42
熊本五高合宿に参加して	45
西郷隆盛遺訓について	50

西田哲学について……………	53
歴史哲学研究(一)―時間論の動向―……………	61
抄録△「教壇より」から▽……………	66
和歌△教場にて▽……………	67
歴史哲学研究(四)―田辺元博士の『歴史的現実』を中心として―……………	67
和歌△故北白川宮永久王殿下奉悼歌・田辺敬典兄を憶ふ・明治節奉祝式典献進歌▽……………	71
全体主義論……………	73
和歌△朝・歌集「心田」より▽……………	79
抄録△「西欧文化の運命」から▽……………	82
友へのたより……………	83
抄録△「新体制論の反省」から▽……………	89
維新大業の指標……………	90
日本的な物の見方……………	99
抄録△「民族統治論」から▽……………	106
和歌△コレヒドール陥落・北白川宮永久王殿下御二年祭献進歌・大阪城のほとりにて▽……………	107

和歌へ歳末	109
昭和二十一年～三十年（三十五歳～四十四歳）	
和歌へ新年歌会にて・日向国原	110
思ふこと思ふまゝに	111
意志の拠点	115
抄録△「公共心」から	123
思想の師三井先生	126
抄録△「暗中摸索時代」から	130
朝鮮をどう考へるか	130
和歌へコスモス	139
抄録△「思想からみた国会の更生方法」から	141
昭和三十一年～四十年（四十五歳～五十四歳）	
黒上先生といふ人―われわれの思想上の恩師として―	143
ベルグソンの言葉から	149
抄録△「精神交流の時代」から	153

和歌△冬の旅	154
『紫の火花』(岡潔博士著)を読みて	155
信の復活	161
和歌△夕べ△他	165
昭和四十一年△五十年(五十五歳△六十四歳)	167
和歌△合宿にて	167
大学問題の行方―日本の文化史的使命に及ぶ―	174
和歌△慰霊祭献詠(昭和四十一年)	174
和歌△万葉集のうた(田無合宿にて)	175
和歌△慰霊祭献詠(昭和四十三年・四十四年)	175
日本民族の正念―「平和の大海へ注ぐ一滴の水」(三井甲之著)をよみて―	176
和歌△慰霊祭献詠(昭和四十五年)	182
日本の真面目	183
和歌△慰霊祭献詠(昭和四十六年)	185
人間とは何か	185

和歌△桑原暁一大兄のみ霊に捧ぐ	188
桑原暁一兄を悼む	188
和歌△慰霊祭献詠(昭和四十八年・四十九年・五十年)	193
昭和五十一年～五十五年(六十五歳～六十九歳)	
事毎に信あるべし	195
和歌△合宿詠草▽他	200
和歌△慰霊祭献詠(昭和五十一年)	201
信ずるといふこと	202
和歌△合宿詠草(一)・(二)▽	206
和歌△慰霊祭献詠(昭和五十二年)▽	207
日米関係に思ふ―国家目的宣揚の時―	208
黒上正一郎先生を偲ぶ(一)・(二)	213
短歌創作のために	230
和歌△合宿詠草▽	246
「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌	246

和歌へ慰霊祭献詠(昭和五十三年).....	248
大正時代の思想的背景(一)・(二).....	248
和歌へ合宿詠草V.....	261
「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌.....	262
和歌へ慰霊祭献詠(昭和五十四年)V.....	263
独立国日本の混迷.....	264
講読演習参考.....	267
『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』―輪読のしをりとして―.....	281
和歌へ合宿詠草V.....	300
「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌.....	300
和歌へ慰霊祭献詠(昭和五十五年)V.....	301
昭和五十六年～五十八年(七十歳～七十二歳)	
信時潔先生を偲ぶ(一)・(二).....	302
お話ししたい二つのこと.....	320
和歌へ合宿詠草V.....	322

「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌	323
俳句△下萌ゆる▽	325
和歌△慰霊祭献詠(昭和五十六年)▽	325
和歌△合宿詠草▽	326
「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌	326
和歌△慰霊祭献詠(昭和五十七年)▽	327
御製・御歌を拝誦して	328
俳句△月明り▽	334
和歌△合宿詠草▽	335
「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌	335
慰霊祭祭文	336
俳句△蟬しぐれ▽	337
和歌△慰霊祭献詠(昭和五十八年)▽	338
略歴及び執筆目録	339
編集後記	355

高木尚一

遺文・遺歌

昭和六年～十年（二十歳～二十四歳）

『稜威の男健』創刊に際して

『伊都之男健』創刊号
昭和七年二月刊

愈々今度我等の連絡機関たる雑誌が創刊される事になつた。

様々の紆余曲折のある中にどうしても消し去る事の出来ない憶念の誠心に続いて来た会の生命の新たな発揚を友等の叫びにまのあたりうかゞふ事が出来るかと思ふと、云ひ知れぬ歓喜に打たれる。

『昭信』が彼の余り携帯に便利でない原稿の儘の姿で出現し、その後は絶えてしまつたが、今度は何とかして続けて行かう。

我会創立以来、色々苦しい事、困難な事があつたけれどもそれ等は決してその影響を会の根本精神にまで及ぼすものではなくして一時的表面的のものに過ぎなかつた。そして今日全会員一致して盛り上げる様な力を以て猛進せんとするこの氣運を示すに至りし幾多の材料として皆役立つて来たことを沁みく述懐するのである。我等の為を最後まで思ひ給ひつゝ我等を最後まで懷まれ

つゝ苦しき御一生を終へられた先生（編者註、黒上正一郎先生）、先生と共に会の土台を築き創業に
血涙を流した諸先輩の努力を今更の様に顧る時、其処に眼に見えざる大み教の力と日本帝国の偉
大なる生命を仰ぐことが出来る。

我等の雑誌を飽くまでも我等の魂の奥底からの叫びを以て満たし度い。その中に我等の雄健^{をたけび}を
思ふ存分吐き散らし度い。不断の理想と着実なる実行に日々力ある我等の同信同胞生活、実人生
実修体験の国民生活は決して淡い青年時代の夢で終るべきものではない。それだけに我等の使命
は厳肅なのだ。何も生活を定義してそれに当て箴めようと努力するには及ばない。併し一度この
厳肅な使命の前に身を顧る時、「俺の身体は俺一人のものぢやないぞ。俺の身体は日本のものだ。
新日本の土台にならなければならぬ身だぞ」といふ自覚に愕然として怠惰な身を叱咤激励する、
それでよいのだ。固定した概念は我等の生命力を萎縮せしめる。「労働者は絶えず資本家に反感
を持つてゐる。三度の飯も食へないのに出征兵士の寄付等出来るか」といふのは固定した概念で
ある。所が実際は彼等の中に「俺達は食へなくても」と言つて零細な金を投ずる者が反つて中流
等より多いといふ。それと同様我等の生活もあるが、儘の我等が憶念の誠を内に湛へつゝあるが、ま
ゝの向陵の地にあつて不断の弾力を以て送つてゆく所に一日一日求むる道が体得され生きた信念
が養はれて行くのだ。偏せざる思想とか事なかれ主義とか生半可な事を言つて居たのでは結局生

きくした自らの生命を自らの務の中に打込む事は出来ないのだ。

因循な姑息な考を捨てよう。そして日本の大生命の泉を地下深く掘り下げよう。

「稜威の雄健」が世を救ふ時の必ず来らむ事を確信しつゝ、隱忍自重の生活を我等は送らう。

(编者註、発刊の時は『伊都之勇建』の表題に決定した)

——昭和六年十二月十日——

黒上先生をしのびまつりて

『伊都之勇建』創刊号
昭和七年二月刊

はるかなる山の端そめて沈みゆく夕日みつめてなき人思ひぬ

秋霧のこくたちこむる野みちゆくところに思ふ君がみすがた

ともすればなえゆくところむちうちて君がみこゑを今きかむとす

虫の音のしげきここだのくさむらの中なる君がおくつきしぬびぬ

秋祭

ゆたかなるみのりたたへて吹く風に秋のまつりの音をきくかな

はろかなる太鼓の音のひびきくる祭の宵はしづけかりけり

御輿ゆく巷の渦のただなかにわれただ一人もだしゆきけり

去年の秋君去りましたし思ひ出の祭の日ぞとおもひみるかな
虫の音は草にこもりて木立暗く秋の祭の日は暮れにけり

秋雑詠

秋きぬとおもふところに路々の草木さびしく風にそよげり

秋もへば柿なる頃の田舎家の静けさ胸に浮びくるかな

思ひ出の秋めぐり来て空青く日ざしさやかに軒を照らせり

大根のびし広き畑をつらぬきてうねる小みちに夕日さすなり

武蔵野のくらき木立の下ゆけばいにしへびとの歌おもほゆる

生ひ茂る森の彼方の空赤く野辺に音なき秋の夕暮

おもひ出の歌よみがへるむさし野の秋の木立は忘らえぬかも

あまざかるひなに病む友いかがあらむ風肌さむき秋にしあれば

むさし野のなごりの木立夕やみに消えてかすかに虫の声する

大江山にて（暑中休暇）

ささはらにそよかぜゆらぎ岩清水くむ人もなくたぎち流るる

新井兼吉・河野稔両先輩をしのびまつりて

『伊都之男建』第二号
昭和七年六月月刊

この一月新井・河野二先輩を失つた我等は、黙々として会の創立に全力をつくしつゝ病魔のため尊き生命をさゞげられし両兄を思ひ、多事多難なる我等の前途、我国の将来を思ふ時無辺の生死海を貫くわが日本の大きいのちの極りなき開展を信じつゝも、言ひやうのない悲壯な感を禁じ得ぬのである。

両兄は実に仲が好かつた。面倒な仕事をなんとかかとか言つては回避しようとする河野兄、「おい河野、さぼるな」と怒鳴る新井兄、両兄とも、ぼくにはなんとも堪へがたく懐しい気がする。さうして広い智識をもたれながらあくまでも謙虚な態度ですこしも才を誇る様子のなかつた点で一致してゐたことを思ふにつけ、不勉強な自分のはづかしくてならぬ。

両兄の正確なる判断、批判など多くの学ぶべき点を、逝かれたのち、日のたつにつれて思ひあたるのも、何といつていゝか実に分らぬほど惜しいやうな、はかないやうな気がする。よく対象を理解できぬうちにいゝかげんな「批判」といふやうなものをやつた気でゐたりする不真面目な態度を両兄は少しも執られなかつた。ぼくもよく叱られたが、今になつて見ると實際無理もない

ぼくの生活であつたのである。

謹直な新井兄、淡々たる河野兄、いつまでも思ひ出はつくせぬ。己を忘れひたすら国の前途を憂へてゐた新井氏、長いやまひの床にありて、胸中火の如き熱情をもちながら流転常なき生活の一瞬々々を敬虔な祈りにすべをさめて、まことに一木一草にもしたしきをもつなごやかな生を味はつてゐられた河野兄。

創立時代で自分のからだなど顧るいとまなきとはいへ、よくもあれだけやつて下されたと思ふと、一時一刻も無駄にできないと思ふ。河野兄などもおからだの具合が悪かつたため、とかくこまかな仕事を嫌はれたのであらうが、ぼくたちは気が附かなかつたし、自分も忍ばれたのだ。新井兄も実に刻苦奮励された。

同じやうに苦しまれた先輩五兄の中二兄は早く師の君のみあとを追はれたのだ。

春は静かに逝く、そして我等のつとめはまだ是からだ。まだ／＼創業時代である。

今日、ふと本箱の中から古い御製拝誦帳が出てきた。これは先輩五兄が一高二年一学期のころ、毎朝夕タ、ソ、クのところを代る代る拝誦され感想を述べられた尊い記録である。

今「さくら」についての御製を仰ぎし新井兄のそれにかんする感想を引用する。

五月七日（明治天皇御製拝誦）

待花

木のもとにいづればまづぞ待たれける花みて遊ぶ春ならねども

をりにふれて

さくら花霞みてにほふ山みれば世にはことある春としもなし

旅中花

野も山も花のさかりになる時をうれしく旅にいでにけるかな

咲く花を待たせ給ふ御製又観桜の御製など数多くあるのであるが、桜花に対して懐き給ふ愛賞の御情は、最も大御心を悩まし給ひし事繁き日露の役に当りても「花みて遊ぶ春ならねども」と花を待ち給ひ、桜花の霞みてにほふ山を見給ひては世の事しげき事とも覚えぬまで自然のどかなるを嘆ぜさせ給ふのである。世は事繁くとも自然は自然のまゝに無心である。身は濁悪の世に処すとも無心なる自然に対すれば、けがれは去り心も慰めらるる。有限の人生に無限の自然より活力を注入することによつて絶えず我々の心は活力を与へしめらるゝのである。

明治天皇御製拝誦

落花

ちりやすき一重桜の花の上に風さへそひてそゞぐ雨かな

花未飽

うつろへばうつろふまゝになつかしと思ふは花の色香なりけり

落花

人みな惜しむ心はしりながらかぎりある世と花の散るらむ

樹間花

こずゑのみ人に知られて桜花こがくれながら散りやはつらむ

翫花

さかりのみなにかはいはむ桜花ふゝむも散るものぞなき

然しながら桜も時来れば散りゆくのである。散りゆく花はまたとなく惜しき心地せらるゝのである。

「散りやすき一重桜の花のうへに風さへそひて」雨のそゞぐ、これ人生の事実である。こゝに人生の悲劇が生ずるのである。大いなる英才を懐きながらいかに多くの人々が「風さへそひてそゞぐ」雨の為にこの世を辞して行つた事だらう。またいかに多くの人々が不遇なる地位に、目に見えぬ地下の材として逝いたことだらう。こゝにあげたる御製は字面は桜を詠ませ給ひたるものなれども尚深き人生の事実を示させ給ひしものと仰ぎまつるのである。たゞ憾むらくは

我が紙背に徹する洞察の力なきを思ふのである。

単なる世の成功を追ふべからず、外にあらはれずして死にゆくとも祖国日本の為につくす微忠は、日本の永久生命に一点の結合を持つてふこと、これこそ祖国日本を永久に続けしむる生命である。

「散りゆく花はまたとなく惜しき心地のせらるゝのである」と言はれた新井兄は「こずゑのみ人に知られてこがくれながら散り果つる」桜花と散つてゆかれたのだ。

黒上先生御逝去後の例会で新井兄が左に掲ぐる法華義疏の御文を僕に示されて淋しげに微笑された時の事が忘れられない。

「言ふこゝろは、復た真の羅漢なりと雖も、如来在世の金口の正説を聞かざれば、仏滅度後の時に能く此法を信ずる者なきなり。故に『仏滅度の後を除く』と云ふ。所以に若し道を楽ふ者は、今仏の現在する時に緩くすべからずと、是の如く信を敦るなり。第二に積す。疑を標して曰く、仏滅度の後を除く所以は何んと。言ふこゝろは仏滅度後の時、能く此法を説く者は得難きが故なり」と。第三に、重ねて信を敦るの意を顯はす。若し爾らば何れの時にか信を得る、必ず餘仏の出世を待ちて乃ち信ずることを得べし。然るに諸仏は亦何れの時、何れの日にか出づ

るを知らず。亦仏出づと雖も、亦我縁なからんことを知らず。然れば、則ち今仏現在する時勉むべきこと自ら明かなり。」(方便品第二)

口には出されなかつたが黒上先生を慕はれてゐた気持が沁々と僕には分つたのだ。今でも法華義疏を開く度にこの御文を誦しては兄を思ひ出すのである。

次に亡き河野稔兄の文を引用しよう。

五月九日(明治天皇御製拜誦)

書

ひもとかむ暇なき日のおほきかな読むべき書はあまたあれども

天皇の大御身にましまして、殊更に暇なき日のおほきことと拝察申し上げるのであるが、我等も実社会に立つ時は必ず種々なる事にまぎれて暇なく日を暮すことの多からんと思はるゝのである。

このありのまゝなる御生活の御発表によつて一向我等は学生時代に勉強しておくべきことをつくぐと感ぜしめらるゝのである。学ぶべきこと多かるうちにも、

書

思ふことしげからざりしそのかみによみつる書は忘れざりけり

の御製を拝誦し御体験の告白に接しては、自ら我等の思ふことのしげくない学生時代に於ける我等が生活にて最も必要な日本人としての經典研究の好機と効果とを思はざるを得ないのである。こゝに

学問

事しげき世にたゞぬまに人は皆まなびの道に励めとぞ思ふ

の御製のある所以である。然れども外的誘惑、内心弛緩よりともすれば進まず怠り勝ちになり又それ故に苦悶懊悩するのは私の實際に味つて居る所である。

読書

文字をのみよみならひつゝ読む書の心をえたる人ぞすくなき

又学問し物識りになると自分の読み習つた知識をもつて他を批判し、又はその知識を知識として他に伝へる等の行為に出で、又德行すぐれたる人の言行に接しては、已にこの徳をそなふるごとく振舞ひ、他を見下すことが多いのである。こゝに

述懐

おのが身はかへりみずしてともすれば人のうへのみいふ世なりけり

をりにふれて

わが心われとをり／＼かへりみよしらずしらずも迷ふことあり

の大御歌を拝誦しては、我等が態度の傲慢なるを覚えしめられ、又この大御心にしたがつて、
ひたすら身につとめんと願ふのである。

切実な河野兄の告白である。幾度か僕も同じ思ひを味つて来た。今日この文を見ると、思ふま
いとしても在りし日のことが思ひ出されてならない。

思へば学窓より社会へ、我等の国民生活はまだ／＼限りなき艱難を前に控へてゐるが、すべて
は祖国を念ずる「まこと」に統一され、我等は「先なるものとぶらひ後なるものを導く」生死
不断の没我生活に強く生きねばならない。亡き二先輩の抱きし大志も、後に残つた我々がしかと
承け継いで必ず成しとげなければならぬと決意するのである。

福島中学大節会（同信団体）諸兄を迎へて

（一） 明治神宮参拝

くるまよりつらなり降りて六にんの友ら来ましぬ我らが前に
かたるべき言葉出でねど何となくうれしさみちてまなこを交す

『伊都之男建』
昭和八年七月号

同じ道たどる友よと見かへせばこの一ときはまたなくうれし
数そろひ宮参りせむと我らみな鳥居しづかにくぐりてゆきぬ

玉砂利をふむ音高く一列にならびし我ら黙しゆくなり

みやしろのみあらか見ゆればいつとなく心しまりて友ら見かへしぬ

我もまたみ国につくすはらかなの一人と思へばこころをどりぬ

先の代の大君いますみやしろに参るこころの凝るはこのとき

かしはでの音にとけゆくはらかなのついでに神に通はむ

我を忘れをろがみまつる一ときはいのちのかぎりここにつくせり

(二) 寮にて

日毎つどふまなびやに來し友ら迎へ今をかぎりともてなす我ら

語らむとしてかたり得ぬ中刻々と過ぎゆく時の惜しかりしかな

思ひ／＼に残しの文を書き終へてかたみに顔を見かはしてゐぬ

力強き文かきのこし一と時の名残りをあとに友ら去らむとす

声を合せ玉杯うたふ感激に我を忘れてまなこをつぶる

万歳をとなへて友ら身仕度をととのへととのへ部屋を出でゆく

校門に送りて立てば夕闇は街に一面たちこめてあり

別れむとかはすまなこのかがやきにはじめてあひし朝を思ひぬ

一ときは一ときごとに過ぎゆきて時の流はとどめもあへず

「御大事に」と呼ぶ声のこしはらからをのせたるくるまは走り出しぬ

友去りしあとにひたすら立ちつくすその一ときのことろつくし得ず

眼に見えぬいのちかよへどしばらくの別れも我れはかなしかりけり

みをしへの大みちびきのそのままにかよへ一すちつたなきまことよ

みをしへの大みちびきのそのままに生きゆく外に道なかりけり

波風よ狂はば狂へ磯松の固きところに我は生きなむ

病床雑詠(一)

江古田野をはつはつてらす稲妻の閃き消えずおどろの空に

病床雑詠(二)

三階の窓より見ゆる合歡の木の葉かげ涼しき夏は来にけり

ねむの木の細葉かすめてひらひらと白き胡蝶は力なくとぶ

『伊都之男建』
昭和九年七月号

昭和9年(23歳)

乾きたる地這ふごとき赤躑躅ここだ花咲く病院の庭

人病めば頼るものなしとただ一すぢ聖のことばに生きしめらるる

飲 び(病舎にて)

よろめく足もと

踏みこたへつつ

田をすく翁よ

ともしきいのち、

みだる若穂の

かそけきゆらぎ

波うつその間も

やすまぬ手先、

み国を支ふる

力となりて

自然の大地に

身をなげ入れつ

明日をも忘れて

畑うつ翁、

あゝ、その腕の逞しき、

つよき大和の

生命の姿、

石壁冷き

病舎の中に

おきふすあはれ

病人我身、

『伊都之男建』
昭和九年七月号

されどもなどか

心をどる

尊きみ国の

み民と生れ

み民の作りし

をしもの食みつ

生きしめらるる

男の子一人、

天地のむた

さかゆくいのち

祖国のいのちを

みおやの神の

つきぬおもひを

たたへし歌に

日毎仰ぎて

生くる男の子の

よるこびつきせず

生きゆくかぎり。

旧作

春雨にくもる松原見はるかす朝餉の床に友とかたりぬ

しめやかに友と語れば師の君のこのみ胸にうかびくるかな

天地の見えのはてまで青畑のもえ立つ春となりけるかな

女らの高笑ふ声しづまりて春の一日もくれかかりけり

『伊都之男建』
昭和九年八月号

はつはつにのびし木の芽を眺めつつ腕組み黙すわが友あはれ
同じ病もつわれら二人共にをれば病忘らふみ国語りて

黒上正一郎先生のみ霊に捧ぐ

あた波のたけるま闇の学びやに和のたたかひを宣したまひぬ

一語一語心をこめて世の人のまことの道を師は説きましき

ともしびのあかきが下に語りましし君がまなざし世に忘らえず

大御教のままに迷はず生きゆくべしと師はくりかへし説きたまひしか

世の人の学びの道のあやまりに根ざす禍はかり知られず

み国いまだならずてふみたよりの数々みるも悲しかりけり

秋されば野山の木々も色づきて師の君います心地するなり

あはれ我が世にあるかぎりはらからと伊都の男建ふみたけびなむ

病院より帰りて

浄水の土手にかぎられしあかつきのみ空になびきたゆたふ黒雲

『伊都之男建』
昭和九年十月号

『伊都之男建』
昭和九年十二月号

一人通はぬ土手のここかしこ朝餉の煙たちのぼりをり
家並のまばらに見ゆる笹原に白露あふれ日はてりわたる

夕

枯れ残る尾花一むら笹原のはてに波うつ夕さびしも

家並のはざまいぶせく生えのこる草原枯れて冬は来れり

宵闇の迫る空地に家建つる大工らの声まだかしがまし

ま木白き新家が中にただ一つともしび光れりまばゆきばかりに

槌音もとだえがちなる仕事場にうごめく人影うかべるが見ゆ

友のふみ

大宮に詣でし友のうたとふみよめばなつかしそのみやどころ

新た代の国のゆくてをまもります先のみかどの大みやどころ

ゆきかへるまゐり人しげき玉砂利のみちを吾友もだしゆきけむ

かたき床つべたき壁につかれたる友いこひけむ木がくれみちに

肌さす風すきまもる部屋ぬちにひとりしあれば友こひわたる

『伊都之男建』
昭和十年二月号

ながやみにこころ年月ひそめども起たてやむべしや男子われはも
すすめてふ友のもろ声一ときも我は忘れず世にあるかぎり

建国祭

わきおこる国内のどよみ八ちまたの御旗仰ぐにもおもはるかな
目に見えぬ力こもれるうらら風もろ身にうけて町を歩みぬ
をちこちの学びやに湧く君が代のうた声あふれぬ野にも街にも

師の君のみ霊のみ前に

天がける君がみ霊のみまもりに我らが歩みは永久にたぢろがず
年々にひらけゆく道日の本のまなびの道をみまもらせ給へ
つもりつもの御身のくるしみ耐へましてひらき給ひすがし道はも
大み教いただきまつるはらからのいのちはてなくまきひろげなむ

久々に一高へ(五月二十八日)

久々に一高の門くぐりゆけばつきぬおもひは胸にわききぬ

『伊都之男建』
昭和十年四月号

『伊都之男建』
昭和十年七月号

つかれたる足を早めて西寮の友らの部屋にたどりつきたり

(編者註、「西寮の友らの部屋」とは一高昭信会の部屋のこと)

御写真もかへりきましてものごとく壁にかかるを見るがうれしさ

伊都之男建友よりもらひらきみればひろごるおもひとどめかねつも

友らのことば友らのいのち果しなくひろごりゆくかこのうつそみに

バスのゆれ電車の進みも忘れ男建よみつつかへり来にけり

個を全に没する悲哀と歓喜とにあふるる友らのみふみ尊し

夕畑行

やは葱のはつかにのびしひろ畑をおほふ寒空はてしも知らず

力なき日ざしもれくる寒空をとぶ雲ぎれのゆくへ知らずも

うちつよく青菜のうねはげざやかにかはける土のうへにうかべり

兎飼ふ小屋もありけり畑近くかすかに照らす夕日をうけて

『伊都之男建』
昭和十一年十二月号

昭和十一年～二十年（二十五歳～三十四歳）

述懐

病おこたり身内の力湧き来ぬと友に告げなむ何はありとも
ここたくの日数わたりて世のさまを泣き憤り黙し来にけり
思ふこといはずすごさば末つひにおのがいのちはほろび絶えなむ

散歩

日盛を裏の細路ひとりゆけばまがきうづめて昼顔の咲く
草にからみ垣にまつはりきそひ咲くはしきこの花物言ふごとく
垣ぬちの家居人らはしづまりて花壇に白き蝶の飛ぶ見ゆ
語るべき言葉かず胸にこめもだゆく苦しき友知るらむか

『伊都之男建』
昭和十一年六月号

『伊都之男建』
昭和十一年八月号

晩秋

色あせし葡萄のつる葉さゆらぎて庭べ淋しく日は暮れむとす
土のはだへ日にまし固く色うせて冬まちかきを思はするかな

夕

もや深くちまたをこめてくれかゝる空の彼方ゆ鐘の音きこゆ
木も草も青くつゝみてあたりはふもやに夕のにはひこもれり
なつかしき夕のにはひ胸に吸ひ一とき我身とけゆく思ひ

折にふれて

師のみうたよめばみこゑもよどみなきしらべのまゝにきこえくるなり
ふみよめばいにしへ人の声きくごとしとさきつみかどはうたひたまひし
ふみにこもるいのち泉なくむ人の求むるまゝにあふれてつきず

春近し

斑雪消え池の面ゆるびさ庭べの木々には春のきざしあふるゝ

『伊都之男建』
昭和十一年十二月号

『伊都之男建』
昭和十一年十二月号

『伊都之男建』
昭和十二年三月号

霜に焼けしもみの根もとにまつはれる丁字ははやも蓄つけたり
うす赤き蓄のやゝに綻びて香りはなたむ日も近づきぬ

犬ならし

男一人獯れうのならしにたくましき犬走らす土手下原に

日曜のたそがれ時を子供らは遊びをやめてそを見まもれり

空高くなげられしまりをめがけつゝかけゆく犬は狂へることし

土に落ちはずむをめがけかみつきてくはへもどる間しばしもあらず

伏せといへば地に折伏して吐く息のつきもあへぬに言づけを待つ

からきわざ幾日かねりて主と共に山にゆくらむめぐしこの犬

ガラス瓶に水を入れて大豆を充満せしめ固く栓し置く時

発芽の力にて瓶を破裂せしむるといふ実験写真を見て

水と共につめられし豆の芽をふきて瓶破りしをうつしゑに見ぬ

立ちならぶガラスの瓶は砕かれて中なる豆はあふれ出でたり

豆粒の芽ぐむ力の凝る時はかたきガラスもくだくといふか

『伊都之男建』
昭和十二年四月号

鐘をもて叩きしごときその力豆にひそむとは思はざりしを
三枚のこのうつしゑにかぎりなき教へうけしは我のみならじ
豆すらもかく生く力示せるを男の子われらはたゆたふべしや

安房神社

山ずその安房のみやしろ

さくら花み垣をおほひ

白きみち鳥居につよく

山露ぶきのまろき若葉は

ひた／＼と生ひ重りて

み池をかくめり

たまさかに詣づる人の

拍手の音は

山にひゞかひみそらに消えゆく

肌ざむきあしたの風の

海辺ゆ吹きくる

みやしろの裏山より

見はるかす山なみと田の面と

菜たねそら豆花さく田の面と

青き海原

その色にみくにの力ぞこもる

千早ぶる神のみたまの

しづまりまします

しづかなるこの宮居に

我らもろとも

『伊都之男建』
昭和十二年五月号

大君に仕へまつらむと

をろがみまつりて大御歌をろがみよみまつりつゝ

朝な夕なにうけひまつりつゝ

とこしへのいのち養はむ

くれたけの代々木の宮を

課外講義

『伊都之男建』
昭和十二年六月号

窓近くいてふの青葉さや／＼と音立てゆるゝ講義の合間に

午後の日はやゝにかたぶきなゝめさす光はいつか肩を照せり

精神と物質との関係をくりかへしのぶる講義は堪へがたきかな

分ち得ぬものを分ちてそを再び結びつけむと学者はくるしむ

重々しき石かべかくむ部屋にしてほの見る青空眼に心地よし

ニュース映画「ソヴェトの軍縮」を見つゝ

『伊都之男建』
昭和十二年六月号

大砲のひびき

重爆撃機、

戦車の行進、

重工業のやむなき発展

楽のとゞろき

石油の精製

石炭の採掘、

銃をになひてすゝむ兵士の

酔へるがときその眼射、

スターリンの独裁なりし

ロシアの整備は

今眼のあたりに映し出され

我らの耳目に

敵意は迫る、

備はありや

我が国民に。

きけ

大君の大御教を、

一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ

天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

と。

このミコトノリぞ

平時戦時を分たぬ

心のいましめ。

青葉したゝる

沃野の皇土、

稲穂波うつ

みどりの宝田、

それをこそ守るは我らが使命。

不敗の国の

固めはよきか、

目にみえぬ

思想のたゝかひに

撓まぬ心の用意はありや、

『永遠の生命は国民てふ容器あつて始めて
維持され得る』

とフイヒテは説きし。

国亡びて宗教もなく

文化の開展も人生の理想もなし。

安佚と享樂とを求めて祖国に抗する人らは

外国の奴隸となりて

屈辱と不安の生を得むのみ。

あゝ自由とは何ぞ、

大君にまめやかに仕へまつるとき、

こよなき自由を身におぼゆるを

そをこそいとひて

自由はありや。

いはじとすれど

今の世のさまたぐならず。

合宿雑記

『伊都之男 建』
昭和十二年八月号

今夏の合宿は相州寒川神社で行つた。茅ヶ崎から相模川一帯の雄大な平野をガソリンカーで約十分許り行き、宮山といふ駅で下車するのである。打つゞく相模川の緑の堤防の彼方に大山その他の山々が連り、桑、甘薯等の畑が一面にひろがつてゐる。神社の境内は非常に広く松、杉の老

樹が鬱蒼と取囲み昼間は蝸、夜は梟が鳴く。

僕は丁度七月廿日の午前に着いたので、その日の正午から独自の行動を取るといふ我が北支駐屯軍のことが気になり、四時に附近の雜貨店のラヂオを聞きに行つたが、まだニュースでは何も報道せられなかつた。しかし、静かな宮山の村にも非常時の色は次第と濃くなりつゝあることが感ぜられた。夜禰宜さんとも戦争の話をした。風呂をもらつた附近の農家でも色々と戦争の事を聞かれた。

毎朝上空を飛行機が飛ぶ。心を落ち着けようと思つても落ち着かない。「学問とは何だらう」と時折あらぬ疑問に心を悩ましたりする。朝夕社務所から新聞を借りて来て貪り読む。不拡大といふ言葉が気になつて仕方がない。神意に反する様に思はれてならぬからだ。皇軍活動の報に接すると、明治三十七、八年の御製が今更の如く有難く仰がしめらるゝ。

明治天皇御製 折にふれて

軍人つくす力のあらはれてけふもすゝみしたよりをぞきく

おのが身にいたでおへるもしらずしてすゝみも行くかわが軍びと

戦のにはのおとづれいかにぞとねやにも入らずまちにこそまて

軍人ちからつくしゝかひありて仇もなかはまつろひにけり

昭和12年(26歳)

石だゝみかたきとりでも軍人みをすてゝこそうち砕きけれ

折にふれて

戦のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ
よとゝもに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

折にふれて

たへがたき暑さにつけていたでおふ人のうへこそ思ひやらるれ
千萬のあたをおそれぬますらをもこの暑さには堪へずやあるらむ
いくさ人いかなるのべにあかすらむ蚊の声しげくなれる夜ごろを
つはものはいかに暑さを凌ぐらむ水にともしといふところにて

一夜螢飛ぶ田圃道を後藤、南波両兄と共に散歩した。高圧線の鉄塔がほと東西に立ち並んでゐる。螢が行手をさへぎる様に飛ぶかと思つたと胸もとにとまつたりする。一高二年の夏の満昌寺合宿を思ひ出す。あの時は新井兄も河野兄も元気で一緒に螢を取つたりした。黒上先生も御在世で徳島に御療病中であつた。

三宝とは仏法僧なり。則ち四生の終帰萬国の極宗なり。

と聖徳太子憲法十七条にあるが、恩師先輩を憶念する我らの同信生活こそ現実に与へられたる三宝である。

廿一日に若野兄廿二日に中村兄帰られ、廿三日には田所兄が来られ一緒に握飯を持って相模川の河原に行つた。月見草の一面に咲く中で握飯や桃を食べ乍ら話した。帰つてから歌に関する田所兄の研究発表があつた。僕はまだ『古義』もよく読まず作歌も怠つてゐたので恥しく思つた。時局に心を刺戟せられて、何も手につかなくなるといふ事はよくない事である。自ら緊張してゐる積りで実は弛緩してゐるのである。

廿四日の朝、寒川村在郷軍人会の武運長久祈願祭が執行された。早朝から集つて来た老若の人々は祭の前に僕らの合宿してゐる休憩所で談論風発北支問題につき盛に意見の交換をしてゐた。

明治天皇御製 述懐

たゝかひの道にはたゝぬ国民もちとに心をくだくころかな

国をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも

同日夕方上野兄来られ一泊、翌廿五日合宿を終へ、途中辻堂の田所兄宅に寄つて御厄介になり帰京した。

今度はどうも落着かず勉強もしなかつたが、時局はまだ／＼重大化する傾向あり皇国の敵は十

重廿重に迫りつゝある時、徒らに心を動揺させてゐては何一つ出来ない事を反省せしめられる。

抄 録―「感想断片」から―

『伊都之男建』
昭和十二年八月号

吉田松陰先生は孟子の「性善」を止むに止まれぬ大和魂なりと解せられ「今如何なる田夫野老と雖も、夷狄の輕侮を見て憤懣切齒せざるはなし。是性善なり。」といひ、「然れども堂々たる征夷大將軍より、列国の諸大名より、幕府の老中諸奉行より、諸家の家老用人より、皆身を以て国に殉じ、夷狄を掃蕩するの処置なきは何ぞや、其智田夫野老に及ばざるに非ず。唯だ田夫野老は傍觀の者にて性善の盡なり。將軍大名老中奉行などは形氣の欲にて性善を蔽はるゝなり。」といはれた。これは山鹿素行先生が『聖教要録』に

性は善惡を以て言ふべからず、孟軻の所謂性善とは、已むを得ざるを以て之を字あざなし、堯舜を以て的あてと為るすなり。後世其實を知らず、切に性の本善を認めて工夫を立つ。尤も學者の惑なり。といはれたのと同じ精神である。「性の本善を認めて工夫を立つる」ものは西洋にあつてはカントである。「内なる道德律」がそれであり、東洋にあつては心学理学の徒である。

松陰先生が詰らぬ心学理学に一顧も与へず、孟子の性善を以て直ちにやむにやまれぬ大和魂な

りと断言せられた所に、その切実なる体験に基く正しき思想法がうかゞはれる。

新宿駅にて

日の丸の小旗うちふり警官ら軍歌うたへり列車の前に

僚友をいくさのにはに送るべく咽喉もさけよと声はり上ぐる

興奮にわき立つ心おさへつゝわれもひとときそをみまもれり

たゝかひはいよゝはげしく国民の心はいよゝ高なりゆかむ

『伊都之男建』
昭和十二年九月号

戦死者の家

上海の突撃戦に戦死せし三等兵曹の家を見出しぬ

日の丸の弔旗を立てし門べより家ぬちに人の集れる見ゆ

いち早く知らせを聞きて家族らの馳せつけるらむ話しごゑきこゆ

送りたる夜はい寝られざりきと大声に語る男の声もくもれり

かぎりなきみくにのいのちにつらなりて天がけるみ霊眼に見る心地す

『伊都之男建』
昭和十二年十月号

二重橋前

幾万のつはものこゝに銃を捧げ宮居をろがみ都さかりし
ますらをのさゝぐるまことすべたまふ大君います宮居ぞこゝは

旅行に出発せむとして

旅立ちの時間せまればこしかたの思ひあらたに胸にわきくる
友らのいのちこゝに集り我が生を支ふと知らば何か恐れむ
冬日照る土手の彼方ゆ土くづす機械の唸りはをやみもあらず
石だゝみかたきとりでも岩がねもきりとほしてぞ我はゆくべし
みんなみの三浦みさきをさしてゆく旅路はるかにしぬばるゝかな
同信の契りかためむ旅なれば心ひきしめ語り合はなむ
師の君のみ魂のままりうつしくも仰ぎゆきなむ友らと共に

観兵式拝観

もののふの軍ならしの庭清み彼方に富士の高嶺ぞそびゆる

『伊都之男建』
昭和十二年十二月号

『伊都之男建』
昭和十二年十二月号

『伊都之男建』
昭和十三年一月号

大君の着御を待てるつはものの銃きらめきて並み立つが見ゆ
人声も聞えずなりて舞ひ下りし鳩は静かに地をあゆめり

気をつけの号令かゝれば君が代のラツバ次々に四方にこだます
大君のみ車の列肅々と便殿近く進み来りぬ

ひたすらにをろがみまつるわが心あたりに人のありとも覚えす

東京駅にて

数あまた陸士の生徒ら駅にあふれ汽車待つ姿たのもしきかな
ま白なる手袋はめし右手挙ぐる正しき敬礼眼に心地よし

機敏なる動作に示す訓練のあといちじるく心うつなり

日の本のみいくさ率ゐ大君のみたてとならむ若人のむれよ
軍服に目かゞやかせ父母のもとに帰らむといさみたちたり

外国のゐやなきふるまひくじくべきみ国の力こゝにあふるゝ

藤田兄に

養生に専念したまへと書きおくりし心もくじけぬ君が歌よめば
病院を我出でしとき数々のみうたたまひし君いまだ病めり

とゞこほりし思想は我が吐く血となりてあふれ出でつと君は歌ひき(我が退所のとときの君が歌に)

古事記をよみて

天ゆ降り地平げまして大君はみくにをこゝに建てたまひしか

大君の大御業もてきづかれし我國柄を忘れてもへや

民らつどひ君をえらびし異國のいしずゑいまだやすらかならず

みくに生みの神話なつかし神々の御身につながる我が国地よ

民族の情意はつひに外國の威武に屈する事なかるべし

世界を舞台に日出づる國のさかゆかむ御代のゆくてを示すこのふみ

千早ぶる神の御代よりかたりつぎいひつぎ來つるこのふみ尊し

友のたより

さま／＼にもの思ひつゝ家に戻れば一ひらのハガキ卓上にあり

我が宛名大きく書かれなつかしき友の名前はまなこにしみぬ

世をまもる神のちからをうつつしくもかゝぶる覚ゆ友のことばに

『伊都之男建』
昭和十三年二月号

重かりしおのが病ひのいえたるも友のたよりによりてなりけり
忘恩の生になれつゝ友の情忘れむとするこの身浅まし

実朝のうた

後の世に友をもとめてとこしへのいのちをうたにこめし君はも

竹の節松の葉ずゑにとこしへのいのちこもると君はうたへり

むら雲のやみを貫き一すぢの光いそぐ君がうたはも

事変勃発以来畏くも聖上陛下には宸襟を悩ませ給ひ、供御も進ませ給はざりし日も多くありしかば、
秋山司厨長は各地方の郷土料理を調べて、畏き辺りの御食膳に供しまつらむとする由を拜聞して
(編者註、事変とは支那事変をさす)

国民の思想の乱れは大君の大御身そこなひまつれりと知れ

供御の料奉る人も心せよ不忠忘恩の人ら多きを

まめやかに仕ふる民のまごゝろを供御と共に捧げまつらむ

高き位さづけられつゝ大君に仕ふる道を失へる人あり

この不忠を不忠と知らざる人なきやそを思ふごとに胸はりさくる

『伊都之男建』
昭和十三年四月号

ありがたき大御心を忘れはてたはぶる人らの罪輕からず
大御心かく悩ませ給ふにみたみ我らいかで安けき日を送らむや

悲歎述懐

日毎日每天つみ神にちかひまつる忠を貫かむ心未だ弱し

目に見えぬ神にむかひてちかひまつる事のかしこさ忘れてもへや
ちかひまつる忠を貫くことなくば天つみ神のみ怒りにふれむ
目に見えぬ神にむかひて恥ぢざれと教へ給ひし大御歌はも

うつりゆく時あはたゞし我いかでためらふべしや世のたゝかひに
究極の予定を急がき末の世はかくあるらむと思ふいとまなし
かく思ふつかのま早くむらぎもの心ゆるびて迷はむとするに

日の本のみたみの生はとこしへのたゝかひなるぞたちろぐべしや

友のうた

生くるしるし歌にのこしてながき病の床に起き伏す友忘らえず
外に示す差別にとゞまりおごるとき内なるいのちは滅び絶えなむ

『伊都之男建』
昭和十三年五月号

うつそみのまことのいのち求むるは止むにやまれぬ心なりけり
あまざかるひなに起きふし土の香に親しむ友のうた力あり

合宿を終へて

四日あまり友とすぐしこの里の山川なつかし忘れえなくに
なつかしき山川あとにひむがしの都をさして帰らむとする
日毎日毎おもひあらたに師の君のみふみをよみぬ友らと共に
あらたなるおもひひらくるよろこびを一つ心にかたりかはしぬ
このよろこびの底ゆわきくる確信と決意はゆるがじ乱るゝ世にも

朝

朝風の吹きのままに／＼南天の白き花びら窓辺に散りしく
檜の木の繁みにかくれなきかはす雀がむれの声甲高し
次々に起きいづる我が家人のけはひしるけしうたよみ居れば
花売は缺ならして扉ぞひに遠ざかりゆく姿は見ねど

『伊都之男建』
昭和十三年八月号

『学生活』
昭和十三年十一月号

静かなる朝のみちを小車に夏花盛りてゆくらむ花売

東大法学部学生諸兄に呈す

『学生生活』
昭和十四年二月号

東大法学部学生諸兄よ

諸兄は今日本に於ける最高学府といはれる東京帝大にあつて、日々六法全書を手にしつゝ勉学にいそしまれつゝあることとせう。私も諸兄と同じ勉学の体験を経つゝ日頃感ずる所を諸兄に申し上げたいと存じます。

私の申し上げたい事といふのは、法学の研究手法といふ様なものについてとありますが、恐らく諸兄もこの研究方法については色々と独自の見解を有せらるゝことと存じます。今直接にそれについて諸兄とお話し合ふ事の出来ぬのを非常に残念に思ひますが、只今は私の方からのみ私の考を申し上げてみたいと思ひます。

諸兄、諸兄は法学の中の民法学の中で所有権について先生の講義を聞いて居られる時、各個人所有権はいかにして確保せられるかといふ事をお考へになつた事がありますか。勿論民法上の所有権なるものは憲法に於ける臣民の所有権不可侵の条文にその根源を有するものですが、更

にその所有権が実際に確保せらるる「治安の維持」について考へを及ぼされた事がありますか。これが今私が申し上げようとする重大眼目であります。即ち諸兄が民法の時間に六法全書を先生のいはれるまゝにさら／＼とめくつて居られる時には、「所有権」といふものは当然確保せられたものと仮定して居られるでせう。いひかへればその場合刑法とか治安維持法とか治安警察法が嚴重に守られる事によつて、治安が維持されてゐるが故にはじめて所有権が確保せられるといふ事をすぐには頭に浮べられないと思ひます。ともすれば忘恩の驕児になり勝な我々は、治安の維持に日夜刻苦する警官の労苦を忘れ勝ちであり、更に我国治安維持の原理であり原動力である國体の尊嚴を忘れ勝ちであります。今まで治安維持が不充分で動亂の渦中にあつた支那を思へば、自分のものが正しく自分のものとして確保せられる國の恩といふ事に思ひ至らざるを得ないのであります。治安維持の確保せられぬ時は、いかに整備された法規条文といへども死物に過ぎません。此処に思ひを致すことが法律学研究の第一歩であり又終局点であると確信するのであります。國恩とか國体の尊嚴とかいふ言葉すら或は諸兄の耳に異様なひびきを与へるかも知れません。それ程今までの法律学は枝葉末節に走りすぎてゐました。それ故法律学を学び、六法全書をひねくるだけでもはや人民をガバーン（支配する）するかの如き思ひ上つた精神状態となり、又行政法を学びつゝ自分が行政の主体となつて、恐れ多くも 天皇陛下の御親政を忘れ奉る如き不敬を

敢へてする様な結果にもなつたのでした。遵法の良心といふものは遵法の意志であり、それは結局国体防護意志に外ならぬのであつて、反国体といふことは結局法を否定するアナーキズムにならざるを得ないのであります。右の言には決して論理の飛躍はないと確信します。

諸兄よ、今次事変は思想のたゞかひであります。法学を学ぶ者も、この思想のたゞかひに無関心ではゐられなくなりました。否、この思想のたゞかひに無関心である事は、学術的にも誤謬である事に気づかざるを得なくなりました。私の言葉は甚だ粗雑な表現ではありますが、就職の手段としてでなく、本当に法学をいかに学ぶべきかについて真剣に考へらるゝ方は私と一緒に考へて下さると信じます。そして今まであまりにも連関のなかつた各科目相互の連関を考へ本末の関係を事実につき考へ直されたのであります。我国が第三国に併合せられゝばよいなどといふ考へがかりそめにも出てくるといふ事は考ふるだに悲歎泣血の極みであります。

東大はあくまでも日本の大学であり、日本は今世界人道の為に戦つてゐるのであり、死して日本を守るこそ私共のゆくべき一すぢの道である事をお互ひに心に銘じつゝたゞかひませう。

抄 録―「聖徳太子」から―

『学生生活』
昭和十四年五月号

仏教を批判摂取し給ひし太子の御著作には勝鬘、維摩、法華の三經に註釈を加へられたる三經義疏があるが、三經義疏に示さるゝ太子の御釈には、ともすれば概念註疏に墮し易い大陸仏教に比し、人生の悲痛に徹する深刻なる御人生觀を仰ぎまつることが出来ることは、黒上正一郎先生の著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に精密な研究がなされてあるが、これは今日日本思想史研究に當つて第一に研究せらるべき事柄であり、その研究はあくまでも発心求道の信念体験に基くものでなければならぬ。現代に於いて欠けてゐるのはかゝる研究方法である。太子を単に過去の偉聖と仰ぎまつりつゝ、自らの生活体験と没交渉に太子の御事蹟をしらべらる如きことをせず、太子の御言葉に直接にふれて、自らの求道努力の指標となし、ひとしき信に共感共鳴の世界を見出すといふ如きこそまことの研究といふべきである。まことの道を求めつゝ漢土の学を学びつくし、文字の学、概念の学に究極の満足を得られなかつた山鹿素行先生、伝教大師、道元禪師、親鸞聖人らはいづれも詩に文に太子を感激を以て讃仰しまつてゐるが、まことの研究のいやはては、かゝる心弦共鳴の感激あるのみである。そこに信が長養せられる。太子が、「信は是れ義

の本なり。事毎に信あるべし。其れ善悪成敗かなら要す信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは萬事悉く敗る。」と仰せられた「信」こそ全国民の精神を一つに結ぶものである。キリストは信の動揺せる弟子らに向つて、

この故に、われ汝らに告ぐ。何を食はんと生命のことを思ひ煩ひ、何を着んと体のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るなり。

あゝ信仰うすき者よ、なんぢら何を食ひ、何を飲まんと求むな、また心を動かすな、是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝らの父は此等の物の汝らに必要なを知り給へばなり、たと父の御国を求めよ。さらば此等の物は、なんぢらに加へらるべし、懼るな小さき群よ、なんぢに御国を賜ふことは、汝らの父の御意なり。汝らの所有を売りて施濟をなせ、己がために旧びぬ財布をつくり、尽きぬ財宝を天に貯へよ。（ルカ伝）

とくりかへし説いたが、太子の「群臣共に信あらば何事か成らざらむ」とふ御言葉を味識し体得し得るものはキリストの言葉も自ら体認し得るのである。今日の日本のインテリの弱きはみな信無き故である。信とは信仰であり、我らが大君のみたてとなつて生命を投げ出す大勇猛心である。

能く獅子吼すとは衆の為に法を説くに怖畏する所なし。

といふ言葉があるが、信順すれば無畏怖の行が出来るのである。事実、太子は大陸の學術を学び給ひつゝ大陸の大国隋を少しも怖れては居られぬのである。「日出づる国」の國書が何よりもそれを物語つてゐる。又太子のみならず、太子をお慕ひ申し上げた、伝教大師、道元禪師も支那に渡りつゝ、精神的思想的には彼を圧倒してゐたのである。伝教大師については神皇正統記に伝説があるので左に引用すると、

伝教入唐以前より比叡山をひらきて練行せられけり、今の根本中堂の地をひらかれけるに八の舌ある鍵をもとめで、唐までもたれたり、天台山にのぼりて智者大師（天台の宗おこりて四代の祖なり、天台大師とも云ふ）六代の正統道邃和尚に謁して、その宗をならはれしに、彼山に智者婦寂より以来鍵を失ひてひらかざる一藏ありき。こゝろみに此鍵にてあけらるゝにとゞこほらず、一山こぞりて渴仰しけり、仍一宗の奥義のこる所なく伝へられたりとぞ。

といふ文であるが、天台大師没後開けられぬ藏を、持つて行つた鍵で開き、一山の渴仰もうけたといふ話がたとへ伝説であるとしても、伝教大師の求道の意志は到底彼土の僧の及ぶ所でなかつたであらう。まことに「群臣信あらば何事か成らざらむ」である。我ら日本人は太子の御言葉通り一すぢの信を貫き通し、幾多の先達を有してゐる。この先達を憶念しひとしき信に生き抜かん

とする心が国民に失せぬ限り、日本は決して動揺しない。たと恐るべきはこの憶念の心のうすれゆくことである。

熊本五高合宿に参加して

『学生生活』
昭和十四年十月号

八月二十六日、門司に一泊の後二十七日午後四時熊本駅に着き荷物をさげて五高山荘へ向ふ。神奈川県で一緒に合宿した友らの笑顔を中心に浮べながら豆タクを飛ばせて下立田の方面へ向ふ。運転手が道を知らぬ為、相当町はづれの山のふもとで降りて歩き出した。道をきき／＼細道を辿つてゆくと、後から不意に声をかけられ驚いてふりむくと二年の野村兄である。ほつとして荷物を持つてもらひ同行の長谷川兄と共に山荘に向ふ。山荘は素朴な田舎家で静かな丘の小高い所に建つてゐる。柿の木の実が緑色になつてゐる。元気な一、二年の諸兄も集つてをられた。合宿は昨日からつゞけてをるさうである。風呂をもらつて浴衣にくつろぎ色々話をなす。独ソ協定のこと、ヨーロッパ情勢のこと等、同じ心の友らがかく遠くの土地をへだてゝ語り合へることはまことにうれしき極みである。明治天皇御製を共に拝誦し、日本国民としての共なる感激に生き得るよろこびを共に味はひつゝ夕飯まで語りつゞけた。

やがて一同そろつて夕食をとり、夜は私が一時間ばかり話をし色々議論を戦はせた。

スポーツの問題、学生思想生活の問題、寮の問題等ラムプの光りのもとで話し合ふ。東光会の諸兄は運動部に関係してをる人が多いため、部の生活に対してはみな真剣な気持を抱いてゐる。同信協力生活はあくまでも広大なものであり運動部の生活を包摂してゆくものでなければならぬ。そこにスポーツも忠義の原理により生命化せられ、みいくさに召されし時の用意ともなり得るのである。我々は選手偏重の弊を除き、挙つて武道と共にスポーツをなし、陛下のお役に立つ立派な身体を作る様に努力せねばならぬ。これは中々易くしてなし得がたきことである。

午後十時より三十分間坐禅、瀬上兄指導、終つて明治天皇御製拝誦、終つて感想を述べ就寝、人里はなれた山荘の夜は早く更け、あたりは静寂そのものである、満天の星は冴え光りまたゝいてゐる。全国の各地に合宿しつゝある友らの上をしのぶ心切なるものがある。

八月二十八日、午前六時起床、洗面後屋外にて明治天皇御製拝誦、山荘前の芝生は一面に露をおいてしつとりとしめつてゐる。

午前八時より講話（高木）約五十分、日本思想史、宗教改革等を中心として話す。

終つて、養田先生の『日本論理学入門』のよみ合せを行ふ。三井先生と共に二十数年を学術改革運動に身を捧げ来られし養田先生の痛切な情意にみちびかるゝ正確な論理と言霊の威力は若き

友らの心をうつのである。

精神科学と自然科学との関係、人生研究の正しき方法等、疑問の箇所を究明しつゝよみつゞける。五高の友らは同じ五高の先輩蓑田先生には殊に畏敬の念となつかしみを感じてゐる。

昼食後、高森先生のお宅を訪問の後武徳殿にゆき高橋空山先生より御依頼の件につききく。帰つてから一休みして、しきしまのみち会をやつた。はじめてうたを作つた人々も非常によいうたを作り驚嘆した。まことに不思議といふ外はない。

「まごころにかへりみくにを思ふときほろびぬいのちわれらにあらむ」と三井先生はうたはれたが、正しく友らのうたは「まごころにかへりみくにをおもふ」若き生命にあふれてゐる。

これまことに神のみちびきである。感激のしきしまのみち会がすんだ所へ浜田兄から電報が来て、今日の晩着くとの報に一同晩飯を早くして熊本駅に向ふ。八時十分、浜田兄はリュックを背負ひ笑顔をかべて出て来られた。久し振りの対面である。同兄は新潟から帰つてすぐ東京駅へゆき急行に乗りおかれて、普通列車で下関まで来てそれからこちらへ直行した由でまことに大へんな道中であつた。一同で目ぬきの銀杏通を歩き夜おそく山荘に帰つた。しばらく話す中に時計は十二時近くなつてゐた。明治天皇御製を拝誦して寝につく。

八月二十九日、朝御製拝誦常の如く、今日はよみ合せを進度を早めつゝ行つた。『日本論理学

入門」、黒上正一郎先生の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』、三井先生の『明治天皇御集研究』等を次々によみ合せて時間の経つのを惜んだ。午後は神風連の墓に参り、夜は芝生に火を焚き寮歌をうたひ、満月の光の下に乾杯して、これからの戦ひを誓ひ合つた。

夜更けてこれからのたゝかひにつき激励し合ひしみじみと、かく一堂に会し得るよろこびを語り合つた。しかし我らの生は悲喜動乱の生である。よろこびは深きかなしみと共にある。先人の苦闘と戦死をしのび、こゝに深きよろこびと共に深きかなしみを味つたのである。かく手記をかきつゝ、思ひは遠く彼地の友らにかよふ。友らよ、雄々しく戦はう。―後略―

九州北部連合訓練合宿（編者註、佐賀市外川上村春日山道場にて、八月三十日から五泊六日間行はれた）

八月三十日午後三時佐賀駅着、教授小田龍太先生はじめ古賀、末次、大津留その他数名の諸兄のお出迎へをうけて恐縮した。ハイヤーで合宿地県立春日山道場にゆく。雨がふらぬため、ほこりのわき上る道をまつしぐらに二十分ばかり走り、道場に到着。道場は実に設備の整つた理想的な場所である。入口から玄関までの樹木には神奈川県合宿と同様、「選択の時は去り決意の時は来れり、新しき時代は未だ来らず、そは青年の心情に内在す」等と墨書した大きな紙が貼つてある。

これより一週間の緊張した合宿が開始されたが、その間諸兄はわきめもふらずまつしぐらに、みそぎに剣によみ合せに精進された。高橋先生はつねに会の先頭に立つて叱咤激励せられ、浜田兄も新潟信和会に於ける痛切な体験をのべられ一同に感銘を与へられた。私も完全に力を出しきつて徹底的に無力を歎じたのである。そして高橋先生より又諸兄よりも色々な御教示をうけた。我らの運動はまことに完結せざる不断のたゝかひである。この間歐洲の情勢は日一日と急展開し、ドイツのポーランド総攻撃より英の対独宣戦と、めまぐるしきばかりで、時事問題についても火の如き議論がたゝかはされた。本文をしるしつゝ、はるか九州の友らを思ふ情切々たるものがある。諸兄と共に健闘しよう。

合宿短歌抄(九州北部連合訓練合宿にて)

みくにいまあやふきときぞと語りあふ我等の思ひは抑へむすべなし
春日山木のくれしげみなくせみの声ももどかし湧き立つ思ひに
しきしまのみち一すぢにふみゆかむと神にいのらむ心をこめて

西郷隆盛遺訓について

『学生活』
昭和十四年十二月号

『西郷南洲遺訓』は徳川幕府大政奉還後廟堂に立つた西郷隆盛が、激流の如くおしよせ来りし西洋文化の渦流の中にあつて、皇国の民のゆくべき一すぢの道を求めつゝ政治の要諦人生の理想をかきのこしたものである。皇祖 天照大神の御神勅のまにまに大陸に進出すべく征韓論を説いたが、容れられずして故郷に帰りやがて城山の露と消えた悲劇的一生が、念々相統の求道の誠により貫かれてゐたことをその遺訓はうつくしく伝へてゐる。この誠によりその思想は無限の開展威力を底にたゞふるのである。西郷翁の人を相手とせず天を相手とせよといふ敬天愛人思想が同朋としての共感共鳴の同信協力生活に帰入する一歩前で止つてゐることはまことに惜しみても余りあるが、大演習中雨の夜を陸軍大将の正服のまゝ 陛下の御座所の天幕の外に侍立してゐたといふ純忠の精神は、国民の口から口へ伝へられて今尚敬仰の的となつてゐるのである。

この誠により西洋文明を批判せる南洲の言は、今日尚再誦三誦すべきものがある。即ち人智を開発するとは、愛国忠孝の心を開くなり、国に尽し家に勤むるの道明かならば、百般の事業は従て進歩す可し。

といふ語である。今日尚「人智」の進歩といへば汽車汽船の發明改良等をすぐ連想する如き人が多いが、これ全く根本を忘れたる考へである。西洋の自然科学萬能思想の余殃はかゝる所にも残つてゐる。今日資本主義社会機構の改革、社会施設の改革、物質的資材整備のみを説きつゝ、愛国忠孝の心を開く方途の努力をほらはぬ人々が多いのも、すべて人生の根本を忘れたる人々である。これに関連し「文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言にして宮室の壯嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふには非ず」の言葉も玩味すべきである。文明開化の声、国内に興り、衣食住に至るまで西洋の模倣に日も之れ足らざる当時の思潮に対し文明といふ語の語義を「道の普く行はるゝ所以なり」と主張せることは、正しき批判である。

人の問題をぬき去つた西洋科学思想に対し適確に語義を正すことにより、南洲は当時の思潮とたゞかつたのである。あらゆる誹謗に屈せず戦つたのである。我らが今日国内にみなぎる共產主義思想とたゞかひつゝある時、「人智を開発するとは、愛国忠孝の心を開くなり」との言に無限の力を得しめられる。「信楽開発」といふ言葉があるが、教育教化の問題こそ明治維新の皇謨扶翼の大問題であつた。

愛国忠孝の心をいかにして開くか、これこそ教育宗教学術すべての問題である。総合的的人生体験にもとづく直観力、思想判断力の長養としての解脱智の開発について明治政府

は殆んど考慮を払はなかつた。人生より遊離した學術のみ学校に於いて教授する為、道のしをりは学外に之を求めねばならぬ。日本教學の頽廢弛緩の凶兆は西郷翁の胸裏にはすでに予感されてゐた。

正道を踏み国を以て斃る、の精神無くば外国交際は全かる可からず、彼の強大に畏縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に順從する時は、輕侮を招き、好親却て破れ、終に彼の制を受るに至らん。

といふ有名な外交精神は、永久に我国外交の指針たるべく、これこそ国内思想問題と相表裏せしめらるべきはいふまでもない。

徳川氏は將士の猛き心を殺ぎて世を治めしか共、今は昔時戦國の猛士より猶一層猛き心を振ひ起さずば、萬国対峙は成る間敷也。

といふ言葉にもみらるゝ如く、萬国対峙列國進攻の情勢に眼をひらきつゝ尚敢然として征韓論を主張した思想の威力、信念の威力をこそ現代日本人は一人残らず奮ひ起さねばならぬ。

今日我らは南洲遺訓を三誦しつゝ、翁の終始一貫ふみ求めし「道」の内容に思ひを致し之を更にきり開かねばならぬ。それが翁の遺志をうけ継ぐ所以であり、それは又我らの負ふ所の東西文化融合の世界的使命遂行の具体的方途に外ならぬ。翁が「天地自然の道」といつたその「道」を

コトノハノミチとして我らの人生体験に密着せしめ、天皇の御製御詔勅に随順しまつることによ
り、その「道」を正しゆく所に南洲翁の思想は更に開展せしめられ、その遺志は実現せられゆく
であらうことを信ずる。「戦国の猛士より一層猛き心を振ひ起さむ」といつたその「猛き心」は
いかなる思想攻略にも「撓まぬすなほにてをゝしき大和心」であり国民協力団結心でなければな
らぬ。それは同時に周密適確なる思想批判力をその根底にひそましむるものでなければならぬ。

西田哲学について

『学生生活』
昭和十五年一月号

西田幾多郎氏の哲学思想は現代日本の哲学界に牢固たる勢力を有するものであるからして、そ
の内容を検討しつゝ更にこれを開展せしむることは重大な文化史的意義があると信ずる。

殊に最近西田哲学が日本の代表的哲学としてドイツに紹介された事実に鑑み、果して西田哲学
が世界に誇るべき内容を有するや否やを日本国民は是非とも検討する必要がある。

順序として先づ氏の哲学を根底づけてゐる人生観の内容を剖検し、逐次その理論の批判に及ぼ
さんとするのである。

(一) 西田氏の人生観

真宗の家に生れ、熱心な真宗の信者たる母上を持つ氏は、親鸞聖人の言葉には非常に影響を受けてゐることが、その著書をみれば分る。『思索と体験』なる著書には特に右のことが強調されてゐるが、始の方でクリストはまだ正義を重んじ、人の罪を責める心が強いが、親鸞には絶対的愛がある、といふ様なことを説いてゐるのは、親鸞に対する見方の皮相なることを示してゐる。親鸞の悪人正機思想は絶対的愛といふ様な概括的表現を以ては尽し得ぬものである。親鸞は南都北嶺のゆゆしき学匠たちと深刻なたゞかひを一生つゞけたのである。概念抽象理論を以て人生を律しようとする学匠とのたゞかひが西田氏にはつひに分らぬのである。

同じく『思索と体験』の中に集録せられた「国文学史講話」序には明治三十七年旅順にて戦死された令弟とそれにつゞいてなくした愛児に対する切々たる痛惜の情がつゞられてある。そしてそこに自分が功名名利を追ふ心を失はしめられ、ひたむきに哲学研究へとすゞむ契機を与へられたことを告白してゐる。人生の無常を感じ人生の悲痛を体験して哲学に志した人は相当に多い。西田氏もその一人であるが、氏の愛児を思ふ情意は、国家の史的生命につながることもなく、祖国防護の意志により統一せられてゐない為、厭世的隠遁的感情に低迷してゐるのである。氏の大正

時代の和歌

なべて皆秋はさびしきものなるを分きて今年の秋はさびしき

思ひ出の影は美しなべて皆うれしかりしも悲しかりしも

赤きもの赤しといはであげつらひ五十路あまりの年を經にけり

しみじみとこの人生を厭ひけりけふこの頃の冬の日のごと

世をはなれ人を忘れて我はたゞ己が心の奥底にすむ

等に最もよくその厭世隱遁思想があらはれてゐる。「しみじみとこの人生を厭ひけり」では親鸞の絶対的愛も何もないではないか。

又「世をはなれ人を忘れてたゞ己が心の奥底にすむ」といふのは、衆生濟度を思はず、つねに山林にかくれて我独り清しとする思想である。かゝる弱い思想生活は大正より昭和にかけての彼のマルキシズムの猛威に対抗することは出来なかつたのである。氏の昭和四年マルキストの青年の來訪をうけた時の歌に

夜ふけてまたマルクスを論じたりマルクス故にいねがてにする

といふのがあるが、マルクス故に夜もねられずと悲鳴をあげつゝ結局、マルクスをどうすることも出来なかつたのである。

それは『思索と体験』、『続思索と体験』等の中にくりかへし説く如く、学問はそれ自身の目的の爲にせよ、政治上の目的のためにするとか、いかに非常時なりといつても、あまり焦つて反動的になるな、といふ様な考へ方が結局マルクシズムに対抗し得ず、その魅力圏内に顛落するこゝとなるのである。世を厭ふて哲学に志すことを誇る様になればそれは立身出世を求むる心と何ら異らなくなる。かくて哲学者として一代の尊敬をうけて来た西田氏も、全国民が忠か不忠かにその思想批判の基準をおかねばならぬ未曾有の国難に際しその態度を明かにすべきである。

世をはなれ人を忘れて己が心の奥底にその逃避所を見出した西田氏は、世の人から学者とよばれ博士とよばれつゝしかも自ら足れりとせず、陛下の広大なる聖恩を思ひ時局の重大を思ひ没我奉公の誠心をふるひ起して、己が心の奥底なる最後のより所「自我」をも一擲打破すべきである。背私向公の学術的意義はかくの如きものである。この自我を一擲し得ざる限り、西田哲学はカント哲学の亜流として時代の急転と共に取り残される外あるまい。

(二) 『善の研究』を中心として

以上氏の歌を中心に論じたる後、氏の倫理学ともいふべき『善の研究』を中心として氏の思想を論ずることとする。

氏が「赤きもの赤しといはで五十路あまりの年を経にけり」と歌によむ如く思索といふことが氏の生命である。しかしその思索がつねに決して人生の核心を衝いてゐるとは決していへない。

たとへば本書六二頁に於いて哲学と宗教との関連に言及し

基督教は始め全く実践的であつたが、知識的満足を求むる人心の要求は抑へ難く、遂に中世の基督教哲学なる者が発達した。

といふが、クリストが学者バリサイ人といかに深刻な戦ひをくりかへしたか、といふ事がつひに西田氏には分らぬのである。

知識的満足を求むる要求により発達したといふ中世のクリスト教哲学に対する批判は氏には不可能である。それは預言者たちを殺し石にて搏つものと悲しきたゝかひをくりかへしたクリストの精神が分らぬからである。而して右の頁の右の部分に於いて、釈迦以前の印度宗教哲学、中世に於けるクリスト教哲学、支那宋代以後の儒教等を知識と情意との一致を求むる深き要求に根ざせるものであるといふ。これ全く氏が世界文化史上に於ける宗教改革者の意志欲求を解する能はざること物語つてゐる。ブラーマンを宇宙の本体とする印度宗教哲学を打破した釈迦の精神、マルチン・ルーテルにより改革せられた中世クリスト教の墮落とクリスト神学との関連、宋代學術を批判せる山鹿素行の情意等はすべて西田氏にとつて未知の世界である。

本書に於いて「純粹經驗」を第一編に説き、その中にて思惟、意志、知的直観等を説くも、氏の説く思惟、意志、知的直観等はその一般的性質を概念的に説くのみであつて、氏自身の体験とは遊離してゐるのである。氏は意志を説く、意志とはかゝるものであると。しかも氏自身が意志する方向に対して具体的に反省は加へてゐない。それ故氏が一度具体的問題にふれると一つ一つ失望せられるのである。例へば右に挙げた宗教と哲学との問題もさうである。又一八七頁に

忠孝といふ如きことは固より当然の義務であるが、其内には種々衝突もあり、変遷もあり、さといかにするのが真の忠孝であるか決して明瞭ではない。

といふ様なことも、赤きもの赤しといはで五十路路あまりの年をあげつらつて来た氏の面目をあらはしてゐる。いかにするのが真の忠孝か、分らなければ小学生に聞けば案外早く分るのではない。大君に仕ふる道に色々変遷があるから現在明瞭でないといふなら重大問題である。これが分らねば氏のあらゆる思索は実にこの一点に集注せしめ、深痛の苦悶に耐へつゝ、それを明らかにすべきではないか。一九六頁に

西行法師が「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさになみだこぼるゝ」と詠じた様に、道徳の威厳は実に其不測の辺に存するのである。

ともいふが、西行がうたつたのは道徳の威厳に非ず現実に伊勢皇大神宮に参り、その尊厳に涙を

流したのである。しかし西行のかゝる歌は思想的にも又歌としても成つてゐないのであつて、こんな歌に対する批判力すらなく、しかも之を持つて来て自分の哲学を權威づけんとするのは不見識といふべきである。又二五二頁には

国家は今日の処では統一した共同的意識の最も偉大なる発現であるが、我々の人格的発現は此処に止まることはできない。尚一層大なる者を要求する。其は即ち人類を打つて一団とした人類社会の団結である。此の如き理想は已にパウロの基督教に於て又ストイック学派に於て現はれてゐる。併し此理想は容易に実現はできぬ。今日は尚武装的平和の時代である。

とあるが、パウロの教、ストイック学派は共に個人の解脱完成を最高理想とするもので、社会の団結の原理とはなり得ぬのである。右につゞけて

遠き歴史の初から人類発達の跡をたどつて見ると、国家といふものは人類最終の目的ではない。人類の発展には一貫の意味目的があつて、国家は各其一部の使命を果す為、興亡盛衰する者であるらしい。

といふ。人類発展の一貫した意味目的の内容は如何、又その一部の使命をはたす為に国家は興亡盛衰するものらしいといふ最後の「らしい」は実に無確信の表現である。しかし右の如く言つたまゝでは氣になるらしく又それにつゞけて

併し真正の世界主義といふは各国家が無くなるといふ意味ではない。各国家が益々強固となつて各自の特徴を發揮し、世界の歴史に貢献する意味である。

といつてパウロやスティックとはおよそかけはなれた様なしかも月並な結論をそつとつけて胡魔化してしまつてゐる。かゝる好い加減な考へ方をしながら眞の忠孝はいかなるものか明瞭でないとおぼつらつてゐるから、マルクス故にいねがてにするといふ如き神経衰弱的敗北思想家となつてしまふのである。

結語

氏は本書の終りに宗教を論じ、宗教的要求は我々の已まんと欲して已む能はざる大なる生命の要求であるといふが、親鸞の言葉、クリストをして已む能はざる心をかり立たしめた批判の対象となつたものは何か、といふことを氏は再思三省されたのである。而して実にその批判の対象こそ「赤きもの赤しといはであげつらひ」と自身告白せる西田氏の如き思想であつたことに愕然として目覚むべきである。

氏は『思索と体験』の中で令弟が明治三十七年旅順の役にて戦死され遺骨も収められなかつたことに對し断腸の悲しみを叙してゐるが、その心事は深く諒とすべきも、名譽の戦死といふこと

に一言も触れられぬことに對する不満はどうしても払拭出来ぬのである。肉親の死はかなしきものである、しかしそれが大君のみたてとなりて戦死せしときは、涙ぬぐひて雄々しくもその後を追ひ共にたゞかはむと決意前進するのが戦死者に對する無上の慰霊ではないか。

筆者はこの批判文の筆を擱くに當り謹んで西田氏令弟の忠靈の遺烈を偲ぶと共に、未だに眞の忠孝といふことが明瞭でないとおげつらつてゐる西田氏の猛省を促す次第である。

歴史哲学研究(一)——時間論の動向——

『学生生活』
昭和十五年三月号

前号(编者註、『学生生活』一月号所載「歴史哲学の新しき開展——三木清氏『歴史哲学』批判を中心として」をさす)で三木清氏の歴史哲学につきその時間論を批判したが、「時間」論は自然科学精神科学両方面より漸次問題視せられつゝあることであるからして、これについて更に論を進めることとする。

『科学知識』本年新年号に澤瀉久敬氏の「生きられる時間・空間」と題する論文が載つてゐる。この論は時間空間を自然科学の根本問題として取扱つてゐるが、内容的には哲学的であつて、論者の人生観は相当に眞剣なものがある為、該論文を最後まで弛緩せしめないものであるが、たゞ澤瀉氏の思想が究極に於いて正しき歴史哲学にまで開展しなければ、人生観としてきはめて不安

定なものであり、我と世界との概念的対立に終始する弁証法的史観を打破出来ないであらう。現代は「私」と「人類」「神」といふ概念のみにより思考してゐる程呑気な時代ではないし、自らの生を支ふる国家の存立興亡及び国家組織の原理がいかにあるべきかを考へないことは本来誤謬でもあるからである。そこに国民としての使命感に生き貫く意志がすべての學術研究を内より支ふべきことを思はしめらるゝのであるが、一応右論文の結論につき論旨を展開してゆくこととする。澤鴻氏はその所論としてまづ左の如くいふ。

ヘルマン・ミンコフスキーは、今と此処とを結びつけることによつて幾何学を具体化した。ユージェーン・ミンコフスキーはそれに「我」を加へることによつて、時空を生に高める。生きられる時間と生きられる空間は我において交叉合一すると共に、今と此処は我と世界をその一点に融合せしめる。

時間と空間とが我に於いて交叉合一するといふ思想は道元の『正法眼蔵』「有時」の中に適確な表現を以て説明されてある。

いはゆる有時は 時すでにこれ有なり 有はみな時なり。

しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。

いはゆる山をのぼり河をわたりし時にわれありき われに時あるべし。われすでにあり 時さ

るべからず。

時は飛去するとのみ解会すべからず 飛去は時の能とのみは学すべからず 時もし飛去に一任せば間隙ありぬべし。

要をとりていはゞ尽界にあらゆる尽有はつらなりながら時々なり。

澤鴻氏が苦心して到達した結論を道元はすでに数百年前にかくも緊急でしかも流暢な表現を以て説いてゐる。しかしこの過程に於いて等しくとも澤鴻氏が前掲引用文につゞけて、

時間と空間が我を成り立たしめると共に、我が世界を成立せしめる。そして我が世界を成立せしめることは世界が世界を創造することに外ならない。

といふ結論よりも道元の

物々の相礙せざるは 時々の相礙せざるがごとし。このゆゑに 同時発心あり 同心発時あり
および修行成道もかくのごとし

といふ方が具体的直接的であつて、それは求道体験の相違といふ外はない。たゞ今日我々が考ふべきことは念々に相統する「いま」を貫く修行成道の意志の方向が更に具体的に追求せらるべきであつて、それは史的生命的の開展に没入する国民生活体験の深刻化により止むに止まれぬ欲求に外ならぬのである。それは単に「作仏」「悟道」として、固定概念的に把握すべくもない。

自然科学精神科学を通じての「時間」論の究明は生の総合的全体の究尽であり、そこに科学と宗教と芸術との渾融合一が実現せられゆくであらう。澤瀉氏が最後に生を正しく解さねばならぬといはるゝことは同感であつて、これをやらずにす「時間」論は究極に於いて時間つぶしの戯論にすぎなくなる。

たゞ問題はいかにすれば生を正しく解し得るかといふことである。前号に引用しまつりし

明治天皇御製

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける

を謹解しまつると、「思ふこと貫かむ世」をまち給ふ持続的御意志をこめ給ひつゝ過ぐさせ給ふ御月日を「長きものにぞありける」と述懐し給ふのである。こゝに於いてこの念々不断の意志を抽出せる時間をのみ考ふる時間論の戯論なることを注意すると共に、念々不断の意志がいかなる方向に向ふべきかを究明することにより生が正しく解せらるべきことを思はねばならぬのである。

アレキシス・カレルはその著『人間この未知なるもの』に於いて「内なる時間」といふことを説き「時計によつて区劃された時間」と区別し、しかもその「内なる時間」を更に「生理的時間」と「心理的時間」とに分け、「生理的時間」とは人間が胎内に宿つてから死ぬまでの凡ゆる

変化を包含する一つのはつきりした「拡がり」である、といひ、「心理的時間」とは意識自らの運動であり精神的の持続である、といつてゐる。

この生理的時間といふものは相当に問題であるが、それよりも第一に問題とすべきは心理的時間に於いてそれを意識自らの運動となす点である。すべてかゝる「時間」は人間の意識により認識せらるゝものであり、認識主体といふものはつねにはつきりさせ乍ら研究をすゝめねばならぬ。カレルの説はこの認識の主体と客体との関係がやゝぼかされてゐる傾向がある。カレルのいふ生理的時間、即ち人間の一生の生理的变化過程も意識と不可分に存在するものであり、こゝに意識の優先的統一性といふものから生理学の相関的研究が必要となつてくるのであつて、この点は時間論のみで押通さうとすると正確な学術的研究とならぬ危険がある。

しかしカレルが「内なる時間」を時計によつて区割された時間と區別しそこに人間の意識活動による心理的時間を考へたことは注目せらるべきである。しかしこの區別を知解を以て認識するのみでは眞の歴史哲学研究とはならない。

吾々は生きてゐる歴史である、この歴史の豊富さは生きてきた歳の数よりもその内部生活の豊富さに基くのである、と彼はいつてゐる。不断に意慾し意図しつゝ人生の無常をかなしみたまゝかひゆく内部生活の無限の拡がりを体験するものにしてはじめて人生、歴史の意義を知り且つその

意志力により正確な科学的研究が展開されゆくのである。我々は単に心理的時間といふものがあると認識するのみでなく、全情意をかたむけつくす意志的生活を実現せねばならぬのである。それ故、明治天皇が畏くも「思ふこと貫かむ世をまつほどの」と仰せられたその「思ふこと」と仰せらるゝ大御心を拝察しまつり、その萬分の一程にも副ひ奉らむと念願せねばならぬのであつて、私の表現にはまだまだ意志力の不足による論理の粗雑さといふものがつきまとつてゐることを痛感せざるを得ない。古人が血涙もてかき記した言葉を現代語に解きほぐす意志力を悲求するのみである。

抄 録—「教壇より」から—

『高 校 教 育』
昭和十五年六月号

私は生徒との精神的交流に於いて、又相互の思想鍛練に於いて心から無力を痛感する。殊に国体觀念のきはめて動揺せる言葉をきゝ又かゝる言葉を以て疑惑的質問をされるとき身体中の血の逆流する如き苦悩と憂憤を覚える。そして高等学校の生徒とはみなこんなものだと思つてしまふ妥協的精神がともすれば心中にもたげようとすることを深く悲しむのである。その憂憤悲痛の情を私は誰に訴へてよいのか。しかし結局誰に訴へるよりも先づ自らの誠の足らざることを責めね

ばならぬ。かう思つてはいく度か自分を責めた。しかしいふべきことはいはねばならぬのである。すなほにをよしく、私は心ある人々に向つていふべきことをいはうと思ふ。肉体は朽ちてほろびるとも悠久の思ひを祖国につなぎ、祖国の運命を負ふべき青年の心につなぐべく、私はくりかへしていふべきことをいひ、説くべきことを説かねばならぬ。

教場にて

『高校教育』
昭和十五年七月号

常若の国のみたみにつたふべき言葉足らはぬことのかなしさ

くし力こゝに生れよ一ときの言の絶え間のたへがたければ

一切をすべむ意志もてひたすらに説けども未だ心通はず

いつか我が言葉すがしく若き友の心に通ふ時なからめや

しきしまの国のみたみを教ふべきことたゞならずみだれゆく世に

歴史哲学研究(五)―田辺元博士の『歴史的現実』を中心として―

『学生生活』
昭和十五年八月号

前四回(編者註、第一回「時間論の動向」、第二回「高坂正顕氏の論を中心として」、第三回「歴史的世界」、第四回「学と

世界観にわたり私が考へて来たことは各回毎につながりをもつたものではなかつたけれども、めまぐるしくひらけてゆく時代にひたすら臣民の道をふみゆかむとする意志のおもむくまゝに色々な説を批判し來つたのである。私は歴史哲学研究といふ題の論文をかきつゞけ乍らも、絶えず自ら所謂学匠沙汰に陥らむとする危険を自覚してゐる。それ程時代は切迫してゐるのである。それ程国家の危急は一瞬の凝滞も許さないのである。この時代に一向直進の改革意志を失つて学匠沙汰をする位ならば、こんな研究は直ちにやめた方がよいと思ふ。

しかし私は意志と行動との不可分關係を正確に認識しつゝ動乱の世をすべゆくまことの學問をすゝめゆかむと志し、同志と共に日夜たゞかひ乍らあくまでもこの研究をつゞけてゆかうとするのである。

田辺元博士述の『歴史的現実』といふ書は昭和十四年五月十日から同年六月十四日までの間、前後六回にわたり京都帝大学生課主催で行はれた日本文化講義の筆記である。

これは氏が、歴史的現実といふものが随順の対象であり、歴史を現実と離れた理念を以て批判する事は許されないといふことを強調せられたものである。

現実に随順するといふことは決して我々が自由を失ふことではない、といふことを氏はくりかへし説かれる。その態度は正しい態度である。殊に氏が

我々は色々計画をたてゝもなか／＼思ひ通りになるものではない。併しどうにもならない中で飽くまで無私謙虚に精進してゐると却て思ひもよらぬ先方から道が開けて来る事を我々は何らかの程度で経験する。これが現実の自由である。

といはれるあたり、従来の弁証法的迂路から一步踏み出されたことを明かに示してゐる。

これは親鸞のいふ自然法爾のことわりであり人生事実人生法則究明のつねに第一歩となる点であつて、田辺氏はつひにこの秘鍵をさぐりあてられたのである。

しかし次に、しからばこの現実をいかに見るかといふ見方に対する批判といふことは依然として後に残されてゐる問題である。

議論を更に具体的にすると、現実とはなれて理念を立てゝはならぬといふことは右の著で充分明瞭にされた。しかし同じく「現実」を直視しようとしてゐる者の中にも現実の把握の仕方について種々様々である、ことを忘れてはならぬのである。

同じく「現実を見よ」と叫ぶ人のものゝ見方が偏してゐるときには、その「現実」の内容は著しく歪曲してゐることが多いのである。総合的ならざるものゝ見方からマルキストはつねに現実を階級的対立観念から見ようとする。マルキシズムからいへば金のないものは絶対に金のあるものには敵かたはない、それが「現実」であるといふ見方をするのである。そしてかういふことに触れ

ない議論はすべて現実無視の議論として斥けられるのである。

かゝる問題をいかにするかは思想批判の問題である。これをしも田辺氏に要求するのは無理だといふ人もあらう。又そんなことは田辺氏の論題外だといふ人もあらう。又田辺氏とて思想批判はやつて居られる、現に右の講演そのものが批判ではないかといふ人もあらう。しかも私は更にこの点を田辺氏に突込んでいたゞきたいのである。

「現実」それは謎の如く、不可知の世界として我々の前に横たはつてゐる、我々は現実から遊離することは出来ない、それはよく分つた。しかしその次に我々は現実をいかにきはめるかといふことを究明せねばならぬ。それは物を考へる人の心理、思想の究明である、それは実にあらゆる学問の出発点である。

その出発点に田辺博士は絶えざる探求の果に今到達せられたのである。これは決して田辺博士に対する失礼な言葉ではないと思ふ。私は博士が「時局評論」をその学究の中に取り入れられむことを切望する。それは学者の義務でありそこに正しき精神科学は進展するのである。「歴史的現実」の哲学的研究は、時局評論から史実批判の領域に入つてゆくべきである。私はそれを主張したい。

それを博士がなされなければ、その説かれる「歴史的現実」なるものが一つの空漠概念として

宙に浮いてしまふおそれがあるのである。

秋山謙蔵氏の著書に『歴史と現実』といふのががあるが、厳密にいへばこの題は変である。それは田辺氏の論理の如く現実とはすべて歴史的现实であり、従つて歴史と現実とは二つの別個のものたり得ないからである。しかし時代に対する感覚は相当にある。この感覚によつて題名の『歴史と現実』といふ如き概念の対立が、統一せられてゐる。右の書には幕府政治に対する批判がある。それは幕府政治が国力進展を阻害してゐたといふのであつて決して透徹した思想的批判ではないが、歴史哲学の研究又日本文化史の研究などは特にかゝる問題を取り上ぐべきである。そして学者は国体防護の戦を実感し体験し展開すべきである。所謂現実の究明に際してもこれがその根本とならねばならぬ。

故北白川宮永久王殿下奉悼歌

『学
生
活』
昭和十五年九・十月特輯号

すゝみゆく大みいくさのさがけと散らせたまひしみのち尊し

君臣のけちめみだれしすめぐににすがしきみちをひらきたまひぬ

荒地の地の底深くみいのちはさりてみくにをまもりすらすらむ

み身をさゝげ道のしをりと散りましゝことのかしこさたゞごとならず

みたみ我れまこと足らはず示されしこのみ教へに心もだふる
いはむすべせむすべしらにはづかしき我身かへりみみたまをろがむ
ゆきましゝみあとしたひて大君のへにこそ死なめみたみ我らは

田辺敬典兄を憶ふ

（编者註、田辺敬典氏は昭和八年海軍兵学校に入られたが、肋膜炎・左腎臓結核・腰椎カリエス等累積せる病患とたたかひつ『直畏堂』の長篇論文を『学生生活』によせられた。同信生活を唯一のたよりに生きつつけられた方で、昭和十五年八月一日逝去された。）

『学生生活』
昭和十五年十月号

再びは起ち得ぬ床に世を思ひ国を憂へて逝きし君はも

こやしつゝ剣打ち振り消えのこる力あつめてふみかきしとふ

尾羽張の剣のいのち身にうつし雄々しことばをしるしたまひき

かなし世にきざみしいのちとこしへのみくにのいのちにつらなりてあり

かく歌ひ君がみたまををろがみて我はすゝまむみたみのみちを

御通夜に列して

香煙のゆらぐが中の一ふりの軍刀白布に横たへてあり

ものゝふのゆくべき道を病みて尚もとめし君のこゝろかなしも

昭和16年(30歳)

ものゝふに選ばれ乍ら戦場に立たれずなりしことのかなしさ
戦場に立たれずあれど目に見えぬ思想のたゞかひに君はたふれぬ
人知れぬこのたゞかひのはげしさをかたりつたふる君がふみはも
霊前に奏しまゐらすレコードの神州不滅のかなしきしらべよ
全国の友らうたへるこの曲をみたまにさゝぐる涙と共に
幽頭を分たぬいのちのつながりをおもへばやゝに心やすらぐ

明治節奉祝式典献進歌

菊の花咲きみつくぬちみたみらは大みまつりをほぎたてまつる

『学生生活』
昭和十五年十一月号

全体主義論

(一)

全体主義といふ言葉が今日は流行語の如くなつてしまつてゐるが、分つた様で分らぬのはこの言葉である。

『新指導者』
昭和十六年六月号

全体主義の基礎觀念につき或人はいふ。

全体主義とは、これを最も簡単に言ひ表はせば「全体は部分に先行する」といふ觀念に基づき、全体たる社会が部分たる個人に先行するといふ社会理論である。

と。

所が問題なのはこの「全体たる社会」とは何かといふことである。それは全体たる社会といふものを我々の主観に於いていかに把握するかといふ認識論から出発し、その認識の正邪真偽に価値判断が加へらるべく、こゝに精神科学界永年の根本問題たる全と個との関係が、深刻なる世界戦争の煉獄の中に究明せられむとしてゐるのである。

近来日本に於いて用ひられてゐる全体主義は大體社会主義と同義語であつて、この誤りなることは論を俟たない。所が意外にもこの謬論が決定的に行はれ、それが防共協定による日本の全体主義化と称しつゝ日ソの差違を念頭に置かず、共產主義社会主義に対する適確な批判を加へずして事実上社会主義共產主義を実行せむとする如き傾向に導いて来たのであつた。

こゝに於いて我々はその是非を我々の直接經驗にたちかへり、素行のいふチカクヒクキトコロより出発して、無理がなく、自然の情を学問的認識究明の根柢に置かねばならぬのである。

(二)

建国大学教授村井藤十郎氏は近著『創造国家の法律学』の中に於いて「具体的全体」といふことを説かれ、具体的全体とは国家に外ならぬと結論されてゐる。それはそれ自体の中にその存在の根拠をもち、随つてそれ自らの生存発展が目的である。無限界の支配圏を持ち、時空に互る本然的統一意志を持つたものであるといはれてゐる。この最後の時空に互る本然的統一意志といふことが最も重要な注目すべき点で、この意志を個人の意志との連関に於いて正しく究明する所に全体主義の本質解明の鍵があるのである。而して結局我々に与へられたる具体的全体とは国家に外ならぬといふ結論を直接經驗的に感覺し得るや否やといふ点が最後に問題となつて来るのである。

(三)

ドイツに於いてはフィヒテですら『ドイツ国民に告ぐ』の中で国家と国民とを區別し全体たる国民と部分たる国家といふ様に分けたのは彼の直接經驗に基き、当時のドイツの封建的分邦よりは全体たる統一国家に対する感覺は生じなかつたものと思ふ。

その上に十八、九世紀旧式哲学の上に立つ所謂多元的国家論が、国家は教会、学校等と並立する部分社会であるといひ、日本に於いてもその残痕が残つてゐて、国家即全体と中々考へられない人が殊に知識階級の人々に多いのである。

尤も「国家」といふ概念に捉はれると、もはや我々の生々しい直接経験からはなれてくるので、こゝに又問題があるのであり、我々は芸術的創作創造の精神を学術的研究に内在せしめつゝ、この難問題の究明に当らねばならない。

(四)

さきに村井藤十郎氏の説を引用せる時、本然的統一意志といふことに触れたが、西洋でかゝる「超個人的全体意志」を正しく説いたのはヴァイルヘルム・ヴントである。

ヴントは公共体の概念を説明するに精神的合成の原理を説き、言語風習家族国家等の公共的産物は個々の成素には心理的分析を加へることは出来ても全体には加へることは出来ぬとなした。

近代科学の個人主義的思想法によれば、国家社会はあくまでも個人の総和であり集積であつて、それ以上の何ものでもないとされた。そこに社会国家契約説が生れた。

ヴントは之に対し国家社会には個人意志と分離はせぬが、之を超出せる合成意志が存在しそれが全体に対して支配的地位に立つのであるといふ。

この合成意志を最もよく説明し得るのはヴントによれば言語の発達であつて、言語はどうしても個人の案出といふことで解釈出来ぬからである。又一つの芸術的作品にはその作られた時代や国民の或る調子が附いてゐるが、その調子について純粹な論理的分析は加へられない。たゞ可能

なことは同一性質の芸術作品の共通点を調べて当時の文化に関係づけて考へて見ることのみである、といふのである。

しかしこの合成意志といふことが中々多くの人に分らぬのであつて、所謂アトミズムの影響は深刻なるものがある。凡ての関係を矛盾関係と見たヘーゲルの弁証法は、このアトミズムの影響下にあるのであつて、アトミズムを打破せんとして打破出来ぬのである。ヘーゲルは、公共体を個人的条件に分析しきれぬ統一体として認めつゝ、それが個人といかなる関係に立つかといふことが説けないでしまつた。これは彼に正しき心理学が欠けてゐた為である。

(四)

今我々の精神生活を省りみると、祖国をはなれては祖国を憶ひ、家をはなれて家をおもひ、親兄弟をおもひ、同胞をおもひ、友をおもふのは自然の情である。

ヒューマニズムといふ思想は本来公共心の振起を意味してゐるが、不断に流動し交流せんとする人間精神が限定された個人我に局限せられず、個人を超えた全体を内に味はむとする欲求は否定出来ない。こゝに従来外部より一の形体として考察せられ来つた「公共体」はこの人間の内部的な精神生活の究明により内部的に把握され認識されむとしてゐる。

旧式ドイツ哲学の幕府的压制下に呻吟して、近代人間精神は先づナチスの學術革命によりゲル

マン神話の復活となつて、急速に交流開展し、今や全歐を動亂の渦中に投じつゝ、そこに生く無息の精神の開展とそれに基く正しき秩序を着々実現し、人情人倫否定の共產主義は克服せられつゝある。

たゞ今後ナチスとして考へねばならぬことは所謂シュパン流のカトリシズムの全体主義の誘惑に対する警戒であつて、紙一重の差で内容は天地の差となつて来るのであり、それに対する価値判断の客観的基準を不斷に統治者の言葉によつて明かにしてゆかねばならぬであらう。

そこで問題は日本である。

東西の文化渦流交流する中心に立つて苦闘する日本は、三千年来もちつゞけて来た他国文化に対する敏感性の故に一切の文化に対して無関心で居られず、つねに他の影響をうけつゞ来たのである。しかし幸ひなことに他国文化の影響をうけても、そこにつねに国民をして帰趨に迷はざらしめ給ふ 天皇のみことのりと隠れたる指導的天才の精神が一貫して相続せられて来たことは否定出来ない。

而して所謂全体主義が、皇室を中心として又皇室に忠誠ならむと意志する指導的人格の言葉に共感共鳴する同志的結合の中に、直接の感覚に訴へて祖国の無窮生命を護らうとする意志により正しく開展せしめられて行くべきことを信じ、且つかく念ずるのである。さもなくば、全体主義

の名の下に人間の情意を涸渇せしめる共産主義権力思想が跋扈してしまふ惧れがある。

ごく雑駁な議論になつてしまつたが、筆者は全体主義理論の内容についての細密な検討と共に積極的文化政策論を用意しつゝある。

朝

『新指導者』
昭和十六年六月号

紅つゝじつぽみふゝみて春たけしき庭べ朝のま日てりわたる
やはらかき土もありあがる木のもとに生ふる若草色のさやけく
ところせき庭にはあれど春花のにぎはひ咲くを見るぞたのしき
南天のあかき実の玉左手には梨の白花いまたわゝなり
植木鉢置きかふ父の年老ひし姿なつかし家出づる我に

歌集「心田」より(高校在職時代)

序

『新指導者』
昭和十六年七月号

店に稀れなる上質ノートを選び買ひ来て、生の記念の歌集となしぬ。歌集たづさへ我がゆくところ 天
つ神々かけそひたまひ、まもりますらむ しきしまのみちを。心とゝのへ我が吐く言葉は、友らの心に

ひときかよはむ 心田の培ひ、これのみぞ心の願ひ、そをこそ果さめ、これなる歌集に。(昭和十五年

四月十一日)

歌(四月十一日)

目に見えぬあやし力のひしひしと身に迫りくる日毎日毎に

思想戦たやすくいへどなかなかたやすからざるわざにしありけり

一ときも心やすらぐいとまなきこの世に生れし男の子ぞ我は

うたをよむ時のみ心安けしと先つみかどはうたひたまひき

うつしよに歌よむことの楽しさをはじめて知りぬ乱れし御代に

うつしよをすぶべき心うたよめばおのづとわきくる神のまにまに

歌よみてうつしよすぶるくし力我にもありと思へばうれし

千早ぶる神のみ力かゝぶりて生くる安けさ歌によみなむ

教場にて

指導者となるべき人よ危ふかるみくにまさめに見よと説きたり

声をかぎりに我が説きあかす學術の方法いまだ生徒は分らず

くりかへし説かば必ず悟らむと心はげまし説かむとすれど

頓悟入信の心の動き一人一人に知り得ば我も説き易からむに
むらぎもの心の動き一人一人異りたれば説き難きかも

我がいのちすりへらしても日の本の国背負ふべき人を育てむ

四月十六日

教場に並みゐる生徒ら面あつめこなたみつめぬ我が入りゆけば
しはぶきもたたず静まり我がかたをみつむるさまにみぬちしまりぬ
皇国の悲しきさだめ担ふべき若き人らの面みつめぬ

四十の心もだへか底ゆるる重たき思ひ我に迫りく

そを支へそをはねかへし己が身の裂け散るまでと語りつづくる

○

みことのりにこもる御稜威の奇し力今ぞ知りぬる心の底より
みことのりにまつらふ時ははかり得ぬ人の力はわくと知るべし
みことのりなみする人の乱れゆく心はやがて世のみだれなり
みことのりに背きまつらばむらぎもの心狂ふと今ぞ知りぬる
狂ひたる人の心ははてしなく世を乱しゆくみるに危し

抄 録 「西欧文化の運命」から

『新指導者』
昭和十六年八月号

親が我子の病気に一喜一憂し、事業家が自らの事業の成否に一喜一憂する、それがありのままの即ちまことの人生である。このありのままの人生を全体的に心に統べつゝ、国家全体の動向を考へつゝ、そこに祖国の運命に一喜一憂するのが、正しい意味の政治学であるが、ギリシヤの政治学者は概括的にいつてこの一喜一憂する気持がなく、こゝにギリシヤ文化爛熟して国は亡びたのである。シュペングラのいひ方はたどたどしいが、いはむとする所はかういふことで、歴史の開展を智解を以て認識するよりも意志的に史的開展の中に没入してゆけといふのである。

西欧文化の運命は決して日本文化の運命と別個に存するものではない。一つの文化単位として世界文化のあらゆる要素を日本は自らの中に持つてゐる。それ故西欧文化の興廃は最後に於いて日本の重大責任として負荷さるべき運命にある。

友へのたより

『新指導者』
昭和十六年十月号

久しく御無沙汰してゐるけれど御元気ですか。東京も長雨ののち漸く本当の夏らしくなつて来て昼間は三十四度から三十五度にもなります。

そんな訳で読書も中々能率が上らないけれども、やはり本をよまないでゐるといふ事も出来ない性分なのでよんでゐます。

そしてともすると毎日後から後から発行される新刊書の勢に吞まれさうになるけれども、本屋でよく気を落ちつけてよんでみると、案外よい本は少い様だね。君にも何かお送りしようと思ふけれども中々これと思ふのがないものです。時代を根底から揺り動かすのでなくて時代に乗つてゐるものが多いと思ひます。

そしてそれらの本が多く出れば出る程僕は意的に反撥してしまふのです、これは一面からいふとよくない事かも知れませんが。読書の方法について余り考へた事がないからでせうが、時折自分の読書法について反省することもあります。

○

いつかの講演会で僕はクロード・ファーレルのアジアに於けるヨーロッパの中から、一九三七年から、支那の政治は事実、蔣の政治であることが終つてしまつた。支那の政治が、インスピレーションがモスコオから来る匿名政治化したことは疑ふ余地もない。満州国―日本に保護されてゐる―とソヴェトの植民地たる外蒙古とを分つてゐる国境で起つた度々の好戦的な事を構へるやうな事件を切りはなしてはほとんど説明できない。さらに極く最近、蔣介石は日本に秘かな苦悩をも秘めて、率直な通牒を發してゐるが、その中で、「日本が余を相手としない？余死せばとて、支那は何等の事情の変更を見るものではない」と言つた。あまりにはつきりした、この眞実は（西歐人たちはこの苦しみを誤解した）蔣自身も確信してゐないのだ。だがこれは事実である。はげしくも、悲しい事実である。極東の平和も戦争も、もうこれからは、この有名無実な蔣介石といふ男にかゝつてゐるのではない。

それはかつての支那の匪賊たちでゆたかな大臣、ゆたかな部将となつた匿名の沢山の人間たちの手中に、また銀行家、武器商、国際投機家たちの手中に落ちてゐるのだ。

といふ様な箇所を引用しましたが、これを引用しつゝ底の底まで心が滅入つてゆくのを感じました。

ファーレルが、日支事変はあまり気がかりだし、またあまりにも異様だ、だから閑つぶしなど、

のん気な気持では研究できない、といつてゐる如く、我々日本人自身も考へると分らなくなることばかりです。けれども日本が刻一刻世界の重囲に陥つてゆくことはひし／＼と感じます。二、三年前僕が君に会ふ度に、ソヴェトは日本が弱る頃必ず米国と結んで挟撃して来るだらうと言つてゐたけれども、悲しいことにはそれが本当になつて来た様だね。

○

アメリカの石油船が護送艦に囲まれてウラジオストックに向つて出発したといふ新聞記事を見ましたか。いづれ何処かの日本本土の海峡を通るのでせうが、これこそ日本の權威に関する重大問題だと思ひませんか。

○

チェレーンが地政治学論の中で「ナポレオンがモスコーを取ればロシアは崩壊すると考へたのが誤算であつた」と言つてゐますが、支那についても同じことが言へませう。クロード・ファレルも、

皆さんは磯にうちあげられた蛸を御覧になつたことがあるだらう。支那はちやうどあのおそろしい蛸であつて、何でも吸ひつけるが、背髄も持つてゐないのだ。何処を掴めばいゝかわからない。茫乎としてどうしても掴めないのだ。

といひ、

支那は現在も一つの無政府時代にをるのだ。支那はかつて、一つの国家であつたことがない。国家といふ觀念は全然支那人の頭にはない。支那はその起源は恐らく単一にちがひないが、民族の集塊以上のものだつたことがない。

といつてゐます。かういふ国と戦ふ戦のやり方を日本は果して研究してゐたでせうか。

長い間の鎖国時代に日本人は荒土開拓のはげしい意志を失ひかけてゐました。それは事実でせう。古事記にあります御国生みの神話の伝へる無秩序の土地に秩序を与へてゆく意志、自然を培ひ耕してゆく文化創造の精神が喪失されようとしてゐたのです。

近頃流行してゐる地政治学でよくいはれる「領土は国家の体軀である *das Reich ist der Körper des Staates*」といふ土地を肉体の如く考へ、人間の肉体と土地とを密着させて考へる思想ですが、何か御国生みの神話に通ふものがある様に感ぜられます。

自然から遊離した都会文明が文化を衰退に導くことは古来つねに警告されてゐた所ですが、僕らは今こゝで土地に対する愛着、生物を生み成してゆく情熱を失つてはならないと思ひます。地

政治学では民族の性格心理に関する研究が欠けて居り、更にそれをいかに理想的に鍛へてゆくべきかといふ様な政策が示されてをらず、つまりそれは政策の素材的要素として役立つ様になつてゐるのでせうが、かういふ学問からヒントを得つゝ直接自分の精神の危機に気づかなければならないと思ひます。かういつても決して今の流行思想の様に消費と生産とを対立させて消費よりも生産が重要だといふ如き事をいふではありません。最近電車の中で「生産者団体たる漁連の東京進出!!」などといふ広告で海苔と鰹節を売つてゐるのですが、わざ／＼こんな所で生産者団体と断つて威張らなくてもよいと思ふのですが、どうもかういふ所が変だと思ひます。消費者はいけない、商人は生産と消費の間に立つて搾取するから最もいけない、これはなくしてしまへ、といふ思想には僕は絶対反対です。これは結局、「物」といふものを縦横に駆使するダイナミックな意志力を失つた、スタティッシュな考へから出て来る議論です。さういふことでは生産者そのものも保護することは出来ずまい。人間の生活は一つのつながりを持つたものであり、生産といふこともつと総合的に考へねばならぬのです。

これはお手紙で充分つくせるものではありませんが、とにかく今「商人」がみないやになつて「生産者」になりたいといふ時代で、妙な時代になつて来たものだと思ひます。

○

話が色々に飛びますが、久し振りの手紙なので次から次へ書き度いことばかりで整理に困つてゐます。しかし手紙だと抽象的なことが書けない所によい所があると思ふ。

論文などになるとともすると概括論となり抽象的になり勝なものです。近代資本主義の行詰
—高度国防国家建設—東亜新秩序建設といふ様な言葉を並べる凡百の論文著書が、実に深みのない抽象論が多いのであつて、君もいつかの手紙でこぼしてゐたのを思ひ出します。

殊に田舎にゐると、さういふ文章と現実の生活感情が益々疎隔してゆくだらうね。日本人の神代ながらの生活感情、直接経験といふ様なものをなくなさない様にすることが今日どうしても必要だと思ふ。商業学校の生徒など、国家とか国家生活とかが本当に分らない人々が沢山ゐるのだから、危機といふのはかういふ所にあるのだね。かういふ現実の混迷をそのままに認識して、その根因を正し、脈々たる国民感情を湧き起らせることが、思想対策委員会などでも考へられなければならぬと思ひます。

今はすべての人が危機を内に感じつゝ、その危機と戦はねばならない時代だと思ひます。

(下略) —八月某日—

抄録 「新体制論の反省」から

『新指導者』
昭和十六年十一月号

悠久の歴史生活は人類民族悠久の思ひと共にあり、悠久の思ひとは、あるがまゝの悲喜動乱の人生の痛苦の中に貫かれる断ち難き愛着と憶念と理想実現の意志等を綜合したものである。

信はつねに疑と共にあり、真理はつねに迷と共にあり、人間精神生活はつねに煩惱と共にある。万邦無比の日本国体はあらゆる反国体思想との悲痛深刻なる戦ひにより護られ来り今後も永久にかゝる戦により護られてゆくべきものである。所がこれら迷とか疑とか煩惱とか反国体思想とかを認め究めて、それを念々に払拭しようと思志するのでなくて、その存在を否定しようとしたのが多くの新体制理論である。

これはそのこと自身が一つの非常な迷ひであることに気付かねばならぬのであつて、かういふ理論が實際政策をバックする様になると、非常に不親切な人情味のない政策となつてあらはれ、ことに事、国体に関する場合、反国体思想の存在を否定せむとする結果は反つて反国体思想との戦を阻害し、結果的には反国体思想を増長せしむるといふ由々しき結果を招来するのである。

維新大業の指標

『新指導者』
昭和十六年十一月号

桜田門外の変、大和の変、生野の変、長州征伐、大政奉還、討幕の密勅、王政復古の大号令、鳥羽伏見の戦、征東大総督の出発、徳川慶喜の恭順、五箇条の御誓文の渙発、と明治維新の政治過程は複雑を極めてゐるが、木戸孝允はその自記に

戊辰の歳伏見戦以来、諸藩京都に輻輳し、議論百出、或は攘夷と云、或は開国と云、或は鎮国と云、而して三論中又種々派党を立て各々国論と呼び藩論と唱へ、天下囂々自ら紛乱の勢あり、東北の戦争を終へ、諸藩其国に就き互に我流を主張し、兵力を養ひ、長は薩と肩を比し土は肥と争ひ、各一隅に割拠し、眼目を只内地に注し已に大患の外に来るを知らず、当此時、朝廷上条理を推すもの有りと雖も、亦是を如何ともすべからざる、知る可し、此に於て皇国の大不幸、則億兆の大不幸、未曾有と云ふ可き也

と記し、その間の事情を物語つてゐる。

攘夷開国両論の対立から廃藩置県の内政改革、征韓論をめぐる対立と同時に、神仏分離を目指す神仏判然令の発令より行はれたる廃仏棄釈及びそれに対する仏教各宗派の反撃、キリスト教の

伝播等々宗教上の問題も複雑を極めて、まことに明治初年より十二、三、四年にかけての間は多事多難であつた。

この間の歴史を従来は、政治史、文化史、社会史と各々別な見地からしかも別な方法を以て研究されて居て、総合的方法が取られてゐないのは残念なことである。しかも現在に於いては目立つて、唯物史観的方法が有力な地位を占め、封建主義の没落より資本主義への発展段階といふ公式適用は苦もなく行はれてその説は非常な力を持つてゐるのである。この方法は時代の思潮と中心的指導者の思想との関係、それが、いかなる系統を以て、以前よりつゞいてゐるかといふ様なことは一切考へず、全てを経済的關係に分析してしまふので、事実に則した研究の出来ぬことはいふまでもない。

こゝに筆者は現在の國際的危局と国内新体制の動向を考へ合せ、今一度明治維新の政府の施設と指導者の思想内容との関連を研究して、現代の鑑とせむとするのである。

(一) 王政復古と平田派神道家登用

徳川氏は大政奉還して王政復古するやこゝに祭政一致の御親政が復活したのであるが、こゝにその衝に當つた岩倉具視が重用したのが平田篤胤の流を汲む矢野玄道であり、又同じく平田派の

大國隆正の思想を承継する玉松操であつた。

これらの人々が建策して神道の復活を叫び明治四年左の如き三条教憲が神部省から発せられた

第一条 敬神愛國ノ旨ヲ体スベキ事

第二条 天理人道ヲ明ニスベキ事

第三条 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守スベキ事

右の教憲を仏僧は三条教則と呼び種々の解説書が出来た。

明治六年一月、東京に大教院を置き、各府県に中教院、小教院が置かれ、仏僧も、装束を著け拍手を打つて大教院に出仕し、三条教憲を講義するに至つたが、神官と仏僧とは早くも衝突し、明治八年に大教院は廃止され、仏教各宗は各自その宗旨を説くことを許された。この失敗は何処に原因ありやと云ふに、当時の祭政一致の思想が、仏教とかキリスト教とかを批判撮取統一し得ない偏狭なる平田派神道であつたからであつた。これに対して正しき識見を有せざりし岩倉具視の思想がこれ又、維新政府の政策に甚大なる影響を与へてゐることを看過し得ない。

吉田松陰先生が留魂録の中に「京師に大学校を起して天下の人材を集め、天朝御教習の余を分つべし」といつた正しき皇神の道はかくして廟堂の指導者によつては復活されなかつたのである。岩倉は明治四年大使として欧米に使し、キリスト教の公認を迫られ、容認して帰つてきたが、信

教の自由といふことは、かくて何ら見るべき統一的文化政策なくして認められることゝなつたのである。

(一) 保守思想と進歩思想の対立

明治初年より七、八年に至る間、保守思想と進歩思想とは激しく対立した。所謂文明開化の普及を目指し、御一新といふ標語のもとに職祿世襲を廃し、帯刀を禁じ、斬髪に改め、太陽暦を用ひ、貨幣制度を新にし、徴兵令を布いた。明治八年に銀座通りが煉瓦建築となり東京横浜の外人居留地が西洋文明の延長であり、瓦斯灯は街に灯り、明治新政府は次第に西洋文明の崇拜模倣に力める様になつた。御一新とは本来神武復古であり、祭政一致の復活の爲の教学興隆でなければならなかつたのに、現在の新体制の如く目標があらぬ方に進んで行つたのである。

而して明治初年の官憲によるキリスト教の圧迫が、列国治外法権の撤廃との代償として、強制的に解消せしめられたのは有名な話である。明治五年に岩倉具視が大使として米國大統領に接見後、國務卿フィッシャーより、キリスト教禁止の教札撤去を迫られ、次いで英京ロンドン、フランスでも峻厳にキリスト教布教の自由を要請された。ドイツ、ベルギー、イタリーの諸新聞も亦、大使一行を歓迎する辞よりも、日本のキリスト教迫害に対する非難と憤慨とを掲げた。副使の一

人であつた伊藤博文は、日本政府に上申して

吾人は行く処として切支丹追放と信教の自由との為^にに外国人の強訴に接せざるはなし。思ふに
此際、前者に就いては速に解放し、後者に関しては幾分自由寛大の意向を表明せざれば、到底
外国臣民の友誼的譲与を期待すべからず

といつてゐる。そしてドイツに於いて、岩倉大使はグナイストの意見をきき、宗教は自由に任
した方がよいといふ意向を強めて帰朝したのである。こゝにキリスト教の宣伝布教は非常な勢で行
はれ、天賦人權論等の外来思想と共に、思想文化上の問題となつて来た。しかも政府の方針は殆
んど放任であつた。

(三) 征韓論をめぐる論争

明治四年廃藩置県が行はれたが、その折、西郷南洲が鹿児島県の桂四郎に宛てた手紙の中に
当時は万国に対立し、氣運開立候ては、迎も勢ひ難防次第に御座候間、断然公儀を以て郡県の
制度に復復候事に相成

といふ文句があるが、万国に対立する為には藩毎に割拠してゐてはならぬといふ氣宇が躍動して
ゐる。西郷と争つた大久保利通は明治五、六年に欧米視察に行きドイツのビスマルクに会つて激

励され、ビスマルクの铁血政策を真似ようと決意して帰つて来たのである。

その方針は西洋の文物制度を整へて内治に力を注ぐこと、その為にはあらゆる反対を押し切り、
铁血を以て断乎としてやりぬくといふ方針である。この決意と実行力とは高く評価さるべきでは
あらうが、それは往々権力偏執の政策となり、将来の見透しよりする経綸を立て損ずる恐れがあ
る。戦国に於いて民主主義思想による独裁政治が強行せられる時には、非常な不祥事が勃発する
危険がある。

西郷南洲の思想もとより完璧とはいへないが、大久保利通の思想はそれよりも民主主義的であ
る。大久保が伊藤博文に宛てた憲法制定の要を力説せる意見書の中にかくいふ。

抑々我カ

祖宗ノ国ヲ建ツル豈ニ斯ノ民ヲ外ニシテ其政ヲ為ンヤ、民ノ政ヲ奉スル亦豈ニ此ノ君ヲ後ニシ
テ其国ヲ保タンヤ。故ニ定律国治ハ即ハチ君民共治ノ政ニシテ、上ミ君權ヲ定メ下モ民權ヲ限
リ至公至正、君民得テ私スヘカラス。(中略)

其特權君ニ在ルヲ君主ト謂ヒ、民ニ在ルヲ民主ト謂フ、其君民共ニ之ヲ執ルヲ君民共治ト謂フ、
此レ上下各其公權道義ヲ保全暢達センカタメ、君民共義以テ確乎不拔ノ国憲ヲ制定シ、万機決
ヲ之レニ取ルコレヲ根源律法ト謂ヒ又之レヲ政規ト謂フ。

更に左に引用する所は大久保の「君民共治論」の内容を表はしてゐる。

然リト雖モ今日此議ヲ建ツル乃チ

天皇陛下ノ大権ヲ輕重スルヤ、曰ク否、夫レ、天子ノ大権其ノ外貌益重ケレハ則チ其實権愈輕シ、何ントナレハ則チ將門均ヲ乗ルノ日、天子九重ノ内ニ在リテ威嚴堂々、下民仰テ神トナス、而シテ、天子尺寸ノ権ナシ、一旦親カラ万機ヲ裁スルニ当リテ下民始メテ天日ヲ拜シ、至尊モ亦タ斯人タルヲ知ル外貌ノ威半ハ損ス、人情時務ノ日ニ開明ニ赴ク水ノ湿ニ就クカ如ク、物理ノ自然人力ノ支フル所ニ非ス、今ニシテ之レヲ察セス、其外貌ノ大権ヲ強持セント欲セハ則チ天下坐ナカラ官署ヲ擁シテ昔時將門乗均ノ日ニ異ナラサルノミナラス、天位モ亦將ニ危カラントス。是ヲ以テ上ミ君権ヲ定メ下民権ヲ限ルモノハ蓋シ國家愛欲ノ至情ニ出テ、人君ヲシテ、万世不朽ノ天位ニ安ンセシメ、生民ヲシテ自然固有ノ天爵ヲ得シムル所以ナリ

右の論は要するに天子が万機を親裁遊ばされると、人民は仰いで天子も亦人なるを知りその威嚴を失し人情のおもむく所遂に天位も危くなる。それ故君権と民権とを限ることにより天位を保ち生民固有の天爵を保たしむるのであるといふ。不遜なる、何といふ臣民としての感覺の鈍いはからひであらう。

君臣の分は權利を分け合ふことにより定めらるゝなどといふのは飛んでもない間違ひである。

至尊の御姿をうつくしく拝せば、益々その尊さに打たれるべきを先づ思ふのが日本臣民としての正しい感覚である。それを「至尊モ亦人タルヲ知ル、外貌ノ威半ハ損ス」といふのでは実に日本人らしからぬ感覚である。所謂天皇機関説の思想はかゝる所より発するのである。

かくも鈍感なる感覚を持つ、大久保が西郷卿を斥けて強硬政策を実行し刺客に殺害されたことは、精神的思想的には正に維新大業途上の重大危機であつた。大久保の死後、自由民権論者一斉に蜂起したのは、一種の反動であつて、忠義臣道の明徴は遠遠となつて来るのである。

(四) 現代との関連

この不安動揺の中に、明治五年から十八年にかけて前後六回に亘り、畏くも明治天皇には全国各地を御巡幸になつたのである。民草ひとしく天皇陛下の御稜威を仰ぎ奉つた。矛盾対立あるがまゝに大御代をすべさせ給ふ大御心に、なびき伏したる民草の心は、未曾有の皇国飛躍期に帰一の道を与へられたのである。今日明治維新に対して昭和維新などといはれ、高度国防国家建設の為の国民生活の編成替へをやらねばならぬなどといふ飛んでもないことがいはれてゐるが、古いものをばら／＼にして新しく作りかへるといふ様なことは、日本の国に於いて考へてはならぬのであつて、高度の協力精神は直接、天皇の大御心に帰一する臣民の歴史的伝統精神によつて

のみ実現し得ることを考へねばならぬのである。その意味で国民再組織とか新体制といふことが全く新しい理念に立つと言つて宣伝されて来たことは深憂すべきことなのである。古きものは凡て資本主義国家体制であり、これを否定して新しき国家体制を形成するといふことはそこに実に危険なる革命思想を醸成せしめるのである。

独逸グライラズツルド大学教授ベルンハイム博士は一九二二年、その著『史学入門』の序文に次の如く書いてゐる。

目下独逸で流行する革命的風潮は史学のために不利である。革新熱心者流は考へる、古き事物は何の価値もない、それを少しも知る要はないと。歴史哲学の著作に於ては歴史事實の認識の認識可能性に対する盲目的懷疑が勢を逞うして居る。人々は専門的に練り上げられた精細な作品を蔑視し、歴史の素材をば、指導的理念の手段で、直観的形体にぶち込んでしまふ。之と同じ風潮は他の国にも現はれて来る。

ベルンハイムは史学研究の見地からいつてゐるのであるが、社会民主党の勢力下にあつたドイツの革命的風潮に反撥してゐる言葉は、現在の日本に於いても首肯出来るものがある。

歴史の素材を、指導的理念（ライテンデ・イデー）の手段で、直観的形体にぶち込む

といふ、その「指導的理念」といふのがつねに問題であり、事実を歪曲する固定概念の強制に対

し、歴史研究者はつねに戦はねばならぬ宿命を感じしむる。それは現在の日本でいへば、資本主義体制が旧秩序でそれを打倒する新秩序の建設といふ、理念一色で歴史を塗りつぶさんとする傾向である。

最近出る日本歴史の書物は多くかゝる理念で書かれてゐることに注意せねばならぬ。こゝに社会主義共産主義イデオロギーが常識化しようとする危険が益々増大しつゝあるのだ。我らは渾身の力もてこの風潮と戦ひつゝ豊かに強靱な精神を振起して、明治の聖代を偲び奉らねばならぬ。

〔編者註、本論については『国史の精神』（日本世界観大学叢書・昭和十七年一月刊・精神科学研究所発行）にさらに詳しい。〕

日本的な物の見方

『新指導者』
昭和十七年二月号

(一)

その昔、ギリシヤのプラトンは、矛盾の彼岸、魂の郷土イデアの世界に至る魂の革命を説き、その論理形式として、弁証法を取った。無常変易の人生の中に常住不断なるものを求めようとする人類の普遍的欲求は、往々その目標として心に描く常住なるものを図式化し、その図式に向つ

て、現在の状態を急激に変化せしめようとする、ラディカリズム、革命的精神となるものであることを警戒せねばならぬ。スペインのホセ・オルテガは、現代の課題（池島重信氏訳）の中で、デカルトの人間は純粹知性の完全性といふこの一つの道德だけしか容認しない。彼は他のすべてのもので対して聾であり、盲である。だからして過去と現在とは彼の眼から見れば微塵も尊重に値しない。それどころか、理性的見地から見れば、過去と現在とは明かに犯罪の外観を呈するものだからしてデカルトの人間は増大する犯罪を剷滅し、彼の明確な社会秩序を速かに整備するやうに勸説する。純粹知性により構成されるところの未来の理想が過去及び現在の理想に置き代へられなければならない。これがもろもろの革命を生み出す精神状態なのである。政治に適用された唯理主義は革命である。またこれを逆にして、唯理主義的に非ざる時代は革命的でない。ひとは、歴史を感知し、過去及び現在のうちに別種の理性即ち純粹理性ではなく生命的なる理性を認知することができぬのに応じて革命的となるのである。

と述べてゐるが、唯理主義と革命との關係を明かにし、歴史事實をはなれた純粹理性の産物たる社会構図を急激に実現しようとする所に革命が勃発することを警めてゐる所は、その部分に於いて振るべき所がある。日本的な物の見方は大局から論ずれば、順逆を決し、革命的思维と内面的に戦ふ所に、その法則が確立されて来たといへよう。日本に曾つて政治革命がなかつたといふこ

とは、決して偶然の出来事に非ず、実にそれを勃発せしめざる様意識的無意識的努力がくりかへし継続されて来たことを忘れてはならないのである。この努力は楠公が戦死に当つて七生報国を誓つた悲願や明治維新志士の悲願にその永遠の指標を与へられてゐるが、そこには毫も傍觀的理智的説明を許されぬのである。

(二)

アリストテレスがプラトンのアイデアに安住地を求めず、動きゆくものそのものに實在の相を見出さんとしつゝ一切の生成を最低の質料(人間に於いては肉体の如きもの)と最高の形相(人間に於いては精神の如きもの)との間の排列によつて観るのであるが、質料と形相をかく二分したことは、アリストテレスと雖も免れることの出来なかつた二元論であつて、この二元論を論理的に解決しようとしたのが弁証法の迷妄である。弁証法に於いては(AはBなり)といふ論理的判断をなす場合AとBとを最初から峻別し両者を絶縁してかゝるのである。これがそもそも調和的ならざる不統一なる精神生活より出発する考へ方である。

今仮りに日本的なる物の見方の特長を挙げるならば、あらゆる矛盾をいつも内面的に統一してゆかうとすることであつて、この点従来の日本文化研究家といふ人々は遺憾乍ら極めてあなかつた為、あれこれと概念的に外部から説明するのみで、自分自身の態度精神といふものがその中

に反省されなかつたのである。

これでは絶対に日本文化の本質は分らぬし、又日本の考へ方といふ如きことは擱めぬのである。日本の考へ方は全体としてあるものを先づ全体として擱む所から出発する。

全体を先づ把握することは古来伝承的なる芸術的直観の中に行ふことを修練されて来たのであるが、明治以来西洋精神科学の輸入と共に、大学は当時のドイツ旧式哲学の擒となり、それが政治家官吏の頭脳を支配し、空前の世界観混乱時代を現出したことはこゝに繰り返す必要はない。

「人間は理性的存在なり」といふ仮定より出発し、純粹理性より演繹的に發展せしめられる論理的正確さに絶対の信を置きつゝ過去を否定するといふ行き方が、色々様々なるドグマを成立せしめて収拾すべからざる状態に陥つてしまつた結果、その風潮に乗じて原始的な魔力を恣にしたマルキシズムが根強く浸潤してしまつたのである。

前掲ホセ・オルテガの文中「純粹知性の完全性のみを一個の道徳として容認する人が、他のすべてのもので対して聾であり、盲である。だからして過去と現在とは彼の眼から見れば徹塵も尊重に値しない」とある。かういふがむしやらな人間が過去も現在も否定して未来の共產主義社会の空想図式のみ追ひ求める様になるのである。こゝに価値判断の基準根拠が崩壊すると共に価値判断そのものが全然なくなつてしまふことになる。凡そ物事の是非善悪を判断するには、一方的

独断に陥らざる様絶えざる比較研究が必要である。殊に精神科学の対象は変転常なき生きたる人生であるから、諸事象の時間的空間的連続の究明がなければお先真闇で、何がよいのか悪いのか見当が附かなくなつてしまふ。所が理性的人間といふ如き独断的仮設から出発する議論、又Aはそれ自身矛盾を含みその矛盾が増大すれば必然的にBとなるといふヘーゲル弁証法の如き、最初から矛盾といふ事実を独断的に規定しAがBとなる間の時間は経過の中に何ら人間意志の自由なる判断を挿ませぬ議論は、それ自身反人生的であり反人生的なるが故に革命的である。

この意志なき弁証法に対しては流石にドイツに於いても耐へきれずしてショーペンハウエルの如き意志の哲学が強く反撥した。

しかしショーペンハウエルのいふ意志とは盲目なる本能ともいふべきもので、この意志ある限り人間は不断に苦の中にあへぐのである。かくて人間は永久の苦の中に努力をつゞけるのであると説き、この生きんとする意志を否定する所に解脱が与へられるといひ、解脱を求むる為の苦行を説いたのである。

矛盾の連続である弁証法と、苦悩の連続たる厭世哲学とは何れもドイツ精神漂泊の歴史である。常住なる真実を求めて無常変易の人生にさ迷ふ西欧の人々の魂に触れ、その人々の苦しみを自らの苦しみとした明治以来の日本国民は危く彼と共に共倒れに陥らむとして漸く伝統的精神に目覚

め自主的精神を取戻したのである。苦の中に楽を見出し、楽の中に苦を忘れず、治に居て乱を忘れず、乱の中に治を思ひ、絶えざる平衡調和を求むる日本精神の法則は、今や全人類の拠るべき規範として昭示せられむとしつゝある。

(三)

ブルノー・タウト氏の『日本美の再発見』、長谷川如是閑氏の『日本的性格』等の数々の書物が示す如く、内外人共に日本の文化的本質を究めんとする努力が最近殊に行はれ出したことは前にも一寸触れたのであるが、今私が本表題の如き尨大なる構想の論文を草するに当り依然として頼るべき先達の乏しきことを嘆ぜざるを得ない。

日本的な物の見方を具体的に且つ概括的に説明するならば、事物に対する認識を論理の媒介を経ずに全体的に全感覺的に行ふといふ特長を持つてゐる。

例へばAはBに等し、或はA \parallel Bといふことを日本語でAはBなりといふ。みな同じ意味であるが、最後の「AはBなり」の文意を分析すると、Aは、といふ時の全体的な感覺の中に既にBといふものが同一化されてゐる所に微妙な違がある。兵士が戦場に於いて天皇陛下万歳を叫ぶ時、それは臣民たる自分がかゝる情意はあまずなく、大君の大御心に摂められ君臣一体なりといふ論理的説明を否定するのでなくして、その論理を超克する宗教的帰依感情であつて、それが事ある

毎にあらはれる大和だましひである。君臣の別を嚴然と正しつゝ大御心に一つに帰するといふ秩序と和合の原理を現実の生活の中にまもり来つた日本の伝統的精神は同時に日本認識論の出発点となるのである。それが悪をも慈しむ慈悲心となり、一切を生かしてゆかうとする調和的なる物の見方の原理となるのである。

「自他の二境を等しくす」といふ、聖徳太子の御言葉は自他の外面的區別を撤去することではなく、自他の外的區別はつけ乍ら、しかも自らの心を人の心に通はず、内面的精神の和合を説きたまふのである。

この全体的和合を先づ自らの内心の統一に実現せむとして世界幾多の先覚者が苦闘をつゞけて来た。主観と客観を区別しつゝ、その區別に苦しみ、ショーペンハウエルの如く「世界は我の表現なり」と叫んで大問題を起したりし乍ら、この世を統べる法則を求めつゞけたのである。日本国体の精華は正にこの根本問題に解決を与ふる鍵として世界の人々の開ける眼に示されむとしてゐる。本論はきはめて概略にすぎぬが、私は更に具体的に体系的に日本的な物の見方を宣述すべく用意してをることを申し加へて擱筆する。

抄 録 —「民族統治論」から—

『新指導者』
昭和十七年五月号

つくり、飾らず、たゞひたすらに、世の人のまことをつくす所に、人といふ人の心は通ひ合ひ融け合ふのである。

日本の指導的人格とは忠臣であらねばならぬ。故に我国教育は史上に於ける忠臣の遺志を継承し、その念願を実現せむとする悲願を嫡々相承することではなければならぬ。

インドの指導者ガンジーは「英国人は印度を取りはせぬ、我等が与へたのだ」と悲壮な叫びを発してゐるが、英国の支配下にある諸民族は今までの不甲斐なさを等しく痛感すべきである。

コミンテルンの宣伝が、不正義な外国に支配されてゐる民族を一時的には煽動出来ても、真にその処を得しめ、その創造力を開展せしむる事は出来ぬことは火を視るよりも明らかである。

脈々たる意志は天地の法則に則る所にはじめて正しく貫かれるのである。ドイツ精神にはこのハルモニ―が欠けてゐる。それは拭ひ難き心中の不安である。それに比し天皇の御詔勅の何とゆるぎなくおほらかなることよ。みことのりくりかへし拝誦し陛下の御民と生れ死する喜びを今更の如く禁じ得ない。

コレヒドール陥落

地下深くとりでを固め刃向ひしあた力尽き我に降りぬ

鉄壁の装備を誇り幾月かあたは阻みぬ我が行く方を

無電連絡逸早く知り弾丸を雨と降らせし密なる防備よ

無電機をたのまず我は海を泳ぎ谷を渡りて連絡せしといふ

難攻不落のとりでに迫る肉弾は近代科学の装備をください

大君のみことのまにまにつはものは撃ちてくださいぬその堅塁を

百千度包囲突撃くりかへすその意志力を知れや外つ国

仇の城はふらずばやまじ海くがに御稜威あまねくみちわたるまで

『新指導者』
昭和十七年六月号

北白川宮永久王殿下御二年祭献進歌

『新指導者』
昭和十七年十一月号

二とせは早過ぎたれどたふれましゝその日のかなしみ今に忘れず
御戦死のしらせを知りて胸せまり街さまよひし思ひをこゝに

みだれゆく臣のまさ道畏くも御身をさゝげて正し給へり
蒙彊の荒き国土しこばらのむらがる中に神あがりましぬ

千早ふる神のよさしと仰げどもかなしき思ひ絶ゆる時なし

しきしまのみちふみわけよとのこしましゝみ言葉今に我が胸を打つ
ことのはの道の乱れを御身に統べ日毎はげしく戦ひましき

歌をよみ神ををろがみ日の本の民は生きよと教へたまへり

天つ神のみすゑのみ子は靈戦の御さきがけと散らせ給ひぬ

のこされし高きみをしへいたゞきてたゞ一すぢに我は進まむ

大阪城のほとりにて

『新指導者』
昭和十七年十二月号

秋空はくまなく澄みてたくましき城の高屋根日にかゞやけり
そのかみの姿さながら大空にそびゆる城のなつかしきかな

世は移り人はかはれどこの城の姿かはらずそびえて立てり
秀吉の雄図夢むかまくろなる天守の屋根は力こもれり

市人らむらがり集ひおほらかにそびゆる城を仰ぎて去らず

大君の御稜威仰げと異国に兵を出せし思ひをこゝに

豊公の思ひはいかに海くぬがみいくさ進みゆくをみるとき

臣のみち正しくふみし豊公のいのちは絶えずみくにと共に

歳末

初雪は早や降りやみて道の上にかがよふ夕日かげ寒々し

あはただしく年暮れむとすたたかひのあけくれ日数重ぬる中に

撃てど撃てど仇はよせくる東海の大和の民を侮る敵は

来む年もたたかひいよはげしからむ撓むべからず大和の民は

『新指導者』
昭和十八年二月号

昭和二十一年～三十年（三十五歳～四十四歳）

新年歌会にて

幾年か集ひ得ざりし友らまたこゝに集へり奇しきえにしに
次々によみあげらるゝ友の歌しらべにつきぬいのちこもれり

新らしき年のほぎごと歌によむ友らの声のなつかしきかな

久しくもふれ得ざりしかしきしまのみちのしらべのたふとかりけり
絶えたりと思ひししらべうつそみに未だ絶えずと知るぞうれしき

吾子を抱き年の始めの宮まゐりうたに歌へりはしき友はも

たゝかひにたふれし友の上思ひうたよむ心神みそなはせ

年をへてつらなる友の数そへど世になき友の多くなりぬる

世をあげてあらぬ思ひにさまよへど我ら迷はじよろづよまでに

高らかに歌よむ友のかぐやける面をしみれば心和みぬ

『昭興風』
昭和二十二年四月号

昭和28年(42歳)

よろづよに動かぬまこと高らかに歌にうたひて進まむ友よ

日向国原

霧島の秀峰に白き雪肌の陽にきらめきて空晴れわたる

はつはつに咲く紅梅の小枝もる小春の光地にあまねし

門のへに梅咲き出でぬ冬ごもりいく月いく日重ねゆくまに
春草のもゆるきざしか築山の土やゆるるびかぎろひの立つ

思ふこと思ふまゝに

『新公論』第一号
昭和二十八年三月刊

話が理に落ちると面白くなくなつて座談の席では座が白けることは始終経験する事であるが、それにも拘らずともすれば座を白けさせては、はつと気が付くといふ苦しい体験を二十年もくり返して来た。二十年といへば長い様であるが、全く夢の様に過ぎ去つた。思想といふ事を自覚じ、思想生活といふ自覚の中に思惟し反省し、討論しつゝ未だに万人の心に通ふ思に徹底し得ずひとりよがりになり勝ちなのは、まことに齒がゆいばかりであるが、年の功とでもいふか人の話をよ

く聴かうとする心がまへは幾分か出来て来た様に思ふ。

人の話を聴いて自分の意見を述べ、少しづつでも自分の思想の客観的根拠を明かにしてゆく事が望ましいが、その客観性は誰が判定するかといふ様な事を考へ出すと訳が分らなくなる。たゞ行ひ得る事は或る思想なり学説なりを事実と照し合せて間違つてゐるか否かを論じつくすことであつて、そこに生れる共鳴の世界は一つのドグマの強制によるセクシヨナリズムを打破する威力を持つものである事は確信を以て言へる所である。

終戦後八年、疑ふべきを疑ひつくし自らの歩みに検討を加へつゝ、曾つては敵として親しく口もきかなかつた所謂マルキストといはれる人々とも交り、その人々の平素の言動、精神生活にも直接触れて来た。それらの人々のいふことに自分をなぐさむばかりに耳を傾けつゞけて来た。九州の南の端の農村に、はたまた工場に、鉱山に、東京、大阪、名古屋その他の大都市に、新らしい友と心のひろがり求めて、さまざまに歩みつゞけてこゝに八年、強烈な意識の滅尽の後に残る無量の思ひは不思議なことに昔も今も全く変らない事である。戦後日本人は自らの文化を徒らに蔑視し自らを否定しようとして焦つてゐた。その渦中に私も浮沈しつつ何か止むに止まれぬ思ひに生き貫いて来たのである。その止むに止まれぬ思ひとは何かといへば一口にいふと形式論概念論に安住し得ぬ思ひである。

今日民主主義、共産主義、全体主義、等々の是非が論ぜられ、再軍備論、その反対論が論ぜられる。そしていつか淡徳三郎氏だつたかが「あれよあれよ」といふ間にといふ様な投げやりな表現を用ひた如く、それらの是非善悪論と無関係であるかの如く、現実の独立態勢と防衛態勢とが着々と整へられてゆくといふ事はどうした事であるか。

自然科学の進歩に対する現代の精神科学の無力といふ事をおつて我々は声を大にして叫んだ。思想の威力といふものを実感出来なくなつた今日の状態は、所謂言と事とが一致しない事甚しきものがあるのを、多くの人々が気がつかない処に現代の不安があり動揺がある。

事実を知るといふ事が凡ての学問の出発点である事は観念的には誰でも分つてゐながらそれを実行する事は六ヶしい事この上ない。一例を挙げると労働者の味方を以て自任したマルクスの学問が労働の実態を職種別、業種別に人間の生理心理技能といった面から具体的に研究しつくしたものである。私に終戦後八年間労働科学研究所にゐて一番よく分つた事である。

マルクスが恐しいとか共産主義運動が恐しいとかいふ事は各人の主観でそれが一概にいけなとか悪いとかはいへないにしても、マルクスが労働の実質をよく研究してをらない事だけは動かすべからざる事実である。

日進月歩の学術の進歩は先人未踏の分野を拡大発展せしめつゝある。ウイルスヘルム・ヴントが

いつた精神と肉体とは統一せるつながり(アインハイトリツヘル・ツァンメンハング)であるといふ言葉は二十世紀學術の進歩の示標として終始私の頭をはなれないが、自然科学と精神科学、唯物論と観念論、といふ様なものが対立した二つのものでなくなつて来てゐるのが現代であつて、我々の年来の主張である大学の改革も、水の低きに流れる如く、その學課の配列から學課の内容へと、自ら行はれざるを得ない状態に向ひつつある。少くともマルキシズムのみが眞理であるといふ様な迷信的ドグマはそれが三十年近く學界を閉してゐたといふだけで実に恥づべき事であつて、理論より実践へと駆り立てる共產主義運動が、逆にその実践によつて、その理論に対する検討を行はしめない所に、意志を奪ひ去る事は、何といつても非學術的である。

今日の様に愛国といふ事が左右両翼から叫ばれる時は特に確固たる思想批判力を必要とし、固概念化したスローガンに左右される事なく、具体的事實に則した深い思索と批判を必要とする。そのために軽々に同志的結合を意図して焦るよりも、眞の世界觀的確信に至る道理を少数の者でもよいかから相寄り相集つて闡明すべく努力しそのための思想史文化史の研究、又今世紀に急速に発達しつゝある物理学、生理学、心理学、社会学等の研究が必要である。

変転極らない人心の帰趨は一つの立場に安住出来ないのであつて、レヂスタンスを叫びつゝムスターリンを神格化したり、反共を唱へつつ社会改革の理想を喪失したりまことに人心は迷ひ易い

ものなる事を知らねばならぬ。それ故今日の日本の各政党に属する政治家も、素直なありのままなる直観力を以て固定化した立場に捉はれずに物を考へねばならず、学者といはれる人々は政治家に代つて思想する雄大剛毅なる精神を振起せねばならない。

今日口を開けば今の日本はしつかりした指導者に欠けてゐるといふ人は、もはやさういふだけで自分の気魄が餓ゑてゐる事と悟らねばならぬ。

自分一人位がなどと考へる時、その自分とはや威力のない屑となる一物体と化してゐる事を。知れ。たより得るものはこの自分一人ではないのか。同志の協力、団結も必要である。併し志を同じうする、その志とはあくまでも個々人の心中に横溢してをらねばならぬと信ずるのである。

意志の拠点

『新公論』第二号
昭和二十八年六月刊

(一)

人間の意志といふものは最近の心理学、生理学の重要な研究対象になりつゝあるが、かなりむづかしい問題である様に思はれる。

クセジュといふ文庫本の中に、ジャン・C・フィルー著、村上仁訳『精神力とは何か』——心

的緊張力とその異常——といふ本が出てゐるが、その中でも、意志の衰弱、意志の訓練といふことが書かれてゐる。それによれば「意志」は「緊張力の個別の場合」であり「その具体的表現」であつて、「意志的活動は特殊な能力、豊富な知能と判断力を必要とする」としてゐる。また「意志は単なる決心ではなく、むしろその決心を持続すること、障害にもめげず実行すること」であり、「それ故意志の要素としては決断、持続、実行の三つに分けられる。」と説明してゐる。それ故「あの人は意志が強い」といふ場合は、第一に目的に到達するためにあらゆる手段を講じようとする執着力、第二に本能や感情を支配する自制力、第三に無駄に躊躇せず迅速確実に決心する能力、第四に自発的に計画し新しい仕事を創める創造力といった諸々の能力をそなへた人といふのである。この著者フィールーによれば「ヒロイズムは意志の現はれといふよりも陶醉にすぎないことが多いし」、「頑固一徹な人は大い奴隷であり、弱者である。」とされ、又「絶えず反抗する人も人格的独立性をまだ獲得してゐない自律的意志に欠ける人である。」といふ。

意志の方向を分析し人間精神を分析し、心的緊張度の問題を分析することは、思想問題を取扱ふ場合重要な問題である。しかしこれが不充分であると、唯物史観、唯物弁証法の批判も不徹底に終つてしまふのである。

スターリンに代つてソ連の首相となつたマレンコフも、現代中共の指導者毛沢東も、実践と経験を重んずる一種のリアリストで、決して飛躍的観念論に捉はれてゐないのであるが、それだけに、その政策なり思想なりに対しては、具体的な検討が必要となつてくる。

ソ連の意志する所、中共の意志する所に対し日本の意志はいかに貫くべきか、又英米の意志はいかに貫かれつゝあるか、これが目下の国際情勢の動向であるが、フランスの意志の心理学はかゝる大問題を処理するまでのスケールはそなへてゐないので、それは全く我々自身の処理すべき問題となつてゐる。そしてかゝる生理的心理学を社会心理学にむすびつけ、マルクス、エンゲルスなどが考へ及ばなかつた分野について、今開展しつゝある状態を正しく認識し、廿世紀に於ける学問のやり直しを世界の人々と共に考究し実行する事が必要である。経験に固執すれば眼界が狭く固陋となる惧れがあり、教義にとらはれると観念的になりすぎるといふので、そのどちらにも捉はれない様にする事は、共産主義国家にとつても民主主義国家にとつても共に緊要であつて、この実行には非常な意志力を要する事はいふまでもないことである。

(三)

アレキシス・カレルの『人間—この未知なるもの』の翻訳が最近また複版され、社会学を中心とするヒューマン・リレーションズの研究が広く産業事業場の人事管理に応用されつゝあるこ

とは、形而上学的観念論打破のため喜ばしい傾向であるが、こゝでもう一つ突込んだ研究が出ないと精神科学界は一種の堂々めぐりの状態をつゞける外ないであらう。しからばそれは具体的にはどういふことか。一口にいへば人間の文化的欲求とそれにつながる意志の問題である。

例へば労働者の生活時間を調査すると、睡眠時間を切り下げても新聞をよんだり読書をしたりして文化的欲求を充たす時間を多く取る場合がある事が分るが、これを現在の社会科学の表現を以てすれば、人間が生理的再生産を犠牲にしても文化的存在たる事を主張するものであるとするのである。こゝで読書の内容等を検討することは暫く措いても、「人はパンのみにて生きる能はず」といふ言葉の具体的内容が実態調査によつてあらはれる時、文化的存在としての人間の価値をいかに判定するかといふ問題が起つて来るのである。人間の労働の強さをエネルギー代謝率で測り、労働による疲労度をフリッカー値で表はしても、次に引用するアレキシス・カレルの暗示的な言葉は依然として未解決の問題として残るのである。

「地球の表面の形を変へさせた思考、国家を破壊または建設する思想、涯しなく拡がった空間の奥深くに新しい宇宙を発見させた想像が、秤量しうるほどのエネルギーを消費することなく展開されたことは驚くほかはない。最も強力な知的創造の仕事も、二頭膊筋が書物を持上げるため収縮するに要する物質代謝より、遙かに僅少な代謝を必要とするにすぎない。シーザーの野心も、

ニュートンの思考も、ベートーヴェンの靈感も、パスツールの峻烈な考究も、微生物や甲状腺のわづかな分泌過多ほどに、彼らの組織の榮養を促進することはできなかつた。」

(四)

文化的存在としての人間のあり方に千差万別あり、個人個人の意思の強弱に千差万別あり、向上一路の道念も一瞬にして崩壊することあり、不世出の天才も或時は類型化された大衆の一人として逃避することあり、不断にたゞよひ動いてゐるのが、人間の内心の世界である。それ故様々の迷ひからその都度脱却するためには、不断の自己批判と相互批判、反省と祈りが必要なのである。戦後の民主化訓練で、日本人も自己主張の表現力がかなり鍛へられて来た事は事実であり、会議の運び方、教育訓練の仕方は教へられて来たが、今日必要なのは教へられる「内容」であり、一貫せる意志を支へる原理が与へられる事である。

共産主義を教義とする共産党は、その革命の実践に際しては、マルクス・レーニン主義の教条をかかなり大幅に修正してはゐるが、黨員個人々の意志の自由な進展はセクト的に阻害されてゐる事は確かである。但し今日に於ける共産党の戦略戦術は、決して非共産主義国家或は非共産黨員に対して強制的に出ない事であり、殊に中共はかゝる行き方が著しい様である。それ故之に對する我々の意志の拠点をはつきりすることが特に重要である。「無為にして化す」とは古来東洋に

於ける帝王の道であり、無為といつても何にもしない事ではない事は勿論であるが、適切な政策と適切な指導の言葉は、正しい政治になくはならぬものである。個人意志の正しい一貫した発展の方向は、必ず正しい公共心として国家の政治につながり、国家意志ともいふべき超個人意志につながるのである。こゝの処が最も重要な点であるが、最近流行しつゝある社会心理学でも、この点何となく曖昧である。

日本にも戦後サルトル的不安といふ言葉が流行した事があつた。サルトルは「心を否定する」といひ、また彼は「意識は、内容の空虚なものである」といふ。「ひとが或ものを認識するといふ場合も、たゞあるものは認識されるものであつて、認識するものは捉へられない。」といひ、また「意識は身体以外の何ものでもなく、身体のみみとめて心を否定する」といふ様な考へ方である。この考へ方によると自他の関係とか、その間に切磋される道徳的価値判断とかいふ事は、客観的にその正しさが立証されない不安がつきまとふのであつて、サルトルの実存主義が多くの人には、分つた様な分らない様なものであつたにも拘らず、その「不安」思想が戦後の生活不安食糧不安とむすびついて流行したのであつた。

現在はそれに比べるとずつと落ちて大衆の心にも筋金が入つて来た様に思はれるが、しかし問題はこれからであり、宿命的に日本の負ふ文化史的使命の達成のためには、現在のレベルで満

足してはゐられないのであつて、このまゝ停止する事は死滅を意味するともいへよう。

(五)

次に日本の文化的使命といふ事に論及しよう。

日本は最初に支那の思想が入つて来て以来、之に対して体験的思想批判を行つて来た。

聖徳太子の仏教儒教批判にはじまり、万葉集山上憶良の歌などにはれる当時の支那式現世蔑視思想家達、いはゆる異俗先生等との思想戦、山鹿素行の宋学批判による実学精神といつた一脈の批判摂取の精神を承け伝えて来た。更に明治時代に於ける明治天皇御指導の下に行はれた西洋文化の摂取批判、これは現在未だに継続中なのであつて、その間未曾有の大戦争に敗北して憲法も改正されたけれども、欧米文化の渦流の中に苦悶しつゝ、それに対する批判摂取の内部的戦ひは一刻も止めてはをらないのである。日本は元来強く雄大な意志を持つてゐるから、外来文化に対して決して之に対抗的に排撃はしない。純なナイーブな心を以て之を受け入れ、永い間の忍耐と努力によつて之を批判し摂取してゆくのである。これが先祖から伝へられてゐる教訓である。我々日本人の意志の抛り処はこの教訓に随ふ所に存するのである。ますらをの道、ますらをの心といく度か歌にも詠まれてゐる無畏怖の勇猛心も、この教訓に随順する所から生ずるのである。今頃随順などと飛んでもない逆コースといふ批判もあらう。かゝる批判に対し私は別にいきり

立つことなく大河が低きに流れる如くこの文化的大業の遂行に尽くさうと思ふ。そしてクリスト教の問題、科学と宗教の問題、ファッシズム、デモクラシー、コミュニズム等の政治思想の検討、マルクス資本論の根本的改訂等、次々に未解決になつてゐる問題の解明に努力しようと思ふ。

そのために非常に多額の調査研究費を必要とするならば、これを何とかして調達することも必要であるし、又幾多の協力者も必要とするであらう。「念々疑を生ずること勿れ」といふ仏語があるが、こゝで疑つたらそれこそ地獄である。終戦後から一貫してかういふ事を考へ乍ら、まだ／＼他にやる人があらうと黙つてゐたが、結局周囲を見廻しても自分でやる外になくなつてしまつた。かう心に決めると不思議に協力者が次々と現れて来て、意志の拠点が次第にかためられて来た様である。

これから先は具体的なプランニングとその遂行が必要であるが、これも思はぬ所から途が開け、思はぬ所から開展してゆくであらう事を信じてゐる。

意志といふことを説き起した本論の出発点に戻ると、最初問題にしたのは人間個人の意志であつた。しかしその意志が未透る開展をしてゆくためには、宇宙意志につながる国家意志、超個人意志につながるものでなければならぬといふのが結論である。しかし宇宙意志、国家意志、超個人意志等のつながりは、これ又現代の知識人の感覚にピンと来ないものばかりである。

しかしこれが今いふ如く思はぬ所から現代日本の知識人にピンと感ぜられる様にならないとも限らない。

柔軟の感覚は敗戦による戦時統制経済機構の崩壊と同時に、国民の胸中に蘇つて来たともいへるし、大東亜戦による型破りの体験は、破格の求道心の素地を培つたともいへよう。

信じてかゝればかく善意に解し得る幾多の条件が積み重なつてゐるとも見られるから、徒らに悲観したり絶望したりする事は禁物である。むしろたゞひたすらに一步前進二歩前進でゆく所に途が開けるであらう。「ますらをのゆくとは道ぞおほろかに思ひてゆくな」といひ「ますらをの心ふり起し」「ますらをと思へる我も」といふ万葉の歌はかゝる時切々と胸に浮んで来るのである。

抄 録 —「公共心」から—

『新公論』第三号
昭和二十八年九月刊

「公共心」はゲマインジンとは何か。一口にいへば狭い自分の心を広い公けの世界につなぐ時に生ずる心であつて、自他が一体となる心といふのである。この心からは面従腹背といった様な卑屈な心は生れて来ない。又センチメンタルな向下的な愛も吹き飛ばすものであつて、我々は—

日一日と不断にこの心を錬磨してゆかねばならないのである。

今次世界大戦中、日本の軍閥に対する厳しい批判は今尚各方面からつゞけられてゐるが、滅私奉公が説かれて、文字通り皆が一途に奉公しようとして、しかも次第にまことの公共心といふものが日に日にうすれていつたあの当時の政治の欠陥を、もう一度刻明に検討する必要がある。つまりあの当時、内外の情勢、相互の職務の重要性をつぶさに研究する余裕もなく又不自然な秘密主義により極秘にされ、人間の才能はその適材に応じて伸ばされる事なく、外に戦線が拡大するにつれ、人心は内に萎縮して行つたといふのが実状であつた。これでは敗れる外はないのであつて、まことの日本精神の発揚は到底望めない状態にあつた。知りたいことは知りつくし、その上で国家がどうなるべきかを真剣に考へるといふ熱情を湧き立たせる政治が日本にはもつと必要なのである。

山鹿素行文集『士道』の中の「自戒」の章に、孔子の論語の中の「学んで時に之を習ふ亦よろこばしからずや」といふ句に対し、時に習ふと云ふは時として習はずと云ふ事なし、時々刻々に学べる処をならはし省みる事であるといつてゐる。論語をうっかり読むと、「時に之を習ふ」といふ

「時に」は時折り、時々、たまにといふ意味に取つてしまふ。所が素行の解釈は大いに異り、時々刻々に習ひ反省するといふので、非常に緊密な体験的な解釈である。私も実は最近この解釈に接し眼を開かれたのであつて、今日学問をする人々にとつても必要な言葉であると信ずる。

或程度まで一人で自由にやれる絵画、彫刻、音楽、等は反つて非常に進歩しつゝある。言葉の芸術では俳句が発達して来た。しかし乍ら個我を全体につなぐ悲痛偉大な心を直叙する和歌の興隆はこれからである。

公共心の振起なくして防衛計画を樹てゝも防衛の意義がはつきりしないのであつて、現在の国家秩序は之を破壊することが先決だと思ひ込んである人々も国内に相当に居る事をつねに忘れてはならない。

モンティンルパの教師であつた加賀尾師は愛の極致は二つのものが一つになる事だとくり返し説いてゐるが、その言葉には無量の思ひがこもつてゐて、ありふれた説教とちがつたひびきがあるのは注目すべきであるが、二つのものが一つになる、自他が一体となるべく、血みどろの苦修を我々はこれから体験せねばならない。そしてその苦修の中に開かれてゆく超人為的交流世界の進展に身を委ねる以外にゆく途はないのである。

思想の師 三井先生

『新公論』第四号
昭和二十八年十月刊

(一)

私をはじめて三井（甲之）先生にお会ひしたのは今から二十三年前一高の一年に入つた時、先輩につれられて甲府のお宅にお伺ひした時である。その時話された事は大部分忘れたが、「精神科学は歌をつくれれば分りますからやらなくてもよい。それよりも自然科学をおやりなさい。」といはれて当時岩波文庫から出てゐたデュ・ボア・レーモンの『自然認識の限界』の訳をよむ様に教へられたのを覚えてゐる。当時はまだまだしつかりした勉強はしなかつたが、歌だけは次々に作つては先生に送つて直していただゝいてゐた。

『明治天皇御集研究』もよみ合せしてゐたが、甲府に向つた時の雰囲気から全体的に分つてしまつた様な気がして、細い文献的研究は余りやらなかつた。きはめて漠然とした生活であつたが、自分自身は疑はなかつた。それまで既に何十年と戦つて来られた先生の思想の戦ひの跡をつぶさに文献によつて辿るといふよりも、現在の大らかでしかも明確な思想批判力による言語表現に引ずられて居たといふ方が正しかつた。勿論周囲がオール赤化の時代で、氣狂ひの様になつてマル

キンズムの文献をよみ漁る学生の中で、それらを説得する実力はないが、自分自身は先生のいはれる通り思想の筋道から外れまいとするのに余り苦痛を感じなかつた。不思議といへば不思議だが、結局一種の雰囲気の中に生きてゐたのである。先生が、不断に思想戦の只中に居られるのに、私はその和かな風ほうにまき込まれて、実戦の苦しみを味はなかつたのである。私の伺つた御話の中で「地主として小作人争議の包囲体制の中に、やはりつとめて説得するといふ態度を失はぬ様にする事が大切であること、ひどい目にあつても先方に病人があれば何といはれても私は薬を持つて見舞にゆく」といふ様な事、又詩を作つたり論文を書くために身体を健康にし、特に手首の鍛錬を怠らなかつたといふ様な事は、私の記憶に深く残つてゐる。ウントの心身平行論はつねに先生の現実の具体的な生活の原理になつてゐた。

(一)

昭和八年夏大学の二年の時病氣になつて療養をはじめてからは、先生の書かれた『手のひら療治』をその入門書と共にくり返し何百遍となくよみ返し、この時、はじめて先生の思想が東西の医学生理学物理学をも博綜する広大な体系をなしてゐる事に気がついた。本書の中の玉利博士の邪氣排泄論、身土不二の原則、宇宙線の問題、生理学と心理学のつながり、生命磁氣の実在等何回となくよみ返し、実習により確め、宗教、思想等に対する批判力を養ふ事が出来たのである。

それ以来、所謂淫祠邪教といふものに対して恐れがなくなり礼拝の意義を悟り、治病の原理も次第に明かになつて、私は先生の一語一語によつて生かされて来たといつても過言ではなかつた。

病氣がまだ治り切らぬ昭和十年美濃部憲法の問題が起り、先生は実に思想批判の先頭を切つて毎日論文を書かれてゐたが、表面国体明徴を目標として勃発した二・二六事件は陸軍の自由主義排撃論となつて、これが国家社会主義的計画経済の遂行に拍車をかけ、君臣の分を明かにして人生秩序をコトノハノミチにより確立してゆくまこと思想運動は次第に歪曲された形となつて行つたのである。支那事變の進展と大政翼賛会の発足の内外の情勢につれ、革新論的愛国主義東亞連盟論から、はては石川興二博士などの天皇中心の共產主義國家の建設論といった様な、飛んでもない思想が横行し、三井先生の一貫した弁証法的思想法の批判、マルキシズムの批判と、ソ連の政治批判等は大多数の國民の耳に中々入らなかつたのである。しかし我々の学生合宿には度々来られその度に慎重に真剣に準備されては、つねに新鮮な感覚と言葉によつて講演をされた。そして「私の書いたものをよく読んで下さい」とくり返しいはれた。

昭和九年に発行された『しきしまのみち原論』は日本認識論の奥義ともいふべきもので円熟した先生の思想法を緻密な分析を以て表現したもので、固定概念の打破、自然科学と精神科学の關係、唯物史觀唯物弁証法の端的な批判は一層明白に述べられてゐる。幾度か私は本書をよみかへ

し力を得て来たが、終戦後は心に思ひつゝつひにお目にかゝる機会がなかつた。毎年一回の戦没同志の慰霊祭にいたゞく祝詞は三世永遠の世を一貫する宇宙の法則をつねに指示され、人伝ひとつてに先生が「終戦と共に日本国民は全部涅槃に入つた」といはれた事も思ひ浮べ、東西文化の融合統一の大業が益々我々の双肩にかゝつて来るのを念々に痛感して来た。

(三)

昭和廿二年脳溢血で倒られた事を伺ひつゝもつひに甲府にゆく機を得ず、慰霊祭の前後にいたゞくハガキのおたよりに、先生の思想活動が旧に倍してつゞけられてゐる事を直感してゐる所へ松田福松先生や夜久正雄兄の努力により、先生の『今上御製解説』が謄写刷で出版された。この書を私はくり返し／＼よみ今尚座右に置いてゐる。心身共に救はれるといふ事を現実に具体的に体験し得るのは本書を一読する時である。

誰が行つても誰に会つても、思想を語り「道」を説かれる先生のコトバは、今上陛下の御製の大らかな御言葉の中に融け込んでゐて、「はじめにコトバありき、コトバは神とともにありき」といふヨハネ伝の一句の意味が具体的にはつきり判る。

今のまさかに、この一瞬に、日本文化三千年の鍊成が、御製の御調べの中に仰がれる事の歓喜を先生はくり返し述べられてゐる。

今日この時代にこの書が果して何人理解出来るだらうかといふ事は、もはや私は考へない事にした。そして天衣無縫の先生の思想活動を迷はず継承する事が自分の責任であると思つてゐる。

抄 録 「暗中摸索時代」から

『新公論』第五号
昭和二十八年十一月刊

凡てがダイジェスト化し、千数百年前の国宝も都会の真中で観ることが出来、世界の主なる出来事は数日中に映画に再現され、テレビでは即座に見る事が出来ても、自分自身の精神の生長は自らの自発的発心修行に俟つ外ないのである。

朝鮮をどう考へるか

『新公論』第六号
昭和二十九年一月刊

(一)

最近朝鮮の問題が依然としてかなり深刻化してゐるにも拘らず、終戦後とはかく無縁の他国と考へ勝ちであつた惰性があつて、日本人としては非常に密接な関係がある様な、ない様なきはめてちぐはぐな気持を持つて来たのである。我国と韓国との関係は、歴史的にみても千年以上の交

渉の過程があつて、対立的に自他を分つて考へられないものがあるのを、昭和二十年以後一応地
図の上で断ち切られた。そして従来の日本に代つてアメリカその他の国が朝鮮問題で苦勞して、
形の上では独立韓国となり、しかも南北が二分して冷戦をつゞけてゐる。この思想的苦悶は古今
未曾有のもので、その苦悶の精神的波動は、陰に陽に日本にも影響を与へてゐることを直感する
のである。それ故、日本は今の朝鮮をどう処理するかといふ様な発言権を持つ程國際的にえらさ
うな顔は出来ない立場にあり乍ら、一方何とかしなければならぬ立場にもあるといふ、妙な立
場にあるわけである。こゝで反省せねばならぬことは、曾つての我國のやり方が帝國主義的であ
り、侵略主義的であつたから間違つてゐたのだと責める人はあるが、しからばどうすればよかつ
たのかといふ積極策を説く人が甚だ稀であるいふ事である。朝鮮のことを考へるな、手を出すな
といふのか、考へ方なりやり方が間違つてゐたから別な方法で処理せよといふのか、何かこの際
はつきりした考へ方をはつきりさせる必要がある。そしてかゝる点の調査研究を徹底的に行ふ必
要がある。さうでないと李ラインの問題が起ると「やつつけろ」といきり立ち、一方に於いて反
共の立場から南鮮と親善関係を結べといふ様な、依然たるスローガンの連続に終つてしまつて、
現実性と深みに欠けた動き方しか出来なくなつてしまふ。

それ故こゝで我々はゆつくりと自分自身の生活体験に基いて日本と朝鮮との関係を具体的に考

へ直し、曾つて日本の領土時代の朝鮮の開発に努力した人、或は官吏軍人として彼地にあつた人々が、自分らのやつて来た事を逐一ふり返つてみて、今後の具体的な進路を見出さねばならないのである。太平洋戦争の指導理念とされた大東亜共栄圏論の構想に於いても、朝鮮などは本當に我国と一体不可分な領土として考へられ、朝鮮人即ち日本人として考へられてゐたが、今靜かに私の少年時代に朝鮮に三年ばかり住んでゐた体験を回想してもこれは甚だ甘い構想であつたと思はざるを得ない。そこで御参考までに私自身の体験を次に記憶を辿つて述べてみよう。

(一)

私は(旧制)中学校の一年から三年の夏までを朝鮮の京城で過した。丁度大正十四年から昭和二年夏にかけてである。それまで生れてからずっと東京を離れなかつたのが、軍人であつた父の転任で、急に予想もせぬ朝鮮へゆくといふので、当時日本の領土として地図に赤く塗りつぶされた朝鮮を图上で眺めては未知の土地の想像に胸ときめかしてゐた。

父の着任は正月早々であつて、京城の一つ手前の竜山の駅で大勢の出迎へを受け、寒い道を通つてだゞ広い官舎へ入りそれから私にとつてはきはめて印象深い生活が始つた。しかし想像してゐた程内地と變つた生活でもなく、軍隊の官舎村といふ特殊地域だつた故かも知れぬが不自由なことは少しもなく、学校も内地人ばかりであつて、きはめてのんびりしたものであつた。しかし

その中で大正十五年であつたか当時皇族であつた李大王(日韓併合当時の朝鮮王)の葬儀に中学生として沿道に参列してゐた時、朝鮮人の学生が朝鮮独立万歳のビラを撒き靈柩に投石した事件があつた。その時のショックは未だに忘れ得ぬ記憶となつてゐる。

丁度葬列が私達の眼前を半ば過ぎて、靈柩が近づいた時、教官の号令で敬礼をして頭を低く下げた瞬間、ゴッといふ潮音に似た音が起り、騒然たるざわめきが起つた。私達はたゞ呆然とする中に、教官は素早く我々を引率して街の裏通りを通りぬけて学校まで連れて行つた。私は全然何の意味やら分らず、学校に集合してゐると、教頭がビラを一枚手にして壇上に上り事件の説明をした。

当時の齋藤総督、湯浅政務総監らは先に式場に行つてゐたため事なきを得た由。後で聴くとゴッといふ音は投げた石が靈柩に当つた音であつた。日韓併合に反対して自分の国の王の靈柩に投石する險惡な心にはじめて触れた気がしたが、私の幼稚な頭はそのショックからして世界史の動向を深く掘り下げてゆく事をせず、その日その日の学課を無事に修めてゐるに止つてゐた。

しかし毎晩の様に私達の官舎へ遊びに来ては酒を飲んでゆく若い将校連の生活をみてゐると、日本の統治の精神的文化的弛緩といつたものを漠然と乍ら感ずる事が出来た。麻雀を覚えたのもその頃であつたが、日本人はかゝる外地にあつて、いかに生くべきかといふ様な事について、誰

からも筋道の通つた話は聴かされなかつた。趣味と娯楽とスポーツとさういつたものは発達してゐたが、何か棒が一本足りない生活であつた。

当時講談社の『少年倶楽部』などが盛に売れ出した頃で、『日本少年』『少年倶楽部』などに連載される日米未来戦といふ様な幻想的戦争小説によみふけり、弁論大会などで上級生が日米戦ふべしといふ様な気焰を上げるのを聴いてゐたが、さうかといつて当時のアメリカについての詳しい研究をする程徹底してもゐなかつた。初夏ともなると京城周辺の山々の色の美しさとアカシヤの花の林の中で芳香にうつとりとして新体詩などをつくり、絵を習ひ、剣道の選手となり色々な事をやり乍ら、又再び住みなれた東京へ帰る日を待ちわびる様になつた。朝鮮での生活は決して不自由ではなく物質的にはめぐまれてゐたが何となく物足りない生活であつた。総合的に考へてみると学校の先生とか官吏とか軍人とかが、本当にその土地にあつて日本の文化を掘り下げ、開拓して精神生活の深さと相応する国力の進展をはからうといふ経綫に欠けてゐた様に思ふ。日本軍閥の圧制と資本主義的侵略と概括的に言ふ前に、自他一体の精神交流の世界を開き得なかつた日本の政策を反省する必要がある。軍隊といふ特殊組織の訓練体制を維持しつゝ、その精神の緊張度を維持するために外戦へ外戦へと伸ばしてゆくことは、決して国力の自然の開展にならぬどころか反つて内部崩壊の危機を招来せしめるのである。前述した様に、官舎村の将校連の精神生

活の停滞と、鬱屈した感情をどうさばいてゆくかといふ事を、当時誰かが日本の為政者として考へねばならなかつたのである。「治に居て乱を忘れず」といふが、「治に居て乱を願ふ」様な氣を起すものである。

事実満州事変の勃発により朝鮮軍の出動となり当時停滞してゐた士氣は昂揚したに相違ないが、例の独立万歳の思想は素通りしてしまつたのである。山鹿素行の士道などをみると、むしろ平時の学問と修行に重きをおいて、あます所なくその心得を説いてゐるが、日常茶飯事の起居動作に至り、うるさいまでにこまかに注意してゐるのをよみ、はじめにとでもこんな窮屈ではやりきれないと思つてゐたが、最近は一つ一つ味ふべきものがある事を痛感するのである。

(三)

つまり当時の朝鮮の治安維持に當つた軍人は何よりもまづ文化政策に留意し、文官と協力して「独立運動」の底流に思ひを致し、形式よりも内容の研究に思ひを至さねばならなかつたのである。威武を以ておどすのみといふのは、日本古来の精神からは外れてゐる事を当時気がつかなかつたのであらうか。李大王の葬儀の時のゴーツといふ投石の音は日本領土として赤く塗つた朝鮮の地図の上にさまよつてゐた私のファンタジーを根本から揺り動かした音であつたが、学校ではそれに対する解決を得られなかつた。昭和二年八月に東京に帰りその後の朝鮮はどうなつてゐた

か知らないが、満州事変から支那事変へと進むにつれてクリスト教学校の閉鎖その他色々な政策が行はれてゐた事を聞いた。彼地にゐる間にも軍司令官の官邸に家族と一緒に招かれて満鮮国境地帯の内鮮融和の生活実況映画などをみせてもらつたりした折には内鮮融和といふ事になり政府当局も心を使つてゐる事を感じたが、何かしら形式的な感が消えなかつたのを覚えてゐる。そこへより一層輪をかけた形式的な文化政策が行はれて、反つて元も子もなくなつてしまつたのではないかと思はれる。そして昭和廿年の終戦と同時に朝鮮は日本の領土ではなくなつてしまつた。

日本歴史上によく出てくる任那日本府の滅亡といふ事がひし／＼と感ぜられる事態の中に、少年時代の朝鮮の生活を思ひ出すと、もはや我々の中々手の届かない外国となつてしまつた彼地ではあるが、何かしらあの山河は未だに私の心の中のものとしてなつかしくはつきりと記憶されてゐる。恐らく多少なりとも彼地に住んだ日本人はみな現在も彼地の記憶を心によび起してゐるであらう。他国とはいへ朝鮮をどう考へるか是我々の自由である。否それどころか日本の政治は宿命的に朝鮮問題につながりをもつてゐるのであつて、再び独立を回復した我国が自主的に朝鮮を考へ直してみる事は必要である。明治初年に征韓論を唱へた西郷南洲の遺訓なども最近よく引用されるが、西郷の征韓論でも必ずしも武力討伐でなく、神の心を彼地につたへるといふ文化政策が主となつてゐる。当時は国内整備が先であるとして岩倉具視に反対され、総理の三条実美公にも

う一年待つ様に調停されたにも拘らず、きかないで城山へ帰つてしまつたが、南洲の言葉をみても領土的野心とか帝国主義的侵略とかいふ事で片附けられない或一体感がみち溢れ、天下を治めるといふ大きな経綸から出発してゐることが分る。勿論今日の対立状態は生やさしいものでない事はよく分るが、それだからこそ、古人にも劣らぬ大勇猛心を起さねばならぬのである。

目下の処李大統領の威嚇の前に我国は黙然としてゐる形ではあるが、私の心の中には対立を絶した一体感が、不思議に胸中に消えないのである。

四

古来外人のクリスト教宣教師や仏教の僧侶が日本に布教のため渡来した例は多数にある。しかし日本の方から海外へ布教に渡つて永く外国人を教化したといふ例を余り見ない。そのため外国人からみると日本は非常に独善的にみえることは止むを得ない。又事実独善的な点多々あるのであるが、世界宗教がよくその根をはやしてゐる日本の文化は、伝統が独善的な形のまゝ屏息してゐる事は決して自然な形ではない。独善的な結論だけを他に強制する文化政策で失敗した日本の対朝鮮、対南方諸国の政策を省みて、我々自身再び真剣な求道者に立ちかへる時が来た様に見える。今日、日本国内には人口愈々密となる一方人心は反つてその和を欠き、人々相互に疑ひ合ひ嫉み合ふ事限りなきものが見られ、物質的にも精神的にも実際に救ひを求め声が高まり満ち満ちてゐる。

る。人言の嘘かまことかの判断にはかなり鋭敏になり乍ら、一方利益に迷つては簡単にだまされ
るといふ悲劇をくり返してゐる。この間に中途半端な菩提心などを起したら手取り足取り叩きつ
けられてしまふ危険があるにも拘らず、菩提心を起さねば救はれないといふ矛盾した事態の中に、
案外朝鮮をどう考へるかといふ問題を解く鍵があるのである。朝鮮の問題は海の彼方の手の届か
ぬ問題ではない。勿論事業を起すとか、彼地で就職するといふ事は簡単に出来ない事は明白であ
るが、韓国民の民族的苦悶を我々が生々しい現実感覚で自分の事として解決する事は可能な事で
ある。今こそ史上千余年に亘り韓国民が我国に対して抱きつゞけた逆念を、解き和らげる悲痛偉
大なる文化政策を展開すべく、内に用意を整へねばならない。イデオロギーに捉はれぬ自由な思
索と自由な精神を以て、自他一体の境地を内に開拓する修行が、今日程要求せられる時代はない。
朝鮮の中学生時代、学校から特に許可されて見た「アジアの光」といふ釈迦の一代記の外国映画
が不思議に印象に残つてゐるが、地上に充滿する逆念と魔性の中に永遠の和を求めて止まぬ求道
の一念は、必ず貫かれる事を信じてゐる。

曾つて朝鮮にあつて、統治に當つた日本の軍人政治家官吏実業家その他の人々は細大もらさず、
当時の経験を整理反省し、どこに取るべき処があつて、どこに無理があつたかを総合的に研究し
直す事も無駄ではあるまい。そしてアメリカ、中共の施策と比較対照し、日本として朝鮮復興に

協力すべき処は協力すべきである。その一番ポイントとなるべきものは我ら自身の内心の道念である。

コスモス（昭和二十八年十一月九日）

我家のコスモスの垣丈のびて夕べしづかに風にゆらげり

夕風の吹きゆくまゝに花あまた右に左にゆれてたゞよふ

白き花くれなゐの花うすき葉のみどりにまじりてうるはしきかな

人あまた朝夕に通ふ道にコスモス咲けりこゝろたのしも

コスモスをみつゝすぎゆく人のまなこ和かなるをみるがたのしも

家造りいまだ足らはぬ我家もこの花あればにぎはしきかな

貧しさも今は忘れてうるはしき花に心をなぐさめてをり

帰途（昭和二十八年十一月九日）

夕やみの深き坂みち終点にま近くバスは速力増しぬ

光芒はやみに鋭く警笛の音のみはげし舗装の道に

運転手のまなざしきつと前方をみつめてすべてを忘るゝごとし

『新公論』
昭和二十九年二月号

動揺に身を任せつゝ緊張に声をひそむる乗客あまた

うなりつゝ坂のぼりゆくバスに向ひ小型自動車こなたに下りくる
すれちがふ車忙しくよけかはし過ぎゆくつかのまはげしくゆるゝ
坂のぼりまたくだりつゝ終点の駅のともしび見えそめにけり

ネオンあまたまたゝくちまた賑はしくバスのゆくてにひろがりてあり
花を売る店うるはしも秋の花あまたかざりてともしび明し
ブレイキのひゞきも高くバスとまり客は次々路に降り立つ
つとめ終へし心安けく仰ぎみる夜空の星もなつかしきかな

六郷河原（昭和二十八年十一月十日）

乾きたる土を耕す農夫らに秋の日落つる六郷河原

ごう／＼と鉄橋わたり電車ゆくま下に青き冬菜大根

土のいろにぶくひからびはたつもの丈低けれど色はさやけし

をやみなく耕す努力水涸れし河原をつひにきりひらきけむ

河の辺の瘦土ひらきたづきする民ら生きゆく力失はず

かそけくもいのちつなぐか畑を打つかひなにこもるみくにのいのち

抄 録 「思想から見た国会の更生方法」から

『新公論』
昭和二十九年六月号

「あらゆるものが退歩し衰へてゆく時代は主観的だ。それに反してあらゆるものが進歩しつゝある時代には客観的傾向がある。現代は挙げて退歩しつゝある。主観的だからだ。この傾向はたゞ文学のみならず、絵画にもその他の多くのものにも見える。」

ゲーテがエッケルマンにかく語つたのは一八二六年のことであるが、現代にも何かしら共通するものがある様に思はれる。

ひとりよがりで他を責め合ひ乍ら、自分自身が真に自らの殻を破つて進歩向上しようとしなない。最近各方面の行詰りを打開すべく、新しい人材、新しい政治の出現が要望されてゐるが、無暗に「新しい」を連呼するのみでは言葉のひとときによるセンチメントの一時的刺戟に終つてしまふ危険がある。

思想問題を甘く考へてゐる間は政治は本筋に乗らず、又政治の何たるかを解する事も出来ない。何となれば政治とは人の心を治めるものであるからである。

文化財保護といふことが終戦後やかましくいはれてきたが、文化財には有形のものと共にそれを支へる無形の精神世界とがある。英米ソの世界諸国を相手に戦つて敗れて以来、一時日本人は自分の文化財を疑つたが、この疑念にひつかかる低迷にやりきれなくなつて、再び自らの生命の源たる文化財につながらうとする気持が勃然と興りつゝある事は確かである。

昨年だつたか、都内某百貨店で行つた法隆寺文化展に雲集した息づまる様な老若男女の群衆の様子は右の事実を示す一例である。かうした場所に於ける実感はジャーナリズムには中々率直に表現されないのであるが、実感はあくまでも実感であつて、疑念をさしはさむ余地はない。

又神前で儀式を行ふ時の、犯しがたい雰囲気、私はいつも、難攻不落の法城を実感する。

人間がつゝしみを忘れ、目に見えぬものを否定する唯物論に捉はれる時は、この法城をも敢へて犯さうとするに至るので、思つても恐しいことである。

昭和三十一年～四十年（四十五歳～五十四歳）

黒上先生といふ人

——われわれの思想上の恩師として——

『国民同歩』
昭和三十七年二月号

（→）

黒上正一郎先生について書く様に編集部から依頼があり右の題を示されたが、実をいふと黒上先生について「人」といふには少からず抵抗を感じる程、宗教的人格であつて、昭和五年九月に三十一歳の若さで郷里徳島で亡くなられる前一年足らず接して教をうけた印象は、神格に近い印象の方が強かつたのである。

先生の略歴としては、明治三十三年九月徳島市の素封家の嫡男として生れ、慈愛深い母上、住^ス恵^ス氏の下に商業学校を出て阿波銀行に勤務した。

少年時代から芽生えた宗教家の素質により出家求道の念止み難く銀行の帳簿の下に仏教教典などを置いては読んで居られ、間もなく銀行を退職、独学を以て親鸞、日蓮の経文から、聖徳太子

を研究し、入沢宗寿、藤原猶雪、三井甲之、井上右近その他の諸氏に師事し、聖徳太子研究に劃期的境地を開拓された。

昭和三年の三・一五事件の後、共産主義運動熾烈を極めた中に、第一高等学校に「昭信会」を、東京高等師範学校に「信和会」を研究グループとして結成し、熱誠こめて学生を指導された。その頃私は第一高等学校に入学し、「昭信会」に入会して黒上先生の指導をうけたのである。

(二)

私が昭信会の例会に出始めたのが昭和四年五月頃で、一週一回の集會に、夜七時頃から集つて黒上先生の講義を聴く。題は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の連続講義で、ガリ版の要項によつて、東西文化の比較論から古事記、日本書紀、万葉集より一貫せる日本文化史に及び、柔軟な徳島弁で二時間余お話がつづく。講義中は眠ければ眠つてもよいから終りまで聴く様に先生がいはれるので、私などはよく眠つた。余り眠りすぎてよく先輩から叱られた。午後九時になると集會室がしまるので、二十名ばかりぞろぞろ先生の後について一高の正門に近い本郷の先生の下宿にゆき、六畳の間にぎつしり坐つて菓子を山の様に出され先生や先輩と十二時近くまで懇談する。今でいへばフリーストーキングの時間である。これが楽しくて堪らなかつた。先生も実にくれしきうに皆の質問に答へられた。少しも気張らず力まず淡々として誰彼の差別なく応答され、

疑問の去らない者は皆が帰つた後一人残つて徹夜で質問してゐた。先生はそれもいとはず教へられた。こんな事で元来弱かつた身体を益々害されたが、その時代の混沌の中に生きる青年として先生は我々と喜憂を同じくされ、そこに悦びを持つて居られた。食事は玄米とか大根おろしとかが中心の粗末なもの、衣服は質素な和服に袴で、洋服を着られたのは私は見た事がなかつた。字は上手ではないが、一字一字ていねいに力を入れて書かれる為、万年筆の先がすぐ割れて駄目になつてしまふ。原稿を書かれる時のゴリゴリいふ音が隣の部屋まで聞える程で、学生が訪問しない時はいつも執筆に余念がなかつた。これが今尚諸氏に読まれてゐる遺著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』である。

一同と話して居られる時もひざ頭の上に指で字を書いては文章を練つて居られた。

(三)

半年位する中に先生は病氣勝ちとなり下宿にゆくと一年上の新井先輩が先生の背中に手のひらを当てて触手療法をしてゐたのを覚えてゐる。もうその頃肺結核は相当進んでゐたらしいが、誰も気が付かず、それらしい療法も診察もうけられなかつた。当時は今の様にパスもマイシンもなく、開放療法が漸く提唱されはじめた頃で、結核に対する知識は我々もまるで無かつた。余り無理をなさらぬ様に我々が云ふと先生は「私はかうやつてつとめてゐるのが一番楽しいし又楽なの

です」といはれた。田所先輩などがひそかに結婚をすすめられたらしいが、先生は一人つ子の田所氏をつかまへて「田所さんの妹さんなら喜んでいただきます」と笑つて居られたさうで、田所氏はそれを私に話して「先生は苦勞人だな」と一人で感心してゐたのを覚えてゐる。苦勞人といへば、三十歳そこそこでいかなる名士とも老教授とも堂々と礼儀正しく交はり、思慮分別まことに行き届いたその人柄は今だにその一挙手一投足に至るまで腦裏にしみついてゐて、五十歳の今日尚先生から教へられてゐる氣持である。

今から察すると先生の心中には何かつよい無常感が支配してゐたらしい。後を継ぐ我々は各自出来るだけ身体を強健にして時間をかけても先生の遺志を達成せねばならない。

(四)

本郷の下宿で私が一対一で教へをうけたのは二回だけで、一回目は親鸞聖人の文集を私に一冊持たせ先生も一冊持たれてその文章の一節を講義し乍ら教へられた。二回目は私が、うかうかした考へで「個人の修養」のためばかりを考へ、他の宗教団体の例会にも出て、そのよい所を取らうといふ様な氣持でゐた。そのごく微妙な志の動搖を看破され、おだやかな中に強い語調で叱られた。二回目の時は河野先輩も傍に居られ私の我執を戒しめ、「その点は先生が始終いはれてゐるではないか」と注意された。元來私は人生に悩みを持つて会に入つたわけではなく、軍人の家

庭にあつて漠然と日本精神とか日本思想とかにひかれて入つたのだが、道に志すことは生易しい事ではない事がこの時はつきりと分つたのであり先生にしてみれば、半年以上も自分の例会に来てまだこんな所を低迷してゐるのかと思はれたらうけれども、少しもそれを口に出さず、懇切な口調は今だに耳に残つてゐる。明治天皇の御製に、まことから発した言葉は一度きけば忘れないといふ意味のお歌があるが、正しくその通りである。

先生の読まれた和歌は歌集となつてゐるが、便せんに大きな字で次々に連作で書きしるされ、封筒には毛筆のしつかりした字で黒上正一郎と書かれた。楠正成の正を取つて正一郎と名付けられたさうだが、先生の体格は太くたくましく背は高く「あれに肉がついたら堂々たる体格だらう」と先輩方は話して居られた。先生の歌を次に数首かかげる。

——黒上先生遺歌——

うすざむき風ふく夕べ新月のひかりは冴えてさびしかりけり

裏山の木々のもみぢももうらさびてわがふるさとも秋ゆかむとす

暮れてゆく空をながめて君いますひんがしのかた我はしたふも

今ごろは君いかにぞと筆をとるときにも思ふ勉むる君を

(昭和三年十一月)

ふるさとの鳴門の海のはやしほに生ひしわかめを君にさゝげむ

淡路島さやにうつらふ大瀬戸の海ぐさ君におくりまつらむ

むやの海に友をみとりしそのかみにめでしかほりのなつかしきかな

なつかしきむやのわかめのみからだによしとしきげばうれしかりけり (昭和四年五月)

先生の歌の大部分は友へのたよりの中に誌されたもので素直に雄々しき切々たるしらべをたへてゐる。昭和五年にはもう徳島に帰つて療養され専ら手紙や歌で我々を指導されるのみで、数々の和歌が我々と先生を結ぶきづなとなつてゐて、三井甲之先生が説かれた文献文化史的研究といふのはこの生きた精神の交流の中に展開されたのである。

(五)

昭和五年九月廿一日一同悲嘆の中に先生は徳島の実家で永眠され三十一年の短い生涯を閉ぢられた。私達は先輩と共に徳島に行つて御葬式に参列し、はじめて母上の黒上住恵氏スミエにお目にかかつた。母上にはその後も非常な御厄介になり例会や機関誌発行の金を月々送つて下され、我々個人に宛ても正一郎の志を継いでくれて本当に有難いといふ、巻紙に毛筆で長い長い手紙を度々下さつた。そのお手紙はまことに懇切であつて一メートルから二メートルに及ぶ長さのものばかりである。母上のこの心情を通して黒上先生の人柄がうかがへるのであつて、私の母も黒上先生の母上のお手紙には本当に感心してゐて今時珍しい方だといつてゐたのを覚えてゐる。

先生が逝かれた後、マルキシズム唯物弁証法の批判を一心にやつて居られた河野先輩、遺稿の整理に没頭された新井先輩も一年余り後に相次いで亡くなつた。

それからは謄写刷になつた先生の遺著の読み合せを中心に例会やら合宿をつづけ、親しく先生に接しない友らも次々に集つて、精神交流の世界は次第に全国の大学高校専門学校に拡大しはじめた。

黒上先生の教へが教育教化と政治活動の相即一致といふ点にあり、「人生の帰趨に迷ふな」とくり返された「きすう」といふ独特の先生の発音が今尚強烈に耳に残つてゐて、戦前戦中戦後を通じて一貫した指針となつてゐる。千三百年前「和を以て貴しとなす」と説かれた聖徳太子の御精神も、その教へを身を捨てて説かれた黒上先生も、今日の日本の運命を予感されて居られたのであらう。『国民同胞』に掲げてある各地の友らの和歌のしらべに、黒上先生の和歌にみられる高いしらべがあふれてゐるのをみても、日本はほろびずと確信するのである。

ベルグソンの言葉から

『国民同胞』
昭和三十七年三月号

昨年夏の雲仙合宿で小林秀雄氏がベルグソンの思想を引用されたが、ベルグソンが一九一一

年四月十日イタリアの大学都市ポローニヤで開かれた哲学国際会議で行なつた講演『哲学的直観』を河野与一氏訳（岩波文庫）で読み、心ひかれる箇所を引用して感想を述べよう。

——哲学は現今單純になつて一層生活に近づかうとしてゐるやうに思ひます。それは正しい事で、我々はこの方向に力を注がなければならぬと信じます……文字の複雑さが精神の單純さも見失はせるやうなことがあつてはならないからです。

× × ×

哲学者は心に持つてゐるものを文句で言ひ表はした後この文句を訂正し、またその訂正を訂正しなければならぬと感じないわけには行かなかつた。

かうして一つの理論から他の理論へと訂正を加へて行つて、自分の考へを完全にすると信じてゐながら、実は複雑を招き説明が説明に加はつて、自分の根源的な單純なところを次第に度を増す近似価で表はすことしかできなかつた。

× × ×

この視点から見ても哲学の本質は單純の精神であります。哲学は精神をそれだけ見てもその業績を見ても、哲学と科学と比較するにしても、一つの哲学を他の多くの哲学と比較するとしても我々はやはり、複雑は表面だけのことであり構造は附屬物であり、総合は概観であることが

わかります。哲学するといふことは単純な行為であります。

× × ×

さうして我々自身はやはり人為的な宇宙に像どつて人為的に拵へられてゐるために瞬間的な姿を以て知覚し、過去を既になくなつたもののやうに云ひ、追憶と不思議な若しくは執れにしても縁のない事実、物質から精神に与へられた援助だと思つてゐます。それとは反対にあるがまゝの我々を取戻しませう。厚みがあるばかりでなく弾性的な現在、我々を自身から遮つてゐるスクリーンをもつともつと遠くへ押しやつて向与の方へ無際限に拵げて行くことのできる現在の中で取戻しませう。あるがまゝの外的な世界を取戻しませう。

× × ×

芸術が天性と幸運に恵まれた人々にしか、それも間遠にしか与へない満足を、かういふ意味の哲学は我々すべてのどの瞬間にも提供してくれて、我々を取巻く亡霊に再び生命を吹き込み我々自身を蘇らせませう。かうして哲学は実践に於ても思索に於ても科学の補足になりませう。生存の便にしか根ざしてゐない応用に限らず、科学は我々に幸福、少くとも快樂を約束します。

しかし哲学は既に我々に喜びを与へることができませう。——

以上は甚だ断片的な引用であるが、二十世紀初期にあつて物理、化学と共に生理学心理学の発達

により哲学等も唯物論唯心論の混迷を打破して新しい展開をみせようとする息吹きの感ぜられる講演であつて、クロード・ベルナルの実験医学、ウイリアム・ジェームスの実用主義、ウイルヘルム・ヴントの生理心理学などに通ふ一連の思想系列は十八、九世紀のドイツ観念哲学の形式固定化を打破し目覚しい自然科学の発達を内に支へる、発らつたる精神科学の基盤となり得るものとして味読せられるべきである。

ベルグソンのいふ単純な精神、正しい直観が正確な精密な科学的分析の基礎となり得る事を思ふと共に、実際にこの分析をあらゆる方面に行はねばならない。

単純といふと浅薄とか未熟とかいふ意味に取る場合もあらうが、この場合はさうではない。

聖徳太子の『三経義疏』の中に「心疑なきを得むとは、神情開朗にして小乗の疑滞なきなり」といはれてゐる、いはゆる小乗の疑滞なき精神をいふのであつて、すなほで、をよしき日本精神に通ふものである。それは人生の複雑さに徹しつゝも、つねにそれを内に統御する威力を失はぬ精神である。現代の日本人は米ソの対立の間立つて精神の自主性を奮然と回復すべきである。ベルグソンのいふ単純な精神、古代からうけつぎつたへて来た、ことそぎて力ある精神に立ちかへつて外国文化を摂取批判すべきである。

抄 録 —「精神交流の時代」から—

『国民』 昭和三十八年十一月号

聖徳太子の言はれた「他と共なる生」「共に是れ凡夫」といふ御精神はあくまでも我々が体して進まねばならない。そしてこの文化的使命はいかなる職業に従事する人も、又国内にゐる時も外国にゐる時も、いついかなる時も忘れてはならない日本人の宿命的な使命である。この使命を忘れて日本の永続的繁栄は望めず、日本の真の独立も望めない。

未曾有の敗戦によつて叩きつけられ踏みにじられた日本民族に、今靈魂の系図が蘇りつゝある。黒上正一郎先生が身を以て書かれた『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の一書が若い大学生諸君によつていかに真剣に輪読されてゐるか、私は一、二度その席に出て今更の様に言魂の幸はふ国、日本の有難さを感じてゐるが、問題は今後世界の国々と苦楽を共にしつゝ、史上曾つてなき精神交流、文化交流の時代に雄々しく耐へてゆけるかどうかといふ事である。

それには先づ生活を簡素にし、身心を鍛へ、何よりも素直に雄々しき求道のまことを念々に失はぬ事である。

聖なる言葉は、時空を超えて伝はるものであり、どんなに報道機関が不備でも口から口へまこ

とある言葉は伝へられ、人間の心と心に通ひ合ふのである。我々はこの事を固く信じよう。

冬の旅（昭和三十八年十二月五日）

『国民同胞』
昭和三十九年一月号

久々に都さかりてひな路ゆく車中に朝の光あふるる

人らみな車窓に黙し初冬の野山にみいる朝の一とき

新幹線のびゆく野山なりはひのはげしさ示し心重たし

はろばろとひらくる川原一すぢのながれをはさみ人影もなし

鉄橋の橋桁古び冬草のはつはつ生ふる川原淋しも

冬の陽の光しみ入る川底に小石つぶつぶかどやきてあり

熟れはてし柿赤々と松かげに映えて小高き丘静まれり

富士の嶺は雲に浮びてまむかひに物言ふ如し旅ゆく我に

歌よめばひらくる思ひ天がけり友らに通へ今のうつゝに

『紫の火花』（岡 潔博士著）を読みて

『国』民同「胞」
昭和三十九年八月号

最近朝日新聞社から発行された岡 潔博士の随筆集『紫の火花』を読んだが、文化勲章受賞の世界的数学者である著者の淡々とした表現の中に秘められた憂国の至情と、卓抜な見識に私は深く心を打たれ、毎日座右に置いて読み返してゐる。

その中から二、三心にとまつた言葉を誌してみると次の通りである。

へたとえば他の悲しみだが、これが本当に分ったら、自分も悲しくなるというのでなければいけない。一口に悲しみといっても、それにはいろいろな色どりのものがある。それがわかるためには、自分も悲しくならなければ駄目である。他の悲しみを理解した程度で同情的行為をすると、かえってその人を怒らせてしまうことが多い。軽蔑されたように感じるのである。

これに反して、他の悲しみを自分の悲しみとするというわかり方でわかると単にそういう人がいるということを知っただけで、その人には慰めともなれば、励ましともなる。このわかり方を道元禪師は「体取^{たいしゅ}」と言っている。ある一系のものをすべて体取することを「体得^{たいとく}」すると言うのである。

理解は自他对立的にわかるのであるが、体取は自分がそのものとなることによって、そのものがわかるのである。(十二頁〜十三頁)

自我本能は抑止すれば抑止する程よいのだとして、これが完全に近い程抑止出来るならば、自由意志の活動はこれだけでよいのです。あとは純粹直観が受持ってくれますから。

心の深層に働く純粹直観は、外面から見れば強靱な意志力、内面から見れば心の喜びです。たとえば、松の種が運悪く大岩の上に着ちたとします。松の種は芽生えて岩の上の僅かな土に根を下ろします。根は少しは岩の中にもはいります。

冬が来ると、根のまわりの水分が凍って膨張して、岩を少し割ってくれます。それで小松は翌年は少しよけい岩の中に根を入れることが出来ます。その状態でまた冬が来ます。これを繰返すのです。

そうすると、しまいにはさしもの大岩が割れてしまします。あなた方は時々、亭々たる松の巨木が大岩を割って、大地に根を下ろして、大空高く聳えているのを見かけるでしょう。こうしてそうなったのです。

これと純粹直観に基づく意志活動とは非常によく似ているのです。(一九八頁〜一九九頁) V

本書の冒頭で岡氏は「情緒」についての評論を行はれてゐる。

氏によれば情緒情操の欠けてゐるものには数学も分らず、又人生も分らないのであつて、道元禅師の言葉をよく引用され乍ら、自然はこころの中にあるのだといはれてゐる。

そして現代の教育では、自我の抑止による真我の生長をはかることが欠けてゐること、それ故に真の自由、向上心が体得出来ず、正しい意味の民族性に欠けてゐるといふ様な言葉が湧く様に書きつらねられてゐる。

いにしへの奈良の都の風土の中に永年住まれた岡博士の、みづみづしい感覚は万葉の歌、芭蕉の句を一つ一つかみしめてをられるのである。

○

今日企業内で人材養成の研修が一層盛んになつてゐるのは大企業に集る人々が企業からの利益のみを目当てにして、それを内から支へる志気を欠き、創造力をなくする様な事があれば企業は内から崩れるからである。

センシティブィティ・トレーニング、人間理解等々のトレーニングはかくして益々盛んになりつつあるが、かうした訓練もまだまだ受身の人が多いし、まして国家を支へる人材はいかにして教育されるかといふ事を特に政治家は真剣に考へねばならない。

それには先づ人間の精神思想の問題を深くどこまでも追究し、中途でいい加減にぼかしてしまはぬ事である。

コンドルセ侯爵が、フランス革命の渦中にあつて追手を逃れつつ死を賭して書きつづつた『人間精神進歩の歴史』は日本でも翻訳が出てゐるが、ヨーロッパにはかうした精神史に対する強靱なる追及の精神が伝へられてゐる。生理学的心理学から民族心理学にまで進んだヴィルヘルム・ヴントも然りであるが、息をながく、思ひを深くひそめて人間精神の開展に思ひをいたす事は、今の日本に於いても特に必要である。

三井甲之先生の長詩「郷土追放」の一節に、

なげく、といふ日本語よ、

体験せむとするのであるか、

まことその言葉のごとく

「うらなげき」「なげきこひのみ」

わがつく息は長く

さけびいのりし

われらの祖先の

みおやのことばは

かなしくををしき

記紀万葉に

移動悲痛生活を

みちみちてをつたのを、

いまわが身に

ふるさとをのぞむが如く

いまかへりみしめらるのである。

と歌はれてゐるが、「まことその言葉のごとく 我がつく息はながく」といふ右の数節は三十年にわたつて私の心に刻みつけられてゐる。

ヨーロッパ人の息は長いといつたが、日本人の息はそれよりも更に長い。

戦後の〇×式教育によつて中断されたかにみえた文献文化的的研究はかくして、今また若い人々によつてうけつがれつつあるのである。

若い学生諸君の合宿記録、往復文書の中に時折り、はつとさせられる様な表現をみる時、私は青年の心中にきざしはじめた解脱智のはたらきを感得するのであるが、かうした解脱智の開展が今日の学校の成績、実社会の業績の上に直ちに点数となつて評価されない処に、現代の行詰りの原因がある。

一時あれ程声を大にして叫ばれた「科学技術の振興」が色々やつてみた末、その根底に人間精神の振興、人間能力の開発といふ難問が横たはつてゐる事が漸く分つてくるにつれ、これはさう簡単に片づけられない問題だといふ事になると、気の短い人々は手を引いてしまふのである。

○ 思想問題を論ずれば、左翼右翼の人数情報等のみを問題として、自分自身の内心の問題と結び

つけて考へる人は意外に少い。

例へば又さきの『紫の火花』からの引用であるが、

「芥川はこう言っています「ギリシヤは東洋の永遠の敵である。然し、またしても心がひかれる」私は大学生のときか、卒業して直ぐかにこれを読んだのですが、なかなかその意味がわからず、二十年位問題として心に温め続けていたことを憶えています。(二七四頁)」

といはれる様に「ギリシヤは東洋の永遠の敵である」といふ様な言葉を二十年も問題として心に温めつづけるといふ審細な工夫を重ねてはじめて思想問題の真髓に達する事が出来るのである。

今日の日本人にとつて東洋も西洋も自分の外にあるものではない。日本はもはや東洋と西洋との間に固定的に存在するものではない。

最初に引用した「自然はこころの内にある」といふ岡博士の言葉と共に、私の用ゐた東洋も西洋も日本の外にあるものではないといふ表現も説明を要する。又博士のいはれる純粹直観といふ言葉も中々むづかしい。

ただ前に引用した岡博士の「松の木」の文章をよんでみると、そのいはれる純粹直観は親鸞のいふ他力の信、他力易行道に一脈通ふものがある様に思はれる。これを博士は修羅道の「根性」と區別してをられるのはまことに微妙な教へである。

「他人（ひと）を先きにし、自分を後にせよ」と祖父上から教へられ、日々の一つ一つについてこのことを実行された岡博士の戒律修行はまことにおほらかにして自然な感を与へるのである。今日事業場などで何といふことなく大小様々な災害が次々に起り、当事者の必死の努力にも拘らず中々なくならない事実に対して、自我の抑止と真我の実現により生命のリズムの高揚と注意力、情操の陶冶が必要であると、いきなり説けば一笑に附せられるかも知れないが、これは真実である。

幾多の錬成訓練研修がどこまでも有終の美をさめるためにも、日本人は本来の永久の生命に立ちかへり、正しい文化開展の歴史をつたへる古典、古人の教へに活眼を開く時であると繰り返し思ふものである。

信の復活

『国民同胞』
昭和四十年十二月号

本誌十月号に載つた山田輝彦氏の「日本の神々」、加藤善之氏の「人間尊重論の暗い影」、共に感銘深く熟読した。

山田氏は明治以降に於ける日本の人文科学を批判され、自然科学が実験によつて真偽を実証し

ながら、着実な発展を遂げて来たのに対し、哲学や歴史の世界において、真の民族的体験に根ざした学問が生まれて来ない事実を真剣に反省されてゐる。

最近大槻博士の辞書『大言海』によつて「弁証法」といふ言葉を引いてみると、

「直覚又は経験によらず概念を分析して事理を研究すること」と記されてゐるが、これは中々簡潔な解釈である。国家、社会、人間、人類、平和、神、社会制度といった様々の概念を具体的に經驗的にその内容を究明する努力こそ真の精神科学、人文科学であるべき処を、弁証法などの西洋の思想の言葉の魔力にとりつかれ、それを進歩的と思ひ込んで来た迷ひは今こそ払拭せねばならない。

明治四十二年の明治天皇の御製に

寄書述懐

すゝみゆく世におくれなばかひあらじ文の林はわけつくすとも

といふ御歌があるが、「すゝみゆく世におくれるな」と教示された御言葉を三十年近く私は心にくり返し仰いで来たが、何か最近益々切実に仰がれるのである。

天皇は単に「文明開化の世におくれるな」といつた様なことを戒しめられてゐるのでない。「文の林はわけつくすとも」とあるから、固定概念の学問世界に閉ちこもつて、人生の事実を直視す

る心を失つてはならぬことを戒められてゐるものと拝察する。今日進歩的思想家といはれる人々の一団が、段々時代に取り残されつゝあるのも、自分で自分のカラを破れないからである。

曾つてナチスの全盛時代に、東大教授の某氏は教壇の机の上に、当時のナチスの思想的指導者ローゼンベルグの『廿世紀の神話』を置き、学生に向つて「私はこの本をこゝに置く、しかし読まうとはしない」と見得をきつたが、これはいけないのであつて、やはり外来思想文献を確実に読んできちんと批判撰取せねば学問の進歩はない。当時私共学生は、研究グループをつくつて『廿世紀の神話』の邦訳の読み合せをやつたり、ヒットラー・ユーゲントの代表者の青年リートツケ君やナチスの文化使節デュルクハイム伯なども話し合つたが、ゲルマン民族の優越性、ドイツ・ユランドすべての上に、といふ思想を完全に吹き込まれた青年の言葉には真の説得力は感じられず、デュルクハイム氏とは共鳴する所もあつたが、個と全との関係、精神科学の思想法の根本については、むしろこちらから積極的に吹き込んだ形だつた事を覚えてゐる。併し乍らかういつた事は私共にとつて、非常に有意義であつたし、今後もあらゆる外国の人々と真心をこめて話し合ひたいと念願する次第であるが、それよりも今日の急務は日本人相互の話し合ひで戦ひ、いがみ合ふといふのではそれこそお話にならない。

何よりも、日本人相互の老若、労資、師弟友人の間に於いて人生観、世界観について、仔細に、

具体的に論じ合ふ風潮をまき起さねばならない。「この忙しいのにそんな暇があるか」と冷笑する人がいかに多くとも、それでは現代の行き詰りは打開出来ないのだと確信しつゝ立ち上らねばならない。

今日の経済不況が深刻であることは勿論であるが、この沈滞の中に我等国民の心が益々通ひ合はなくなつて、相互の不信が深刻化する事がより以上に恐ろしい。

不信は、旺盛な生命力と意志の欠除から生ずる。「今日では意志が知識の奴隷となつてゐる」とは、クセジュ文庫に『意志』といふ本を書いているポール・フルキエの言葉であるが、「在俗の繁務は仏道の修業を妨げるものでない。すべては仏法あるのみ」といひきつた道元の言葉をも憶ひ起し、「自分一人が国家の事を考へてもどうなるものか」といつた様な卑屈な心を捨て、**「たと一人の坐禅も諸仏にまどかに通ず」といつた道元の大確信の言葉の通りに、我らは自分の心を調伏せねばならない。**

「人間尊重」をスローガンからときはなつ力は「信」を介しての人々のつながりである。それなくしては人間尊重の要求もその宣言も愚かしい所行である。それは云ふべき事ではなく、行ふべき事であり、人に要求すべきことでなく自ら行ふべき事である、とは前号の加藤善之氏の言葉であるが、日本国民が真に国民としての自覚とよろこびとをとり戻せるか否かは、正にこゝにい

ふ「信」を介しての人とのつながりの実現にかゝつてゐる。明治天皇のみ教へにある「すゝみゆく世におくれるな」といはれる事もかゝる事に外ならない。三井甲之先生のいはれる如く「文化は昔にさかのぼりつゝ前進する」ものである。世の進運、すゝみゆく世は幾多思想的先覚者が憂へて来た、東西洋文化の激突という情勢を展開して来て、こゝに日本国民の持つ文化史的使命、東西洋文化の融合の使命遂行の時期が到来したわけである。

これは日本人にとつて「いやなら止めておかう」と逃げることの出来る様な生やさしい事ではない。岡 潔先生もくり返しはれる様に、これが出来るのは日本人以外に無いのであつて、日本人がこれをやらねば人類は破滅の危機に直面するのである。

こゝで我々はもう一度日本の歴史をふり返り、皇室を中心に伝承される悠久の大義、「よものうみみなはらからと思ふ」と仰せられる撰取不捨の御精神を仰ぎつゝ素直に雄々しく、まがれる思想を正してゆかねばならない。

夕 べ

あらしめく空の彼方に黒々と雲ゆく様のただならぬかな
庭木みなゆらぐが中に法師蟬狂ほしく鳴き日は暮れむとす

『国民同胞』
昭和四十年十月号

ゆく夏のみじかきいのちひたすらに蟬なきしきる夕べかなしも
庭土をふみしめ立てばをちこちの友ら思ほゆ心もしぬに

心

しきしまの大和心をみがけとふ明治のみかどのみ教へ尊し
くぬちいま乱れに乱れそをすむ大和心は失はれむとす
おもふこといふべき時にいひ得ざる弱き心をうちくだきなむ
ますらをの心ふりおこしたちろがず我はゆくべししきしまのみち

(昭和三十八年九月に在京学生とOBとの「輪読や和歌創作の集ひ」として発足した東京八日会で
歌はれたものから収録)

昭和四十一年～五十年（五十五歳～六十四歳）

合宿にて

大布たぬを木の間に張りて友ら迎ふる言葉しるせり墨くろぐると

この言葉我は忘れじ全国の友ら迎ふるその言霊を

宿に入れば友らいませり深き思ひ内にたたへてほほゑむ友らよ

『日本への回帰』第一集
昭和四十一年五月刊

大学問題の行方

——日本の文化史的使命に及ぶ——

『国民同胞』
昭和四十一年八月号

早大の事件が表面的には解決して以来、日本全土を動かした大学の問題もジャーナリズムの社会面から影をひそめたが、学芸欄にその論点を移した観がある。

朝日ジャーナル七月二十日の増刊号は「大学革命への提言」といふ論文集であるが、秀作九篇の長論文を集めたものである。「大学革命」とはやし、オーバーな表現であるが制度論、運営論

が圧倒的多数である。中で、学生の論文では、現在の大学生が、アジる人とスポーツする人と勉強する人とに分れてその間のギャップが段々大きくなつてゆく、しかも大多数の学生は「俺は一体何なのだ」といふ混沌迷の中に生きてゐるといつたムード論に終始してゐて、大学革命といった様な意志的なものは読み取れない。

又現在の日本の大学を思想的混乱にまき込んでゐる「思想」について言及してゐる人は誰一人ゐない。

専門分化した大学の中でお互ひの専門を尊重し合ふのはよいが、それはなれ合ひとは違ふ。自然科学者は社会科学者の説に口出しするな、社会科学者は自然科学者を批判してはならない、かういつた所から、学問は生命のないバラ／＼なものになつてゆく。

『人間—この未知なるもの』の著書で世界的に有名なアレキシス・カレルは、
人間についての真の学問を発達させねばならぬ。

それは物理学や化学や力学より以上に必要である。

人間を分析するためにはあらゆる技術が必要である。

人間の分解は無限であるし専門家でない学者が必要である。

真の学者は追々少くなつてゆく。V

といひ、

△最高の綜合は毎日常生活の煩はしさで気の散るやうな人間には出来ない。人間の科学の發達は他の科学以上に非常な精神的努力を必要とするのである。(桜沢如一訳『人間—この未知なるもの』) V
といつて学問の専門分化の危険を警告してゐるが、今日の大学の危機は正にかういつた「眞の学者」の少なくなつてゆく状態を措いて外にはない。

新政治経済研究会の機関誌『新政経』六月号には、一九六五年四月に米國インディアナ州のノートルダム大学で行はれた「マルクスと西方世界」といふシンポジウムに、日本から参加された京都大学の猪木正道教授の手記が載つてゐるが、かういつたシンポジウムをなぜ日本の大学は主催出来ないか残念で堪らない。

ノートルダム大学はアメリカに於けるカトリックの大学として知られ、一九五六年のハンガリー事件後、この大学には多くの亡命学者学生も集り、反ソ反共といはれる同大学がソ連および東欧の研究者も招いて、マルクスの思想そのものを問題にして、シンポジウムを行つた所に意義があるが、この記録をよんでも、当時の論争は未解決のままに終つてゐる。

外国のこれらの学者のマルクスの思想に対する見解がこの程度のものであるとすると、いよいよ日本が主催して徹底的な批判討論会を行はねばならない事を痛感する。そして研究は自由なり

の原則に基き、学内に於いて何らの政治的圧力を加へられることなく、マルキシズム批判の言論を堂々と展開し、教授学生一致協力して真の學術興隆に努力すべきである。曾つて河合栄治郎教授が教場でいつてゐたが、「大学内でマルキシズムに反対を表明すると出世の途を絶たれるのである。」かうした世俗的権力が学内を支配してゐる様では真の学問の發展は望めない。又反共とか防共とかいつても、ナチスなども理論はまだ／＼不完全不徹底なものであつて、思想的混迷は依然としてつゞいてゐる。

最近読んだ岡 潔博士の著書『月影』の中に又々心ひかれる文章があるので左に引用する。
△私はフランスに留学する途中シンガポールに立ち寄つたのであつて、その後ずっとパリにいた。そうすると一九三一年に満州事變が起つた。あのときの諸外国の日本に対する非難はすさまじいものであつた。まるで戸外で暴風雨に逢つたようなもので国内にいた人には想像もできないだろう。私は日本はどうなつていくのだろうと思つた。シンガポールでの体験のこともあつて私の強い関心はおのずから日本の上を集つた。私は一九三二年に日本に帰りその後ずっとこのくにいて、したしく日本のありさまを見てきたのであるが、その後日本は心配なほうへ心配なほうへと歩き続けて今なおそれをやめようとしなない。だから私は関心を日本から離す術がなく、とうとう三十年以上、主関心を日本の上に持ち続けてしまった。真我の位置は主関心

の集まるところにある。だから私は普通の人のように小我を自分とは思えず日本を自分だと思
っている。そうすると生死に対してどんな気がするかというと、私は日本の情緒の中から生れ
てきてやがてそこへ帰って行くのだという気がするのである。

私はまる三年パリに住んでみて、何だか非常に大切なものがここには欠けていると感じて、
帰国してから芭蕉や道元に本来の日本の風光を教えてもらったのであるが、パリに何が欠けて
いたのかといえ、それは「情」である。（八六頁）▽

右はまことに達人の言として何度も噛みしめ味ひたい。成程現代フランスの知性は大したものとい
へよう。

前記のアレキシス・カレルがフランス系アメリカ人で、同一思想系統のクロード・ベルナール、
ベルグソンの生理心理学、生理学者で社会心理学倫理学をも論じマルキシズムを鋭く批判するポ
ール・ションシャル、精神医学等のパルマード等々、廿世紀後半に向つて発展をつづける人間の
科学は愈々精細をきはめてゐる。

又政治家であると同時にすぐれた科学者哲学者である者も多く、数学者で大統領たりしポアン
カレも然り、又数学者哲学者であり、同時にフランス革命の渦中に政治家として活躍し革命中政
敵に追はれ逮捕の追手を避け乍ら『人間精神進歩の歴史』の大著を書き遺したコンドルセ侯爵等、

枚挙にいとまない程であるが、これらの人々の著書をよんでゐても、確かに岡氏がいられる様に何か欠けてゐる。それは「情」であるとは名言といふべきである。

岡氏は又かうもいはれる。

ハ実存哲学は形だけを見ればもう東洋哲学が話せばわかりそうなところまでできているが、よくみると情の裏づけがまったたく逆であるから、なかなかそうはゆくまい。V

さういはれれば、例の実存哲学のサルトルなども一世を風靡してゐるかの如き哲学者ではあるが、日本の天皇をヒットラー、ムッソリーニと同じ様に考へ、霸道的政治を行つたと誌してゐる事は非常な認識不足である。

サルトルの随筆『大戦の終末』（渡辺一夫訳）には、

ハたゞ今日になつて、ムッソリーニもヒットラーもヒロヒトも、要するに小っぼけな王様どもにすぎないということに甫めて気づいた。民主主義国の上に襲いかゝり掠奪と殺人を恣にしたこれらの国々は列強であるどころか、ごく脆弱な国家だったのだ。これらの小っぼけな王様たちは、死んだり失墜したりしてしまつたし、その封建的な小さな王国、ドイツ、イタリヤ、日本は地上に倒されている……V

と誌してゐる。「口ひゞく、我は忘れじ」といふ古事記の歌ではないが、「サルトルよ、覚えてゐ

給へ、この言葉を」である。かりにこの論が一九四五年終戦の時に書かれたものであるにせよ、私はサルトルが来日して日本の国と天皇の意義を今一度考へ直すことを切望する。天皇に関しては最近訳されてゐるモズレーの書いた今上天皇の伝記の方がはるかに具体的である。

そこで前記の岡氏がいはれる「情」についていふならば、氏は最初「情」といふ字を和英辞典で引くと「フィーリング」「エモーション」と書いてあるが、これでは浅すぎる。いくら欧米人が罪の子でも「情」が全くないのではない。そこで「情」に相当する欧米語を捜してゐる中に、最近ある人から「キリスト教でいふソールがそれであつて、あれを魂と解釈してゐるのは間違ひです」と教へられた。フランス人は「情」を教会内にしまひこんでゐるから、教会外をいくら捜しても見当らないわけだ。人の中心は「情」であつて情の根底は「人の心の悲しみを自分のからだの痛みの如く感じる心」すなはち観音大悲の心である。と岡氏は説かれてゐる。そしてそれにどうして

△明治以後の日本はいつも欧米から「教会外」のものを取ってきては、無反省にまねたのであるが、こんなことを続けていると、ついには世に一滴の潤いもなくなってしまうだろう。▽
といはれてゐる。

たしかに明治以来日本人は外来文化吸収に異常な熱意を注ぎ今尚之をつゞけてゐる。併しその

ために岡氏がいはれる様な「情」の泉を枯らして行つたのでは、文化の吸収どころかその逆になつてしまふ。少くとも精神文化に於いては、日本人は自らの伝統に目覚めるべき時である。

明治百年は単に一を加へてやがて一〇〇に達したといふ様な平坦なものではない。明治維新の志士、日清・日露戦役、大東亜戦争と祖国防護の戦にたふれた幾多の英霊は、今日の世界人類の苦悩に一すぢの光明を示現し得る国家の威力を、日本が一日も早く恢復出来る様に悲願悲泣されてゐるに違ひない。

それには道元禪師のいふ「道心ありて名利をなげすてん人」が年齢地位性別の如何を問はず日本の文化史的使命に邁進せねばならない。

これなくして明治百年祭の意義はないものと知るべきである。

慰霊祭献詠

みたままつり年を重ねて皇神のみまもりいよゝ仰がるゝかな

ゆるがざる国のいしずゑ示します大み教を忘れてもへや

ますぐに立ちますぐに進めと告げたまふ神のみさとしかしこみまつる

『国民同胞』
昭和四十一年十月号

万葉集のうた (田無合宿にて)

七五三年 (天平勝宝五) 二月二十三日興に依りて作れる歌二首 (大伴家持)

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも

わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

二十五日作れる歌一首 (同前)

うらうらに照れる春日に雲雀あがりこゝろ悲しも独しおもへば

千年の年へだたれどうぐひすの鳴く音かはらず大和島根に

うち沈む春日の心うちはらひますらをの歌君はうたひし

揚雲雀み空にきこえうらうらと照れる春日のともしきろかも

一すぢに歌よむ心いにしへに通ふ一ときうれしかりけり

万葉のうたのしらべのひし／＼と身ぬちに迫るこの日頃はも

歌よめばみくに思はゆ歌よめばいにしへ人と共にあるごとし

慰霊祭献詠

夕闇の巷をゆけばたへがてに神のまもりをひた祈るなり

『国民』同
昭和四十二年一月号

『国民』同
昭和四十三年十月号

慰靈祭献詠

『国』民『同胞』
昭和四十四年十月号

生垣に沁みいるごとく紅芙蓉花咲く庭に秋空高し

天がける神のみたまを仰ぐごと朝の光のうるはしきかな

日本民族の正念

——『平和の大海へ注ぐ一滴の水』（三井甲之著）をよみて——

『国』民『同胞』
昭和四十四年十一月号

忙しいといふ時の「忙」といふ字は、「心が亡びる」と書く様に、仕事に追はれすぎると心の生長がなくなるとは、最近或人の講演速記の中で読んだ。日常の挨拶でも「お忙しいでせう」といふことは半ば相手を祝福してゐる場合が多いし「いや忙しくて仕方ありません」と答へる時には、半ば得意な時が多い。そして「心が亡びる」或は「心を亡ぼす」ことを嘆く人は少ない。

交通は日毎に便利になり、昔の人が想像もしなかつた様な交通機関の発達により人々が相接する機会はいくらでも数多く与へられ乍ら、心の交流、深い思ひ、精神の共鳴、心からなる対話は次第に少なくなつて、何百年か前に、不便な山野を大半歩いて布教してまはつた親鸞の言葉などが、今だに生き／＼と生命あふれるものとして我々の心を打つのはどういふ事であらうか。

又最近或テレビの中できいたせりふに『いや今の私にとつて大切なのは「聖徳太子」の方だ』といふのがあつた。私は瞬間はつとして思ひなほすと、それは、「お金」といふ意味であつた。あゝエコノミック・アニマル。アニマルとは歴史の感覚のないもの、歴史を知らないもの、バイタリテイはあるが、過去現在未来を貫く古人に対する憶念と、将来の改革と進歩の観念のないものをいふ。

大蔵省印刷局で印刷される日本国紙幣の、五千円札と一万円札には、聖徳太子の肖像が印刷してある。併し乍ら太子のお書きになつた御著作、その偉大な文化的価値については学校でも教はらない。印刷局では紙幣に虫がつかぬ様、印刷の時に防腐剤をしみこませるが、この紙幣を使用する人の心がくさる事は考へないであらうか。

政治とは人の心を治めることである。明治時代の文豪二葉亭四迷は、その小説『平凡』の中で「私は以前政治家の仕事などはその日その日のやりくり仕事にすぎないと思つてゐたがそれは誤りで、政治家とはつねに或精神界を相手に仕事するものだ」と後になつてから分つた」と主人公を述懐せしめてゐる。

こゝでもう一度考へ直してみると、日本人のバイタリテイの奥底には、現在の学校教育の動向にも拘らず、建国以来うけつがれた素直で敏感な批判力と勇猛心があらはれてゐて、外人がエコ

ノミック・アニマルと評するのは、日本文化の主流を知らないからである、ともいへる。むしろ今こそ日本人自身自らの正念に立ちかへる時であると思ふ。

こゝ一月あまり『三井甲之存稿』の別集として刊行された『平和の大海へ注ぐ一滴の水』をくり返しよみ耽つてゐる。本書は著者最晩年の遺稿であつて、殊にその後篇は昭和二十二年四月十日著者が自宅にて脳溢血で倒れた後の病床日記をその主な内容としたもので、あれだけ教をうけ乍ら倒れた後お見舞にも行かなかつた事をくやみつゝ、著者の柔軟な自然随順の心境を表現するコトバに直接ふれて、無限の信界につながる思ひに日々を送つてゐる。

同書三二頁に般若心経を誦して究竟涅槃の心境が開発進展することを述べた後に、

「思想せず、考慮にとらはれず、唱へるのである。コトバのしらべのまゝに唱へ、よむのである。それが唱名におちつくのである。唱名が念仏である。念よりもむしろ唱が主となるので、唱名の『しらべ』が大切である。深思静観冥想から解放されるのである。考へずにサトルのである。サトルは目がサめる。疾く目サメルのである。」

と述べられてゐる。

このことは曾て私が三井先生のもとにお伺ひした時、冬枯れの田んぼ道を歩き乍らくり返し教へられた。

くり返し唱へるコトバ、アマテラスオホミカミ テンノウヘイカ ナムアマダブツと、そのし
らべが大切だ。と説かれた時の先生のコトバの中で「アマテラスオホミカミ」という音声は今尚
はつきり耳に残つてゐる。同書の右の文につゞけて

「『信楽開発の時刻の極促ごくせき』である。物理学の速度をも考ふべきである。これはサトルことを理
解するために学術的に考へるのである。サトルことは考へることを抱納するので、弁証法的に
排斥するのではない。」

これは前にいふ、思想せず、考慮にとらはれず、唱へるといふことを補足するもので、「サトル
ことは考へることを抱納するので、弁証法的に排斥するのではない」といふ点は味ふべきコトバ
である。

先輩の田所さん方が日常の生活の中で親鸞聖人の顕浄土真実教行證文類序の開巻の最初のコト
バ

「ひそかにおもんみれば難思がむの弘誓ごうぜいは難度海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧
日なり」

の「難思の弘誓」などいふ言葉だなあ、これは聖徳太子の十七条憲法の中の「剋よく念うて聖と作な
る」といふお言葉に通ずるものだ、といはれてゐたことを思ひ出すが、ひろくなり狭くなりつゝ

つながつてゆく我々の思想生活がかうした先人の生きたコトバに現実に支へられてゐることを思ふと日本はありがたい国だと思ふ。

次にもう一ヶ所前掲『一滴の水』から引用すると、同書三八頁に

「ヴントが最後に英米の実利主義の哲学に対して独逸の理想主義イデアリスムスを説いたのは世界大戦(第一次―筆者注)の悲劇にともなつたもので、敵味方に分れたことによる研究の対象の分裂にわざはひされて全世界的統一依拠を失つたからであらう。悲しむべきことには彼もその意図に反して、つまりは哲學者であつたからで、哲学の到達した所は燦然たる文化殿堂のさびしさと硬直であらう。そこを一步ふみ出せば、實際ふみ出さざるを得なかつた世界は『俗諦』^{ソグクタイ}のそれであつた。ゲーテは独逸哲学の末路を予言してををつた。」

著者のいはんとするのは英米の実利主義哲学もドイツの理想主義哲学もどちらも採るべき要素を持つてゐるのに、英米とドイツが敵味方に分れたために研究対象の分裂にわざはひされてヴントが一方をすて一方による考へ方に固執する結果になつたといふのである。燦然たる文化殿堂のさびしさと硬直、そこを一步ふみ出した世界は「俗諦」であるとは、文化の全世界的統一依拠を失つたことにより、ドイツが真俗相依の国になり得ないことを示すと共に、日本の現在のアカデミズムの行づまりをも示してゐる。この行づまりの打開は、全文明国の精神発達史上の重大問題で

ある。

日本は第二次大戦で敗けたけれども、日本文化の伝統は古来撰取不捨であり、敗れて尚全世界の統一依拠を失つてはをらず、益々その文化史的使命遂行の責務は重くなりつゝあることを自覚せねばならない。

最後に前掲『一滴の水』にしるされた三井先生の和歌の中から晩年の寂滅為楽自然随順の心をうたはれた数首を引用し、感想を述べよう。

世の中にくさぐさのこと起るまゝにまかせてながむるこゝろゆたけし

かにかくにせむと意志して生くるなれどそをたちきりて生くるすべあり

わが思ひおもひ切りつゝ空わたる日をみるごとくみつゝくらさむ

うつそみのいのちしぬるをしる時し人のいのちはとこしへならむ

永生を生くるをしへを宗教と名つけしことわりいまさとりたり

ふりそゝぐ天つ日かげを身にうけてまことありがたしと思ひつゝあり

日のひかり身にそゝぐことをむらぎもの心にもふがくすりなりけり

右の歌の第二首目「かにかくにせむと意志して」とあるのは、生きてゆく中にその時々々の行動を支へる様々の意志があるが、「そをたちきりて」といふのは、仏の本願力といった超個人的意志

につながら、自力のはからひを捨て、他力の信に生きるその意志過程をさすもので、この点理くつに走る前に議論をやめて、静かにその前後、歌をふくめてそのしらべを追つてよみ、サトル以外にない。

また最後の歌

日のひかり身にそゞくことをむらぎもの心にもふがくすりなりけり
日のひかりが絶えず自分の身にそゞいでゐることを心に思ふことがくすりになる、ふりそゞく日の光が自分の身をつねに照らしてゐると思念し、心を天地につなぎ、天地のリズムに心を合せることにより、病気がいやされるといふことであり、つねに死に直面しつゝ神に祈り自然のめぐみをあふぎ生きる作者の心があらはれてゐる。

以上はいひたい事のほんの一端であるが、今日の日本の表面の混乱のあらしが大きければ大きいだけ、日本民族の正念は表面にあらはれることを信じつゝ攔筆する。

慰霊祭献詠

秋風の心にしみるこの日頃亡き師の君のみこゑなつかし
皇神のみまもり信じはらからと心合せてみくにまもらむ

『国民同胞』
昭和四十五年十月号

日本の真面目

『国民同胞』
昭和四十六年十月号

最近某週刊誌の記事の標題に「何が起っているか分らない中国で共同声明を作っている効果」といふのがあつた。日本が中国へ中国へと草木もなびく如き状態に一寸水をさした様な標題である。思想的に主体性を失つた人々は「中国では夫婦共稼ぎが徹底的に制度化し、保育所、托児所の完備により、所謂一家団らんの時間はごくわずかである」といふニュースをきくと、今の日本の家庭生活はみな悪いと思ひこんでしまふ。日本の職場でも最近共稼ぎが増加し、労働力確保のため、托児所、保育所を事業場で整備せねばならない状態は否定出来ないし、今後この傾向は強まるであらうが、これから逆に家庭の愛念を出来るだけうすくし、否定してゆくことが国家を強大にする道だとなると、これは精神の法則から外れてくる。子煩悩といふ通り、我子を可愛がる愛念は煩悩の一種にはちがひないが、この煩悩を制度的に断ちきることは自然の法則に合致してゐない。

「煩悩を断ぜずして涅槃を得」といふ様に、日本思想は煩悩を否定せず、これを菩提心で浄化してゆくのである。

一家団らんとたやすくいふが、まづ親が、大げさにいふと上求仏道下化蒼生といった菩提心を念々もちつづけなければ実現出来ない事は、深くものを考へる人は分る筈である。

それを何か日本の一家団らんは安易で、個人主義的で恥づべきものだといつた卑下感が先に立つと、それこそ軍国主義的な中国の思想宣伝に参つてしまふ。アメリカのアベグレンはじめ経営学者は、何年にわたつて実態調査をした結果、日本の家族主義、終身雇用制が飛躍的経済成長の原動力であるとの結論に達した。

こゝで日本人は自信を失はないで、まづ国家の治乱盛衰から日常茶飯事にいたるまで、脉々として作用してゐる天地自然の法則を究め、人生の核心にふれる哲人聖賢の言葉を深く味はふ体験に徹してゆく必要がある。

御訪欧中の天皇陛下のにこやかな御笑顔の中に、四海同胞を祈念される御愛念と、天地の神をまつられ、神に祈られ乍ら、常住真実を追及される求道の御意志がひそんでゐることを外国人より先に日本人が知らねばならない。

天皇が国民の事を思つてをられるお気持は底知れぬ深さがあることは、知る人ぞ知るである。

社会福祉、福祉国家、社会資本の充実、人間尊重、公益優先、等々政策がスローガン化して内容に統一を欠く時、人々は静かに己に立ちかへり、天皇の御気持を味はふ今の一念に活路を見出

すべきである。

正確な科学的事態調査研究による内外の文物制度の研究と共に、分裂した国論を不断の生命的統一に求める熱意をふるひ起さねばならない、それは大慈大悲の願行につながる。

大慈大悲といふが、親鸞のいふ様に「ふかく大悲を行ずるひとは衆生を愍念みんねんすること、骨體こちたいに徹入するがゆゑに、なづけて深とす」といふ如き深い心を伝えてくれた先師の言葉は、威嚴にみちてゐた。念々疑を生ずること勿れと經文にある通り、我々の思想生活は今の一念に統一される。これを信といふ。時空を超えて信の世界はひろがる。在俗の世事は千差万別乍ら、心はこの信界につながる不思議な国日本の真面目が発揮されるのは正にこれからである。

慰霊祭献詠

ありがたきみ教へつたへ身をすてしみたままつらむ心のかぎり

〔国民同胞〕
昭和四十六年十月号

人間とは何か（巻頭のことば）

〔労働の科学〕
昭和四十八年二月号

人間尊重、人間回復が叫ばれる昨今であるが、めまぐるしい社会の動きの中に、少しでもゆと

り、人間らしさ、余裕、余暇をもちたいといふムードは、よくわかる。

しかし、ここであらたまつて、「しからば人間とは何か」と問はれると、なんとなくはつきりしなくなる。

人間は神とアニマルの中間にあるもの、サルから進化した霊長などの一般的な考へ方から、もう一步進んだ究明が必要となつてくる。

昭和四十四年発行された、ベルギーの哲学的経営学者ジョゼフ・バジールの『人間回復の経営学』には、第二次大戦開始の数年前出版され、日本はじめ欧米十数カ国語に翻訳され、百数十版を重ねた仏系アメリカ人の生理学者、アレキシス・カレルの『人間—この未知なるもの』の中の説を、いたるところに引用してゐる。それはルネッサンス以後の哲学の基礎をなした、デカルトの心身二元論に対する痛烈な批判である。

デカルトの後に哲学界をリードしたドイツのイマヌエル・カントの晩年の著作、『人間学』は、人間の具体的な行動、性格、病気などを、生理学と心理学の両面から考察したものであつたが、その後に出たヘーゲルの観念論は、カントの説を進展できず、その影響のもとに、社会科学全般にわたつて、人間の生理学、心理学、衛生学的考察を行なはないままに、長い年月がすぎた。その間、生理学、心理学、衛生学者らのたゆまぬ努力の連続とともに、ドイツ、ライプツヒ大学

の教授であつたウイルスヘルム・ヴント、前記のカレル、フランスのソルボンヌ神経生理学研究所長のポール・ショシャル、その他多くの学者らによつて、人間の学問は総合的に進められ、心身二元論から心身相関論に展開してきたのである。

なくなつた労働科学研究所初代所長の暉峻義等博士が、生前口ぐせのやうに、「心身相関論の展開は、ぼくのライフワークだよ」といつてをられたが、その業績は、われわれも引きついでゆかねばならない。

最近、日本経済新聞社から発行された『人間とは何か』といふ書物は、飯島宗一、加藤秀俊両氏の編で、生物、生理、病理、文学、社会、宗教各方面の人の共著と、シンポジウム形式の質疑応答を加へたもので、人間論の総合的展開の一端を示すものと思へるが、かうした研究は、今後非常な勢ひで進展するであらうし、したがつて人間の科学である労働科学も、いつそこの進展をするであらう。

ただ日本の現在のやうな大学の学科の分類によると、人間論に関する総合的な学問が普及しにくい点もあるけれども、それを補ふセミナー、シンポジウムのくり返しにより、ゆきづまりになつた専門分科は、もう一度原点にもどつて、新しい総合統一に向かふやう、いちだんの努力が必要である。

話が前後するが、ヴントから十年余の後に、同じくライプツヒヒ大学の哲学教授になつたアーノルド・ゲーレンの『人間学の探求』も、日本訳で出てゐるが、それにも行為する人間を統一的に考察することから出発する、心身相関論がうかがへる。

生まれて成長し、働き、疲れ、楽しみ、時には病み、老衰する、生きた人間とその環境が、生きた人間学の対象であることを、あらためて認識し、ゆめゆめ概念のもてあそびによつて学問の生命を絶やしてはならない。

桑原暁一大兄のみ霊に捧ぐ

『国民』同『胞』
昭和四十八年六月号

かぎりなきみくにのいのちともろともにとたゝかひたふれし君ぞ尊き
うちつけにことばかざらず道を説きし君のみ声もきこえずなりぬ
残されしみふみをたよりはらからとたすけ合ひつゝたゝかひゆかむ

桑原暁一兄を悼む

『国民』同『胞』
昭和四十八年八月号

去る五月十九日、桑原暁一兄が長逝されたが、不思議なことにそれ以来桑原兄が急に身近にこ

られたやうで、一高昭信会どうぎょうかいのときの同行時代にもどつた様な気がしてならない。

昭和五年に旧制一高の文科に入られた桑原兄の同期には、若野秀穂、加納祐五といった同志がゐた。今の国文研の中心をなす小田村兄、夜久兄は更にその二、三年あとから入られた。詩人宗教家タイプの若野兄と、人並みはづれた意志と粘り強さで黙々とついでこられる加納兄と並んで、母上姉上の熱心な真宗の信仰生活の中に生ひ立ちながら、すぐれた統覚と分析の力をもち、当時肩で風を切つてゐた左翼学生に対してびくともしないだけの勉強をつみ重ねてゐた桑原兄の存在は、昭和五年の九月になくなられた黒上正一郎先生亡き後、田所先輩らが指導された一高昭信会を支へる大きな力であつた。当時君は口ぐせのやうに、

「弁証法とかカントとかマルクスとか、それらを縦横に論ずる実力をもつてそれを批判しなければ威力がないよ。」

といつてゐた。その言葉通り、よく勉強してゐた。しかし学者ぶる聖人ぶるといふことは全くなく、切実な思索と求道の中で大事なことを簡潔に二こと三ことで表現する力をもつてゐた。

あの頃は春夏の休み毎に合宿をしてゐたが、或る夏の合宿を或る寺で行つたとき、その住職さんと高校生の桑原兄と問答みたいなことをしたが、桑原兄のおだやかな二こと三ことで住職さんは黙つてしまつた。

人生の大事とか、信仰上の大事とかをコトバで決する能力はこの頃からもつてゐたやうである。お葬式の日には桑原兄の無二の親友であり先輩でもある佐賀の副島羊吉郎氏が靈前で切々と述べをられた如く、桑原兄の学生時代は苦学の連続であり、世の常の学生であつたら当時の流行思想であるマルキシズムに走つたであらう状況であつた。しかし君の卓抜した批判力は逆にマルキシズムの欠陥をついてゐた。桑原兄のやつたアルバイトは家庭教師はもとより鮎屋までやつたといふ。鮎屋をひらいた場所がわるくてさつぱり売れず、毎日毎日のこつた酔の入つたすつぱい飯を食べてゐたよ、ときはめてユーモラスに話してゐた。痛切な悩み苦しみを淡々と話すため鈍感な私にはよく分らず、若野兄などによく注意された。

若野兄と桑原兄はタイプは全くちがつてゐたが、何か別な方向から同じく道を求めてゐたと考へられる。若野兄は不幸にして早く病没したが、桑原兄の精進は撓まずにつゞけられた。君が時折つゞやく様にもらされる告白の様なコトバはいつまでも忘れられない。たとへば或る時（高校三年のときか大学生の頃）ふとかういはれた。

「ぼくは明治天皇御製の

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

といふ一首にみちびかれてきた。」

とぼつりといつて、あとは「ゆたかならなむ、ゆたかならなむ」とかみしめるやうにくり返した。この御製は明治四十五年の御作で、明治天皇崩御の年の御製である。桑原兄は長い間思ひつゞけてきたことをぼつりと洩らされたのであるが、毎朝御製拝誦をしながら何となく形式的になり勝ちな私の心に深くくひ込む様な告白でいつまでも忘れられない。

桑原兄の葬儀の時、長い間公私共に桑原兄に深い交はりをもつて来られた夜久正雄兄が、明治天皇御製を、涙と共に霊前に拝誦された、その悲痛な声と共に、桑原兄の告白は忘れられない。親鸞の他力の信仰に徹し、日本精神史を身を以て研究し、俗諦をきはめつくしながら教典にみちびかれた一すぢの生活は、そのまま靈界においてつゞけられてゐることを信じて疑はない。

山本勝市博士の計画経済批判論に共鳴し、戦時中から戦后にかけて、君は特に山本先生と親しかつた。先生は桑原兄の霊前に切々と語りかけられてゐたが、この断ちがたい生命のきづなはえたいの知れぬ現代日本の様相の中にあつて、不思議なる確信のよりどころとなる。

桑原兄の講演、著書はどこまでも内在的批判を主とする内面的威力をもつてゐて、昭和十六年頃我々の主催した「日本世界観大学」の講演会で、君が三十歳前後の年齢で行つた「世界強国論」という講演は、故田所広泰先輩がこれこそ客観的で威力ある、大衆に訴へる講演だと絶讃するところであつた。この様な実力は晩年になつていよいよ発揮され、本誌前々号に小田村寅二郎兄が

書かれた如く、『日本思想の系譜』の著述に当り桑原兄の指導と執筆がなければあの大著は出来なかつたであらうことは衆目の一致するところである。

聖徳太子の研究も、古来太子に対する批判がましい説も一つ一つ読みつくしてそれを反駁し得る實力をもつてゐた。もうこの頃になると残念ながら小生などの追隨を許さぬものがあつた。例へば『日本思想の系譜』の編集の中で、小生の分担の一つに「三浦梅園」があつたが、桑原兄は小生に、「高木君、三浦梅園やるの？ 梅園は価原と三語だね」と軽くいふ。彼は梅園の主著、玄語、贅語、敢語の三語をちやんとよんでゐるのだ。専門家を軽んぜず、考証を軽んぜず、その論文は客観性にみちてゐた。

桑原兄と二人だけで偶然会つたのは七、八年前、渋谷のデパートの食料品売場であつた。家に奥さんの居られぬ君は、今晚佐賀から副島さんが来られるので、晩のお菜を買つてゐるんだと、さもうれしさうであつた。そこで食堂で二人でビールを飲んで話したが、二人だけの会合はそれが最後であつた。何かあわたゞしく年中忙しく暮してゐて、友とゆつくり話すまもない生活を送つてゐる私にとつて、桑原兄の死は大きなショックであつた。病床に集つて姉上や、しつかりした二人の御息と共に、磯貝兄はじめ高校生教へ子達がこもこも看病する様をみて、黒上先生が本郷の下宿で病氣になられて教へ子が集つてゐた様を思ひ出し、かさかさに荒れ果てた様な国内

に一すぢの泉が湧いてゐる様な感に打たれた。

体裁をかざらず、ひたむきに率直に論じつくし説きつくし、聖徳太子の研究、古事記の研究に打ちこんでゐた桑原兄の足跡は生々しく残されてゐる。晩年の不朽の労作である「聖徳太子研究」は、未発表ではあるが夜久兄、小田村兄、戸田義雄兄ら七、八人の同志が何年となくつゞけてをられるものであるが、かういふ深く思をひそめた共同研究が今の世に何より大事なことである。

冒頭にいきなり書いたやうに、桑原兄はなくなられて急に私の身近に来て下さつた。これから同信同行生活を一緒にして下さつて、親しく私を教へていたゞける様な気がしてゐる。

桑原兄のかきのこされた著述をゆつくりよみ直し、君が生前に話してをられたコトバをかみしめ、これからやりなほさうと思つてゐる。

桑原兄のみ魂よ。今の日本の有様の中に、安らかに眠つて下さいなどは私は絶対にいへません。どうか我らの身近にあつて共に戦ひつゝ我らを導いて下さい。かう祈りながら追悼の言葉を終ります。

慰霊祭献詠

みくにまもることのゆゆしき日ごと夜ごとおもひてやまずみだれゆく世に

〔国民同胞〕
昭和四十八年十月号

言の葉のみち正さずば内に統ぶるみくにの力くづれゆかむに

慰霊祭献詠

国の威力おとろへはててくぬちいま争ひやまず何ぞかなしき

みたままつり神に祈りてとこしへにみくにのいのちまもりゆきなむ

慰霊祭献詠

みだれゆく世のさまみつつ天がける師友のまもりいのらぬ日なし

〔国民同胞〕
昭和四十九年十月号

〔国民同胞〕
昭和五十年十月号

昭和五十一年～五十五年（六十五歳～六十九歳）

事毎に信あるべし

『国民同胞』
昭和五十一年四月号

有名なフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』を訳された大津康氏は原理日本社の同志であり第一高等学校の教授であつたが、三井甲之先生の書かれたものによると、第一次大戦終結とともに文部省留学生として最初に入独し、老ヴントに日本の宗教に就いて語るべき重大なる使命を果すべき用意の完成を見ぬ間に病氣のため帰国せねばならなかつたといふ。

『ドイツ国民に告ぐ』は大津氏以前にも幾人かはその翻訳を試みたが、難解苦渋何人も半途でやめてしまつて、大津氏によりはじめて完成されたといふ。これまことに大津氏の思想の威力によるものといふ外はない。

フィヒテが一八〇七年より一八〇八年にかけて、伯林学士院に於いて学者教育者その他愛國の士を集めて行つた『ドイツ国民に告ぐ』は、ナポレオン全盛時代の仏軍による占領下にあつて、幾度か仏軍の太鼓の響に妨げられつゝ行なはれたもので、国民に多大の感動を与へた。

一八一四年ドイツ自由戦争が起り、彼は国民軍の教練及び講義に忙殺され、夫人が傷病兵看護中にかゝつたチブスに感染して夫人に先立つてその年一月に五十三歳にて死去した。一八一四年といへばナポレオンがエルバ島に流された年で、彼は翌年二月エルバ島を脱出して再挙をはかつたが、六月ワーテルローの戦に大敗し八月セントヘレナに流され、六年後一八二一年五月に死んでゐる。

有為転変の世の様さながらに、いはゆる英雄の霸道のはかなさをみるのであるが、同時に、フイヒテの熱烈な愛国心が仏軍の占領下にナポレオンの権力をはねかへした事実と、祖国の再興に戦ひたふれたフイヒテの精神をもう一度その講演によりみとらねばならない。

岩波文庫の中に入つてゐる右の『ドイツ国民に告ぐ』は、私が昭和四年旧制第一高等学校に入り、昭信会で黒上正一郎先生のご指導をうけはじめた頃、明治天皇御集、聖徳太子の三経義疏、親鸞聖人文集などとともに必読の書としてすすめられた。その後五十年近く経つた今日、敗戦、米軍占領下の生活を経験し、漸く独立国の姿に戻らうとしつゝも、いひしれぬ思想的混迷の中に苦しみ乍らこの本のもつ靈力に心ひかれるものがある。

そしてフイヒテの精神は、一九一九年第一次大戦で敗れたドイツが、ヴェルサイユ条約の鉄鎖にしばられ乍ら、これを断ち切つて立ち上つたナチスの精神の中によりみがへつたが、その指導者

ヒットラーは勢に乗じてまたしてもナポレオン一世の行つたモスクワ遠征を行つて大敗し、その雄図は瓦解し、覇道の末路をみるのである。こゝに改めて日本の建国とともに伝はる政治の理想たる、いつくしみあまねからしめ、虎のすむてふ野辺のはてまで正しき道をひらかなむと念じられる、歴代天皇のご精神を伝へられ、聖徳太子の外來文化摂取のご精神をつぶさに説かれた黒上正一郎先生のごことが強く憶ひおこされるのである。

次の連作和歌は黒上先生の著書『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の巻末に集録された先生の遺歌で、最初の五首のうちの四首である。

手紙のはしに（大正九年六月二十七日—二十一歳）

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつなかりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび

こののぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのこちちするかも

あゝ一信海われもつながらむと求むるこゝろそのこゝろにこそわれは生くるか

一信海われもつながらむと求むるこゝろ、二十一歳にして親鸞から聖徳太子へ讃仰の研究にすゝまれた先生の信と体験は並々ならぬ深いものであつた。私が教をうけたのは右の歌を作られてから十年後で、先生は三十歳であられた。そしてその翌年には亡くなられたのである。

先生が私達に話される言葉はおだやかなうちに厳然たる威嚴があつたのを覚えてゐる。例へばその頃流行した倉田百三氏の『出家とその弟子』について「倉田さんの出家とその弟子をよみましたか、親鸞はあんなセンチなものではありませんよ」と。その時の先生の澄んだ瞳と語調は今でも忘れられない。なる程いはれる通り親鸞の言葉は九十歳で世を去るまで、念仏一途の眞実の淨信に貫かれたもので、『出家とその弟子』の最後のところなどあんなものではないと強く批判してをられた。

親鸞文集から『浄土文類聚鈔』の一部を左に引用するが、親鸞の文章はこの様にごつごつとして全身全霊がそこにこめられてゐるのである。

いまねがはくは道俗等、大悲の願船には清淨の信心を順風とし、無明の闇夜には功德の宝珠を大炬とす。心くらくさととりすくなきものは、うやまひてこの道をつとめよ。悪おもくさはりおほきものは、ふかくこの信をあがめよ。噫、あゝ弘誓の強縁、多生にもまふあひがたく、眞実の淨信、億劫にもえがたし。たま／＼信心をえば、とほく宿縁をよろこべ。(親鸞浄土文類聚鈔)

右の文章の終りに「たま／＼信心をえば、とほく宿縁をよろこべ」といふ言葉に黒上先生のお心はつながつてゐた。そして先生は亡くなられるまで十年間一すちに貫かれたのである。

思へば先生の歌のなんと格調高きことよ。そして右の御遺著の言葉のしらべの高きことよ。

先生が亡くなられた直後の一高昭信会の合宿で、友の一人が先生のテキストを中心に研究発表をし、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の序説の書き出しの一行であるところの

「東洋文化の伝統及び理想を正しく現実 に 把持するものは我が日本である」

といふ一節について二時間余の大発表をしたことがあつた。発表が終つた途端に疲労のため彼は机に突伏し、きいてゐた田所先輩が大声で「ありがたう」と叫んだのを覚えてゐる。

今日戦後の民主政治の動向が変な方向に進み、国民的信念による結末はなくなり、国民的信頼関係、心の交流はうすく信なき生活、信なき政治は国民を無限の混迷に陥れつゝある。

聖徳太子憲法拾七条の

九、に曰く 信は是れ義の本なり。事毎に信有るべし。其れ善惡成敗かなら要す信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは、万事悉く敗る。

と示される信とは信順意志であり至心至誠心である。太子のこのお言葉は最近私の心に直接ひびいてくるのであつて、在俗の繁務を統一し浄化する示標と仰がれるお言葉である。信は相統することが大切であつて、一時の感激、情緒のみでは長養できないものであることは、先生や先輩方からも何遍か教へられた。この教はいますべて生き生きとよみがへつてきた。

天皇のみことのりや太子のお言葉はみな、私自身に直接教を示されたものとして仰ぐこと、そ

して夜となく昼となく「事毎に信あるべし」とくり返し念ずること、その他にゆくべき道はないと確信できる様になつた。

合宿詠草（九十九島巡り）

岩肌に松のみどりに深々と夕日しみ入る島美しき

ひたひたと浪うちわけてゆく船に集ふ友らもしばし声なし

大海につらなる入江色青くあまたの島のなつかしきかな

宿舎にて

みどりこき弓張岳のいただきにつどふ友らの力づよきかな

声高くはげまし合ひつきはめゆく言の葉のみちけはしかりけり

法師蟬しきなく夕べひたすらにうたよみをれば心しづけし

今宵はもみたま和めのみ祭りに心をこめてつとめまつらむ

和歌相互批評の折に

若き友らかたみにこころ通はせてうたのことばを正し合ふなり

しきしまのみちはしるけしはじめての作歌にこもるしらべをよめば

「合宿教室」感想文集
昭和五十一年十月刊

表現の苦を重ねつつみ友らはことばえらびてうたはむとする

具体性を失はぬ様よみ給へと語れどおのがことばは空し

我が力足らはぬことをつくづくとおもひ知りたるこの一ときよ

合宿終る

まなしたにひらくる海とやちまたをみつつぞ思ふみくにのさまを

にひぶみのあだしことばにおほはれてくにのまさみちわかずなりたり

心こめみくにのことを語り合ふつどひ尊しみだれゆく世に

ひもすがら心ゆるめずつとめきし合宿もいま終らむとする

山を下り世のいとなみにもどるとも大君仰ぐごころ忘れじ

慰霊祭献詠

大和ごころつらぬきとはせとくりかへし教へたまひし大み歌はも

みくに思ふ心ふりおこしますすらの道をすすまむ友らとともに

『国民同胞』
昭和五十一年十月号

信ずるといふこと

『日本への回帰』第十三集
昭和五十三年三月刊

——第二十二回「合宿教室」(昭和五十二年・雲仙)における講話——

私はただ今御紹介いただきましたやうに、学生時代に半年ほど、皆様が輪読してをられる『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の著者、黒上正一郎先生に直接教へをうけましたし、三井甲之先生のお話も聞きました。さういふわけで、昨年久しぶりにこの合宿に参加いたしました。が、私自身の「日本への回帰」が始まつたやうで、なにか運命的に皆さんとかうやつて一緒に研鑽を努める時代が来たやうに思はれ、非常に嬉しく思つてをります。

今日の午前中、夜久先生は「君が代」の話から始められましたが、これは現在非常に大切な問題なので、このことは合宿最初の講義で山田先生が話された「内なる国家」といふことと内面的に関連させながら、体験的に理解していただきたいと思ふのです。理解するといふより、信知する、素直な正しい姿において信じ、知るといふことが必要です。三井先生は「明治天皇御集」を拝誦することを宗教的儀礼と結びつけられて、それを当時第一高等学校に学んでゐる私どもに伝へられました。明治天皇がお亡くなりになつたあとと全国民は心の支へを失つて、暗黒の中に迷

つた。これから日本人は何を支柱にして生きて行つたらいいだらうかと模索してゐる時、「明治天皇御製集」が出版されて初めて十萬首に近い膨大な御製が残されてゐることを国民は知つたのです。三井先生はここで、日本国民として行くべき道、さらに世界の全人類に向つて、自信をもつて生きてゆく原理、それはここに示されてゐる、かう確信して、「明治天皇御集」の拜誦と研究を始められたのです。さらに黒上先生は、この三井先生がお書きになつた『明治天皇御集研究』の中に収められてゐる「研究方法論」を、甲府の三井先生のお宅に泊りこんで、幾日も幾日も学ばれた。その間黒上先生は殆んど寝られないので、三井先生が少し横になつたらと言はれても、机の上に寄りかかつたまま、夏だつたので蚊帳を頭からかぶつて二、三時間眠つたらまた勉強を始める、そのやうにして学ばれたさうです。さういふ意味で黒上先生の御本は三井先生の『明治天皇御集研究』のエッセンスを吸収した上で書かれたと言へますし、今後も特にこの二冊を中心にして勉強していただきたいと思ひます。

現在、日本には哲学がない、さらには宗教がないなどといふ非常に浅薄な意見が未だに思想界、教育界を支配してゐるやうです。そのために学校では、日本文化の正しい姿についても殆んど教へられることがないやうですが、このことは日本にとつて大変な損失だと思ふ。ところが逆に外国人は日本人のもつ底力に注目してゐます。すなはち日本は戦争には負けただけでも、その後猛

烈な勢ひで復興した、その原動力は何かといふことに全世界の人々が深い関心を寄せてゐるので
す。だが日本人は、殊にインテリと言はれてゐるやうな人々は日本を蔑みさげすみ、あるいは日本を否定
するやうな考へが風靡してゐますが、ではその風潮を打破する道、それは何か、私は、それは御
製に示されてゐる、まごころを貫く道、それを信ずる以外にはないと思ふ。それは決してむづか
しい、「白雲のよそに」求める道ではなく、本当に卑近な道なのです。その道を疑はずに踏み行
つていくほかはないといふことです。

結局は夜久先生も言はれましたが「信ずること」、それ以外にはない。三井先生も、黒上先生
も、親鸞上人の念仏の世界からはいつていかれたのですが、そのことは非常に大切なことだと思
ひます。

私が昭和十四、五年でしたか、甲府の三井先生のお宅を訪れたときに、田圃の中を歩きながら
先生は称名念仏といふことについて話されましたが、その時先生は自分はいまは、「天照大神」
と唱へることにしてゐると話され、その「大神」おほみかみといふところに非常に力を入られました。そ
のおことばは私の耳にいまだにありありと残つてゐます。それ以来私も「天照大神」と唱へます
が、しかし、それで迷はなくなるかといへばそれは嘘です。そのことは山鹿素行も言つてをりま
すが、「惑ひを去る」といふのは嘘なので、「惑はず」といふのが正しい人生態度なのです。惑は

ぬために絶えず信仰し念仏を唱へるのです。人間の心は常に散乱する、それを統一する、それが念仏です。この一心不乱になつて統一することによつて、木内先生も言はれたやうに直観力が現はれてくるのです。日本人が戦後めざましい発展をやりとげ、世界における技能競争においても、ゴールドメダリストが続々出てくるといふのも、日本人が無意識的にそのやうな統一力を保持してゐるからだと思ひます。すなはち、日本人の優秀さの基になるもの、それは一口でいへば「信」だと思ふ。「信する力」だと思ふのです。この合宿で練り鍛へるのも、この「信」に外ならない。合宿が終ると皆さんは一人一人に分れてゆかれる。その時には何も頼るものがない。さういふ時に三井先生が言はれた「天照大神」を唱へるといふこと、これが一人一人を支へてくれるのです。これは決して難しいことではない。親鸞は称名念仏を易行道と言ひましたが、その易行道によつて、その道の信仰を念々に伝へてゆくことが出来ます。キリストも巷において伝道し、そして又折を見ては広野に戻つてはげしい祈りをされた。祈つては又巷に出る、それを交代してゆく。私どももさういふ交代が必要だと思ひます。

○

吉田松陰先生が理想とされたところは「天朝の御学風」、朝廷には神代の時代から伝はつてゐる御学風がある。それをこの世にひろめていくこと、そのために有能な人材を集めて、都に大学

校をおこすことでした。その松陰先生の念願が期せずしてこのやうな形で、不十分ながらもこの合宿教室といふ姿で実現しつつあること、これは本当に不思議といふほかはないと思ひます。

先程も申しましたやうに、日本に哲学がないなどといふ全く出鱈目な議論を排除し、貴重な研究をここから進めてゆく、そして貴重な心の交流をまきひろげてゆく、その拠りどころとしてこの合宿教室を大切にしながら、確信をもつて進まなければいけない。私はさう考へてをります。

合宿詠草(一)

霧深き仁田峠はしづかにてバス降り立てば風の冷たき

横なぐりに霧の水滴吹きつくる見はらし台に友ら並み立つ

まなこしかと霧海にこらせど底知れぬましろき霧雲深さ知られず

みやまきりしま花咲く頃はいかばかり美はしからむこれの景色は

バスに乗り見張らし台をさかりゆく心重たく友ら言無し

「合宿教室」感想文集
昭和五十二年十月刊

合宿詠草(二)

ひらけゆく心のまゝにさはやかに感想述ぶる友らたのもし

「合宿教室」走り書き感想文並
びに和歌、昭和五十二年九月刊

雲仙のみ岳山なみ青々と秋のけはひの日毎しるけし

栗の実のやゝに黄ばみて朝風にゆるゝ台地に蜻蛉とんぼとびかふ

決定けつじようの心を得しか壇上にますぐに立てる友らたのもし

まごころをこめてかたみに語り来しおもひ一すぢ貫きゆかむ

九州の山河さんがうるはしきしまのみくにはじめの神話とともに

みくに生みの神話さながらわきおこる友らのいはかり知られず

いにしへゆつみかさね来ししきしまの道の伝承うつゝにぞみる

天地の神に祈りてこの道を歩みゆかむと心に誓ふ

慰霊祭献詠

嵐去り深まる秋の空青く師友のみたま仰ぐこちす

みくにまもり道をまもりてひたすらにたたかひたふれしみたままつらむ

かたしとてたゆむなかれと大君のみちびきたまふしきしまのみち

大君のしらすみくにの底知れぬいのちを信じ世にたたかむ

『国民同胞』
昭和五十二年十月号

日米關係に思ふ——国家目的宣揚の時——

『国民同胞』
昭和五十三年一月号

万延元年（一八六〇）遣米使節新見正興、村垣淡路守出發。日米通商条約を結ぶ使節としてアメリカ・ワシントンでの使命を果し同年十月日本に帰国したが、その折、新見、村垣らの一行がニューヨーク・マンハッタンの通りを馬車で進行してゆく様を、詩人ウォルト・ホイットマンが、詩集『草の葉』の中で次の様に歌つてゐる。（訳は木口公十氏）

プロオドウエイ ペイジエント

西の海越えて、こゝに日本ワシントンより、

礼義正しく、両刀たばさむ色浅黒き使節たち、無蓋馬車に悠々と、無帽のまま、
怯まず臆せず、けふ、マンハッタンを乗り打つて行く。

自由の子らよ、我が見るものを人も見るや、我は知らず、

日本の地位高き使節達の行列につらなつて、後を固め、上に翔り、めぐりを囲みまた列伍に加はつて進み行くもの、

我が見るものを、自由の子らよ 君らに歌つて聞かせよう。

……(中略)……

うつくしきかな、マンハッタン!

アメリカのはらからよ、我らのもとに、

さらば遂に「東洋」が来たのだ。

我らのもとに、我がまちに、

石と鉄との壮麗の大建築の向き合つて並び立つ、その中を歩むべく、

けふぞ我が地球裏面の人々が来たのだ。

一切の文化の母、

諸々の言葉の水原ミナモト、詩歌の祖先、太古の民ら、血汐たぎり、思深く、瞑想に沈み、激情に湧き、香料の香にむせて、ゆるやかな衣キヌつけて、日に焼けし面オモテもて、烈しきこゝろ輝く目もて、ブラ
アマの民が来たのだ。

ホイットマンは淡路守一行を決して軽侮せず、その異様な服装についても「礼義正しく 両刀
たばさむ 色浅黒き使節たち」といひ、悠々と、怯まず臆せず馬車に乗つてゆくといひ、「東洋」
がつひに来たといつてゐる。

そしてその自信にみちた使節の顔に表現される日本文化の内容を直観的に、一切の文化の母、諸々の言葉の水原ミナト、詩歌の祖先、……とよみ、日に焼けし面もて烈しきこゝろ輝く目もて、ブラアマの民が来たのだ、と歌つてゐる。しかもこれは決して、架空な想像ではなく、村垣淡路守がその旅行の記録を書いた遣米日記には、当時のアメリカの文化について鋭い批判を示してゐるのをもみても、ホイットマンの直観は正しかつたと考へざるを得ない。

遣米日記は満洲事変の前年、故河村幹雄博士が『日米不戦論』の中に引用されてゐる如く、大統領選挙のことを入札で定めるとか、外国人夫人の礼装も両肩を露はに出してゐることを無礼としつゝも、これが賓客をもてなす最高の礼装だと考へ直したり、永年の武士的教養を以ていさゝかも気を銜ふことなく極めて自然な感想と批評を述べてゐるのをもみても、こゝに大詩人ホイットマンの心に最初にやきついた日本人の使節の印象は、日本文化交流の発端ともみるべき、価値の高い詩といへよう。

今日日米の關係が經濟問題にのみ終始して日本の黒字べらし、アメリカの貿易収支赤字の事ばかり論じられてゐる。当面は勿論これは重要な問題で政治的經濟的解決は急がなければならぬが、こゝで兩國共その国家目的と国家精神を明確に闡明する必要がある。

今日一〇億パーレル程度を目標とするアメリカの石油備蓄は、膨大な量の石油輸入を継続し、

そのためのアメリカの貿易収支赤字は数百億ドルに及び、その赤字は来年もまた更に増大するであらうと推定される。しかも中東戦乱に備へるアメリカの国策戦略は、広大な石油の地下資源を有する上に更に広大な岩塩層をタンク代りにして、輸入した原油を蓄へるそのために赤字をもものともせず強行してゐる。日本ではやつと九十日分の備蓄法が昨年通り、大変な予算をかけて備蓄タンクを建造せねばならない事から、石油エネルギーでは勝負にならないと見なければならぬ。

大東亜戦争でアメリカに敗れた日本は今更の様にアメリカの実力を認識させられた。

昭和二十年に、敗戦のどん底から立ち上つた日本の経済復興は目覚しく、造船はこゝ十数年間世界一のシェアを誇り鉄鋼生産ソ米に次いで第三位、石油精製能力米ソに次いで世界第三位、ラデオ、カセット、カラーテレビ等家電製品は世界に輸出されてその性能を誇り、自動車もまた生産台数に於いてアメリカに次ぐ第二位を確保し、トヨタ、日産はアメリカ最大のメーカーGMに次いで世界第二位第三位を占めてしまつた。特にトヨタは自己資本率に於てGMとほぼ同格、従業員数、生産台数では彼が勝るが、従業員一人当り生産性は金額でGMの三倍を挙げてゐる。これは日本人自身も大学などでも余り教へられないであらうが、日本のマスコミでは禁句みたいになつてゐる「国威の発揚」ともいへよう。しかもこれら日本各社の当事者は決して驕ることな

く、アメリカが小型車製造に本腰を入れ出したら、かうはいかないといつてゐる。考へてみれば日本は資源乏しく何かを加工して輸出する以外に途はなく昭和四十年代後半から国際収支の黒字化による国際的信用を基調として、金融機関も海外支店を置き、合弁法人を置き、海外駐在員事務所を設置してきた。日本のより処はこの信用以外にない。みなが一生涯懸命に働き、信用に基づく黒字は日本の海外経済信用の基礎をなしてきた。たゞこの黒字がひたすら日本のエゴイズムとのみみられる所が今日深刻に反省させられる点である。

日本の建国以来の国家目的は改めていふまでもなく、よきをとりあしきを捨て、東西文化の融合をはかりつゝ人の世の正しき道をきりひろく事であり、皇室に伝はる統治のご精神も、日本教の根本精神も、これに統べられるものである。色々なはからひをすて、日本古来の精神に立ちかへる時この現在のゆきづまりから脱出できると確信するが、永年にわたつてかき乱されて来た思想的混沌を決して看過する事なく、あくまでも辛抱づよく教育改革に専念せねばならない。今日英国が掘り当てた北海油田は英国経済を救ふものであると共に、安易にその利益に依存すれば遂に英国を滅すかも知れぬといふ意見がある。通貨の変動、貿易の不均衡、経済不況等の底に胎動する求道の精神、死をもおそれぬ摂受正法の精神の発揚の時期の到来を信知するのである。

黒上正一郎先生を偲ぶ(一)

『国民同胞』
昭和五十三年四月号

黒上正一郎先生(正一郎の正は楠正成マキマシナリより取られたもの)は明治三十三年徳島市の素封家の嫡男に生れ、大正八年徳島県立商業学校を卒業、阿波商業銀行に勤務されたが大正十三年退職、悲痛なる宗教的体験と一筋の求道心により、親鸞、最澄、空海より聖徳太子の信仰思想と日本文化史の研究に没頭され、昭和四年に東京高等師範学校に信和会を、第一高等学校に昭信会を創立されて学生の指導に献身され、昭和五年病の為郷里徳島に於いて三十一歳で亡くなられた。

昭和四十五年十二月に国民文化研究会から発行された故桑原暁一氏著『続日本精神史鈔』の巻末に、副島羊吉郎氏(当時佐賀大学教授)の「黒上正一郎先生の思い出」が「わが生涯のともしび」と題して載せられてゐる。

副島氏は、黒上正一郎先生が指導された東京高等師範学校信和会の創立者であり、桑原氏は、同じく黒上先生が半年ばかり指導された一高昭信会の会員で、個人的にも非常に親しく協力されて来られた。桑原氏が特に右の著書に副島氏の寄稿を求められた動機は、今になつてひしひしと私の胸に迫るものがある。桑原氏は生涯をかけてこられた聖徳太子、楠氏、親鸞、実朝につながる

る日本民族の生命をまもる捨身の求道生活の中に、黒上正一郎先生のご精神を仰がれたのである。桑原氏は昭和五年に旧制一高に入学されて一高昭信会に入会されたが、その時は既に黒上先生は病気の為郷里徳島に帰られて療養されてをり、九月廿一日亡くなられるまで再び東京には帰られなかつた。桑原氏も黒上先生を慕ひつゝお会ひしたことがないので、副島さんに思ひ出の執筆を頼まれたのである。

黒上先生が一高昭信会の例会で講義されたレジメの刷り物をみて、桑原氏は、このレジメをみるだけで心がひらける思ひがすると慕つてをられた。私は昭和四年に一高に入り、五月頃から昭信会員となり、黒上先生に直接教へをうけた者であるが、短い期間ではあつたが出来るだけ詳細に、当時の事を思ひ出し乍ら、黒上先生の教へを書き誌さうと思ひ立つた次第である。

前記副島羊吉郎氏の黒上先生との出会ひは昭和三年三月、高師二年の春休を利用した四国八十八ヶ所順礼の途中、菅笠に金剛杖、白の手甲、脚絆といふ巡礼姿で、徳島の黒上家を訪れたと書かれてある。

私の入会は田所広泰先輩に勧誘されたもので、午後七時頃から一高内で行なはれた黒上先生の聖徳太子に関するご講義に出席したのが最初であつたと思ふ。軍人の家庭に生れ、小学校中学校と進む中にも漠然と日本人として忠孝の道をつくすのは当り前位に思つてゐたのが、一高に入つ

てみて当時の思想的動揺の中にこの根本観念が根底から大きくゆり覆されさうになつてゐる状態を知らされ、世の中の現実に驚愕したのである。当時の思想的背景については後篇に誌すことにし今回は一高昭信会の生活体験をもとに黒上先生について誌さうと思ふのである。

いま手もとにある資料は前記『続日本精神史鈔』と、小田村寅二郎氏から送られた、昭和十年一高昭信会発行『伊都の男建』——『黒上正一郎先生遺著』聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』発行記念号』——である。この雑誌には、三井甲之、蓑田胸喜、松田福松、田代二見、井上右近、入沢宗寿、田中寛一等の諸先生や諸先輩はじめ学生多数の追悼の言葉が載つてゐる。

先生に直接接した約半年間は、例会から下宿へ、また慰霊祭、御製拝誦、三井甲之先生を黒上先生が招かれた講演会、明治神宮参拝等息つく間もない位充実したものであつた。

例会が午後九時頃終り、本郷の一高の門前近くの先生の下宿に集つて、山の様に出されるお菓子等をいたゞき乍ら口々に質問し、先生は懇切に答へられ教へられた。

人生の帰趨する道、仏法僧の内容、明治天皇、聖徳太子の教を説き乍ら、

「よい本を何遍もくり返しおよみなさい」

とくり返しはれた。これは明治天皇御製にも示される様に、よむふみの心を得るといふことであつて、先生が信仰上の師と仰がれた近角常観師のかゝれたものを五十回もよまれたといふ。

(近角常観師は当時宗教界の重鎮として本郷の求道会館に於いて親鸞聖人の教を主として説かれてゐて、四国から上京された黒上先生が、近角師から親鸞の教を教へられ、聖徳太子の「世間虚仮唯仏是真」の教を説かれ、爾来深く近角師を尊敬し、下宿も求道会館に定めて研究にいそしまれた。)

先生の声は、副島さんはいはれる様にオクターブの高いよく透るしらべをもつてゐた。特に和歌をよまれる時は、きいてゐる者の心にしみ透る調べをもつてゐた。

源実朝の歌で(金槐和歌集にある)

あら磯に浪よするを見てよめる

大海の磯もとゞろによする波われてくだけてさけて散るかも

といふ歌もはじめて下宿に伺つた時先生が高らかに朗詠されて、そのしらべは胸にしみ込んで忘れられなかつた。

明治神宮参拝その他先生に連れられて昭信会員が校外で行動した時の印象では、黒上先生は和服に袴をつけられ実にテキパキと引率された。三井先生を一高の例会に講師として招かれた時も、実に礼儀正しく世俗的な折目はこの上なく正しかつた。

わづか二十七、八歳で、当時一流の教育学者であつた入沢宗寿、田中寛一の諸博士とも堂々と交際され、論文は東京帝国大学の国文学界の機関雑誌『国語と国文学』に載る程評価の高かつた

黒上先生であつたが、師や先輩に対する礼儀の正しさを目の当り見て心を打たれた。

三井先生の黒上先生追悼の長詩の中でも、かうした世俗のことをおろそかにされない事が健康にもひびいたであらうといはれてゐる。

私の知る限り先生はいつも和服で、下宿では袴はとつてをられたが、つねに端坐しあぐらをかゝれるのを見た事はない。

話し方はやはらかでなだらかに次第に信の核心に話をすゝめられるのが常であつた。

菅原道真の歌と伝へられる（大鏡の中にはないが謡曲本の中にある。道真の歌ではないのでは
ないか？夜久正雄氏の説）

心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神やまもらむ

といふ歌に対して「心だに誠の道にかなひなば」といふのが思ひ上りであり、祈らずともといふのは横着で不遜であるとはげしく批判された。

ゆきづまると、聖徳太子の尊像の前にひれふして祈り乍ら太子の信仰思想についての研究を執筆された真剣な先生は、右の様な歌については耐へ難いものがあつたのであらう。

タナスエノミチ、オシモノノミチについては三井甲之先生、松田福松先生が著書で説かれ實際にも指導されたが、黒上先生もこれを実修されてゐた。

先生と共に一高昭信会をひらかれた新井兼吉先輩は、特に影の形に添ふ様に黒上先生に付き添はれ、原稿の整理をし乍ら先生が疲労されると後にまはり、背中に手を当てゝ触手療法をされてゐた。

親友の梅木紹男先輩が昭和四年に結核で亡くなられた後、黒上先生の結核もかなり進んでゐたらしく、我々に話をし乍らも時々首をぐるぐるとまはして肩の凝りをほごす様な素振りをされた。不断の執筆活動の中に、新井先輩の触手はどんなにか先生の力の源泉であつたであらう。

松田福松先生が黒上先生を訪問された記事の中に、黒上先生が玄米飯にごま塩、大根おろしといつた簡素な食事をしてをられた事が誌されてゐるが、旺盛な精神活動と簡素な食事との関係については近代科学によつても充分解明出来ると思ふがこゝには触れない。

内心の信の問題については非常に蔽密であつた。夏の最中であつたか、私に親鸞の顕浄土真実信文類より左の一文を示された。

光明師ののたまはく 九十五種みな世をけがす たゞ仏の一道のみひとり清閑なり、と。まことにしんぬ。かなしきかな愚禿鸞愛欲の広海に沈没し 名利の大山に迷惑して定聚のかずになることをよろこばず 真証の証にちかづくことをたのします はづべし いたむべし

そして「親鸞はこゝまで突込んで考へてゐる、こゝにはじめて無擬の一道としての念仏の道が

ひらけること」を説かれ、ふらふらしてゐる私の心を洞察されるかの如く教へられた。

大正時代から当時にかけて流行してよまれてゐた倉田百三氏の『出家とその弟子』についても先生はあのドラマの最後のところ、親鸞が息子に対して「うそでもよい信ずるといつてくれ」といふあたりを強く批判されて、「親鸞はあんなセンチメンタルなものではありませんよ」とくり返し云はれてゐた。

先生のよまれた数々の和歌には悲痛なまごころがこもつてゐたが、信に支へられたしらべにはセンチメンタリズムは感じられない。辛いとか苦しいとかいふ言葉を決して口にされなかつたと、そのご生活は善導和尚の言葉（親鸞文集の中）にある通り

仏にしたがひて逍遙して自然に帰す 自然はすなはちこれ弥陀国なり 無漏無生かへりてすなはち真なり

と表現される如きものであつた。

聖徳太子の三経義疏については当時『世界聖典全集』をテキストにしてゐたが、先生は「三経義疏の要点は私がいま書きつつある論文に全部出て来ますからそれを読んで下さい」といつてをられた。これは先生の没年である昭和五年五月にテキスト用として謄写本で出来上つた『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』である。病中の先生はこれを見られて非常に喜ばれたといふ。

昭信会では大津康氏の訳されたフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』も読まされたが、ナポレオン軍の占領下のベルリンでフィヒテが行なつた愛国の講演をくり返しよむと、先生は当時既に十数年後の日本の敗戦をかすかに予感されてゐたのかも知れなかつた。

何かの話の末に先生はしつかりした語調で左の如くいはれた。

「いづれにしても最後には政治に進出せねばならないでせう」と。

聖徳太子の教へからも真俗相依、正しき信仰思想による教育と政治との相即は当然の目標であるのであるが、この時の先生のお言葉は今でも耳に残つてゐる。

昭和四年十二月七日、一高の教室に於いて梅木紹男先輩の追悼会が行はれた。(黒上先生と梅木さんは同郷の親友であり、一高生であつた梅木さんは病中に一高昭信会創立について黒上先生と綿密な打合せをされたといふ。)三井甲之先生が招魂の長詩を朗読され、梅木先輩の臨終に立会はれた副島氏も信和会を代表して追悼の辞を述べられた。式一切を主宰された黒上先生は下宿に我らと共に帰られ、羽織袴の姿のまま部屋の中に坐られ、式に使用した大型の梅木さんの遺影を膝の上に抱きかゝへる様にして、時の経つのも忘れた様に追憶談をなさつた。

その時先生が朗誦されたのが次に掲げる梅木さんの和歌であつた。

時雨日の夕暮近く渭の山の上高く鳶は輪を多かく

しづしづと羽ひろげつゝ鳶一羽時雨の雲のをぐらきに飛ぶ

悠々と迫らぬ舞よ鳶の舞よ雲の去来のその中の舞よ

時雨日の雲の動きは悠々とひたすらみつむる心に迫る

殊に第三首目の歌は何度も何度もくり返し、

悠々と迫らぬ舞よ

鳶の舞よ

雲の去来の

その中の舞よ

と大きく区切つてよまれた。あたかも梅木さんの魂魄が鳶となつて雲の中を飛ぶのを眼で追ふ様にされ乍ら朗詠された。

そしてその晩から感冒で床に就かれ、しばらく我々が交代で泊り込んでお世話したが年末に寝台車に横になられたまま徳島に帰られ、つひに再起されなかつた。

昭和五年の春から夏、秋にかけて例会や合宿をつゞけ乍ら、二度ばかり幡ヶ谷にあつた私の自宅に新井、河野、田所の諸先輩が集られ、夜電灯を消して、徳島の方向に向つて手をかざし、黒上先生にも合掌していたゞいて、遠隔治療といふことを行つた。周囲の者は不思議さうにみてゐ

だが、三井先生の説かれるタナスエノミチをかうした形で実修することに私達は疑念をもたなかつた。

三井甲之先生から直接伝へていた手のひらのひどきは年を経るまゝに衰へることなく発してゐる。神に祈るときには、益々それが実感される。

こゝで最初に掲げた故桑原暁一氏の『続日本精神史鈔』にもどり、その終りの方にある附編二「回帰と前進と」からその生命にあふれる言葉を引用しよう。

すべてわかたれてあるもの、それをいま、一つにせねばならない。歴史と現実と、神話と科学と、個人と国家と、民族と世界と、物質と精神と、戦争と平和と、それはすべて根元において一つとならねばならない。表面の概念の差別に執して真実の生を忘却してはならない。わかたれてあるもの一つをひろつて生を局分し、自己の安心をそこに託するとき安易をすてよ。わかたれてあるものすべてを言向け和し、一つならしむる悲痛に生きねばならない。(二七二頁) 右のコトバに心を刺戟されつゝ黒上先生の事を思ふ時、ともすればひるまんとする心を鞭うたれるのである。

黒上正一郎先生を偲ぶ(二)

『国民』同「胞」
昭和五十三年六月号

——時代の思想的背景など——

前編に引用した『伊都之男建』（黒上正一郎先生遺著発行記念号）に書かれてゐる生前の恩師知友の追悼文を総合すると、黒上先生が、聖徳太子の研究に入られたのは、十八歳位の時であつたらしい。そして爾来十年間位であの生命にあふれた研究を世に発表されたのである。

時は正に大正時代で、私も小学生であつたので、当時の時代的背景はまざまざと覚えてゐる。

黒上先生の求道のまごころは慈母観音の様な母堂、黒上住恵殿の献身的御努力に支へられた。制度政策の一切は之を統御する人に帰着する。其の人に在りとは人間内信の問題に存するといはれる聖徳太子の教を説かれ、承諾必謹の道を宣説されたのである。この点がいかに重要な問題であつたかは、以下に順を追つて述べることにする。

大正時代は何となく明治時代の緊張がゆるみ、軍人であつた私の父のところにも退役軍人などが集つてきては、「乃木さんはよい時に死なれた。今生きて居られたらあの乃木式をくつさねばならないだらう」などと話してゐた。軍縮の政策が打ち出され、大正十二年関東大震災は東京を

中心とする関東一円を破壊し、同時に明治末期より知識階級をとらへた社会主義共産主義運動も猛烈をきはめ、同年に「国民精神作興に関する詔書」が公布された直後、同年十二月暮に起つた虎ノ門事件は、共産主義革命を意図した青年難波大助が、当時摂政宮であられた今上天皇を直接銃撃するといふ大不祥事で、時の山本権兵衛内閣は総辞職し、大正十四年には治安維持法が制定せられた。ところがこの法律の運営に当り、司法警察当局に対する学校教育関係者の十分な協力が得られず、思想の混乱はコミンテルンの対日思想攻勢と相俟つて益々はげしくなつた。

黒上先生が、一高に昭信会を、東京高師に信和会をひらかれた昭和四年は、その前年治安維持法による共産主義者の大検挙（三・一五事件）の直後で、学内外の共産主義運動は熾烈をきはめてゐた。一高等で黒上先生の教を乞うた学生に対し先生は夜を徹して話されたが、その中何人が左翼運動の方に走つた。

かゝる状態の中で先生は全身全霊を傾けて人生の帰趨する道を説かれ、「キスウ」といふ独特の発音が今でも耳に残つてゐる。

昭和五年に黒上先生が亡くなられ、翌六年に満州事変勃発、ところがその年の三月に陸軍のクイデター計画（三月事件）が発覚する。

その時の計画案なるものは、竹山道雄氏の著書『昭和の精神史』に引用してあるが、当時の軍

務局長小磯国昭氏の命により永田鉄山軍事課長(後に軍務局長となり昭和十年相沢三郎中佐に刺殺される)が書いたものといはれる(本人も承認)。これは当時の青年将校の時局研究会の討議を重ねた趣旨を要約したものと云ふから益々恐るべきものである。

その計画案、皇政維新法案大綱とは、その一部を引用すると左の通りである。

天皇大権ノ発動ニ依リ一切ノ政党ヲ禁止ス

天皇大権ノ発動ニ依リ既成言論機関ヲ閉止ス

天皇大権ノ発動ニ依リ全国ニ戒嚴令ヲ布ク

天皇大権ノ発動ニ依リ憲法ヲ停止ス

天皇大権ノ発動ニ依リ兩院ヲ解散ス

天皇ハ資本ノ私有ヲ禁止ス

私有資本ハ凡テ無償ヲ以テ上納セシム

これが発覚して、大将の集りである軍事参議官会議で問題になつた時も、その思想的根拠については何ら討議がなされず誰が書いたか、私文書か公文書かといった手つゞき問題ばかり討議されて結局闇に葬られてしまつた。

その翌七年五・一五事件、昭和十一年二・二六事件が起り、故田所広泰氏が口ぐせの様につ

てをられた、終戦にかけての思想的カタストローフの時代がはじまるのである。

竹山道雄氏は前記、『昭和の精神史』八十一頁に次の如くいはれてゐる。

「こゝには軍の団体精神とインテリとの握手がある。前者は国内体制の変革を求め、また「アジアの解放」を唱へてはてしのない戦争をはじめた。後者はやはり国内体制の変革を求め、アジアの解放をねがつて戦争の長期化を欲した。大正末昭和はじめに世を風靡した新思想は、社会を深刻にゆさぶり、その屋台骨をうごかしてつひに旧日本の命取りとなつたが、そのもつとも大きな結果はこれだつた。」

そして天皇絶対を唱へる陸軍が現実的具体的には天皇の御意志を悉く無視したといはれてゐる。こゝで当時の憲兵下士官などが口ぐせの様にいつてゐた、「あなた方は天皇に忠誠を尽くすならば、天皇即軍だから軍に忠誠をつくしなさい」といふ言葉を思ひ出す。かうした軍部の思想傾向は痛嘆のきはみであつて、それとの戦ひに、田所広泰先輩はじめ多くの同志が命を捧げたのである。全く支那事変から大東亜戦争にかけては暗たんたる思ひの連続であつた。

やがて昭和二十年八月の天皇のご聖断によつて終戦となり、軍も解体し治安維持法もなくなつたが、黒上先生のテキストは、小田村寅二郎氏を理事長とする国民文化研究会の協力により復刊再版を重ね、多くの若い学生により読み合はせされてゐる。

黒上先生のかゝれた本は終始生命にあふれてゐて、例へば論語の「和」が何かしら礼を実現するための方便視してゐる如き表現があるのに対し、太子の説かれる「和」は真に自我を全体のために捧げる内的希求の相統であつて、「和を以て貴しとなす」といふ表現には方便の影もみられないといふ点、また同じ大乘仏教教典に対する大陸諸師の解釈と太子の御釈との微妙な差に言及し、形式の固定化し概念化した前者に対し、太子の御釈の表現にこめられた切々たる国家統治のご体験のあとを仰がれてゐる点などに、先生の研究に躍動する生命を感じるのである。大陸諸師の解釈の原典について三井甲之先生の質問に答へて、先生が実にすらすらと難解な漢文の原典をよまれてゐるのをきいてゐても、その研究が並々ならぬものを感じた。三井先生の追悼の長詩の中に、黒上先生が三井先生のお宅にゆき、三井先生著の『明治天皇御集研究』の巻末にある研究方法論につき、微に入り細に入り質問され、夜中に蚊帳をかぶつたまゝ机に伏して仮眠をとられた。その求道心のはげしさをうたつてをられるが、先生は短い一生を正にかうした求道心で燃焼しつくされたのであつた。

故桑原暁一氏が黒上先生の昭信会での講義のレジメの中にあつた「グンドルフのゲーテ論」といふ項をみて思はず感嘆のうなり声をあげてゐたのを覚えてゐるが、最近になつてグンドルフのものをさがしても出版界には見当らない。

有名なゲーテ研究家高橋健二氏にうかがつてグンドルフの『ゲーテ論研究』（全三冊）、「第一部 若きゲーテ」第二部古典期のゲーテ」「第三部晩年のゲーテ」が小口優氏の翻訳により一九五八年 未来社から出版されてゐるのを知つた。フリードリッヒ・グンドルフ（一八八〇～一九三一）については黒上先生の追悼号に原理日本社の水野龍介氏が引用してをられるが、その中にグンドルフはゲーテを論じて

「精神的な創造的な偉大な人間にあつては、生活と芸術とは同一の実質、精神的肉体的統一の異なる属性にすぎないのであつて、生活と芸術とは二つの全く独立した存在ではない。芸術とは生活に従ふ或物ではなくして生活の内在り、生活と共に在るもの、生活と同一のものなのである」といふ箇所を引用されてゐる。

グンドルフの言葉を更に引用すれば、

「ゲーテの概念や教義は、どんな直観のなかにもどんな像のなかにも空間創造的なものとして含まれてゐる、否その力によつて初めて感覺的印象から直観や像が発生するあの精神的活動や行為の独立化がある」（晩年のゲーテ）

グンドルフのゲーテ論は躍動するゲーテの生命が端的に把握されてゐる大作といへよう。しかしこゝにもまた現代世界にはびこる唯物弁証法論者が、ゲーテを史的弁証法の偉大な人物にまつ

り上げようとして、グンドルフの価値を抹殺しようとしてゐる。即ち青木文庫の中のルカーチの『ゲーテ研究』（菊盛英夫訳）序文には

「ニーチェからグンドルフをへて、シュペングラーやクラークス、チェンバレーンやローゼンベルグにいたるまで、そろひもそろつてゲーテをして、発展を敵視し進歩を敵視し非合理主義をふりかざした、当時の支配的な世界観の創始者に祭りあげた。」（二一頁～二二頁）

といつてゐる。弁証法論者の進歩とか発展とかは何を指すのか。しかし乍ら知人から知人にあつてたづねてみると、グンドルフのゲーテ論は意外に根強く当時の有識者の心に残つてゐるのを改めて知つた。そしてあわたゞしくうつり変わる出版界にあつて表面には現れないが不滅の価値を持つ書物は必ず再びその生命を復活する事を信ずると共に、例会の講読にグンドルフを引用された黒上先生の文化的感応力摂取力に驚嘆するのである。私達は昭信会でエッカーマンの『ゲーテとの対話抄』（岩波文庫）をよまされ、くり返しよみ耽つた。そしてその中でゲーテがヘーゲルと弁証法について対話し、

「弁証法は偽を真とし真を偽とするために濫用されなければいゝが」といふゲーテに対し「さういふことは精神の病的な人々がやるだけです」と答へるヘーゲルに対し、ゲーテが「では私は自然を研究したため、さういふ病気がおこらなくて幸福だ」といつてゐる。この会話は非常に重

要でルカーチなども熟読すべきであるが、別の人の訳でエッカーマンの『ゲテとの対話抄』からこの部分を訳してない本にぶつかつて、どうも意図的に削つた感じがして思想戦は不断につゞけねばならぬことを痛感した。

現代日本は諸外国の重囲の中にある点では戦時中と大差はない。国民としてのまごころを通ひ合せ一緒に国をまもるまごころに生き抜く信を貫くこと、詔を承りては必ず謹しめと教へられた聖徳太子の遺教を、黒上先生の御著書に仰いでゆかねばならぬことを痛感するのである。

短歌創作のために

『日本への回帰』第十四集
昭和五十四年三月刊

——第二十三回「合宿教室」(昭和五十三年・阿蘇)における講義——

△はじめに▽

合宿の日程を見ますと、本日の午後は、レクリエーションといふことになつてをりますが、同時にこの時間は短歌創作の時間にもなつてをります。そこで皆さんは、何かズッシリと重いものを背負つてゐるやうな感じを抱かれてゐることでせう。これから皆様がつくられる短歌は、五七七と形が決つた定型詩です。その決つた形の中に自己の思ひを込めて発表しなければならぬ

い。それは、もちろん自分自身の創作でなければならぬし、自分自身の気持を率直に表はすものでなければならぬ。自分の思ひを率直に言葉にするといふだけでも難しいのに、それを定型の中に、五七五七七と指折り数へて詠み込まなければならぬ。気が重くなるのは、当然と言へませう。ところが、考へてみますと、この合宿の最初から今まで随分短歌が出て来ました。今日の朝の集ひでは、次の二首の短歌が詠みあげられました。これは、いづれも明治天皇の御製で、日露戦争の最中にお詠みになつた御歌です。

かざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のところは(明治三十七年)

おのづから仇のこころも靡くまで誠の道をふめや国民(明治三十八年)

日露戦争の時代にお創りになつた御製は、かなり多いのですが、その中でも心に関する御製が非常に多いといふことは、着目すべき点です。己れの心を尽くして、「まことの道」を開いていかうといふ御考へが、戦時に於ても中心的な御意志となつてゐたことが偲ばれますが、この事實は私共が、永久に語り伝へるべきことだと思ひます。このことは、日本の皇室の中に連綿として継承されてきた根本精神であり、先の大東亜戦争中にもそれが現はれたのでした。たとへば、ナチスドイツと軍事同盟を結んでゐながら、ユダヤ人排撃は、日本の国是に沿はないものであるとして同調しなかつた。これは皇室のご精神でもあるといふことを思ひます時に、日本人が古来短

歌を『人生の修業の一つの手だて』として、創作し続けてきたといふ事実が重要な意味を持つてゐるといふことがわかつてくる訳です。従つて、われわれが、これから短歌を創るといふことも、実は極めて重要な意味を持つてゐるといふことになるのです。

△短歌の創り方▽

それでは、これから特に、生れて初めて短歌を創られる方の為に少しお話をしてみたいと思ひます。皆様もおもちであらうと思ひますが、国民文化研究会から夜久正雄先生、山田輝彦先生が書かれた『短歌のすすめ』といふ、本当に良く出来た短歌の入門書が出版されてをりますので、これに則つてお話を進めてみたいと思ひます。

この合宿教室では、短歌を創作するだけではなく、そのあとで相互批評といふことを行ひます。これは、批評者が心を込めて一つ一つの短歌について懇切丁寧に批評しあふと同時に、もう一つお互の心が不思議にも通ひ合ひ、広やかな共感の世界を体験することができるといふ意味を持つてゐるのです。ですから、これから行はれる短歌の創作はそのあとの鑑賞、相互批評と、互ひに大切なつながりを持つてゐるのだといふことを考へながら、短歌を創つて戴きたいと思ひます。

それでは、まづ『短歌のすすめ』の一〇六頁を開いて下さい。そこに載つてゐる歌をよんでみませう。第一首目の歌ですが、これは今から十二年前に皆さんの先輩の一人が創つた歌です。

山の中ゆひとすじの煙ほのぼのと青空のもとのぼりゆくなり

「ひとすじ」の「じ」は間違ひで「ぢ」が正しいかなづかひです。この歌に詠まれた情景は、朝起きてみると、山の谷間のやうなところから、朝餉イフの仕度をする煙が一筋立ち上つてゐるといつたところでせう。対象のつかみ方としては良いし、歌としても一応まとまつてゐる。ただ、この書物の中で著者が注意してゐるのは、三句目の「ほのぼのと」といふ言葉です。「ほのぼの」といふ言葉は、ほのかにかとか、かすかにといふ形容に使ふ。ですからほのぼのと霞む春霞といふやうには使ふが、はつきりと見える一筋の煙には、「ほのぼの」とは言はない。ここは、「真直ぐに」と素直に詠めば良いと著者は言つてをられます。「真直ぐに」といふことで、気持も真直ぐになるし、煙も鮮明に見える。そこで、次のやうに直されてゐます。

山の中ゆひとすぢの煙真直ぐに青空をさしてのぼりゆくなり

強ひて朝といふ時間を表はさうとすれば、

山の中ゆひとすぢの煙真直ぐに立ちのぼりゆく朝あしたの空に

と直せば良いと思ひます。さらに、作者の立つてゐる位置や季節、その時の心境を歌にしたいとなれば、連作にしていくことになります。短歌は、一つの対象をつかまへて、それを一首に詠みこむのが原則です。これを一首一文と言ひます。俳句のやうに、上の句と下の句と、全く違ふ対

象を詠んで、それを対比させるといふやうなことはありません。御歌会始めの詠進歌の中に、人の創つた歌を上下うまく組み合わせせて出したものがあつて、それがたまたま入選してしまつたといふ事例があるさうですが、さういふことをしても決して名譽なことではありません。短歌は、あくまで自分自身の体験を「真直ぐに」つまり率直に詠むことが基本なのです。皆さんも、詠まうといふ情景をつかんだら、实景に即して、率直に克明に表現してみるといふことを心がけて下さい。朝餉の仕度をしてゐるだらうかとか、山の中に住んでゐる人があるんだとか、情景を見つつ、さらに沸き上つてくる思ひがあれば、二首三首と具体的に詠みこんで連作にしていけば良いのです。

明治天皇の御製に、

ともしびのたかき処にみゆるかなかの山辺にも人はすむらむ（明治四十一年）

といふ御歌があります。歴代の天皇方の御製には、この御歌のやうに、自然を詠まれながら、そこに人生を深く考へられてゐるといふ御歌が多い。われわれも、自然を鑑賞し、描写しながら、その中に人生といふものを深く考へていくといふ姿勢を失はないやうにしていきたいと思ひます。次に一〇七頁を開いて下さい。

はるかなる想ひをこめて雲仙の宿に今我はせ着きにけり

「はるかなる想ひをこめて」といふ表現は、気持はわからないでもないが、極めて抽象的でムードに酔つた表現です。遠くの人に呼びかけるとか、便りを書く場合には、かういふ表現を使ふこともありますが、ここでは遠い雲仙の地で行はれる合宿のことを想ひつつ、今その雲仙にやつてきたといふことですから、適切ではありません。著者は、「はるかにも想ひてゐたる雲仙の」と詠むべきであると言つてをられます。さらに「宿に今我はせ着きにけり」といふ表現は確かに少しオーバーです。「はせ着きにけり」といふのは息せき切つて走つてやつてきたといふことですから、飛脚が汗だくになつてやつと着いたとか、伝令が戦線の急を告げるために息を切らしてやつて来たといふやうな場合に使ふ表現です。ここは素直に「たどりつきけり」と言へば良い。

はるかにも想ひてゐたる雲仙の宿に今我たどりつきたり

正確な表現は、誇張がないから、かへつて人の心を打つものです。一七三頁を開いて下さい。期せずして、今日司会をして下さつてゐる澤部寿孫さんの歌が載つてゐます。これは澤部さんが長崎大学に在学中（昭和三十八年）に創られた連作です。

はるばると疲れも見せず集ひ来ぬ彦根の友も熊本の友も

はるばると来し友どちの顔みるにいつしか気持なごみゆくなり

ひたすらに真まことの道を求めむとする友達はここにゐるなり

過ぎし日の苦しきことも今はただ集ひしことのうれしさに消ゆ

天地の生れし様を思はする空あり海あり山もありけり

ここには天地が躍動するやうな嬉しさが表現されてゐますが、かういふおもひは到底一首に詠み込めるものではありません。この歌の場合も、やはり連作にするのが良いと思ひます。友らが集ふ雲仙の宿に今やつて来た、そして、宿の玄関に入ると友らのなつかしい顔が見えたとか、横断幕に力強い言葉が書いてあつたとか、具体的に三首、四首と連作にしていくと、生々とした歌が生れてくる筈です。出会ひの時とか、別れの時とか、今までの状況に変化が起る時に起きた気持ちを適確につかんで詠むと、良い歌が出来ることが多いのです。

それでは、次の歌にいきませう。一〇九頁です。

暗緑の大雲仙の山あひに朝日上りて足音しげし

「暗緑の」は、暗いほどに木が繁つてゐるといふ意味でせうが、明瞭な言葉ではありません。又、「足音しげし」といふ言葉が唐突です。「山あひに上る朝日」が、この歌の主題かと思へば、突然足音が入つて来てしまつて何かつながらりのない歌になつてしまつてゐます。やはり正確さを欠く歌です。著者が直されてゐるやうに、

暗かりし雲仙岳の山あひも朝日上りて人の声する

とすれば、少しは意味がはつきりしてきます。しかし、「足音」を生かすならば、やはり連作にする必要があります。明治時代に短歌革新を行った正岡子規が、当時『明星』といふ雑誌を主宰してゐた有名な歌人、落合直文の歌を批評してをります。

煩へる鶴の鳥屋とやみて我立てば小雨降り来ぬ梅香る朝

これも、今の歌のやうに、対象がいくつもあり、作者が詠まうとしてゐる対象が大きく変化してゐます。まづ「煩へる鶴」が、どこにゐるのかわからない。子規はかう言つてゐます。「そは此歌は如何なる場所の飼鶴を詠みしかといふ事、即ち動物園かはた個人の庭かといふ事なり。」次に、この歌は、何に焦点をおいて詠んでゐるのかが、はつきりしません。梅の香りといふのは、ほんのかすかにしか匂はないもので、それを嗅がうと思つたら、一生懸命鼻の神経をとがらせてゐなければならぬ。それを強調するなら、「煩へる鶴」や「小雨」はかすんでしまふといふ訳です。結局、対象がいくつもあるので、歌全体が漠然としてしまふのです。詠む対象を明確にかみ、一つに絞るといふことが、歌を創る際に非常に重要であると思ひます。

では、次に一一三頁を開いて下さい。

あどけなく笑ふひとみも清かりし旅の乙女に心ひかれぬ

この歌に対する著者の評は、まことに辛辣です。『清いひとみ』があり、『旅』があり、『乙女』

があると流行歌ができるのです。例へば少女雑誌などのさし絵か何かを思ひ出させるやうなイメージを喚び起されますが、そこに本当に生きた、生命のある年頃の娘さんの姿は浮んで来ません。」この歌は、何となくすらりと詠まれてゐて、確かに切実さが無い。切実な感情を言葉にするのが歌の基本です。前掲の二首の歌は、ここをかう直せば、良くなるといふ性質のもですが、この歌は黙つて没にされても仕方のない歌です。俳句で言ひますと、かういふ場合には月並調といふ言葉をよく使ひます。どういふのが、月並調なのかを一言でいふのは難かしいのですが、正岡子規は、次のやうなことを言つてゐます。

「山吹や何がさはつて散りはじめ

といふ句がある。これは別に月並みではないが、『山吹や』が『夕桜』となると月並みになつてしまふ。」と。本当に紙一重の違いで月並みか否かといふことになる訳です。俳句でいふ月並調とは、一口で言ふと凜然とした表現に欠けてゐるといふことでせう。「心ひかれぬ」程度の感情だつたら、それを全部忘れて修行に邁進する位でなければいけない。この歌の作者は、既に歌の作り方は頭に入つてゐるやうですが、もつと切実な思ひを詠むことを心がけるべきなのです。さうすれば、この作者が持つてゐる一種の固定的な概念、歌に対する先入観を打破して、真実の表現を獲得することが出来る筈です。

以上、いくつかの歌を例に上げて、批評を行ってきたわけですが、今度は皆さんが実際にお創りになった歌について、明日の夜、長内俊平さんが批評されるわけです。その時には、ひとつ今までの批評の内容を思ひ出しながら、しつかり噛みしめて聞いて戴きたいと思ひます。

△短歌創作の姿勢▽

それでは、かつてこの「合宿教室」の運営に当つた国民文化研究会の会員の短歌をご紹介しますことにせう。

はげましつはげまされつつ道を求め求めつづけし十まり一とせ

年ごとに若きいのちのあらたなる友のまなざしかがやきて見ゆ

これは、徳永正巳さんといふ方の歌です。それから、次は、明日和歌全体批評をして下さる長内俊平さんの歌、

山の端に陽の落ちしよりひぐらしのなく音のいたもしげくなりゆく

はかなかる命のゆゑか息をつくとまなきがに鳴きつづくるも

病める友集ひえぬ友のねむごろにたのむとのりしことばうかびく

これらは、多年歌を詠み続けてをられる先輩の歌ですが、ひたむきに真実を求めていかうとされてゐるお姿をきつと皆さんも感じとつてをられることでせう。皆さんも、拙くてもいいから、

真剣に真実を心をこめて歌ふやう、心がけて下さい。短歌創作といふのは非常な意志力を要するものです。これからの時間はレクリエーションといふことになつてをりますが、講義を聴講してゐる時と同様、張り切つて、短歌創作に立ち向つて戴きたいと思ひます。明治天皇の御製の中に、次の様な御歌があります。

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

「天地をうごかすばかり」といふ言葉が使はれてゐますが、歌を詠む時には、かういふ強い精神が必要だと思ひます。又、歌の本質を御実感として、次のやうに歌ひ上げられてゐます。

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

△短歌の鑑賞―防人の歌と黒上先生の歌▽

それでは次に、持つて来て戴きました『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の二一八頁を開いて下さい。ここに万葉集の防人の歌が何首か載つて居りますので詠んでみることにしませう。

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

父母がかしらかきなで幸くあれていひし言葉ぞわすれかねつる

わが母の袖もちなでてわがからに泣きしところを忘れえぬかも

三首目の「わがからに」とは「私のために」といふ意味です。いづれも両親との別離に際しての痛切な哀しみを率直に歌ひ上げた歌です。

蘆垣あしがきの隈所くまどにたちて吾妹子わがもこが袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

「蘆垣の隈所」といふのは「葦を結つて作つた垣根の曲り角」といふ意味です。「吾妹子」とは「愛人」のことです。「しほほ」はぐつしよりといふ意味で、防人として任地に赴く男を送る女の痛切な情愛が、この言葉に凝縮されてゐるやうな気がします。

松けの木の並みたるみれば家人いはびとのわれを見おくと立たりし如もころ

この歌は、「松の木が並び立つてゐるのを見ると自分の家族が自分を見送つて立ち並んでゐるやうに見える」といふ意味です。非常に生々しい表現です。

この書物の著者黒上正一郎先生は、この後に次のやうな文章を書かれてゐます。

「彼等は歌をよむがための歌人ではなかつた。しかしその内心のまことが自ら表現せられて歌となるとき、悠久に人の心に徹する言の葉をとどめたのである。そこに目にうかぶものはあるがままの人生に戦ひ生くる悲喜の情意である。その巧まぬすなほなる表現に、遠海はるかに親を思ひ家を思ふ痛切の心の、既に切実恩愛のまことのうちに没せられてあるを見るのである。」

私は十八歳の時、この黒上正一郎先生を中心とした研究グループ「一高昭信会」に入りました。昨日夜久先生のお話の中に出てきました新井兼吉先輩が、この会の例会で防人の歌の研究発表をされたわけです。先程詠みました歌の中で、

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

といふ歌がありました。「忘れせ」といふのは、サ行変格活用の動詞で「忘る」といふのを強調した「忘れず」の未然形です。私はこの歌を聞いて、大変な感動をうけましたが、私は、昭信会に入つたのはこの一首の歌のおかげだと言つて過言ではありません。この歌が私の運命を決定づけたやうなものです。それ位、この防人の歌は、人の心を動かす力を持つてゐる訳です。この歌に感銘を受けてから、自分の心の中に歌といふものが湧いてきたやうな気がするのです。

それでは、私の生涯の師である黒上正一郎先生の歌を味はつてみることにしましょう。先述の書物『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の二六七頁に載つてをります。又、『短歌のすすめ』にも引用されています。

手紙のはしに（大正九年六月二十七日―数へ年二十一歳）

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつながりを得て一信海にわれも入らむとおもふよるこび

このぞみわれはもてりと思ふことわれ生くらくのこゝちするかも

あゝ一信海われもつながらむと求むるこゝろそのこゝろにこそわれは生くるか
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

黒上正一郎先生は、いはゆる歌人ではありません。が、たくさん歌を創られました。そして、その歌は、友らへの便りの後に書かれたものが多く、友への篤信の情を歌にしたものばかりです。この五首の歌は、数へ年二十一歳の時の作ですが、これらの歌の調べは、先述の書物の中にこもつてある調べと一つのものであります。そのことをしつかりと感じとつていただきたいのです。かうした高い調べを心の中で、繰り返しながら、自分の歌の創作に取り組んでいくことが肝要です。正岡子規の歌論の中にかういふ話が載つてあります。江戸時代の末期の国学者に平賀元義といふ人があります。古学を学び短歌を好くした人ですが、この人の所に知人が歌を教へて貰ひたいと言つてきた時に、彼は黙つて柿本人麿の歌を繰り返し朗誦した。歌といふものは、何回も朗誦してゐれば、わかってくるものだと言つたといふことです。五七五七七と指折り教へて苦吟するよりも、調べに心を委ねていくことの方が大切なのです。調べといふものがつかめれば、歌を詠む時に自然にその調べが出て来る。さうすると、調べの高い歌が出来るといふことになります。又、『短歌のすすめ』の中にも書いてありますが、良い歌は自分で暗誦できる位に、何回も詠んで、

とにかく自分のものにしてしまふことが大切です。

小林秀雄先生が言つてをられるやうに、「感じとる」といふ気持がなければ、短歌は自分のものにはならない。同様に、日本文化などといふものも、いくら勉強して知識を殖しても、「感じとる」といふ気持がなければ、その真髄はつかめなれないと思ひます。私共国文研の運動も、ともすれば紙一重の差で概念的なものになつてしまふので、真実に触れ合ふといふ機会を失つたまま上すべりしていくと何の為の運動かわからなくなると思ひます。

明治天皇の御製に、

いそのかみふることぶみは万代もさかゆく国のたからなりけり

といふ御歌があります。「いそのかみふることぶみ」とは、古事記のことでせう。明治天皇は『古事記』を座右に置かれ、折に触れて、何回となく読まれたと聞きます。天皇と祖先の神々が一体になつて居られるといふ事実をこの御歌から拝察することができます。かうした事実を『現実的不可思議』と私共は言ひます。今夜は慰霊祭がございます。阿蘇の嶺嶺につゝまれた夜のしじまの中で厳肅にとり行はれることになつてゐます。私は、この慰霊祭に例年参加してをりますが、そこでは自己の心が自然に統一されていき、本当に祖先・先輩達の御霊につながつていけるやうな気持になります。かうした私の体験も『現実的不可思議』であると言へませう。逆に我々が日

常生活の中で「これが現実である」と考へてみたものが、極めて表層的な事象であつたと気づくこともあります。だからこそ、歌を詠んだ後に、互ひに批評し合つて、「叩き合ふ」ことが必要になる訳です。作者の気持を推察しつつ、歌を直していくうちに、不可思議に心が通ひ合ひ、そしてさらに互ひの心が開展していくといふ体験——これも『現実的不可思議』の体験と言へませうが——を是非味はつて戴きたいと思ひます。

△最後に▽

さて、最後に、もう一度歌を詠む際の心の姿勢についてお話しておきませう。私が強調したいことは、とにかく歌を創りましたといふやうな程度のもではなくて、真実の思ひを詠み上げるといふ気持で取り組んで戴きたいといふことです。さうした気持で取り組めば、本当に自分の至らなさがわかってくる。そして、自分はまだまだだといふことがわかれば、素直な気持にたち帰ることができる。すると、大学とか学年、男女の別を超えて、一人の国民として、一信海——一つのまごころの世界——につながる道が開けてくると思ふのです。短歌創作が信行の一つであるといはれるのも、かうした理由によるのです。要領の良い、スマートな歌を詠まうなどといふ考へは一切捨てて、ゴツゴツした、荒削りの表現でも良いから、飾らない歌を詠んで戴きたい。それが真実の思ひを詠んだのならば、必ずや人の心を打つでせう。そこで初めて人の心といふも

のがどういふものが少しわかってくる筈です。真実の思ひを伝へる言葉の威力を、実感として、自分自身の体で感じとれるやう、良い歌を味はつたり、創作したりして戴きたいと思ひます。

合宿詠草

をやみなき噴煙白く立ちのぼる阿蘇の火口に人らむらがる

観光の人らの列は絶えまなく火口に向ふ岩肌の道を

山頂ゆ下見下せば切りたちし岩の縞肌みるもおそろし

噴煙はしづかなれども空高くふき上ぐる力たたたふることし

「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌

『国文研究会員の感想文集』
昭和五十三年九月刊

今、合宿で行なつたはてしなき思想のたゞかひの中に、なつかしくむつび合ふ心をつなぎ合せてゆく訓練の実感を、そのまま现实生活の中に更に展開してゆかうと、今年は更に決意を新たに
する。

小林先生が心の底からいはれた「私が仕事をしてゐるときはそれは孤独なんですよ」といふお

言葉が、いつまでも耳に残つてゐる。ジャーナリズムやマスコミから超然として、一人道を求められる日頃のご体験によつてこそ、力強い先生の文章が生れてくることを一層痛感し、私は、更に甘えの心を投げすてねばならぬと思ふ。

(第二十六班の班付として)班員諸兄の心が、目に見えてほぐれやはらいでいつた不可思議な現実にあふれ、班長はじめ班員の諸君の努力の並々ならぬものがあつたことを思ふと共に、神のまもりを痛切に感じた。

黒上正一郎先生の教へをうけて五十年に近くなつて、漸くこの状態では恥かしい限りであつて、何とも申訳ないと思つてゐるが、木内先生、小林先生、それから特別講師としてお見えになつた八十六歳の松本先生の庄倒的なお元氣さ、小田村、夜久、小柳、山田諸氏の堂々たる研究発表など、私は心底から頭の下る思ひである。そして、九州方面の大学生の数が多くことに刺激をうけて、東京、高崎でもやらねばならぬと痛感した。それは、今年はじめて受持の班をもつて直接學生に接した実感から発する感想である。かつて一高昭信会時代に、寮で毎朝、明治天皇御製拜誦をするために、各部屋の寢室に遠慮なく入つていつて起してまはつた昔を思ひ、ここで、私も根本的に若返らうと決意する次第である。

なつかしい阿蘇の山々は深々と広野をかこみ、建国以来のみくにのいのちさながらに、今日も

悠然とした姿をみせてゐる。いざたたかはむかな。

慰霊祭

今年またみたま祭りののりとごと奏しまつると心しづめぬ
並び立つ友らをはなれかゞり火のかたへに立てばうつし世忘る
くさくさの神饌はこぶ四たりの友らの面わひきしまりをり
祭文を奏しまつると壇上に立てばいよいよ心高まる
むらぎもの心かたむけのりとごと奏しまつればうつともなし
天地の神もうけませしきしまのみちひらかむと誓ふ心を

慰霊祭献詠

亡きみたまいかにおぼさむすすみゆく世におくれゆくみにのさまを

大正時代の思想的背景(一)

私は明治四十五年五月に生れ、大正天皇の御治世の間、幼時から小学校時代を過した。大正八

〔国〕民同胞
昭和五十三年十月号

〔国〕民同胞
昭和五十四年五月号

年に小学校に入学し九年十年と経過して、十二年の関東大震災の時は東京牛込の自宅で正に驚天動地の災害に遭つた。

大正のはじめ頃は衣食住の洋風化が次第にひろがり、カフェー、ミルクホール（今の喫茶店）、電車、乗合自動車、タクシーなど少しづつ普及し、電灯もガス灯に代つてその数を増してきた。理髪店の主人などはおほむね和服の上に白衣をきてバリカンを使つてゐたが、稀に洋服を着てゐるとあそこはハイカラだといはれた。

私の父をはじめ、母方の祖父、叔父三人共みな軍人で、軍人とのつき合ひが多かつた。当時将校の実生活は今から考へると、平時戦時を分たぬ思想戦に処して軍人勅諭が具体的に生かされてゆくべき学問と訓練が、もつと望ましかつた様に思ふ。乃木將軍を追慕する人々の会が、乃木式といふパンフレットを定期に出してゐたが、多くの人は無関心であつた。軍隊の組織はまだ敢然としてゐて大正九年三月の尼港事件では沿海州に出兵しバルチザンを制圧した。

しかし大正時代の特徴の一つは軍縮で、ワシントン条約では日本の意図した八八艦隊（大型戦艦八隻、大型巡洋艦八隻）の計画が大幅に削減され、陸軍の方も師団の数を減らした。将校は雨の日など軍服の上にマントを着てゆくために、雨にぬれたマントを着て電車に乗ると、一般乗客がいやがるので遠慮して運転台に立つてゐる場合が多いことをよく聞かされた。かうした屈辱感が

「今にみる」といふ感情を抱かせ、やがて昭和のはじめの五・一五、二・二六事件から支那事變につながり、軍縮どころか国民全軍化、軍事国家へと発展して行つたとみられるが、かうした勢力の張り合ひは国の政治としてはまづいので、文武の關係、武力戦と思想戦の關係、それらを統一し生命あらしめる高度の学問、「しきしまのみち」が必要なわけである。

小学校では明治時代からの伝承で、天長節、紀元節等の式典には厳肅きはまる教育勅語奉読が校長によつて行はれ、国歌と共にそれぞれの祝日の式典歌を歌つた。しかしその間、本誌によせられた様な、大正天皇のすぐれた御製について校長の口からたゞの一度も話されたことはなかつた。殊に大正九年から十年にかけて、大正天皇の御病氣についての様々な風聞が生徒の口から口に伝はり、今考へるだにおぞましいその頃の風潮について自ら懺悔する次第である。

大正天皇のお作りになつた漢詩のすばらしさについては、故田所廣泰先輩、同志故安武弘益氏からきかされ、御製については小田村寅二郎、夜久正雄、小柳陽太郎の諸兄の讚仰研究により明らかであるが、これらの諸兄が期せずして言つてをられること、それは、かくばかりすぐれた詩歌をよまれ政務に御精勵になられた、大正天皇の御大患と、当時の風潮、当時側近にお仕へした重臣達の思想行動と無關係ではない様な気がするといふこと、これは小生自身七十歳近くなつて深刻に再思三省せざるを得ない事柄である。

殊に当時元老として宮中にも重きをなしてゐた山縣有朋は、明治二十二年と明治三十一年の二回内閣総理大臣をつとめ枢密院議長、元帥大勲位功一級公爵と最高の位にあつたが、個人的には色々な話が伝へられてゐた。その一つに当時(大正年間)退役陸軍少将の妻であつた私の祖母が私の母に話してゐた事がある。それは山縣が、明治天皇にお仕へしてゐた頃賜つた御宸筆を表装するために、その材料として、天皇の御衣料の一部を賜はりたいとお願ひした時、明治天皇はお許しにならず、かゝる事を許すことは山縣のためにならないと思ふ、とおさとしになられたといふことである。君恩に狎れるといふか、今から考へても恐れ多い事であるが、その後宮中関係の写真の中に、大正天皇が皇太子であられた折に、山縣が自邸にお招きした時の写真を見たことがある。これも山縣の態度が尊大な様子であつたのを覚えてゐる。

大正九年から十年にかけて、皇太子裕仁親王と久邇宮良子女王の御結婚の問題に関し、大正七年既に宮内大臣から久邇宮家に伝へられ、良子女王の父君邦彦王殿下がおうけする旨返事をされた後に、良子女王が色弱の血統を有せられるといふ理由で、元老山縣公が主となつて反対した。山縣は久邇宮より御辞退なさるべきことを強引に主張し、さきの御決定もくつがへるかに見えたところ、東宮御学問所の帝王学講師杉浦重剛、玄洋社頭首頭山満らの必死の活動により議會でも問題となり、つひに山縣公は他の元老松方侯、西園寺公と相談し、御婚約に変更なしといふこと

を中村宮内大臣に公表せしめ、樞密院議長を辞する辞表を侍従長に送った。この間の詳しい事情は、児島襄著『天皇』（文芸春秋社刊行）第一巻に出てゐるが、その時、事が敗れて山縣公が詠んだ、

飛ぶ螢打ち落されて川の面に光りながらも流れてぞゆく

といふ歌はいかにも強引で我執の強い山縣の性格をあらはしてゐる。

大正十年御婚約確定の公表後、皇太子裕仁親王は外遊の途に就かれ、六ヶ月の御外遊の後九月に帰国なされ、十一月に原敬首相暗殺、皇太子は摂政に御就任なされた。翌大正十一年の二月には、山縣有朋は八十五歳で病死、その翌年九月関東大震災が東京中心に起つたが、その前夜、私の家附近の神楽坂通りは、当時大流行してゐた「籠の鳥」といふ歌を主題歌として映画に満員の人ばかりがして、その雰囲気は頹廢の極といつた感がしてゐた。それ故その翌九月一日正午頃、物凄い地鳴りと共にはじまつた驚天動地の大激震は、神の怒りの直撃と思つた。そしてその年の暮に虎ノ門事件が起り山本権兵衛内閣は総辞職した。山縣公の行動に対する国士杉浦重剛、頭山滿らの反撥は、山縣の公私混同して君臣の分を忘れた心に対する批判叱正の行動に外ならなかつた。大正六年のロシア革命と共にその思想原理であつたマルクス・レーニン主義が潮の如く日本に押しよせ、大正十二年の暮に起つた虎ノ門事件で、皇太子殿下に向つて発砲した難波大助なども、

日本の国体変革、共産革命の思想を全身的に奉じてゐた。大正十四年、治安維持法制定され、反国体行動取締りの法的基準が示されたが、大学を中心とする思想宣伝に対しては当局は殆ど無力であつた。大正天皇の深厚なる大御心を素直に国民に伝へることなく、日本の国体変革を意図する思想學術の宣伝を正すことに努力しなかつた要路の人々の責任は重大で、私自身も五十年目にしてその不明を覺らせられる次第である。

第一次大戦後、武力戦が思想言論戦にとつて代り、ソ連中心の国際コミンテルンの思想戦略と共に大正十年のワシントン軍縮条約、昭和五年のロンドン軍縮条約の如き、英米中心の列国の共同戦線の前に劣勢軍備をおしつけられる、その間に我が国有力新聞紙に対する外国の工作その他の事件相継ぎ、日本は建国以来最大の危機に突入してゆくのである。

大正九年、明治神宮鎮座祭行はれ、大正十二年、三井甲之氏の、明治天皇御製拝誦宣言が発表され、黒上正一郎氏の聖徳太子研究と同信相統活動もその基礎は大正時代に培はれた。

デモクラシー、恋愛至上主義、ソヴィエトを祖国と仰ぐ共産主義の渦巻く中に、大正天皇、今上天皇の御製は、明治天皇御製と同じく、一貫してつねに民草の上を御軫念になり、神まつる昔のてぶりを敝修なされながら、くに民と共にと願はせられる御心を歌はれてゐることは感激の極みである。

大正天皇の数々の御製を拜誦すると、小学校時代の暗雲に閉ざされてゐた様な精神生活が、五十年目に開かれた様な感激を覚える。

明治年間に展開された正岡子規の短歌革新、『アカネ』『人生と表現』『日本及び日本人』等につらなるしきしまのみちの伝統は、大正時代にも国民の心の奥底に脈々として伝はり、全国の同信誌友からのたより、和歌、詩は今なほ我等の力源であつて、一つ心に皇室とつながつてゐた。しかしその数は全国民の中のごく一部の少数であつた。

今日昭和の御代となり、国際社会はいよいよ複雑になり、祖国日本の進路はいよいよ多難となりつゝあるけれども、天皇の御製はつねに日本人に生き抜く力を与へて下さるのである。

大正時代の思想的背景(二)

—— 治安維持法・日韓関係など ——

大正十四年四月、加藤高明内閣により治安維持法が制定されたが、これは大正十二年暮に起つた虎ノ門事件を重大なる契機とすると共に、コミンテルン（国際共産党）の日本に対するあくなき国体変革の思想攻略に対する思想防衛を目的とするものであつた。

『国民同胞』
昭和五十四年七月号

その第一条には、

国体ヲ変革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知リテ之ニ加入シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

となつてゐる。これは昭和三年に改正されて、

国体変革ヲ目的トスル場合ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役禁錮トシ

私有財産制度否認ヲ目的トシテ結社ヲ組織シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス

となつた。即ち国体変革と私有財産制度否定とを分けたのである。この法律では国体変革と私有財産制度の否定との関連を明らかにすることが非常に大事なことで、この点、当局者である特高課長の中にも、国体変革と私有財産制否定が何故両方共悪いのか意味が分らないと話してゐた人があつたのを覚えてゐる。これは当時の学者にも責任があるので、この点をこそ解明すべきであつたのに、当時の東大の憲法主任教授の美濃部達吉博士はこれを比類なき悪法とそしり、大多数の学者も之に同調したのである。

この法律の運用の任に直接当る特別高等警察は、幸徳秋水事件判決のあつた明治四十四年創設されたが、治安維持法制定と共に拡充され、全国特高課長人事は内務省警保局長指名により決定

され、知事の自由にならなかつた。又特高課長は選挙取締りに関係しなかつたため、政党内閣時代でも党利党略による影響をうけなかつた。この間の事情は安倍源基氏著『昭和動乱の真相』に詳記されてゐる。

大正十五年十二月、大正天皇崩御、昭和の御代となるが、これより思想的混乱による昭和動乱が始まるのである。

これについては改めて書くこととし、次に大正十四年から昭和二年にかけて私が中学生の三年間を朝鮮ですごした事から、その体験をもとに日韓関係にふれてみたい。

大正十四年一月、京城の南方の龍山に司令部のあつた第二十師団工兵隊長として赴任した父について、私の一家は龍山の官舎に移つた。日本統治下にあつた朝鮮は、軍隊による治安維持の下に農工商方面の民政に力を注いでゐた。

しかし龍山にあつた軍司令官官邸、総督官邸の威容は驚くばかりで、総督官邸などは電灯代だけで当時の金で一日二〇〇円かゝるといふので、平素は使用されてゐないと書いてゐた。朝鮮神宮の鎮座祭も行はれたが、私達内地人は小学校も中学校も朝鮮の人とは別々になつてゐて官舎の生活は城下町といった感じがした。もつとも明治四十三年に日韓併合行はれて以来十五年目位であつ

たこともあり、日本政府としては極力朝鮮全道の内政に努力してゐる最中であつたといつてよい。中学校は龍山中学校に入つたが、その年初夏の頃、印象の深い事件に会つた。その年亡くなられた李大王(日韓併合当時の朝鮮王)の葬儀に、中学校全校生徒が沿道に並んで葬列を送つてゐたとき、わきに並んでゐた朝鮮の学生(高等普通学校、日本でいへば中学校)が一斉に靈柩目がけて投石し、その音は遠雷の如く葬列は大混乱に陥つた。私達一同は教師に導かれ、裏道をぬけて学校に帰り、集合した所で校長から事件の概要をきかされた。その時まかれたビラは朝鮮独立万歳といふものであつた。当時の事件の真相はそれ以後学校からも知らされず、どう処理されたかは分らないが、その時子供心にも、日本の朝鮮統治は決してスムーズにいつてゐないことを直感した。

第十九、第二十師団は朝鮮全土の治安を固めてゐたことは事実であり、憲兵も警察も之に協力してゐた中で、独立運動の潜行はこのやうに根強くあつたことを知つたのである。またコミンテルンの思想攻略は当時の内鮮離反、朝鮮独立運動を支援してゐたに相違ない。

軍司令官の鈴木莊六大将は包容力ある軍人で、我々軍人家族はよく栗拾ひやら映画会やらで官邸に招待された。今でいへば内鮮融和のPR映画をみせられたのだが、その内容は、内地人と朝鮮人の双方の若い奥さんが仲よく家庭訪問をし合つてゐるやうな映画であつたが、内鮮融和とい

ふことは、やはり当局としては重大関心事であつた様である。

こゝで日韓関係について、明治以来の経過を考へると、明治六年六月征韓論起り、西郷隆盛らの征韓論は岩倉らの反対によつて決裂、西郷らは辞職した。しかし征といふ字は使はれてゐても、西郷の論旨や思想の文化的感覚の高さは岩倉などよりは上であつた。

明治十三年八月朝鮮修交使来朝し兩國貿易は開け、京城には日本公使館が置かれたが、明治十五年七月朝鮮人により公使館襲撃され、花村公使以下は危く仁川から軍艦で帰国する事件がおこり、日本政府はかなり強硬な態度で兩國の問題に臨む様になつた。

やがて清国とロシアも交々朝鮮に勢力を伸ばし、明治二十七年八月、日本は清国に宣戦布告し、直ちに日本陸軍は仁川に上陸、九月平壤占領、海軍は黄海で清国を破り、二十八年休戦となつた。二十八年の講和条約による遼東半島の日本への割譲に対する三国干渉の結果、日本は止むなく遼東半島返還、之を機に露国は急速に朝鮮に手を伸ばしてきた。山辺健太郎氏著『日韓併合小史』(岩波新書)によれば、明治三十一年ロシア政府は朝鮮政府に対し、森林伐採をはじめると通告し、五月の上旬に六十余名のロシア軍人と馬賊の頭目林成岱がひきゐる八十余名の中国人をつれて鴨緑江をわたり、朝鮮の竜岫浦に来て土地を買収し、こゝに軍事的根拠地をつくつた。六月にはロシアの砲兵百七十余名は、中国領で朝鮮の新州対岸の安東県に來り、七月に安東県と鴨緑江

底の電信を架設、十月にロシアはこゝに砲台を築いた。ソウルの日本公使館は萩原書記官を竜巖浦に派遣視察させようとしたが、ロシア側はこれを拒絶し、日露の対立は激化し一戦は不可避となつた。

明治三十七年二月に日本はロシアに宣戦布告し、連合艦隊はその月の中に仁川沖でロシア艦隊を奇襲して之をやぶり、陸軍も仁川に上陸しただちにソウルに入つた。そこで日本と朝鮮の間に日韓議定書が結ばれ、朝鮮を日本の保護下に置くことになつた。

明治三十八年朝鮮統監府が置かれ、伊藤博文が韓国統監に就任した。伊藤は明治四十二年ハルビンで暗殺されたが、翌四十三年日韓併合、朝鮮總督府官制公布、寺内正毅が初代總督となつた。保護国から日韓併合に至る過程で、朝鮮国民には色々な不平不満もあつたに相違なく、合併後の日本の統治もこれまでの歴史的事実をふまへて、その民族心理に充分な配慮をしながら行ふべきであつた。それは内鮮融和などといふ生やさしいスローガンでは処理出来ないわだかまりがあつたのである。

伊藤統監がかなり強引に朝鮮と交渉し日韓併合にまで持ち込んだことも朝鮮の反感をつのらせつゝであらう。伊藤がハルビンで安重根といふ朝鮮人に暗殺されたのもそのあらはれである。昭和二十年八月十五日終戦となり、十月四日マッカーサー司令官により出された「政治的、公

民的、宗教的自由に対する制限撤廃に関する覚書」といふ命令により治安維持法は廃止され、全
國の特高警察は廃止、特高関係者はすべて罷免された。

朝鮮では、昭和二十三年北朝鮮人民共和国成立し、南の韓国と国を二分した。昭和二十五年朝
鮮戦乱おこり、北朝鮮軍はソウル（京城）を占領、之に中共軍が介入して三十八度線を突破、国連
軍、米軍も介入してこれと戦ひ、三十八度線まで押し返して昭和二十六年休戦となり、朝鮮は南
北対立のまゝ今日に及んでゐる。

治安維持法廃止後三十四年、ソ連を中心とする共産圏国家は次々出来て自由主義国家群と相對
してゐるが、その国情は千差万別であるけれども共産主義が決してバラ色の人類理想形態ではな
いことは実験済みである。

韓国は中共軍と合体した北朝鮮軍に徹底的にふみにじられ、総力を挙げて独立国として立ち上り、
自由主義国家群に属して近代化の歩みをつゞけてゐる。日本も敗戦の後、裸一貫から出発して立
ち直り経済的には先進国の一員となつてゐる。

思へば朝鮮半島の政治的安定化が東洋平和のかなめであることは、遠く任那日本府の昔から、日
本の皇室歴代の天皇の御関心事であつた。前記山辺氏の『日韓併合小史』にも書かれてゐるが、日
本が韓国に進出したのは、経済的利害のためではなく、政治的安定を保つため、もしロシアが

半島を占領すれば、九州、四国もどうなるか分らないといった脅威にさらされ、身を捨てゝ之を撃破する外なかつたのである。

西郷隆盛が征韓論をいふ時に、つねにくり返していつてゐた「天照大神のみこころ」といふ言葉は、時の太政大臣三条実美の心を強く打つたに違ひなく、三条は西郷に一年だけ待つてくれといつてゐた。

何かしら運命的な歴史の流れの中に、日本を含めて各国の動きは未だに流動的であり、固定化された平和は地球上何処にもない。

この度来日した米国のカーター大統領が、宮中の晩餐会での演説の中で、明治天皇と今上天皇の御製を引用してゐたが、どんな時にも、世界の平和を念願され、この世の正しき道を開かむと祈願したまふ、天皇の御製、御詔勅を、ひたすら拝誦してこの世に生きゆく外にないと痛感するのである。

合宿詠草

湯の滝のさらさら落つる岩肌をかくむ楓の葉かけ涼しき
湯けぶりをあげて流るる溪流のいのちあふるる岩間岩間に

〔合宿教室〕感想文集
昭和五十四年十月刊

神杉は深くしづけくみやしろをかくみて立てりいく百とせを

山深く生ひ重なれる赤松の林をつたひ霧まひ上る

雨はれし高千穂河原神さびて鳥居につづく石の道けはし

天孫の天降りたまひしこの山に神のみたまを仰ぐこちす

「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌

『国文研究会員の感想文集』
昭和五十四年八月刊

千載一遇といふ言葉さながらに今度の合宿の体験は私にとつて殊の外感銘深いものがあつた。

ますらをのかなしきいのちつみ重ねつゝまもり来しみにの尊さを、天孫降臨の霧島に起き伏しして実感として仰ぎ得たのも、友らの現実のコトバによつてである。生きた人の心にふれ、人の心に通ふコトバを求める苦修、同信協力のはげしさ等を実感する中に、くにをまもることの意味を感得してゆくこと、これはまことに容易ならぬことである。

若き友らの感想をきゝつゝ、私は今後益々責務の重大なることを痛感し、今日より初心にかへりつとめようと思ふ。

朝空に陽はのぼりつゝ核島さやかに浮ぶ雲の彼方に

噴煙は横にたなびき悠々と雲にまじはる姿たふとし

合宿も終らむとしてむらぎもの心安らぐ朝の一とき

神山のくしびのいのち身にうけてすぐし来にけりこの五日はも

次々に壇に上りて力強く語る友らの姿たのもし

皇国のいのちさながら若人の語る言葉は力あふるゝ

人ごころかたみに思ひ深奥の信の世界に入りゆかんとす

信を共にみくにつくすまごころの言葉をきけばなみだあふるゝ

慰霊祭献詠

亡き友らのいのち刻みし刷りぶみを捧げまつるときくぞ畏き

かくり世とうつし世つなぐコトノハノミチのさきはひ信じてゆかむ

神まつる昔のでぶりをさめつつ生きゆく外に道なかりけり

「国」民「同」胞
昭和五十四年十月号

独立国日本の混迷

『国民同胞』
昭和十五年二月号

ソ連のアフガニスタン侵攻が全世界に衝撃を与へつゝある裡に、我が日本の自衛隊元幹部と現役自衛官によるソ連に対するスパイ事件が発覚し、日本政府と国民は、自立国家日本のあり方と国防に関し更に深刻なる自覚と対決を迫られてゐる。

戦後の日本は、戦前戦中の我が国は帝国主義的侵略に終始してきたといふ説を一方的に信奉する考へ方のもとに、ひたすら平和を標榜しつゝ、平和をまもるための国防には思ひを致さず、必要な軍備には反対し、防衛の負担をアメリカとの安全保障条約によりかゝりつゞけてきた。

最近になつて次第に世界情勢が緊迫してきて、殊にソ連の、周囲の国々をなめたやり方が露骨になるにつれ、日本のマスコミの表面には出ない国防の必要性を痛感する声が強くならうとしてゐる。

ソ連といへば、大正六年（一九一七年）三月ロマノフ王朝倒れ（二月革命）、十一月ケレンスキーに代つて、レーニンらによるソヴェト政府が発足（十月革命）するが、大正九年（一九二〇年）三月に沿海州ニコライエフスクに起きた、過激派バルチザンによる日本人七百人の惨殺事件は、私

も小学校の二年生の時に知らされ、子供心にも大きいショックをうけたものである。これは世にいふ尼港事件であるが、外務省編纂による日ソ交渉史によれば、当時の日本人犠牲者は石田副領事及びその家族を含む居留民三百八十三名（内、女子百八十四名）及び軍人三百五十一名で、その残忍な殺され方は小学校の生徒の口から口にも伝はり、その時の印象は未だに忘れられない。

その後のソ連政府は革命政権を固める過程で我国に対してマルクス・レーニン主義の思想宣伝工作をはげしく継続し、それに心酔した日本の学生の中には「我らが祖国ソヴェート」と叫ぶに至り、日本の思想的分裂状態は日に日に憂慮すべき事態に突入した。

昭和七年の五・一五事件、昭和十一年の二・二六事件による日本陸海軍将校の反乱、支那事変の拡大と進むうち昭和十四年五月ノモンハン事件がソ満国境に勃発し、我が陸軍部隊がソ連の強力な戦車群に蹂躪されて大敗した。私は当時某旧制高校に奉職してゐたが、一つのクラスでその話がでて、驚いたことに大半の学生が対ソ降伏説を主張してゐた。つまり軍の装備が全然話にならない位ソ連が優れてゐるからだといふのである。私はその時教壇に立つてゐて足もとが崩れ落ちる様な感じがしたのを覚えてゐる。それから二年後昭和十六年、大東亜戦争突入、昭和二十年我が軍は連合軍に対し無条件降伏し、ソ連は忽ち満洲に侵入、我が国の領土、千島樺太を占領して今日に至つてゐる。

その後ソ連はヨーロッパ各地に共産圏を拡大したが、その諸国の生産性は必ずしも上つてをらず色々な矛盾をかゝへてゐる。今回のアフガニスタンに対してもかなり前から正規軍を潜入させ、ダウド、アミンらソ連が立てた首長を自ら次々に殺し、昨年十二月に一挙に十万の大軍をあげて攻め込んで制圧した。之に抗議する国連の圧倒的多数の反対決議、イスラム諸国四十二ヶ国の中三十七国までが強力な反対決議を行ひ、今年の夏開催のモスクワ・オリンピックも米英西独イスラム諸国中国について日本政府も之をボイコットすることに決めたが、各国の世界戦略のはげしい展開の中にさらされた日本の政界及び政治家の言動は、終戦後今では経済大国といはれ世界の注目をひいてきただけに、生命のこもらぬ、間の抜け方は眼をおほふばかりである。例へばアメリカのカーター大統領がペルシャ湾の制海権を死守するといへば、その全身的な言葉の戦略的真意を汲み取らずに、ペルシャ湾は極東なりや否やといった議論が国会でくり返された。

国をまもることは究極的には思想の問題である。古来日本人の祖先による外来文化摂取の道は、けはしく苦しいものであつた。それは単一民族の甘えの文化などと軽々しく呼べないもので、皇室を中心に伝へられた人の世の正しき道を求める心は、世界の何処に住んでも、一人になつてもまもりつゞけ伝へつゞけるべきものであつて、日本国民はいかなる環境にあらうともこの求道心を捨てゝはならない。今日ソ連の無道を一人になつても絶対許さじと心を定め、祖国防護の道を

国民一致してはからねばならない時である。

講読演習参考

高千穂商科大学内
昭和五十五年三月刊

(編者註、本稿は高木さんが高千穂商科大学の教務常任委員をなさつてをられた時に作られたものである。一般の論考とは趣を異にするが、学生への接し方、導き方等に関し多くの示唆が与へられると共に、それを貫く次代の日本を背負つて立つべき若い人達に対する深い信頼と愛情が行間になじみ出てをり、高木さんの人となりをおぼる得難い記録として採録させて頂いたものである。なほ高木さんは昭和五十六年から同五十八年の間教務委員長を勤められた。)

講読演習は、従来本学の担当教員各位の御努力と御協力により毎年行われて来たが、今その経過を整理し、私の拙い体験をも省みながら、その意義と効果について考察し記述しようとするのが本稿の目的である。

Ⅰ 一般的事項

第一に講読演習はセミナーとは異り、またクラブ活動でもなく、一般教養または専門科目や体育でもない。その目的は後述するが如く、相互の精神交流と努力による人間形成である。約四

十名の学生クラス員は、担任教員の指導下におかれ、使用テキストや講義内容は、担任教員の自由選択に任される。

学内諸規定の説明（オリエンテーション）図書館利用方法の講習（演習の一回を用い各クラス順番に行われる）の外に、単位のとり方、その他学業を進める際の注意等、年初に当って質問をうけ、また積極的に説明する必要がある。

年度当初は各クラブの勧誘が次々に行われるが、これについての身の上相談を受けることが多い。その場合教務課・学生課の職員とも連絡し対応する必要がある。その他時期を追って、体育祭・大学祭、後期に入って、ゼミナール連合の説明、その他所要行事についての、担当者からの説明がクラス毎に行われる。

従来各担任教員は、各自の専門を生かされながら、一年間を通じて指導に当たられて来たが、何がしか共通の問題点をさぐり、学生指導の協力方針について色々な面から考察を加えると次の様な諸点が考えられる。

まず、最初に、クラス全員に相対した時の印象は、何ととっても、意識の多様化であり、無感動の時代といわれるだけに、各自の心の方向がどちらを向いているかさっぱり分らぬ様な、雑然たる印象をうける。

この際、一回分位の時間を費やして、各自の今後の勉強方針、現在の生活環境、大学に対する感想等を率直に刻明に書いてもらうことにより、表面雑然としている外貌にも拘らず、心中では真面目に物事を考えていることが分ることが多い。

将来の志望についてはまだはつきりしないことも多いが、中には最初から、税理士・公認会計士・公務員等の資格を取りたいと念願している者もある。

女子学生が男子学生とどう話していったらよいかといったこと（これらは二か月も経つと何でもなくなる）を書くものもある。

資格を取ろうとする者は、とかくクラスの中で孤立して勉強をはじめめる傾向があるが、ここで孤立するだけの方向は、人間として大成することではないこと、相互の性格・環境の差を身近に知り、人間を具体的に知ること、そして相互の思いやりと協力が日常の生活体験になることを身を以て知することは、世に立つ道として重要であることを教える必要があると考える。

一年の科目として、外国語や一般教養科目が隙間なく配列されている中で、語学・体育・専門科目の基礎となる教養科目、人間形成上必要と思われる科目等が、関連しながら身につけられる様配慮するにはどうしたらよいかということも、つねに考えさせ、相談に乗ってやる必要がある。何となく安きにつく傾向をもつ者は、遊ぶことばかり考える様になるのが一般である。

講読演習の時間を利用して、一週間位前に学務部に連絡してグラウンドを借用し、ソフトボールをクラス全員で行なう事がある。楽しくやりたいという念願は大いに生かさねばならないが、何となく安きにつく傾向にもち込まない様に注意する必要がある。

コンパ・ソフトボール・戸外散歩等は理屈で行なえるものでなく、全体のもり上りで行なうのであるが、これが中々むずかしいと思う。

講読演習に於いては、出欠をとることは不可欠である。出席日数が成績評価の基準となる以上、必ずしも好ましいことではないが、これがきめ手である。欠席日数の多い者については、教務課と連絡して事情を聞き、出来るだけ説得して出席させる様にせねばならない。

△生活リズムについて▽

最近、日本の青少年についていえることは、体格に比べて体力が落ちてきていること、骨折・腰痛、頸・肩・腕の故障等が多くみられることである。また成人病とよばれる症候が、若年者にもみられる点などをみると、所謂、文明病といわれる状態が、慢性的になっていることを認めざるを得ない。

サラリーマンにみられる所謂「五月病」という現象が、大学新生にもうかがわれる。したがって、朝昼晩の精神状態の起伏、肉体的疲労、学科の配置、注意力の集中度の高低、等々身近の

問題について考え、姿勢（体力関係で姿勢研究所というのもある）を正すとともに、睡眠のとり方を正し、食事の内容のバランスをとる等の、所謂「日常茶飯事」の問題を見直してみる必要がある。また、我執をはらって公共心を養う、心の調伏の問題を考えることが必要と考える。国際関係の緊迫の中に、国家の自立を守ってゆく日本の国民生活は、毎日毎日が気力の充実によって持続発展させてゆかねばならない時であり、それには困難と戦う心身の鍛練が必要であると思う。勿論一年生の中で運動部に入った者は、激しい「部」の生活によって訓練されはじめている。

同クラスの中で、お互いの生活について理解し合いながら、次第に親しい友人関係も生れてくる。生活リズムも五月から六月と日が経つにつれて若干ずつ差が出てくるものである。

かくして暑中休暇に入ると、クラブ合宿・旅行またアルバイトと各自それぞれの生活プランによって日を過すのであるが、休暇明けに、休暇中の手記感想を書かせると、実に様々な生活記録を誌してくる。生活リズムも、ここで更に差が出てくること分る。後期の十月に入ると直ちに入ゼミの勧誘がクラス毎に行われ、ゼミナールとクラブ活動の両立が可能かどうかといった問題が、学業プランについての感想や疑問と共に相談材料となることが多い。

一月になると、教職課程を希望する者に対するガイダンスが行われ、そのためには単位も余計に取らねばならぬことなどが分り、ゼミを取り教職をとることの困難（運動部に属する場合は更

に困難)なことを思案し相談する者も出てくる。

こうした話し合いが、教員と学生、またはクラス毎に行われる中に、休暇中遊びすぎたことに對する反省や、将来の志望を再確認する等、前期にみられない緊張感がただよってくるのが感じられる。一方では講読演習の時間を、より楽しく過したいという願望も強く出て、中でもソフトボールをやりたいという希望が多くある。こうしたリクリエーション的運動や、学生同士だけで話し合う時間を適当に与えることも、より多く必要になる。

それと同時に、まじめに出席している学生程、自分の出席日数を気にして、盛んに教員に聞き出す様になる。あまり出席しない者で既に棄権した様な考えを持つものも、少数ではあるがみられるのもこの頃である。

一年必修の講読演習に失格した者は、二年次で再履修することができ、少くとも一年間に二十回以上は出席して履修する様に指導したいものである。

私もことある毎に感想を書かせ、その度に個人の名は伏せて、疑問の点に答える様にして来たが、今年は更に、私信の形で個人毎に返信を書こうと思う。

テキストとしては、私が昭和四十一年に書いた『弁証法批判の歴史』という小著を用い、世界観と現代国家の指導理念などについて述べたが、テキストが難し過ぎるので序論位にとどめ、前

期の終りにテキストについての感想文を書かせた。その中に一、二名実によく理解し、何回もくり返して読んだと書いているのをみて実にうれしかった。

ただ感じたことは、世界観の問題は言葉で述べただけで結論をつけても、それだけでは本当に分ったことにならないし、深くディスカッションする程大部分の学生は関心がないということであった。これについては、今年度は、色々と準備しようと思う。

後期は夏休み中にやったことや感想を書かせたが、セミナーの勧誘もはじまり、これについての質問・疑問も作文の中に出てきた。

人前でいえないことも、熱心に作文に書く様になり、気持が次第に深さを増して来たようである。

殊に夏休み中に遊びすぎたこと、やがて二年生になるという緊張感に、これからしつかりやらねばならぬということを真剣に書いている様子は、心強いものがあった。

また教職課程の志望者がクラスの約四分の一程あることにも驚いた。本学四年生の教育実習の参観もしたが、それぞれ態度も真面目で好感がもてた。自分のクラスからも何人か教育実習にゆくようになることを考えると楽しみである。

また教職以外の就職を志すものも、それぞれ二年生と進んでゆくであろうが、在学中は機会あ

る毎に接することになるであろうし、相談を受けることもであろうと考え、少しずつ覚えた名前と顔を一致させるようにつとめていたが、このような楽しみも講読演習を担当した一つの余徳であろう。

また時事問題についても時折話をしたが、学生は必ずしも大きな関心を示さない者が多かった。これはもっと高学年になり、就職を意識するようになるにつれ、関心が強くなるのであろう。

△学生の気質について▽

次に、学生にみられる気質の特徴的な点について挙げてみたい。

(一) 読書の方法について

多くの学生は、一つの書物について、深く意味を考えながらくり返し読み直すという様な経験が少い。日常生活の中で、物の値段の高い安いとか、交通費の高い安いといったことには敏感であるが、人生の原則といった問題には一般に無関心である。割に多くの学生が自営業を志し、店を持ちたいと念願しているようであるが、どんな小さな店でも、それを自分が運営してゆくとなると、絶えず顧客をひきつけておくことが最も大切なことの一つであるが、それがどんなに困難な事であるかということは意外に分っていない。店を持ち、店を運営する段取り、連絡、日常の業務等についての突込んだ研究もすすめねばならない。これらの事を、一寸考えて分らなければ

そのままにしてしまうのが学生の通弊であるようだ。実はこの分らない事の中に、深い色々な意味があることを知らねばならない。

語学の学習でも外国語の文章の表現する意味の真意をつかむ訓練は、広く書物を読んで意味を考える習練を積み重ねることにより、達成されることはいうまでもない。しかし、全体として何となく焦点がはっきりしないクラスの風潮の中でも、例えば夏休みの直前に、相当難解と思われる道元の『正法眼蔵』その他を机上に並べ、どれでも貸すから休暇中によむ様にいうと、それぞれに持ち帰って読んでいる様であった。

焦点はつかめないような状態であっても、絶えず肥料をつぎ込んでいる中に、一年後には作文を書く字体・文章なども少しずつ整ってくる効果もみられる。しかし中には一年近く経っても、「抱負」を「豊富」と書いている様な者もあるが、これらはその都度個人的に訂正して返却した。書物を読みながら、自分独自の感想を表現する訓練はいつでも誰でも大切なことであるが、自分独自の考えが「ひとりよがり」にならない為には、身近に親しい友達がいて、自他の関係をいつも念頭から離さない人生経験が必要になってくる。講読演習のクラスの生活も、こうした人生経験として役立てられると思う。

クラスの中に交通遣児援護財団の寮に寄宿して通学する学生がいた。小工場を経営していた父

親が若い頃の交通事故で寝たきりとなり、母親が代つて働きに出ており、一人っ子の当人は全部育英資金に頼つて勉強しており、クラスの友人四名と協力して交通遺児援護資金募集のボランティア活動に邁進していたが、学費の方も怠らず納入し、昭和五十五年度の教職課程を志望している。現在の若い世代が、表面的には無感動、無気力の時代にみえるが、この学生の寮の生活は、毎朝六時に起床してランニングその他の行事を、リーダー指導の下に行っているという。これらを見てみると、国際情勢の緊迫と共に、所謂「しらけ」の時代は次第に去りつつあるのではないだろうか、と感ずると共に、ここですます書物に親しむことの必要性を再確認させられるのである。

(二) 「時間」に対する観念について

一九一二年ノーベル生理学賞をうけたアレキシス・カレルは、その著『人間—この未知なるもの』(日本C.I.協会編・桜沢如一訳)の中で、内なる時間として生理的時間と心理的時間をあげ、これは身体の構造や体液や、生理的ないし心理的状态の不断の連続であつて、これら内なる時間は暦年上の時間単位では正しく計られないものであるといっている。また生理学者の研究によれば、人間の細胞増殖の活動の亢進が夜明けと共に始まる、所謂「夜明け現象」、また、人間の細胞内の塩分代謝の変化が、海潮の満干と関係があるという「生体潮汐現象」は定説となっている。

故に時間を測るのに「長短」の尺度と共に深浅で測る必要がある。前の内なる時間でいえば、例えばテレビの対談などで、活気横溢している談話は三十分でもすぐに経ってしまふ。また様々な難問題が次々に起った二、三日は、一ヶ月以上経つた様な感じがする。多くの学生は、九時から第一時限の授業を非常に苦にするが、定時勤務の社会人となれば、当り前のことである。勤務のためとあれば、明日の勤務に備えて前の晩つとめて早く寝るのが常識である。それが生体の自然法則にもかなっていることを自覚して、時間割をまもることと、深い集中力を以て講義を聞く修練が必要である。とかく機械的に考えがちな時間割を、より立体的に、生体リズムに合わせて考えることが、心身を学校生活に親近させることになると考える。

まして一年の成績のかかっている期末試験の時間を間違えたり、遅れたりする様なミスは、極力防ぐ様にくり返し指導したいものである。

カレルの言葉を引用すると、「内なる時間はわれわれ自身なのである。われわれ自身の「現在^い」は時計の振り子の「現在^い」のように虚無の世界に消えうせるものではない。それは意識の中へも組織の中へも血の中へも書き留められるものである。われわれは実に、われわれの生涯におこるすべての出来事を、器官や体液や精神の上に記録し保存して行くのである。われわれの身体は一つの生きている歴史である。」（一六六頁）

今日自然から遊離し勝ちな生活の中において、一心不乱に何かに心を傾けて行動することがいかに必要であるかはいうまでもない。「近代生活の便利さと生活様式が自然法を犯したのである」とカレルがいう様に、何かしら重大な反省が必要になってきていると思う。

現代人はもっとたくましくならねばならぬ、というカレルの言葉は味わうべきものがある。

「ヨーロッパでもアメリカでも、十九世紀の商界で覇をなした者らの子供は、決して環境と戦い争うことをせずにすんだために、たいがい皆先祖からの体力を失ってしまったのである。」
(二二三頁)

「何よりもわれわれの従がい守るべきは『努力の法則』である。個人でも民族でも、この大きな必要を忘れると、その罰として身体と精神の退化という代価を支払わされるのである。」
(二二三頁)

「現代の人間にとって、もっとも必要なのは神経の平衡であり、理知であり、疲労に対する持久力であり、熾烈な道徳心であって、単なる筋肉の力はその次である。」(二二三頁)

ニューヨークのロックフェラー医学研究所所員であったアレキス・カレルは、一九二九年のアメリカ株式市場大暴落の恐慌前後の道徳的頹廢に対し、苦行的な小集団の孤立を、紀律による修行によって、人間を破滅から救出することができることを強調しているが、今日に於いても傾

聴に値するものがある。

(三) 礼儀について

対象と一体となる没入感と、少数グループによる精神交流の緊密化により養われる公共心により、礼儀が保たれる。他人の話は充分に聞いてから自分の意見をいうこと、他の発言中にみだりに口を出さないこと、約束を守ること、面会は特に長上に対しては紹介を得て時間を約束して訪問すること、その結果は必ず紹介者に報告すること等は、社会生活に於いても心がけねばならぬ礼儀の基本であると考える。

技をみがくと共に心をみがくこと、和合とは単なるなれ合いではないこと、心を調伏して他と和合することは、礼の基本であること等は、決して安易な道ではないが、学生時代から心がけねばならないことである。

無限の可能性を秘めて集ってきた一年生も、修行如何では先人未踏の境地をひらくことも可能である。

△終りに▽

明治三十六年創立の本学が、創立記念日を、我国が日本海海戦に於いて露国のバルチック艦隊を撃滅した五月二十七日ときめてあることや、校名の高千穂は、天孫降臨の日向の地に今なお生

きていることや、校章は鐘と瑞穂と鶏がシンボライズされて、建国神話に深い関係のあることなどについては、名越二荒之助助教授の、高千穂学園史への証言(V)に誌されている。

明治二十七、八年の日清戦争の後の露独仏の三国干渉、明治三十七、八年の日露戦争、明治四十三年の日韓併合、大正三年第一次世界大戦により対独宣戦、そして昭和十六年対米英宣戦、昭和二十年終戦となり、我国の領土はついに明治維新当時の姿にまでもどり、人口のみは維新当時の四倍近くまでふくれ上る中で悠悠として働き、経済力は未曾有の拡大膨脹を遂げた。今日、米ソ二大強国の外に、イスラム教民族国家群の力も侮り難いものとなり、エネルギー問題は共通に存在しながら、精神文化・思想文化の対決時代へと進行しつつある。

ここで日本は建国以来、止むに止まれぬ教育教化の精神を鍛え持ち続けていることは否定し得ないものがあり、様々な困難に耐えながらもこの精神を生くる証しよとして持ち続けねばならないことを自覚するのである。

今日までそれぞれ専門の異なる教員各位が、それぞれ非常な努力を払われて、様々な工夫をこらしながら講読演習を続けて来られた事は、後輩の私も心から敬意を表しつつ、今後益々意見を交換しながら、この道を進もうと決意している。

教員の方々が専門学科であれ語学であれ、また体育であっても、時間中に話されたまた講読され

る言葉のはしばしに教員の心情が学生に伝えられるのは事実である。

仏教の中に「法城を護らむが為に」という言葉が始終出てくるが、教場で学生に接すると「法城」という語が切実に迫ってくる。

法城という城の中に、学生自身もその攻防戦に加わっていることを思い、たじろぐことなく進まねばならない。

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』

— 輪読のしをりとして —

『日本への回帰』第十六集
昭和五十六年三月刊

— 第二十五回「合宿教室」(昭和五十五年・雲仙)における講義 —

△黒上正一郎先生について▽

私は今から五十年前、昭和四年四月に旧制第一高等学校に入学し、五月に黒上正一郎先生が指導されてゐた聖徳太子の讃仰研究会である昭信会に入会し、毎週一回の校内例会に出席すると共に例会後、学校の近くにある、先生の下宿に会員と一緒に赴いては色々なお話をきいてゐた。

そこで先づ最初に先生の御略歴や人柄について述べることにする。

黒上先生は明治三十三年九月に徳島にお生れになつた。小学校を卒業されてから、徳島県立徳

島商業学校に入学された。お家は徳島の素封家、染物の藍の間屋をやつてをられ、亡くなられた父上は阿波商業銀行の頭取をされてをられ、一人息子さんと、母上がまことに信仰心の篤い懇切丁寧な方であつた。先生も同様に謙虚で親切であられると共に、信仰心の篤い意志の強固な方であつた。

十七、八歳の頃既に独学で、親鸞、聖徳太子の深い研究を始められたやうだ。二十歳で徳島商業を卒業されて阿波商業銀行に入られ、二十五歳で退職され二十七歳でもう講演を始められてゐる。大正十五年に二十七歳で東京帝国大学教育学部教育学教室に於いて「聖徳太子の研究」といふ講演をされ、昭和三年以降第一高等学校の瑞穂会といふ文化団体で「聖徳太子の人生観と日本文化」といふ連続講義をされたのである。それが縁で指導教官の沼波瓊音その他と交はれ、親友であられた一高生の梅木紹男先輩とも協力された。そして瑞穂会で黒上先生の連続講義を聞きに行つてゐた数名の一高生と一緒に昭和四年に一高昭信会といふ会を作られ、同時に相前後して当時の高等師範学校に副島羊吉郎氏、廣瀬勝雄氏らと共に信和会を作られた。この間の事情は、小田村寅二郎著『昭和史に刻むわれらが道統』に詳細に載つてゐる。

黒上先生の印象は背が高く色は青白く弱さうであつたが、骨格はがっちりとした方で手紙や原稿など非常に力を入れて大きな字で書かれた。歌も沢山作られ、手紙や葉書によく書いていた。

いた。

非常に丁寧で親切で、目が澄んでゐて、一緒に対座してゐると吸ひ込まれるやうであつた。銀行に五年勤められた時も、対人関係はきちんと細心になさつたであらうし、いはゆる学者ぶるところは全然ない方であつた。しかしながら「志」の立て方の問題になると、自分のみの修業とか人格完成のためなどといふ心を持つてゐると直ちに看破され、親鸞の本を持たせてご自分も同じ所を読み乍ら、その心情をきつく叱られたのである。

先生は親鸞の浄土真宗の信仰を近角常観師ちかくじょうくわんから伝へられ、思想は三井甲之先生から教へられた。三井甲之先生の著書『明治天皇御集研究』の終りに載つてゐる研究方法を黒上先生は聖徳太子研究の中に必死の努力で導入されたのである。この箇所は非常に難解なところで先生は甲府の三井先生のお宅へ泊り込まれ、夏の最中、蚊帳を頭からかぶつて二時間位仮眠をとるだけで勉強し細部にわたり質問をくり返されたと、三井先生は追悼の長詩の中に書いてをられる。

畢生の著作『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』は、かうして日夜先生の手によつて書きつゞられ昭和五年九月徳島で先生が亡くなられた直後に、影の形により添ふ様に先生につき添ひ、原稿を整理しつゝあつた一高昭信会新井兼吉先輩の整理と黒上家の御援助により、謄写刷の本として発行され、これをテキストとして読み合せし乍ら一高昭信会は活動をつづけたのである。

この本はその後昭和十年には黒上家の御援助で立派な装丁の本となり戦後、国民文化研究会の手により註釈付の現在の本となり、全国の同志諸君の協力により読み合せがつゞけられてゐる。

国文研叢書『いのちささげて』『続いのちささげて』にはその後、かうした思想運動に命を捧げた若い人々、戦士の憂国の思ひがつゞられてゐて、聖徳太子の精神は絶えることなく伝へられてゐる。

黒上先生に生前お目にかゝれなかつた友らも先生の教へを慕ひ、わざわざ徳島にある先生のお墓に参る人も絶えない。

左に掲げる碑文は先生のお墓の横に立つ石碑の一部である。

為^レ人温雅^{ニシテ} 而^ハ恭儉事^レ長交^レ友藹然^{トシテ} 有^ニ情誼^一。 体本不^ニ強健^一 而^ハ好^レ学^ヲ 求^レ道之篤^ヲ 数々^シ廢^ス寢食^一。 友人或^ハ恐^ニ其傷^ニ 生勸^一 以^ニ少^ク休養^一、君不^レ介意^セ。 遂^ニ獲^テ病不^レ起^タ。 可^レ謂^レ殉^レ学^一。 人となり温雅にして恭儉長に事へ友と交はり藹然として情誼あり。 体本強健ならざれども学を好み道を求むること之れ篤く、数々寢食を廢す。 友人或いは其の生を傷けんことを恐れ勸むるに少しく休養を以てするも、君意に介せず。 遂に病を獲て起たず。 学に殉ずと謂ふべし。

右は徳島市佐古清水寺内の黒上先生の墓石の横に建立された丈余の石碑「黒上君之碑」五二〇

文字（対南岡本由撰併書）より、本会副理事長小柳陽太郎氏が墓参の際写し取つて来られたものであるが、黒上先生のお人柄がまことによく誌されてゐて、今尚、先生に接してゐた当時の思ひ出が蘇つてくる。

「長に事^つへ友と交はり藹^{あい}然^{ぜん}として情誼あり」といふ藹然としてとは「おだやか」「まめまめし」といふ意味であるが、先生は先輩・友人・弟子それぞれに對し、本當に手厚い交りをされた。「世法を捨てず」といふ懇切さが、相手に伝はつてくるのであらうか、当時の学園に吹き荒れてゐた共產主義運動の嵐の中で、いつも先生の周辺には、和やかな雰囲気が漂つてゐたことは事實である。「和を以て貴しとなす」といふ聖徳太子の御言葉が、先生の口を通して語られると、その言葉がそのまま周囲を支配する、その雰囲気の中に私共は融け込んでいつたのである。

先生は五十年後の今日人生の帰趨に迷つてゐる日本民族の現状を予想されてゐたのであらう。その語られる言葉の中に「人生の帰趨」といふことが何度となく出て来て、「きすう」といふ発音が今でも私の耳に残つてゐる。

三井甲之先生はその永訣の書である『平和の大海に注ぐ一滴の水』（三井甲之遺稿刊行会）の中で、「ゲーテは、独逸哲学の末路を予言してをつた」と書かれてゐるが、ゲーテの詩魂はシュペングラーの『西洋の没落』からナチスにいたつても完全にうけ継がれぬまゝ今日に及んでゐる。その

終末、カタストロフィを予見した親鸞の教行信証の精神伝統は、遠く聖徳太子にもさかのぼることが出来る。

今日私などが黒上先生のことを語るのは、単なる思ひ出話などといふものではない。

黒上先生は今も我らの先頭に立たれて、太子のみ教へを説きつゞけて居られるのである。

碑文の中に、黒上先生が身体が強健でないのししばば寢食を忘れられたと書かれてあるが、当時昭信会に集つた一高の学生の中には、先生の下宿を訪れて徹夜で質問した者もゐたのを覚えてゐる。かうした事が先生の健康を損つた原因であつたが、当時の先生の心境は、何かしら天地自然と一体になられた大乘菩薩に通ふものがあつた様である。「私はいまかうしてゐることが一番楽であり、楽しいのだ。苦しいことはない」といはれてゐた。その志操の高さには今日益々至り難いものを感じてゐる。弟子として、もはや我々の及ぶところではないと諦めるのは「道」ではない。

微力乍ら力を出し合つて協力してゆくのが今日の我々の任務であり、太子のいはれた「四生の終帰、萬国の極宗」である。

当時のマルキシストの学生も、共産主義革命は我らの手でといつた気負ひを以つて、寮の二階の寢室に消灯後もローソクを立て、『資本論』などを読みふけてゐた。今日ソ連を中心とする共

産主義諸国の生産の上らぬ窮状をマスコミも認めてゐる現状では、学生連中もその当時の様な情熱を傾けてマルクスの事をよむ熱意が湧かないのは当然であらうが、それだけに若者の無気力が今日では問題である。

黒上先生のかゝられた結核も今日では不治の病ではないし、アメリカ軍の手によつて、日本に小作制度が無くなつて共産党は小作争議を煽動出来なくなつた。労働環境も戦後三十年で大いに改善され、科学技術は世界一流の域に達した。これから先は、人間の心の連絡、継承、無窮の生命をさとり、覚らしめつゝ易姓革命、闘争革命の残酷破壊活動に対して、和の精神の相統開展に身心を捧げる活動が展開されねばならない。

こゝに黒上先生が聖徳太子の御精神御教示に全身心を捧げて迫つてゆかれた意義があるのであり、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の一書を書き残された意義があるのである。

聖徳太子の研究書は色々あるが、太子がお書きになつた文献、憲法十七条、三経義疏(勝鬘、維摩、法華の三経の御釈)の内容を究め、その文献文化史的研究は、一部の註釈書以外には黒上先生の御著書のみといつても過言ではない。

△三経義疏にみる聖徳太子の御思想▽

黒上先生の思想的師であられた、三井甲之先生はその前掲の著述『平和の大海に注ぐ一滴の

水』の中に、聖徳太子について、左の如くいはれてゐる。

『維摩経『方便品』に居士（維摩居士）の大徳を讚し『心大如海』とあるを大陸諸師がいつれも、其心境の廣大をいふとなせるに對し、『萬機に達して遍照せざることなしと明かす』と國民的實生活に徹入して積尊の世界的宗教をその教義から解放して四生の終歸、萬國の極宗としての仏法僧の三宝を現實國民生活に密着せしめ『大陸思想は太子の御心に於いて、その生命化の郷土を見出したのである』と黒上正一郎氏はその主著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の中でいつてをる」

右の文章はまことに重要な点を指摘されたもので「心大いなること海の如し」といふ維摩経に出てくる在俗居士である維摩居士の心境を、支那大陸の仏教の有名な諸師達が、たゞ抽象的に心境が海の如く廣大であると讚嘆するだけであるのに對し、太子の御積は「菩薩の大悲心は萬機に達して（すべての人々のもろもろの機根に通達して）遍ねくすべをさめ照してゐる」と表現せられ、そこに具体的現実的なる太子の、天皇の摂政としての國家統治の御活動が表現されてゐる事が記されてゐる。

第二次世界大戰に於いて、ドイツは國を挙げて戦ひつゝも、その国歌が示す、ドイツチュラン・ユーパー・アルレス（ドイツは凡ての上に）といふ思想が相手の反撥を誘発して、共感共鳴

の世界を実現出来なかつたが故に、東西に分割されてしまつたのは歴史の示す通りであつて、これは悲劇といふ外はない。

大正六年(一九一七年)ロシア革命が起り、その思想宣伝の波が日本に押しよせ、日本の国体の変革を実行しようとする思想運動が、昭和のはじめにかけて猛烈に行はれた。その勢は当時私達が学んでゐた高等学校、大学に根強く及んでゐたのは歴史の示す通りである。

黒上先生が第一高等学校と高等師範学校に、昭信会と信和会を創立され、著述に講義に昼夜を分たず、病身を省みず努力された御精神は、今頃になつて漸く分りかけて来たのである。

黒上先生が長上に対してはどこまでも礼儀正しく、しかも志は高く、宇宙人生に徹入する雄々しさを持つてをられた事は、御著書の到る処にみられるのである。

最近私は同志と共に、聖徳太子の勝鬘経義疏の研究を行つてゐて、勝鬘経を中心となす如来蔵の意義について、仏教辞典に従つて「真如の煩惱中にあるを如来蔵といふ」「如来の性徳が煩惱の為に隠覆されてゐるのを如来蔵といふ」などと解釈して、低迷してゐるとき、もう一度黒上先生の御著書をよみ通してみた。

すると四十四頁から四十五頁にかけて次の如く書いてある。

「即ち宇宙人生は如来蔵であつて、法身と生死と、感覚と靈性と、それらは分離すべからざる

全一的存在である。こゝに八地の菩薩が一念の中に萬善を修めて、一切の衆生と感応交通し、現実世界の裡に仏陀の至徳を開発せしめ、又別体三宝に即して一体三宝を仰ぎ、動乱萬差の実人生に眞実生命の一道を実現する如きは、即ち宇宙人生の眞相に隨順する宗教的大道の実修となるのである。」

右の文章で如来藏は宇宙人生であるといひきられてゐる。簡明直截の表現は先生の志操の高さを示してゐる。

また今度の講義レジメに引用した第一編「聖徳太子の人生觀と政治生活」七十四頁七行目から「勝鬘經義疏」(一乗章)の中の太子のお言葉

「仍ほ大小を弁ぜば、自ら度せんことを求めず、物を濟ふを先と為して仏果に等流するを稱して大乘と為し、物を化するを患と為し、但自ら度せんことを求めて、彼の無実を藏するを名づけ、小乗と曰ふ。」

について説くと、「なほ、大乘小乗の區別についていふと、自らのみが救はれることよりも他を濟度することを先として、他と共にひとしく、仏の教へに歸入しようとするのを大乘といひ、他の衆生を教化することをわづらはしく思ひ、此の世をはなれた、実体なき空想世界であるところの彼岸(彼とは「彼岸」のこと)を藏し(好み)、これに執着し、これに心ひかれ、他を救はん

としないのを小乗といふ」といふ意味である。煩惱は消滅しようと努力はしても之を消滅出来るものではない。これを消滅しようとのみ努力するのでなく「大士はその身の苦を忘れて苦を同じうして化す」といふことを、太子はくり返し三経義疏の中で説かれ、黒上先生もこれを説かれるのである。

△聖徳太子の寺院建立の御事業について▽

黒上先生の御著の中で最近気付いたことは「太子がその一代に建立し給ひし寺院の数は比較的
多からず」といふ点で、宗教教化の道場に社会救済の事業を兼行せしめられた御業績について述べられた点を、御著の中から引用して(二十八頁〜二十九頁、「聖徳太子の体験過程」感想を述べてみたい。

「太子がその一代に建立し給ひし寺院の数は比較的
多からず、又その建立寺院には頗る異説多く之を悉く明確にすることは出来ぬのであるが、法王帝説には『太子七寺を起す』として『四天王寺、法隆寺、中宮寺、橘寺、蜂丘寺、池後寺、葛木寺』の七箇の寺の名を挙ぐるのである。太子の造寺造塔は決して単なる外的功德崇拜のためではない。四天王寺は対外関係の必要と共に、当時外交の関門たる浪速の地に建立せられたともいはれるのであるが、又其の伽藍には敬田院を中心として療病・施薬・悲田の各院を置かれ、宗教教化の道場に社会救済の事業を兼行せしめた

のである。又法隆寺は学問寺として、毎年法華等三経を講説し、又仏教習学の子弟を養育せしめ、これら寺院に各々実質的意義を帯びしめ給うたのである。

同時に堂塔建立を中心として信仰に基く文教芸術の振興に尽させたまひ、法隆学問寺の如き永遠に国土を莊嚴にして衆生を薰化する偉大の建築の出現は、また太子の指導精神にもとづくことを考証さるゝのである。仏像彫刻に於いても鳥仏師一派を始め、優秀の製作が残され、彼らは帰化人であつたけれども日本の朝廷につかへ、大和の自然に親しみ、殊に太子の御指導のもとにその芸術的行業を励みしものである。その形式は三韓を介して支那南北朝の様式をつたへたものであるけれども、法隆寺本尊・薬師仏・夢殿觀世音・中宮寺弥勒像の如きに於けるその光背の火焰の揺らぐが如き生きたる力、またその尊容の朗かにしてかなしき緊張をたゞふる微笑との対照は、永く太子を中心とする時代の精神生活を象徴するのである。」

右の文章にみられる緊張した調べは、太子の堂塔建立のもつ宗教学術芸術的意義を力強く伝へてゐる。

そして太子が自ら僧侶と儒生を指導せられ、勅を奉じて、宮中に於いて經典を講説し給ひ、「親しく執政の任に当る群臣の心田を開化し給ふたのである」と書かれてゐる。さらに黒上先生は法王帝説に太子御講経の相状を述べた箇所、「戊午の年四月十五日、少治田天皇、上宮王に請

ひて勝鬘經を講ぜしむ。其儀僧の如く也。諸王公主及臣連、信受して嘉せざる無し。三日の内、講説^を訖る。」とあるを引用され、摂政の太子にして又僧の如くあられたことが「真俗相依の理想を實現せられたものである」と述べられてゐる。

今日伝へられ、日本の高額紙幣にも印刷せられてゐる聖徳太子の尊像は、僧形でなく、衣冠束帯のお姿である。非僧非俗といはれる所以であるが、日本の現代の政治家とは比べものにならない格調の高さといふ外はない。

いま右に述べた非僧非俗といふ言葉も、表面的に解してゐると所謂どちらつかずといった一知半解に陥る恐れは充分にある。勝鬘經にいはれる煩惱藏にまつはりつかれる如来藏といふ表現も、概念にとらはれるといつまでも真実がつかめない、堂々めぐりに終始して開展しない。黒上先生がそれを断ち切られて、如来藏とは「宇宙人生」であると喝破されたことは、並々ならぬ思想体験から発せられた表現といふ外はない。

太子は「十七条憲法」の中で「私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり」といはれた。公に向ふ心、静止せず流動し躍動し向つてゆく、きりひらいてゆくところこそ、生きてゆく人間の心である。偉大なる教へに心打たれ、芸術作品に心打たれ、或時は迷ひ、或時は怒り悲しみに打ち沈む、それが生きた人の心である。固定した心は死物であるとは、本居宣長も論じてゐる。それ故に、

太子は同じ十七条憲法に「信は是れ義の本なり、事毎に信あるべし。」といはれた。「事毎に」とは、つねにゆれ動く生きた人間の心をつかりと見透しておいになるお言葉である。

宗教の開祖は発明者ではなくて改革者であり、精神の開展を示すコトバが文明の原動力であり、滅亡しない文化財であると前掲の書の中に三井先生は説かれてゐる。

憲法十七条は特に朝廷にあつて行政の任に当る諸官吏を主な対象として述べられたもので、礼を重んじ、訴訟を公正に行ひ、嫉妬し合つてはいけない等々、世俗の事を直接とりあげ乍らも、「和を以て貴しと為す」「篤く三宝を敬へ」「事毎に信あるべし」と信仰思想を貫かれてゐる。真俗相依とは、かうしたことをいふのであり、太子の寺院建立の御事業にはかうした御精神が充ち溢れてゐたことを見逃してはならない。

△山背大兄王御一家の御最期について▽

推古天皇三十年（六二二年）聖徳太子は四十九歳を以て全国民哀悼の中に薨去された。

それまで太子の御威厳により抑へられてゐた蘇我氏はまた専横のふるまひをはじめ太子薨去後六年にして推古天皇崩御と共にいよいよその勢を揚げ出した。推古天皇の後を継ぐ方は、聖徳太子の嫡子山背大兄王が最も自然な順序の方であり、推古天皇の御遺志もそこにあられることを山背大兄王も承つてをられるのに、馬子の死後大臣となつた蝦夷は画策して敏達天皇の皇孫田村皇

子を推戴しようとして、推古天皇の遺詔を故意に歪曲しようとした。山背大兄王は自分は決して皇位をむさぼらうとするものではないが推古天皇の遺詔を下された時、数十人の人がお側にをり、田村皇子も側にをられたと主張された。しかし蝦夷とその子入鹿はあくまで田村皇子を推し、多くの群臣は蝦夷の言に追隨した。しかし山背大兄王に味方する者もあり、馬子の弟で聖徳太子の恩顧を蒙つた境部摩理勢は山背王を奉じて蝦夷、入鹿と一戦しようとしたが、山背王は父聖徳太子の遺戒「諸悪莫作諸善奉行」を守つて皇位を争はうとはされなかつた。しかし摩理勢は蝦夷に反いて殺された。

そこで田村皇子が即位され舒明天皇となられ、蝦夷、入鹿の勢は益々強くなつた。

天皇は十三年後に崩御なされ舒明天皇の皇后が即位されて皇極天皇となられた。天皇の即位元年に、蝦夷は自分の祖先の廟を立て、天皇のみが行はれる八佾舞を行ひ、天皇の御陵にまさる立派な墓を二つ造つた。一つは大陵で自分のため、一つは小陵で入鹿のためのものである。その造営に上宮王家の領民を使役して山背大兄王の親族の方が激怒されたので、反蘇我的空氣が次第に強くなり、山背王への同情の念が周囲に強くなり、蘇我氏にとり山背王が次第に邪魔となり、つひに無道にも入鹿は、皇極天皇二年に突如兵を出して斑鳩に山背王を攻めた。王は一時生駒山に逃れ、また斑鳩寺に帰られた処を再び入鹿に攻められた。

山背王は最後まで父上聖徳太子の御精神を体して、一身の故に万民を勞することは本意ではない。「吾が一身を入鹿に賜ふ」といはれて、王はじめその妃妻、子女悉く自害され、上宮王家は全滅した。

山背大兄王子御一家の御最期については後世史家が色々な私見を加へ、特に現代の著書の中には読むに耐へないひどい議論をしてゐることもあるが、吉川弘文館発行の人物叢書『聖徳太子』に東大名譽教授坂本太郎博士が書かれてゐる記述は史書に正確にしかも深い心情をこめて山背王の御最期を記述してをられるので左に紹介したい。(右の書の二一頁から二二三頁にかけてその事が書かれてゐる。)

まづ坂本氏ははじめは、山背王はなぜ自分の一族の中誰かはこの世に残して、上宮王家の跡を絶やさぬやうに心がけられなかつたかと思つてゐたが、それは煩惱を絶ちきれぬ人間の凡慮であり、大乘仏教の教へを太子から受けた山背王はもつと深遠な宗教心から一身一族を法のために捨てられたものと気付いた。これは聖徳太子も講義なされ、注釈書も出された「勝鬘經」撰受正法章にある通り、勝鬘夫人が仏陀に向つて撰受する善男子善女人は法の滅せんとするときは、身、命、財の三種の分を捨てることを誓ふと誌された通り、山背王は実践されたとみるべきだとされてゐる。

蘇我氏の専横がその極点に達した時、山背王一族の捨身は國中を覆つてゐた暗闇に一すぢの光明をきり開き、二年後に、蝦夷と入鹿は中大兄皇子、藤原鎌足らにより誅せられ、蘇我氏は一挙にその権力を失ふのである。

逆に上宮王家は滅亡しても、残された教は藤原頼長、源実朝、道元、親鸞、山鹿素行らを中心に信承されて今日尚若い人々にまで伝はつてゐる。

また大工、左官、鍛冶屋などの工匠たちの間に（室町時代の末頃からといはれる）民間信仰として太子講の組織が伝へられてゐる。

大正十年に太子の一千三百年御忌の法要が営まれ、聖徳太子奉讃会に発展したが、まことの太子奉讃は太子のお言葉に直接ふれ直接仰ぎ、人生の道として心に刻みこむこと以外ない。以上が坂本太郎博士の論述の大略である。

さて前掲三井甲之著『平和の大海に注ぐ一滴の水』にホイットマンの言葉として次の言葉をあげられてゐる。「民族の興廃を決するものは結局、かれらがいかに死に面するか、いかに苦痛と病氣にたへるかといふに帰するからだ」「戦争の実相はつひに書物には載らないだらう」「宗教は『人類の詩歌』である」。

同書十頁には更に「ことばの科学と宗教」と題し、次の如く記されてゐる。

「聖徳太子の十七条憲法や三経義疏を読むと驚きと共に希望の光明をみとめ確信を得て安心立命する。日本人として今日の運命におかれたことに素直に従はうとする。この憲法も義疏も漢文であるが、これらを漢文としてでなく、日本語として取扱ひ得るといふことに意想外の意味があるのである。」

「聖徳太子といへば太子建立の法隆寺は名高く内外一般に知られて居るが、太子の憲法や義疏は専門家の外には余り問題にされない。コトバは焼亡しないから文化財として、これを重要視したい。」

○

日本には建国以来うたを中心とする言葉のつながりが絶えない。

最後に黒上先生が数へ年二十一歳の時に詠まれた和歌を左に引用する。

手紙のはしに

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし

みことばにつながりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび

こののぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのこゝちするかも

あゝ一信海われもつながらむと求むるこゝろそのこゝろにこそわれは生くるか

ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

右の歌は伝聞するところによると京都に住んでをられた原理日本につながる聖徳太子研究家井上右近氏を訪問された時の歌である。「あひまつりしその日」とはそのことを指してゐる。

大正時代は表面は朝鮮、台湾、樺太にまで伸びた領土をもつ帝国であつたが所謂大正デモクラシー、ロシア革命思想によつてゆるみが見えはじめ、一方には『アカネ』『人生と表現』『日本及び日本人』といった雑誌の詩歌欄を中心に深い思想をさぐる精神の緊張と苦悩が味はれる時代であつた。殊に朝鮮の如く比較的新しい領土の行政は内地の思潮を反映して独立運動が早くも潜行してゐた時代である。

千三百年前聖徳太子が当代大陸の思想學術を究明せられつゝ隋との国交、三韓との国交に努力された御精神が、若い学徒の協力研究によりしきしまのみちを中心再生したのは、日本民族の生命の若さであり、威力であつた。しかしそれは名利をなげうつ志の承継であつて、太子のいはれる「信」である。昭和二十年の敗戦により、我国は明治以来得て来た領土、朝鮮、台湾、樺太から、従来からの領土であつた千島四島、沖繩までを悉く失つた。沖繩は後に米国から返還されたが、他は独立国となり又千島は未だにソ連が占領中である。その間三十年にわたり日本人はたゞひたすら働いた。そして経済大国などといはれる様になつたが、独立国としての精神文化は未

だ混乱状態である。

我らは益々精進して太子の御言葉をくり返し唱へ究めてゆかねばならない。

合宿詠草（昭和五十五年第二十五回「合宿教室」）

『日本への回帰』第十六集
昭和五十六年三月刊

霧雨のはれまをしばしなく蟬の声たかまりて夕かたまけぬ

友らみな妙見岳にいでゆきて宿静かなる午後の一とき

み霊まつり夜にひかへてくさぐさの思ひ出わきくる一人しをれば

亡き師の君よろこびまさむ今年もまたあまたの友ら集ひしさまに

みたままつる心ひとすぢつとめきしこの年月は短かかりけり

「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌

『国文研会員の感想文集』
昭和五十五年九月刊

講義、班別輪読、班別討論、和歌創作、和歌相互批評等、今度ぐらゐ寸分の障なく行はれたこととはなかつた。私は「班付」を受持つて、久し振りに一つの班（女子班）の内部に心をくだく日々を送つたが、この体験は得難いものがあつた。班長の心づかひもよく分つたし、班員同士のこと

まやかな精神交流も私の想像以上のものがあつた。

日本人としての自覚、国を守ること、これらのことが「概念」から「実感」にうつり変つてゆく体験は、若い学生諸君の感想発表にも十分あらはれてゐた。私はたゞ有難いと感ずる外はない。そして今度こそ、本当の勉強に打ち込まうといふ決意が湧き上つてきた。

合宿の朝の集ひに流れくる小学唱歌のしらべなつかし

わきおこるみくにのいのちさながらに健かなるかな小学唱歌

春秋の野山のさまもうかららの深き情も歌ふこの歌

とこしへのみくにのいのちつらなりて身ぬちに感ずこの朝毎に

友らみなくにまもらむと誓ひつゝ山を下りゆく朝とはなりぬ

慰霊祭献詠

ことなしとゆるぶごころをあやふしといましめたまふ大御歌はも

うつそみのいのちのかぎり大君のみことかしこみゆきし友らよ

しきしまのみちはいよいよはしくて亡き友おもふ日毎夜毎に

ますらをの心ふりおこしすめぐにの道まもらむとちかひまつらむ

〔国〕民同〔胞〕
昭和五十五年十月号

昭和五十六年～五十八年（七十歳～七十二歳）

信時潔先生を偲ぶ（一）

『国民同胞』
昭和五十六年三月号

年を経るごとに思ひ出されてならないのは、国民文化研究会で歌はれてゐる、三井先生作詞「神洲不滅」「進めこのみち」の作曲者である信時潔先生のことである。

今まで何度か合宿などで断片的に話して来たが、まとめて文章にしたいといふ気持が近頃切々と動くままに拙文をものすることとした。

昭和十五年五月に、現在の国民文化研究会の母体であつた日本学生協会が設立され、その会の会歌といつたものがほしいといふことになり、作詞を三井甲之先生に御依頼して、「神洲不滅」と「進めこのみち」を作つていただいた。そこでその作曲をどなたに御依頼するかといふことになつて、当時「海行かば」の曲で全国にその名声が高かつた信時潔先生に御依頼しようといふことになつた。

「海行かば」の歌の原典は次の通りである。

万葉集卷十八 大伴宿禰家持作

陸奥国より金を出せる詔書を賀ぐ歌一首、短歌を并せたり

葦原の瑞穂の国を 天降り 領らしめしける 天皇の 神の命の 御代重ね 天の日嗣と 領らし来る 君の御代御代 敷きませる 四方の国には …中略… 大伴の 遠つ神祖の その名をば 大来目主と 負ひ持ちて 仕へし官 「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なぬ 顧みはせじ」と言立て 丈夫の清きその名を 古よ 今の現に 流さへる 親の子等ぞ …下略…

右の通り、大伴家持の歌の中から取った、

海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の辺にこそ死なぬ 顧みはせじ

の言葉に曲をつけられた、莊重にして厳肅な信時先生の曲は、昭和十五年当時は日本全国を風靡し、当時進行しつつあつた支那事變の戦死者の鎮魂に式典に奏せられてゐた。それ故、私共が三井先生の作詞になる「神洲不滅」「進めこのみち」の作曲をまづ信時先生に御依頼しようと思つたのである。

東京音楽学校で先生の教へ子であつた私の従姉の紹介でお目にかかり、三井先生の歌詞をお見せして作曲を快諾されたのも、三井先生と信時先生の精神の感応交流があつたと信ぜざるを得な

い。

曲は間もなく出来上り、それを当時の本郷正大寮に持参し、数名の幹部学生と一緒に歌つてみたが、全体として曲が弱いといふので改作をお願いしてくれといふことで、今から考へると大変失礼だったと思ふが、私がまた信時先生を訪ねてお願いした。

先生は黙つて私をピアノのところまで連れてゆかれ、大きな手で鍵盤を一挙に叩かれて、「神州不滅」の曲の最後の方の「しんしゆうふめつ」といふ所を弾かれた。

その威力とピアノ（たしかドイツ製であつた）のよくひびく音がズシーンと腹にこたへたところへ、「どこが弱いのだ」と一喝され呆然となつた私に、今度はおだやかな口調で先生はいはれた。「私は大人ですから怒りませんが、歌唱の方のよい先生を紹介するからよく練習して来なさい」といはれ、当時東京府立一中の音楽の先生で「城ヶ島の雨」その他の作曲で高名であつた梁田貞氏に歌唱を、伴奏には東京音楽学校教授で当時のオルガンの奏者として有名であつた真篠俊夫氏を紹介された。専門家にきいてもそれは正に豪華メンバーだと驚嘆される程のものであつた。そして梁田先生のお宅に小生外二、三人で伺ひ、そこに真篠教授も来られて伴奏していただき、新らしく出来た「神州不滅」と「進めこのみち」を正式に教はつた。お二人とも「実に立派な曲だ」と賞讃された。そこで改めて信時先生にもお礼に伺ひ、銀座の録音所で真篠先生のピアノ伴

奏で、梁田先生と我々の合唱で吹き込んだレコードを作り、これを八月に予定してゐる菅平大合宿で教へる様に準備したのである。

その後何遍となくくり返し歌へば歌ふ程心にしみ込む信時先生の曲の力強さが分つてきて、このこと改作をお願ひに行つた私の行為が恥ぢられてならない。信時先生の曲は何べんも歌つてゐるうちにその良さが分つてくるのだとは、専門家の間でもいはれてゐることを四十年後の今日でもきいてゐる。

信時潔先生のごことは音楽の友社刊の標準音楽辞典には次の如く記載されてゐる。

信時潔 一八八七年(明治二十年)京都に生れ、一九六五年(昭和四十年)東京にて死去(七十八歳)東京音楽学校本科卒業後ドイツに渡りゲオルグ・シューマンに作曲師事、一九二三年(大正十二年)から一九三二年(昭和七年)まで東京音楽学校作曲科教授、一九四二年(昭和十七年)日本芸術院会員、一九六四年(昭和三十九年)文化功労賞受賞

作品 カンタータ(交声曲) 海道東征

歌曲 海行かば、沙羅、小倉百人一首より

ピアノ曲 木の葉集、日本俚謡集、六つの舞謡曲、チェンバロのための東北民謡

ドイツ古典派の手法の中で日本的な堅実、厳粛、素朴な歌曲を多く書いた。

と誌されており、残念ながら「神洲不滅」「進めこのみち」、また当時日本学生協合理事長であった田所広泰先輩から御依頼した、支那事変の最中、満蒙の地で戦死なされた北白川宮永久王殿下の御歌に作曲されたもの等は載せられてゐない。

右の辞典の中にあるカンタータ「海道東征」は、神武天皇の御東征を歌つた四十分にわたる大合唱の大曲で、昭和十七年頃ラヂオを通じてその力強い曲が巷に流れてゐたのを記憶してゐる。その頃、御東征の「征」を嫌つて「還」の字を敢へて使ふ思想傾向があつたにも拘らず、「海道東征」と名づけられた根底には、日本歴史の、伝統的生命に信順されてゐた信時先生の御精神が感得されるのである。

信時先生は日頃、自分の作曲の曲想についてつねに左の如くいはれてゐた。「私の作曲のすべで、の曲想は、あの明治時代の天長節（現在の天皇誕生日、当時は毎年十一月三日）の日に、晴れわたつた日本の大空の何ともいへないさはやかで荘嚴な感じである。」と。ちなみに、私の親からいひ伝へられてゐるが、明治時代の十一月三日当日は殆んど雨が降らず快晴であつたといふ。これを語られる信時先生の姿は今なほ思ひ出されるが、限らない憧憬の眼を天井に向けて、心をこめて話されたのである。

当時の莊重な天長節奉祝の歌といひ、明治天皇の御治世の歴史といひ、仏典に出てくる「如来

蔵」の実内容の如く、日本の国がこの世に存在してゐることを限りなく仰ぎ、謙虚で力強い信時先生の残された数々の名曲に籠る命をうけつく、我らの幸を思はないではあられない。

遺影に見られる如く、信時先生は眉毛太く濃く、古武士を思はせる風貌であつたが、お生れが京都であつたせゐか、関西なまりで言葉はやはらかく謙虚で、右の辞典の中で、「日本的な堅実、厳肅、素朴な歌曲を多く書いた」といつてゐるが、人柄も全くその通りであつた。

「海行かば」「神洲不滅」「進めこのみち」等の歌と曲を与へられた我らは、今後も艱難に撓まず、共に歌ひ励まし合ひつつ祖国のいのちともろともに戦ひ進まねばならない。

神 洲 不 滅

三井甲之先生作詩
信時 潔先生作曲

ふごそかに力強く ♩ = 約84

mp

1. ス メ カ ミ ノ ミ ハ ル カ シ マ
2. し さ し ま の や ま と し ま ね
3. ツ ミ ユ カ バ バ ミ ツ タ カ バ

mf

ス ニ ネ
コ カ マ
メ タ マ
ノ ム ユ
ク ツ カ
ニ ム パ
メ ム ク
メ ム ナ
ル ヤ ム
ク の ス
ナ の カ
バ と パ
ラ う ネ
コ ハ ム

ナ パ ラ ハ ヤ ヘ ノ シ キ ナ ミ ヤ
ほ さ ら の み こ と と か し ナ ミ カ
ラ ム ユ カ バ バ ム ナ タ バ ナ

昭和56年 (70歳)

レ一ハガノシホノホアヒソソ
 一りみサすミタミノイメコチモン
 ナ一グタツ

コクニホンワコレゾタアル
 コクニホンワレラマラニム

レ ンシュウ フ メツ ワ レラ ハ シ ン ズ
 し んしゅう ふ めつ わ れら は し ん ザ
 レ ンシュウ フ メツ ワ レラ ハ レ ン ズ

進めこのみち

三井甲之先生 作詩
信時 潔先生 作曲

いさしく ♩=約108

1. ス ス ノ
2. か む の

コ ノ ミ チ ヒ ト ス ラ ニ 一 マ ス グ ニ ス ス ノ
ひ ら き し こ の み ち を 一 み た み は す す む

カ ミ コ ロ リ ナ ガ マ レ ル ミ チ コ ノ ミ チ
み ほ る み の ま け の ま に ま に み た み ら

昭和56年 (70歳)

ソ は ナ マ タ ガ ル ノ ナ ナ ニ ア リ ト
み と か へ り み ず え い き け ゝ の

モ ト ス ク イ キ の リ タ タ ク モ ナ ハ シ
コ コ 1 5 6 ち と と ろ と も

ヒ に ー タ タ カ ヒ タ タ カ
に ー た た か ひ た た か

ヒ ス ス ム ベ シ ー
に す す む べ し ー

神洲不滅

(一)

皇神の見はるかします
四方の國めぐる海原
海原は八重の頻波
八潮路の潮の八百会
祖國日本こゝにぞ立てる
神洲不滅われらは信ず

(二)

しましまの大和島根に
語り継ぐ祖先の伝統
大君の詔畏み
願みず進む皇軍

祖國日本われらの肩に
神洲不滅われらは信ず

(三)

海行かば水漬くかばね
山行かば草むすかばね
空行かば散るさくら花
さゝげたりみ民のいのち
祖國日本われら守らむ
神洲不滅われらは信ず

進めこのみち

(一)

進め斯道一向に
真直ぐに進め神代より
定まれる道斯道を
さまたぐるもの何ありと
本末切りて打ち払ひ
戦ひたたかひ進むべし

(二)

神の開きし斯道を
み民は進む大君の
任のまにまにみ民らは
身を願みず永久の
祖國のいのちともろともに
戦ひたたかひ進むべし

信時潔先生を偲ぶ（二）

『國民同胞』
昭和五十六年七月号

今年三月の『國民同胞』に信時潔先生を偲ぶ一文を書いた。東京都国分寺にある先生のお宅に、御令息信時次郎氏（日本画家）が御家族と共に住んでをられ、亡き先生が住んでをられた一棟はそのまま保存せられ、ピアノも原稿も保存されてゐる。三月号に掲げた遺影も信時次郎氏から拝借したものであるが、その外に昭和四十年八月、心筋梗塞で急逝された当時のお話や、御生前の御生活についてのお話を伺へば何ふ程、故信時潔先生のお人柄の深さと卓見に心打たれる外はない。

殊に晩年には「古事記」の作曲に没頭され、その原稿は未整理のまま保存されてゐることを伺ひ、同じく古事記の研究に没頭しその朗詠についても特に研究されてゐる亜細亜大学の夜久正雄教授と共に、信時家に伺つてその鉛筆書きの原稿を拝借し、近所の文具店でコピーを取らせていただいた。

信時先生の作曲の業績は殆んど全部、遠山音楽図書館と国立音楽大学図書館に収められてゐるさうであるが、夜久氏は遠山図書館の方に行つて探したがなかつたので、二人でコピーをお願い

したのである。「アメツチノハジメノトキ」からはじまる古事記の全文に曲をつけられてゆく大作で、日々、行住坐臥、或は電車の中、或時は大和地方にまで出かけられて苦心されてゐたと伺つた。勿論作品は未完成であるが、先生は、古事記は日本書紀などと異なり全文が詩の形をなしてゐるので、曲にすることは可能であるとされ、その曲想の壮大さには叱咤激励されるものがある。

戦時中作曲された大作（交声曲）「海道東征」も題材は古事記で、作詞は北原白秋である。これは昭和十五年、皇紀二千六百年奉祝芸能祭制定となつてゐるが、昭和十五年といへば、昭和十七年十一月五十七歳で亡くなつた白秋の没する二年前のことである。

福岡県柳川市の出身である北原白秋が天才詩人として感覺世界を彷徨しつつ、最後に故郷の九州柳川に生命の郷土を求めると共に、古事記の生命にふれた作品が「海道東征」である。死の直前まで白秋が古事記を読んでゐたことが、松永伍一著「北原白秋その青春と風土」（NHKブックス）に引用された、死の一ヶ月前に書いたといはれる次の一文にもみられるのである。

前掲書八頁〜九頁、写真集「水の構図」の序文より（死の一ヶ月前、昭和十七年十月六日記す）
水郷柳河こそは、我が生れの里である。

この水の柳河こそは、我が詩歌の母体である。この水の構図、この地相にして、はじめて我が

体は生じ、我が風は成つた。惟ふにひと度は明を失して、偲ぶこころ深く、今亦、五蘊^{ごうん}尽きむとして帰するところいよいよ篤い。いにしへ、やむごとなきおん方は、「命の全けむ人は、豊^{たみ}菰^{こも}、平群^{へぐら}の山の隠白^{かくまが}樫^{かし}が葉を鬢^{うす}華^けに挿せ、その子。」と仰せになつたと聞く。さるにしても何を歎き何を希はうとするこの私であらうか。ああ、柳河の雲よ水よ風よ、水くり清兵衛よ、南の魚族よ。

「夜ふけ人定つて、遺書にも似たこのはしがきを書く」と付記されたものである。この中の「命の全けむ人は」とある歌は、古事記にある日本武尊の最後のみ歌である。

次に参考のため、全曲演奏四十分にわたる大曲「海道東征」の歌詞を抜粋すると次の如きものである。

昭和十五年 皇紀二千六百年奉祝芸能祭制定

海道東征 北原白秋作詞・信時 潔作曲

第一章 高千穂

男声（独唱並に合唱）

神坐^{かみま}しき 蒼空^{あそぞら}と共に高く

み身坐^ましき 皇^{すめらみ}祖^{おや}

遼^{はる}かなり 我が中空^{なかぞら}

窮^{すめらむすび}み無し 皇産靈

いざ仰げ世のごごと

天なるや崇^{あれ}きみ生を

第二章 大和思慕

女声（独唱並に合唱）

大和は国のまほろば

たたなづく青垣山

東や国の中央もなか

とりよろふ青垣山

美しと誰ぞ隠る

誰ぞ天降あもるその磐船

第三章

男声女声（独唱並に合唱）

日はのぼる 旗雲あかねの豊あかの茜ねに

いざ御船出でませや

うまし美々津を（以下略）

第四章 御船謡

男声（独唱並に合唱）

その一

御船出ぞ 大御船出

御伴船こぞ挙りさもらへ

御伴ひとこぞ挙り揚げや

揺りとめよ 科戸しなとの風と

声放て 東に向きて

大御船真ま梶かじ繁しじぬき

照りわたる御弓ゆはずの弨

あな清明さやけ 神にします

あな眩まばゆ 皇子みこにします

はろばろや大海原

涯あをみなわなしや青水泡

揺りとよめ大くき国民たみ

大君に

この神に

讃へ言たたへごと

寿詞申せやよごと(その二以下略)

第五章 速吸と菟狹はやすひ うきさ

男声(独唱)

その一

海原や青海原

海道うみつちの導みちびきや 隼はやぶさや橋根津日子はつねつひこ

速吸はやすひの水門みづかどになも その珍彦うらひこ
(以下略)

第六章 海道回顧

男声女声(交互に唱和並に合唱)

その一

かがなべて 日を夜を海原渡り

かがなべて 将はた歳を宮遷みやうつりらしき

ああはれ その幾歳いくとせ

ああはれ その行き行き

年ごとに御伴船みまわらふねいや数殖かずわかえぬ

つぎつぎに御従みまわびとまたいや増しぬ

ああはれ また春秋

ああはれ そが海山(以下略)

第七章 白肩の津上陸

男声(独唱並に合唱)

その一

青雲しらかたの白肩しろかたの津つ その津つに

雄おとこたけびぞ今いまあがる 御船泊みふねどてぬ

いざのぼれ大御軍みおほぐん

いざ奮へ丈夫の伴

浪速の辺に騒ぐ味虜や その落を

追ひ押しに押しほり み楯並めぬ

いざのぼれ大御軍

いざ奮へ丈夫の伴（その二以下略）

第八章 天業恢弘

男声女声（独唱斉唱並に合唱）

神坐しき蒼雲の上に高く

高千穂や穂触峯

遥かなりその肇国

窮み無し天のみ業

いざ仰げ大御言を

畏きや 清の御鏡

（中略）

神と坐す大御稜威高領らせば

八紘一つ宇とぞ

遥かなりその肇国

涯もなし天つみ業

いざ領らせ大和ここに

雄たけびぞ 弥栄を我等

右の「海道東征」の語法、表現については色々批判したい点もあるが、昭和十五年といへば支那事変から大東亜戦争に発展しようとしてゐる時で、国内は戦時統制主義が強きを加へ、皇紀二千六百年奉祝の祭典もあり上りに欠けてゐた時であつた。その中で、

道ありき 古もかくぞ響きて

つらぬくや この天地

逸かなりその神性

おぎろなしみ剣よ太刀

いざ討たせまつろはぬもの

ひたに討ち しかも和せや

雲蒼し 神さぶと弥とこしへ

照り美しき我が山河

逸かなりその国柄

動きなし底つ磐根

いざ起たせ 天皇

神 倭 磐 余 彦 命

(第八章 天葉恢弘より)

といふ様な表現には情意が籠つてゐる。右の「海道東征」の歌詞は、NHKブックスの松永伍一氏の著書の中には出てこない。

戦時中の事は論外であるといふのかも知れないが、詩人北原白秋としては晩年の日本への回帰といふ精神的大開展であり、特筆すべき事である。

「城ヶ島の雨」(梁田貞作曲)「からたちの花」(山田耕筰作曲)等名曲と共に残る歌詞を遺した白秋の最晩年の作、「海道東征」に奇しくも曲をつけられたのが信時潔先生であつた。そして信時先生は人知れず古事記の作曲をつづけてをられた事は、これまた日本文化史上特筆すべき事である。

「海道東征」の歌詞楽譜は、小生大阪で二十数年間仕事を共にしてきた本誌『国民同胞』の読者富山薫氏から贈呈され、同時に信時先生が作曲された株式会社クラレの社歌のコピーもいただいたことを付記させていただき、この稿はまだまだ未了といたしたい。

お話したい二つのこと

——第二十六回「合宿教室」(昭和五十六年・阿蘇)における講話——

『日本への回帰』第十七集
昭和五十七年三月刊

時間が迫つてまゐりましたので簡単に二つのことについてお話しておきたいと思ひます。その一つはいま加納さんがお話になつた桑原先生のことです。をととひの青年研究発表の折に、小柳志乃夫さんが、桑原先生がいつも口ずさんでられた、明治天皇の「いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ」(明治四十五年)といふ御製のことについてお話になりました。その御製について桑原先生が言はれたお言葉、それをそのままお伝えしますと、「自分はこの明治天皇の御製一首に支へられ、導かれてきたのだ」といふお言葉でした。

桑原さんについての思ひ出はいつばいございますが、アルバイトで寿司屋をやつて見事失敗して、毎日毎日すっぱい飯を食つてゐたとか、さういふことを全然包みかくさず笑ひながら話して

くれる人でした。それによく勉強されよく本を読んでをられました、それを自分の痛感の中で充分咀嚼して、独自の表現で述べる。それがまた実に示唆に富んだものでした。それが一つ。

もう一つどうしても話さずにはおられないのは、齋藤忠先生が若い戦士が旅立つてゆくのをダンチヨネ節で涙ながらに見送ったとおつしやいました。あのお話を聞きながら強く胸に蘇った一つの思ひ出です。

私は昭和二十年の初め頃には、産業報国会から派遣されて、さんざん爆撃され、殆んど機能を失つてゐた川崎航空機の明石工場といふところをりました。そこではもう飛行機を作る能力は殆んどないのです。飛行機の生産台数は一日平均一機ないし二機。そしてその近所に特攻隊の人が泊りこんでゐるのですが、出来上つた飛行機に乗つてそのまま突込んでゆくのです。もつともその間の事情は軍秘になつてをりましたからよくわかりませんが、そのやうな情況でした。

ある日私の泊つてゐる宿屋に二、三人の特攻隊の若い将校が来て、それで泊めてくれといふ。宿の方では「うちはお米がないと泊められない」と言つたところ、実はここで出来た飛行機に乗つてそのまま突込んで行くのだといふことを言つたらしいのです。それで宿屋ではびつくりして万難を排して泊めた。そしてその翌朝二、三人の戦士がわづかお手伝ひさん一人に送られて、飛行場の方にむかつて旅立つて行つたのです。私は陰ながら見送つたのですが、その時はその事情

を知らされてゐなかつたのでそのまま別れてしまつたのです。戰士たちは談笑しながら常に変らぬ態度で悠々と出かけて行つた。その人達が果してそのまゝ突込んで帰らなかつたのかは知りませんが、事情を知らされたあと、あの朝の出陣の場面を思ひおこすと本当に胸が迫るのです。かうして八月十五日に終戦を迎へたのですが、私はそのひとつひとつの光景を心に刻みながら、これから皆さんと一緒に話し合つて、そしてお国のために力をつくしてゆきたいと思つてをります。

合宿詠草（昭和五十六年第二十六回「合宿教室」）

バスに乗り中岳めざしゆく友ら面かがやかせ手をふりてゆく

みたま祭り今宵にひかへ残りたる我は見送るいでゆく友らを

バスのゆく右手につらなる青田には今年の稲の穂先波打つ

ゆふべよりの雨上りたりきさはやかに歌よみきませはしき友らよ

「合宿教室」感想文集
昭和五十六年十月刊

「合宿教室」 走り書き感想文並びに和歌

『国文研会員の感想文集』
昭和五十六年八月月刊

今年の合宿位友らと共に生を実感した事はなかつた。

国家の危急が迫つてゐることの実感と共に、神のまもりが我身に加へられてゐることの実感もひしひしと迫つてきた。

合宿運営の幹部諸氏の御努力も並々ならぬものがあつたが、齋藤忠先生、村松剛先生をはじめ、小田村、宝辺、小柳、山田諸氏の力のこもつた講義、また志賀、長澤君らの若手の方々の講義、長内氏の「合宿をかへりみて」のお話など、メンバーが少々改められながら、全体としては渾然一体をなした合宿が運営されたことにも感激した。

慰霊祭も滞りなく戸外で挙行され、しかもある一人の学生の証言によれば、当日は空は曇つてゐて星がなかつたが、慰霊祭が進行してゐたあひだは祭壇の真上の部分の空にだけ星がまたゝい出てゐて、祭りが終了したらまた見えなくなつたといふ。仏智不思議といふ言葉は、仏典には始終出てくるが、私にはこの「不思議」といふことが、日毎に切々と思はれてくる。親鸞があれだけ度々「和讃」を作つて聖徳太子を讃仰してゐたが、それはまことの実感であつたにちがひないこ

とが次第に分りかけてきた。そして何か今まで一番大切なことをおろそかにしてきた事を痛感する。

今年も昨年同様に女子班の班付となり心こめて班員諸姉と輪読討論を行ったが、みな真剣に協力して下さった。前之園班付、田平班長ほか各班員のご努力を感謝しつつ、来年に向けて、雄々しく出発したいと思つてゐる。班員の方々が、聖徳太子のお言葉が直接自分に語りかけてをられる様な気がする、といつてをられたのは、有難いことであつた。

山なみは雲にかくれて雨しげく今日合宿を終らむとする

友らみな力にあふれ日の本のいのちにつながる思ひを述べき

次々に壇に上りてはかりしれぬ言葉のいのちの深さを述べゆく

相会ふことかりそめならずともに生きゆく機縁につながる身なれば

和合てふ深き思ひを共にすること有難し今の現まつに

今年こそこのまごころを打ちつけに伝へゆきなむいのちのかぎり

糸杉の並み立つ庭べ朝ゆけば草木物言ふ心地するなり

朝夕に見なれし青田みどり濃く蟬の声やまず風のまにまに

下萌ゆる

アンテナの戸毎に光る初日かな

ものの芽のもの言ふごとし一人ゆく

難かざる孫の手もとの大人びて

生垣の影ながくと下萌ゆる

梅雨寒や商ひうすき店並び

うすみどり水脈みせひく海や梅雨晴るゝ

盆景に今年も光る苔の花

夏草や多摩の中洲に水増しぬ

刈り上げし庭木あらはに師走かな

慰霊祭献詠

晴れわたる秋のみ空ははてしなく神のみたまのいますかごとし

『龍耳句集』
昭和五十六年九月号

『国民同胞』
昭和五十六年十月号

合宿詠草（昭和五十七年第二十七回「合宿教室」）

ひぐらしの声いやしげく銚杉のこずゑをわたる山風涼し
ゆけむりの立ちこむる谷いや深くゆき交ふ車細き道ゆく
笹竹の笹のさゆらぎかたはらにホテルの入口屋根低きかな

「合宿教室」感想文集
昭和五十七年十月刊

「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌

「国文研究会員の感想文集」
昭和五十七年八月刊

今年七十歳を過ぎて漸く初心に戻つたといふか、教典と自分が一つに感ぜられ、その他のことは全く感じられない境地が見えはじめた気持である。人間の成長とはどういふことなのか。それも今のこの一瞬に決定せられることに外ならないことと思ふ。

今年、場所も高千穂といふ天孫降臨の地であつただけに、日本の危急が告げられる時、我々は自分が未熟だといふ限定された気持をすて、祖国のいのちともろともに戦ひ戦ひ進むべしと決定する外はない。それが自分として一番自然な生れ乍らの我に帰ることだといふことが、今頃になつて悟らしめられた。

班付として受けもつた四十五班の女子社会人の諸君は、皆しつかりした方々ばかりで、前之園班長は前年に引つゞきよくまとめて下さつたことを感謝いたします。このことの中にも、私は、いひ知れぬ日本の危機の中でのみ祖のみ霊の加護が仰がれた思ひであつた。

雨上りの風さやさやと高原のすがしきひととき友らとすぐせり

合宿を終へて去りゆく友みなを決意の面わかゞやきてあり

日の本のをのこをみなと生れきて生き死ぬさだめにま向ひゆかむ

親より子に伝はる心感想に述べる言葉に涙あふれぬ

日の本のみくにの民と生き死ぬることたゞならずこの現し世に

朝夕に向ひなれたる鉾杉の姿なつかし去りゆく我に

草も木も物言ふごとし霊峰の麓の里はしづまりてあり

慰霊祭献詠

四方の国いら立ちさわぎさまざまに我が日の本の国をのしる

神霊のみまもり祈り人の世の正しき道をひらきゆきなむ

『国民同胞』
昭和五十七年十月号

御製・御歌を拝誦して

今上天皇御製（昭和五十七年御作）

さんしゆゆの花を見ながら公魚わかさぎと菜の花漬を昼にたうべぬ
わが庭のひとつばたごを見つつ思ふ海のかなたの対馬の春を
わが庭のそぞろありきも楽しからずわざはひ多き今の世を思へば
八月なる嵐はやみて夏の夜の空に望月のかがやきにけり

日御碕にて

秋の果の碕みさきの浜のみやしろにをろがみ祈る世のたひらぎを

行徳野鳥観察舎にて

秋ふくる行徳の海をみわたせばすずがもはむれて渚にいこふ
住む人の幸いのりつつ三宅島のゆたけき自然に見入りけるかな

第三十七回国民体育大会（くにびき国体、十月四日～八日）へ行幸に際し島根県民に下し給へる御製
きその雨いつしともなく晴れゆきて秋の松江に国体はひらく（註・きそ＝昨日、ゆうべ、昨夜）

『国民同胞』
昭和五十八年一月号

皇后陛下御歌（昭和五十七年御作）

若葉ふく風あたたかきみそのふにけさは牡丹の花ひらきたり

三宅島の磯に住むとふうみずめ標本を見て描きうつしぬ

新春に当つて発表せられた、天皇皇后両陛下の御製・御歌をいただいて何度も拝誦した。

ここ数年にわたり毎年本誌新年号に御製・御歌について諸兄の感想が謹んで発表されてゐるが、今年はこの四月で、天皇陛下が満八十二歳におなりになり、三月には、皇后陛下は満八十歳におなりになる。まことに目出度き限りである。

御製・御歌はありのままに平易なご表現の中に、渾身のご意志と祈りのお言葉となつて表現せられてゐるもので、心をこめて拝誦しつつそのお心にふれてゆく外はない。そしてたゆまずに作歌の道に精進しつつ、ひたすら国がらを守り文の林を茂らせむとの、天皇のお志をうけつぎ守るべく努力せねばならぬと決意を新たにする次第である。

天皇御製第一首は、昭和五十七年二月頃の御作であり、早春の花さんしゆゆと早春の魚わかさぎ（公魚）と菜の花漬を詠まれた御歌。

第二首は宮中のお庭の花、ひとつばたごを見つつ海の彼方の対馬の春を思ふと詠まれたお歌。

第三首は七月頃の各地の豪雨の報相次ぐ中で、お庭のお散歩も楽しからずと詠ませられ、第四首は八月の嵐が去つて満月が空にかがやく、第五首は十月に行はれた松江国体にお出かけの際、出雲大社につづき日御碕神社を参拝せられた時の御作。

第六首は十月末、千葉県行徳の野鳥観察舎へ常陸宮殿下とご一緒にお出かけになつた時の御作。第七首は十一月に、天皇皇后両陛下お揃ひで八丈島、三宅島をご訪問になつた時の御作。

外に一首、松江国体の際し県民に下された御作一首。

皇后陛下の御作二首の第一首は、五月の初めに詠まれた御歌。第二首は十一月、天皇陛下とご一緒に八丈島に行かれた折の御歌である。

以下に植物名、地名等に註をつけ乍ら御製・御歌について述べることにする。

さんしゆゆの花、山茱萸さんしゆゆ、ミズキ科の落葉高木、中国・朝鮮原産、日本には一七二二年（享保七年）薬用として果実が渡来してゐるが、今日では薬用よりも早春の花木として栽培され、二十個から三十個の黄色の小花の集つてひらく様は早春の花として賞美される。（小学館万有百科大辞典より）公魚はわかさぎ。

ひとつばたご、モクセイ科の落葉高木、五月〜六月に小枝の先に円錐状の集散花序をつけ、多数の白花を開く、本州（長野・愛知・岐阜・三重の各県）、九州（対馬）、朝鮮・台湾に分布する。

庭園樹として栽植され、もと明治神宮外苑にあり。御製に海の彼方の対馬の春を思ふと詠まれたのは、対馬にこの花が多く咲いてゐる事実を植物学にお詳しい天皇はご存知であることは明かである。対馬には戦時中、陸軍要塞と海軍要港があつた。

すずがも、鈴鳴、中形の美しい海鳴、東部シベリア、カムチャツカなどに繁殖、秋に日本に渡来。（広辞苑）

天皇が「秋の果の碕の浜のみやしろに」とお詠みになつたみやしろは、日御碕神社である。昭和十年発行の『辞苑』（新村出編）によれば鳥根県簸川郡大社町（現地名）日御碕にある神社。上社・下社に分れ素戔嗚尊（上社）、天照大神（下社）を祀る。当時国幣小社。夜久正雄氏の印象によると、神社は日御碕の海岸に近く建てられ、日本海の荒波のうちよせる蔽しい景観の中に荘蔽さをたたへてゐるお宮である。

「をろがみ祈る世のたひらぎを」と詠ませられる深い大御心は、第三首目の

わが庭のそぞろありきも楽しからずわざはひ多き今の世を思へば

の御製にも深いつながりのある様に仰がれる。第三首目は、直接には七月の豪雨による各地の被害をご心痛になつたものと拝察されるが、「をろがみ祈る」といふご表現は測り知れぬ深いみ心のこもつてゐるご表現である。

これも夜久氏の感想であるが、第一首目の、さんしゆゆの花を見ながら、昼にたうべぬといふお言葉と、第二首の、ひとつばたごを見つつ思ふといふお言葉とを対象して仰ぐべきである。第一首に仰がれる、早春の花さんしゆゆを見乍ら同じく早春の魚であるわかさぎと菜の花漬を昼に召上つたといふなだらかな生活体験に比し、見つつ思ふといはれるみ歌には

立山のそらにそびゆるををしさにならへとぞ思ふみ代のすがたも（摂政宮の時大正十四年、新年歌会始に御披露なされた「山色連天」の御歌）

霜ふりて月の光も寒き夜はいふせき家にすむ人をおもふ

風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

右二首は敗戦直後の国民生活、引揚者についてお心づかひをなされたみ歌で、「おもふ」といふお言葉の深さは測り知れぬものがある。「海の彼方の対馬の春を」思ふと詠ませ給ふことも「ひとつばたご」の花につながる対馬の春を思ふと詠み給ふのである。

天皇の御製は平易なお言葉の中に、夜久氏が「歌人今上天皇」と仰ぎまつる如く雄大な和歌のみ調べを仰ぐのである。

第六首の

行徳野鳥観察舎にて

秋ふくる行徳の海をみわたせば、
「行徳の海をみわたせば、」とまづ全体の背景を詠まれ、つづいて、「すずがもはむれて、渚にいこふ」と結ばれ、すずがものむれと概念化せず、すずがもはむれてと動詞を用ひられることにより、すずがもの群が一羽毎にリズムミカルな動きを見せてゐる様を詠まれつつ「渚なぎにいこふ」と渡り鳥すずがもに対するお心づかひを詠まれてゐる。無技巧の技巧ともいふべきご表現と仰ぐ外はない。

昨年十月廿九日に行徳野鳥観察舎をご視察になつた記事は東京都内朝日、毎日、読売、サンケイ、東京各紙に報道されてゐたが、元日の各紙上には、日御碕と行徳の御製はいづれも載つてゐなかつた。下関の宝辺氏よりの電話で、こちらのサンケイには、御製は全部載つてゐます、と力強い言葉をきき、ほつとした次第であつた。

第七首目の三宅島の御製は昭和五十七年十一月、天皇皇后兩陛下の八丈島・三宅島ご旅行の際に詠まれたもので、三宅島ははじめてのご訪問であつた。この時の詳細な記録として、島田好衛氏からの知らせで、山手書房発行、高瀬広居氏著『皇后さまの微笑』の一二頁から二八頁まで同行記者による詳細なレポートを集録した記事をよませていただいた。

最近三宅島の地震の報道で、火山島である三宅島の実況がテレビで報道されてゐるが、緑で包まれた太平洋上の三宅島の光景は、まことに御製に示される様に豊けき自然といふおほらかなご

表現が、そのまま当てはまる景観である。

前掲の書『皇后さまの微笑』によれば、三宅島は両陛下の初めてのご訪問であつたが、全島総人口四千人の中千人がお出迎へし、お帰りの三宅島空港にお送りしたといふ。

八丈島は、全人口一万人の中約七十パーセントがご送迎し、汽船で三宅島に向はれる両陛下をいつまでもお見送りし、天皇は皇后陛下のご身体をいたはられて、皇后に早く船室に入る様おすめになつた後、島の人影が見えなくなるまで甲板にお立ちになつてゐたといはれる。

はじめて新春の御製・御歌について書かせていただいたが、日頃の精進の不足を本当に恥ぢるのみであるが、これを機会に雄々しくこの道に精進しようと思つた。助言をいただいた夜久正雄氏、御歌草稿拝受につき色々御尽力を願つた島田好衛氏に深く感謝いたします。

月明り

ゆく春や堀の白鳥水尾ながく

たつき無為思念また無為月明り

そこはかと家人の声す菊日和

龍耳集
昭和五十八年一月号

合宿詠草（昭和五十八年第二十八回「合宿教室」）

「合宿教室」感想文集
昭和五十八年十月刊

木花咲やひめのみ名のみやしろ宿に近く細き参道木かげに見ゆる

一月前社用にせはしき我友がふと問ひかけしこの神のみ名を

はしなくも古事記のことを会社にて語り合ひつたのしかりけり

なりはひはよし異なれど日の本の民とし生くるよろこびはてなし

「合宿教室」走り書き感想文並びに和歌

『国文研究会の感想文集』
昭和五十八年八月刊

第二十八回合宿の終了に当つて万量の感慨を以て感想を記してゐる。ここでの感想は、毎回同様に緊迫感を持つのであるが、今年は特に内外の情勢の緊迫と共に、今までひそんでゐた力が外に對して一致して推し出されてゆく気配を痛感してゐる。合宿運営の担当者の方々の一致協力は、一層倍加せられ、何か知れぬ神意によつて動かされてゆくやうな気がしてならない。

自分自身の勉強の必要性も、いよいよ待たなしたころまで追ひつめられてゐる気持である。

小田村理事長が言はれる「世のため人のため」といふコトバが、多数の学生の心を打つたこと、私自身として無為に過すことは神意に反する、といふ気持を押へることは出来ない。

松ひのき山肌おほひ雲仙の里の朝日は眼にさやかなり

午ひる近く蟬なき出でし湯けむりの長く影ひく日ざかりの道

合宿を終へしやすらぎ来む年にい向ふ決意につながりてあり

男をみな力合せて日の本のまなびの道を正しゆかなむ

千早ぶる神まもりますくにつちの草木ゆたかにいのちあふるゝ

慰霊祭祭文

(昭和五十八年八月、第二十八回学生青年合宿
教室にて)

『日本への帰郷』第十九集
昭和五十九年三月刊

風の音さやかに、山の木々のみどりしづまるここ雲仙の地に今宵昭和五十八年八月八日、われら第二十八回学生青年合宿教室参加者一同相集ひて、みくのために尊きいのち捧げましてとこしへにみくにまもりましますみおや達、いくさびと、同胞、友らのみたまなごめのみ祭り仕へまつらむとす。

日本をめぐる国際情勢はいよいよよけはしく、いく重にもとざされしまなびの道をきりひらくべき我らのつとめはいよいよ重く、この神代さながらの自然の大地に集へる我ら、明治天皇、今上天皇の御製に、聖徳太子のみ教へに国民のゆくべき道の

しをりを仰ぎつつ、かたみに心通はせみ国のことを憂ひつつ合宿もはや半ばをすこせり。

講義の聴講に班別討論にはたまた和歌の創作にその他くさぐさのわざに、かたしとて思ひたわます千早ぶる神のみまもりを祈りつつ、いまよりのちもまなびやに、またつとめのはに力を合はせ、しきしまのみちいやつぎつぎにふみひらかむと、うけひまつることのよしをいましみことたちきこしめしたまへ。

天にますみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてをまもらせ給へと、第二十八回学生青年合宿教室参加者一同に代り、高木尚一謹み敬ひ恐み恐みも白す。

蟬しぐれ（昭和五十八年詠）

菜の花と共に卒業孤島の子

春野遠く雪の生駒につづきけり

ヘリの飛ぶ梅雨めく空の重きかな

帯鋸のひびき時折蟬しぐれ

車ゆく光芒阿蘇の晩夏かな

『龍耳句集』
昭和五十九年一月号

神宮の森深々と咲く菖蒲

ひぐらしの鳴きをさめたる一日かな

ひたむきに土産ととのへ盆帰省

雨深き秋分の道つづきけり

慰霊祭献詠

みたままつりの日は近づきておごそかにめぐる月日をかしこみまつる

「国民同胞」
昭和五十八年十月号

高木尚一

略歴及び執筆目録

年 数へ年

明治四五	一
大正八	八
一四	一四
昭和二	一六
四	一八
五	一九
七	二一
八	二二
九	二三

略 歴 及 び 執 筆 目 録

五月十七日、陸軍少将高木尚右とつね子の長男として、東京・小石川に生る。

四月東京府立女子師範学校附属小学校（現東京学芸大学附属竹早小学校）へ入学。

三月同校卒業と同時に父の赴任に伴ひ朝鮮に移住。

四月竜山中学校へ入学。

九月府立第四中学校三年に転入学。

三月同校四年修了。

四月第一高等学校文科甲類へ入学。第一高等学校の先輩田所広泰氏のすすめにより「一高昭信会」に入会し黒上正一郎先生の指導をうく。

三月武州御嶽における「一高昭信会」の合宿に初めて参加。

※「『稜威の男健』創刊に際して」※和歌「黒上先生をしのびまつりて」他四八首
 （伊都之勇建・創刊号・二月刊 手書・謄写刷）

三月第一高等学校卒業。

四月東京帝国大学法学部へ入学。

※「新井兼吉・河野稔両先輩を偲びまつりて」「雑感」（伊都之勇建・第二号・六月刊）

※和歌「福島中学大節会諸兄を迎へて」他三五首
 （伊都之勇建・七月号）

この頃東京・中野の江古田東京市療養所に入院。

※和歌「病床雑詠」他二三首並びに詩一編
 （同右・七月号）

※和歌「旧作」二一首
 （同右・八月号）

和歌「病床煩惱」三首
 （同右・九月号）

「矢部貞治氏『政治学講義要旨』について」

「田中氏『商法総則概論』について」

※和歌「黒上正一郎先生のみ霊に捧ぐ」十首

「概念凝固思想の实例二つ」

「尾佐竹猛博士の思想について」『短歌研究』(十二月号)

「作品寸評」※和歌「病院より帰るて」他八首

※和歌「友のふみ」他十六首

※和歌「建国祭」他十六首

「経済の定義について」

「黒上正一郎先生を偲び奉る」『賀川豊彦氏の思想内容』

※和歌「師の君のみ霊のみ前に」他十五首

和歌「外畑行」他二十首

和歌「師走」一首

※和歌「述懐」他十首

※和歌「散歩」他十三首

「前進」和歌「土手下」他十三首

「ひらけゆく道」和歌「折にふれて」他八首

※和歌「夕」他十八首

※和歌「折にふれて」他六首

「年頭寸言」和歌「ことのはのみち」他十首

「我等の使命」※和歌「春近し」他十二首

(伊都之勇建・十月号)

(同右・十一月号)

(同右・十二月号)

(同右・二月号)

(同右・四月号)

(同右・五月号)

(同右・七月号)

(同右・十二月号)

(同右・四月号)

(同右・六月号)

(同右・八月号)

(同右・九月号)

(同右・十月号)

(同右・十一月号)

(同右・十二月号)

(同右・一月号)

(同右・三月号)

※和歌「犬ならし」他十七首

(伊都之勇建・四月号)

「カントの人生観」和歌「五月のある日」他二十首

※詩「安房神社」一編

(同右・五月号)

「フィヒテの言葉」※和歌「課外講義」他十一首

※詩「ニュース映画『ソヴェトの軍縮』を見つゝ」一編

(同右・六月号)

※「合宿雑記」※「感想断片」和歌「寒川神社にて」七首

(同右・八月号)

※和歌「新宿駅にて」十四首

(同右・九月号)

※和歌「戦死者の家」他十一首

(同右・十月号)

※和歌「二重橋前」他十首

(同右・十一月号)

「学道」※和歌「旅行に出発せむとして」九首

(同右・十二月号)

※和歌「観兵式拝観」他三七首

(同右・一月号)

※和歌「友のたより」他十二首

(同右・二月号)

「明治天皇御集研究」

(同右・三月号)

※和歌「実朝のうた」他三六首

(同右・四月号)

「明治天皇御集研究」「文献文化史的研究の重要性」

(同右・五月号)

※和歌「悲歎述懐」他二十首

(同右・五月号)

六月土方成美教授を指導教官として学内に「東大精神科学研究会」を設立。

「明治天皇御集研究」

(同右・六月号)

「明治天皇御集研究」

(同右・七月号)

「明治天皇御集研究」「松陰先生と朱子学」

(同右・八月号)

※和歌「合宿を終へて」他十九首

(同右・八月号)

「猶太問題(一)」和歌「材木海岸にて」他九首

「猶太問題(二)」※和歌「朝」五首

「猶太問題(三)」「新刊紹介『研究自由への闘争』

ローゼンベルグ」

「猶太問題(四)」「国際主義と民主主義—

東大に於ける三木清氏講演評—」

「猶太問題(五)」※「東大法学部学生諸兄に呈す」

三月東京帝国大学法学部卒業。

四月東京府立高等学校(現東京都立大学)講師。

※「聖徳太子」「猶太問題(六)」

「猶太問題(七)」「支那共産党の動向と日本の対策」

和歌「四月三日入門式—宮城前にて—」四首

「明治大正時代—明治天皇御集と国民同朋和歌集—」

「猶太問題(八)」

「ユダヤ人と文学」

「英語教育の問題」

「新刊点検—英語研究九月号—」「日本二千六百年史に

あらはれたる大川周明氏の不敬思想」

「大学入試方法批判」※「熊本五高合宿に参加して」

※和歌「合宿短歌抄」三首

「宮崎正義氏の『東亜聯盟運動の基調』」

(学生生活・十月創刊号)

(同右・十一月号)

(同右・十二月号)

(同右・一月号)

(同右・二月号)

(同右・五月号)

(同右・六月号)

(同右・七月号)

(文芸世紀・七月創刊号)

(学生生活・八月号)

(同右・九月号)

(同右・十月号)

(同右・十一月号)

- 「同信協力―道元論を中心として―」
 ※「西郷隆盛遺訓について」「明治思想史概論」
 ※「西田哲学について」「歴史哲学の新しき開展―三木清氏『歴史哲学』批判を中心として―」「田辺元氏の道元論」
 ※「歴史哲学研究(一)―時間論の動向―」「掃還兵の言葉」
 「歴史哲学研究(二)―高坂正顕氏の論を中心として―」
 和歌「国難」他九首
 (学生生活・十一月号) (同右・十二月号) (同右・一月号) (同右・三月号) (同右・四月・五月合併号)
- 五月「日本学生協会」設立、同会の理事となる。
 「歴史哲学研究(三)―歴史的世界・歴史的人間・歴史的法則―」 (同右・六月号)
 ※「教壇より」 (高校教育・六月創刊号)
 「歴史哲学研究(四)―学と世界観―」 (学生生活・七月号)
 「世界史の動向と昭和維新」 (高校教育・七月号)
 「学生と指導者」 ※和歌「教場にて」五首
 ※「歴史哲学研究(五)―田辺元博士の『歴史的现实』を中心として―」 (学生生活・八月号)
- ※和歌「故北白川宮永久王殿下奉悼歌」七首 (同右・九月・十月特輯号)
 「カント批判―歴史哲学研究(六)―」 (同右・十月号)
 ※和歌「田辺敬典兄を憶ふ」十三首
 「悲劇の哲学―歴史哲学研究(八)―」 ※和歌「明治節奉祝式典献進歌」他七首「教育勅語漢発五十周年を迎へ奉る」 (同右・十一月号)
 「學術維新の秋来たり―小田村問題の進展と東大の敗北―」 (同右・十二月号)

「東大に再燃するマルキシズム」「世界史の動向」

「国民組織論」

(学生生活・一・二月号)

和歌「『みたて』創刊号に寄せる」四首

(御橋・一月創刊号)

二月「精神科学研究所」設立に伴ひ府立高等学校講師を辞し同所所員兼理事となる。

「人道興廢の決戦」

(同右・二月号)

「日本文化の嫡流」

(新指導者・四月号)

和歌「房内大兄を迎へて」五首

(同右・五月号)

「経済心理学」 ※「全体主義論」 ※和歌「朝」他八首

(同右・六月号)

「対米文化攻勢論」 ※和歌「歌集『心田』より」三五首並びに詩一編

(同右・七月号)

※「西欧文化の運命」

(同右・八月号)

「現実を掴み支配する哲学」

(同右・九月号)

※「友へのたより」

(同右・十月号)

※「新体制論の反省」 ※「維新大業の指標」

(同右・十一月号)

「維新大業の指標」

(日本世界観大学叢書『国史の精神』・一月刊)

※「日本的な物の見方」

(新指導者・二月号)

「経世教育論」

(同右・三月号)

和歌「冬日」九首

(穆の木集・四月号)

※「民族統治論」 和歌「返の歌」二首

(新指導者・五月号)

「時言」 ※和歌「コレヒドール陥落」八首

(同右・六月号)

※和歌「北白川宮永久王殿下御二年祭献進歌」十首

(同右・十一月号)

昭和一八	三二
一九	三三
二〇	三四
二二	三六
二八	四二
二九	四三
三〇	四四
三二	四六
三三	四七

※和歌「大阪城のほとりにて」十六首

(新指導者・十二月号)

※和歌「歳末」他十首

(同右・二月号)

四月上村道子と結婚。(井上宇磨先生御夫妻の御媒酌)

十一月財団法人労働科学研究所入所。この頃労働科学研究所の「都城支所」に勤務・農工圏開発振興の基礎調査に従事。(これが後、各県に生活改善課が生れる契機となつた)

※和歌「新年歌会にて」十一首

(興風・四月号)

※和歌「日向国原」五首

(同右・七月号)

※「思ふこと思ふまゝに」

(新公論・三月号)

※「意志の拠点」

(同右・六月号)

※「公共心」

(同右・九月号)

※「思想の師三井先生」

(同右・十月号)

※「暗中摸索時代」

(同右・十一月号)

※「朝鮮をどう考へるか」 ※和歌「コスモス」他二九首

(同右・二月号)

※「思想からみた国会の更生方法」

(同右・六月号)

「信念の回復」

(同右・二月号)

「日本文化の源流—聖徳太子を中心として—」

(昭和三年八月第二回全九州学生青年合宿研修会報告)『民族自立のために』十月刊

「聖徳太子の時代についての解説—当時の内外情勢の分析と著者の執筆態度—」

(黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』復刊本八月刊、参考資料)

「聖徳太子研究と現代」

(昭和三年八月岡山合宿記録『民族復興の根柢を培うもの』七月刊)
 ※「黒上先生といふ人―われわれの思想上の恩師として―」(国民同胞・二月号)
 ※「ベルグソンの言葉から」(同右・三月号)

※「精神交流の時代」

(同右・十一月号)

※和歌「冬の旅」九首

(同右・一月号)

※「紫の火花」(岡潔博士著)を讀みて
 「道統の先覚者を偲びて」

(同右・八月号)

※「信の復活」 ※和歌「夕べ」他八首

(同右・十一月号)

※和歌「合宿にて」三首
 ※「大学問題の行方―日本の文化史的使命に及ぶ―」

(日本への回帰第一集・五月刊)
 (国民同胞・八月号)

※和歌「慰靈祭献詠」三首

(同右・十月号)

※和歌「万葉集のうた(田無合宿にて)」六首
 「紹介・夜久正雄著『古事記のいのち』国文研叢書No.1」

(同右・一月号)
 (同右・二月号)

『弁証法批判の歴史』
 「元旦随想」

(国文研叢書No.51二月刊)
 (国民同胞・一月号)

※和歌「慰靈祭献詠」一首

(同右・七月号)

※和歌「慰靈祭献詠」二首
 ※「日本民族の正念―『平和の大海へ注ぐ一滴の水』(三井甲之著)をよみて」

(同右・十月号)
 (同右・十一月号)

昭和四五

五九

二月東京都地方労働委員会公益委員。
四月高崎経済大学経済学部教授。

※和歌「慰霊祭献詠」二首

(国民同胞・十月号)

四六

六〇

※「日本の真面目」 ※和歌「慰霊祭献詠」一首

(同右・十月号)

四八

六二

「近代事務管理の前進」(巻頭のことば)
「生理心理学による人間論の展開—ポール・ショシャールの説を中心として—」

(労働の科学・十一月号)

※「人間とは何か」(巻頭のことば)

(高崎経済大学論集・一月号)

※和歌「桑原暁一大兄のみ霊に捧ぐ」三首

(労働の科学・二月号)

※「桑原暁一兄を悼む」

(国民同胞・六月号)

※和歌「慰霊祭献詠」二首

(同右・八月号)

四九

六三

※和歌「慰霊祭献詠」二首

(同右・十月号)

五〇

六四

「人間回復と労働科学」(巻頭のことば)

(労働の科学・九月号)

五一

六五

※「事毎に信あるべし」

(国民同胞・十月号)

「魂の復活」

(同右・四月号)

五二

六六

※和歌「慰霊祭献詠」二首

(同右・八月号)

「経営労働管理の最近の進展について」

(同右・十月号)

※和歌「合宿詠草」十七首

(高崎経済大学論集・十月号)

「日本文化の源流と我等の使命」

(日本への回帰第十二集・三月刊)

(国民同胞・七月号)

※和歌九首 (『第二十二回合宿教室』終了時の走り書き感想文集・八月刊)
 九月労働科学研究所理事。

※和歌「慰霊祭献詠」四首

(国民同胞・十月号)

※和歌「合宿詠草」五首

(『合宿教室』感想文集・十月刊)

「企業と人間」

(高崎経済大学論集・十一月号)

※「日米関係に思ふ―国家目的宣揚の時―」

(国民同胞・一月号)

「学問の進歩」(巻頭のことば)

(労働の科学・二月号)

「わが仰ぎまつる明治天皇御製」

(代々木・二月号)

※「信ずるといふこと」

(日本への回帰第十三集・三月刊)

四月高千穂商科大学経済学部教授。

※「黒上正一郎先生を偲ぶ」

(国民同胞・四月号)

※「黒上正一郎先生を偲ぶ(続)―時代の思想的背景など―」

(同右・六月号)

「労働科学研究所の現状」

(日本経営者団体連盟で講演・六月)

※「第二十三回合宿教室(阿蘇)走り書き感想文並びに和歌(六首)」

(国文研会員の感想文集・八月刊)

※和歌「慰霊祭献詠」一首

(国民同胞・十月号)

「心身相関の理論」

(高千穂商科大学商学会で研究発表・十一月)

「日本の国家目的を明かにせよ―イラン情勢をみつと思ふ―」(国民同胞・一月号)

「経営学に於ける人間の問題」

(高千穂論叢・二月号)

※「短歌創作のために」※和歌「合宿詠草」四首(日本への回帰第十四集・三月刊)

「定年制をめぐって」(巻頭のことば)

(労働の科学・四月号)

※「大正時代の思想的背景」

(国民同胞・五月号)

※「大正時代の思想的背景(その二)——治安維持法・日韓関係など」

(同右・七月号)

※「第二十四回合宿教室(霧島)走り書き感想文並びに和歌(八首)」

(国文研会員の感想文集・八月刊)

九月労働科学研究所常務理事。

和歌「慰霊祭献詠」三首

(国民同胞・十月号)

※和歌「合宿詠草」六首

(合宿教室感想文集・十月刊)

「経営と労働科学」

(労研維持会資料・十一月刊)

※「独立国日本の混迷」

(国民同胞・二月号)

「経済恐慌と歴史哲学」

(高千穂論叢・二月号)

※和歌「合宿詠草」八首

(日本への回帰第十五集・三月刊)

※「講読演習参考」

(高千穂商科大学内・三月刊)

「生の記念——三井甲之詩集『祖国礼拝』より」

(国民同胞・六月号)

「精神制定について」

(高千穂商科大学商学会で研究発表・七月)

※「第二十五回合宿教室(雲仙)走り書き感想文並びに和歌(五首)」

(国文研会員の感想文集・八月刊)

「イラン・イラク戦争と日本の国防」

※和歌「慰霊祭献詠」四首

(国民同胞・十月号)

※「信時潔先生を偲ぶ(その一)」

(同右・三月号)

※「『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』——輪読のしをりとして——」

※和歌「合宿詠草」五首

(日本への回帰第十六集・三月刊)

「経営戦略の基礎」

(高千穂論叢・三月刊)

四月高千穂商科大学教務委員長。

「文明の将来と労働科学」

(労働の科学・五月号)

「マネジメント思想の流れ」(巻頭のことば)

(劳研維持会資料・六月刊)

※「信時潔先生を偲ぶ」(その二)

(国民同胞・七月号)

※「第二十六回合宿教室(阿蘇)走り書き感想文並びに和歌(八首)」

(国文研会員の感想文集・八月刊)

※俳句「下萌ゆる」十五句

(龍耳句集(二)・九月刊)

※和歌「慰霊祭献詠」一首

(国民同胞・十月号)

※和歌「合宿詠草」四首

(合宿教室感想文集・十月刊)

「昭和五七年のはじめに思ふこと」

(国民同胞・一月号)

※「お話ししたい二つのこと」 ※和歌「合宿詠草」十三首

(日本への回帰第十七集・三月刊)

「自動化技術の進展と人間」(巻頭のことば)

(労働の科学・五月号)

「混迷の世に日本のゆくべき道」

(国民同胞・八月号)

※「第二十七回合宿教室(霧島)走り書き感想文並びに和歌(七首)」

(国文研会員の感想文集・八月刊)

「マイクロエレクトロニクスと労働科学」

(劳研維持会資料九五六号・九月刊)

※和歌「慰霊祭献詠」二首

(国民同胞・十月号)

※和歌「合宿詠草」三首

(合宿教室感想文集・十月刊)

「初めに行動があつた」(巻頭のことば)

(労働の科学・十二月号)

※「御製・御歌を拝誦して」

(国民同胞・一月号)

※俳句「月明り」十四句

(龍耳句集(三)・一月刊)

「経営学を学ぶ」

(高千穂論叢・二月刊)

※和歌「合宿詠草」七首

(日本への回帰第十八集・三月刊)

「自動化と作業安全」(巻頭のことば)

(労働の科学・六月号)

「日本ほど重要な国はない」

(国民同胞・七月号)

※「第二十八回合宿教室(雲仙) 走り書き感想文並びに和歌(五首)」

(国文研会員の感想文集・八月刊)

「明治天皇御製と我が学校生活」

(代々木・八月号)

※和歌「慰霊祭献詠」一首

(国民同胞・十月号)

※俳句「蟬しぐれ」十五句

(昭和五八年詠・龍耳句集四・五九年一月刊)

※「慰霊祭祭文」

—第二十八回学生青年合宿教室(雲仙)にて—(日本への回帰第十九集・五九年三月刊)

※和歌「合宿詠草」五首

(同 右)

十一月二十四日逝去。

戒名 明德院尚譽訓導居士

菩提寺 九品仏浄真寺

墓所 東京都府中市多摩霊園(一種第十二区三十三側十三番・正門より徒歩十分)

編者註 ※印は本書に採録したものです。

編集後記

(長内 俊平 記)

(一)

故高木尚一先輩の遺文・遺歌集を一冊にまとめて発刊することが、今、昭和五十九年二月の国民文化研究会の理事会で決定し、同時に小柳陽太郎(福岡)・青砥宏一(島根)・長内俊平(東京)の三名が、その編集委員に選ばれました。

「先輩の御遺稿を編集」といふ大任を仰せつかった我々編集委員は、高木さん七十年の御生涯での遺文・遺歌を蒐集する作業に、先づ力をそそぎ、ついで、その中からの選択作業に際しては、三名での合宿を東京で持つなどの経過を経つつ、小田村理事長、夜久正雄、三浦貞蔵三先輩に色々の御相談にのつていただいたり、懇篤な御指導に接しながら、同信諸兄の御協力も仰ぎ、漸く半歳を費して、ここに本書『ひとすぢの信』の上梓に漕ぎつくことが出来ました。

この間、高木先輩の未亡人・道子様から、たびたびお便りを戴き、「勇氣」と「励まし」を与へられ、深い感銘を覚えました。御協力いただいた方々にここに心から厚く御礼を申し上げます。

なほここに、未亡人・道子様からのお手紙の一部を御紹介させていただき、お喜びくださる御思ひの一端を、御披露上げたいと存じます。

……前略……皆様方御多忙のところを主人のための労をおとり下さり、何より有難く存じてをります。

こんなにも皆様のなかに主人の心が生きてをりますかと思ひますと、感謝で一ばいでございます。

何も言はず足早に去つてしまいましたが、今になつて、すべて無言の教訓の様に思ふこと多々ございます。四十年の間、幸せに過せたことを、何より感謝してをります。……後略……

高木道子（五九・六・二二）

(二)

私ども委員三名は、この編集作業に従事させて頂いて、つくづく幸せであつたと思つてをりま

す。不可思議の縁よちにつながり得てゐる有難さを、沁みじみ感じ合つた私どもは、編集上の相互連絡のつど、感謝の思ひを和歌に托して伝へ合つたことでした。さうして出来上つた本書でもありますので、この「編集後記」の末尾に「編集を終へて」の気持で、三名それぞれの和歌を添へさせていただくことにいたしました。不躰の段は御了承いただければ幸いです。

(三)

高木先生の遺稿を読みつつ

福岡・小柳陽太郎 (61歳)
(国民文化研究会・副理事長)

つばらかによめばかなしもひたぶるに生きたまひにし君しぬばれて
かくも深きおもひたへて生きますせしおもわは常にやさしかりしを
あたたかきことばくさぐさたまひしをこたへまつらで今ぞくやしき
みことばをよめばわきくるとこわかのいのちのままに生きむとぞ思ふ
今日もまた夏日かがやくひむがしの雲仰ぎつつ偲びやますも

亡き高木さんの遺稿を編みて

島根・青砥宏一 (63歳)
(国民文化研究会・理事)

なき大人ののこし給ひしふみを編む奇しきえにしの畏かりけり

爽やかな声して道を説きましし声うつつによみがへりくる
栄達はただに求めずひたすらに道をただして生きぬきましぬ
赤きもの赤しと言はぬ学匠を批判し給ひし美文なつかし
のこされしみふみ学びて亡き大人のかなしきいのちうけつぎゆかむ

高木さんの遺文・遺歌を編みまつりて

東京・長内俊平(62歳)
(国民文化研究会・常務理事)

ひぐらしの夕なく音もかれがれになりて今年も夏ゆかむとす
ひぐらしの鳴く音をきけば年毎の夏の合宿の思はるかな
年毎の夏の集ひの慰霊祭みたままつりに「のりと」奏せし高木大人たかきおとなはも
昨年こぞの夏「のりと」奏すと祭壇にすすみしみ姿ありありとして
人の世はさだめもあらずその日よりいくだもあらずみまかり給ふ
送葬の柩かつぎしもはるかにていまひたすらに大人の書編む
このわざをなすしあはせになき大人のよきことのはを日ごと拝する
このわざをなす幸せになき大人のひとよのこころざしらしめられたつ
このわざをなすしあはせになき大人の身近くいますこちするかな

このわざをなすしあはせにむらぎもの心に力わきくるおぼゆ
ひとよかけしみ志をつぎゆかむおもひつのりくるみ書編みつつ
よせ給ふ友らの力に支へられ編みつる書を捧げまつらむ

(四)

最後になりましたが、本書の構成、割り付け、そして校正の諸作業に、深夜、土曜日、日曜日の別なく、終始献身的な御協力を惜まれなかつた講談社の磯貝保博・藤井貢両兄に、そして奥村印刷の山崎修一氏に、深く感謝の意を表させていただきます。有難うございました。

昭和五十九年十月十日

一、三〇〇部

頒価一、七〇〇円

送料三〇〇円

ひとすぢの信

——高木尚一遺文・遺歌集——

編者 小田村寅二郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

(理事長 小田村寅二郎)

東京都中央区銀座七一〇一八(柳瀬ビル)

電話〇三二五七二一五二六〇七

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一四



